

---

# プリキュアオールスターズDX2 THE LAST 光と闇 最後の戦い!

桔梗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリキユアオールスターズDX2THE LAST 光と闇 最後の戦い！

### 【Nコード】

N8697P

### 【作者名】

桔梗

### 【あらすじ】

「ワンダー・プラネット」での戦いから数ヶ月後、プリキユアたちに新たな脅威が襲う。別世界に存在する幸せの国・ハピネスランドをかつてない強大な闇が支配したのだ。そしてその黒幕はかつて「ワンダー・プラネット」で戦った最凶のプリキユア・キュアリベリオンだった！なぜキュアリベリオンが再び？そして彼女の真の目的とは・・・？雨牙真夜IIキュアセイバー、そして新たな仲間とともにプリキユアたちの新しい冒険が始まる。光と闇の戦い、遂に

決着！

## まえがき

みなさん、あけましておめでとうございます。桔梗です。

新年を迎え、いよいよ小説第三作目を執筆することになりました。ですがまたもみなさんにお伝えしなければならぬことがあるのでまえがきとしてここに書いておきます。

この作品は、私の小説第一作「プリキュアオールスターズDX2 NEXT 新たな伝説 銀河最大の超決戦！」（以下「DX2NEXT」）の続編であり、また完結編でもありません。なので初めて読まれる方は先に「DX2NEXT」を読んでいただくことをお勧めします。また「DX2NEXT」では台詞前に登場キャラクターたちの名前が必ず記されていましたが、今回は記しません。そして「DX2NEXT」が2009年に公開された『大怪獣バトルウルトラ銀河伝説 THE MOVIE』をベースに執筆した作品だったので今作はその続編に当たる『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝国』を原作に沿ってアレンジしながらも書いていきます。原作が素晴らしかったので、こちらも負けなように最後まで執筆できるように頑張ります。

一応今年（2011年）3月19日の『プリキュアオールスターズDX3 未来に届け！世界をつなぐ 虹色の花』が公開される前までには完結できるようにしたいと思います。

長いまえがき、最後まで読んでいただきありがとうございます。それでは本文をお楽しみください。

## プロローグ

プリキュア。

それは遠い過去より全てを絶望へと変え、支配を企む暗黒の闇から世界を代々と守り継がれてきた伝説の戦士。

彼女たちはみな時には苦戦し、絶望の圧倒的な力を受けても最後まで希望を捨てずに目の前に立ちはだかる敵を相手に奇跡を起こし、勝利を収め、幾度となく世界を守ってきた。

だがただ一人、絶望に敗北し、自らの意志で闇の力に触れ、逆に世界を滅ぼそうとしたプリキュアがかつて存在した。

キュアリベリオン。

同じ希望の光を持ち、世界を暗黒の闇から救った戦士でありながら、異国での戦争にて両親と友達を失った悲しみで世界を憎み、闇の力を手に入れて誕生した史上最凶のプリキュア。

その圧倒的なパワーは他に19人も存在していたプリキュアたちをも凌駕し、深い憎しみと悲しみを持つ彼女は本気で世界を滅ぼそうと考えていた。

だが、結局彼女はそのプリキュアたちのおかげでもう一度希望を取り戻し、光へと帰ることができた。

キュアセイバー。

それが本来の彼女のプリキュアとしての名。

光を取り戻した彼女はプリキュアたちとともに闇の軍団を相手に戦い、そして勝利し、世界を再び守ることができた。

そしてこれから先どんなことがあるとも、絶望に負けず、希望は最後まで絶対に捨てないと心に誓った。  
彼女がそう強く決意したことで悪の戦士・キュアリベリオンは二度と現われることはなかった。

・・・・・・・・・・はずだった。

数ヶ月後・・・。

朝焼けで空が白々と明けていく中、少女は街の中を幾人の人々と並んで懸命に走っていた。

年齢はおそらく10歳程度。スカートは短い少女にしては豪勢なドレスを衣服としており、金髪の頭部には銀に輝くティアラを装着し、六角形のエメラルドグリーンの鉱石を嵌め込んだペンダントを首に掛けていた。それもそのはず少女はその国の皇女だった。ではなぜその皇女殿下が街の中を大勢の一般人の中に紛れて走っているのか。その答えはひとつ。彼女はたったひとりで逃げていたのだ。そして皇女が必死で逃げていたものとは・・・。

「あつ・・・」

ふいにつまづき、皇女は前へ倒れる。しかし誰もが声をあげながら逃げるのに必死で皇女を助けようとしなない。膝小僧に痛みが走って泣きそうになりながらもわずか10歳の皇女は急いで両腕を立て、上体を起こした。

そして、見たくない、けれども夢であってほしいというわずかな思いが混じった表情でゆっくりと後ろを振り向き、やはり見なければよかったと即座に後悔した。

巨大な城が紅蓮の炎に包まれて燃えていた。

言うまでもなくその巨城は彼女の家だった。塔の一部はすでに倒壊し、白かった城壁も徐々に黒く変色していた。窓はガラスというガラスが全て割れ、どこもかしこも煙が黒く噴き出していた。またひとつ、炎の手が上がり、煙が黒いキノコ雲となって、太陽の光が射さないように空を厚く覆っていく。城からは恐怖に怯える人々のけたたましい悲鳴が皇女の耳にも届いた。

絶望の光景に皇女は涙を堪えながらもなんとか立ち上がり、再び前を向いて走り出そうとした。

その時だった。ふいに皇女の前に何者かが空から降ってくるかのように現われたのだ。

驚いて足を止めた皇女はその相手をゆっくり、ゆっくりと見上げていく。するとそこには黒い長髪の15歳〜17歳程度の少女が冷たい目で皇女を見下ろしていた。一番上のボタンを留めていない、白いシャツを半脱ぎにした状態で着、その下に短い黒スカートが見える少女はまず目の前に棒立ちになっている10歳の皇女を見やると、次に彼女が首に掛けているペンダントに目を移し、きゅっと両目を細め、誰かに伝えるように小声で呟いた。

「コチラヤミ042。目的ノモノヲ確認。直チニ回収スル」

黒髪の少女はまるで機械的な言い方をすると、途端に皇女の手首を強く握った。

「痛い！離して！」

「申し訳アリマセンガ皇女殿下、ソノペンダントヲ渡シテモライマス」

「いやっ。ダメッ！誰か助けて！」

「ユカ様から手を離しなさいっ！」

すると突然背後から誰かが叫ぶ声が聞こえ、黒髪の少女は首をねじって振り返った。その刹那、またしても少女がふたり、敵意の目で睨むと黒髪の少女に向かって助走をつけて高く跳躍し、急降下で鋭い蹴りを放った。すぐさま皇女の手を離れた黒髪の少女は両腕を

目の前で交差してふたりのキックを受け止める。だがさすがに二人分のキックの威力に黒髪の少女は受け止めた途端に十歩も後退した。そして交差した両腕を降ろし、冷たい両目で目の前の敵を見据えた。

「ユカ様、大丈夫ですか？」

「お怪我はありませんか？」

ふたりの少女は身長差がかなりあるユカ様と呼んだ10歳の皇女に急いで視線を合わせるように腰を降ろして尋ねた。皇女・ユカは言葉こそ出なかったが、首を縦に振って無事であることをふたりに意思表示した。ほっと微笑を浮かべたふたりの少女はすぐに互いの目を合わせて、うん、とうなずくと降ろしていた腰を上げ、黒髪の少女に振り返る。

ふたりの少女は皇女の騎士<sup>ナイト</sup>だった。両方とも年齢は推定15歳、17歳程度で貴公子のような服装をしており、片方は白い服に銀に染まった髪、もう片方は空色の服に赤に染まった髪をしていたが、少々黄色や紫の色も見え隠れしている。ふたりの騎士<sup>ナイト</sup>は黒髪の少女を見ると、両腕で戦闘の構えを取った。ふたりの動作を見て完全に敵と判断し、黒髪の少女も戦闘態勢を取る。

「キティ、あなたはユカ様と一緒に別の世界へ逃げて」

しかし突然銀髪の騎士<sup>ナイト</sup>が敵を見据えたままキティと名を呼んだ赤髪の騎士<sup>ナイト</sup>にそう言葉をかけた。

「なんですって？兎羽<sup>とほわ</sup>さん、正気ですか？」

キティは驚き、兎羽<sup>とほわ</sup>と呼んだ銀髪の騎士<sup>ナイト</sup>に急いで尋ねる。

「私はいつだって正気よ。キティだってこの状況分かっていてるでしょう。もうハピネスランドに安全な場所はどこにもない。別の世界に逃げるしか今は他に手はないわ。ユカ様のそのペンダントの力ならばきつと次元を超えて別の世界に行けるはずだから」

「でも次元を超えるにはかなり身体に圧力ががかかります。私はともかくユカ様が耐えられるかどうか……。それにあなたはそのまま残るつもりですか？そんなの無謀です！」

「キティ！私たちの使命を忘れたの！？たとえ世界の終わりが来て

もユカ様を守るのが私たちの役目だったはずよ。それは誰よりもあなたがよく知っているはずじゃない！」

「！………兔羽さん」

兔羽はキティに振り返り、ふっ、と微笑んだ。

「大丈夫。私は死なないわ。国王様も王妃様も必ず助け出すから……ユカ様をお願いね」

「……分かりました。ユカ様、行きましょう。ペンダントにしっかりと力を込めてください」

「うん……。兔羽、父上と母上をお願い……」

「はい。必ず、おふたりはこの私が必ずお救いします」

「さあ、ユカ様……」

キティに言われ、ユカは首に掛けていたペンダントを両手で持ち、力を込めた。瞬間、六角形のエメラルドグリーンがまるで意志を持ったかのように輝き始め、青とも緑ともつかないまばゆい光を放出した。強力な光はそのまま皇女と赤髪の騎士<sup>ナイト</sup>を包み始める。そして地上に雷が直撃したほどの強烈な光が炸裂した次の瞬間、光が1センチほどの胞子となって周辺に飛散し、ふたりの姿をこの世界から消し去った。それを確認して兔羽は黒髪の少女をまっすぐに見据えながら足元に声をかける。

「ディアーナ、いる？」

「ええ……」

するといつの間にか兔羽の足元には全身水色の毛で覆われ、額に三日月が描かれたペルシャ猫がいて、しかも言葉を話していた。口調からしてどうやら雌のようだが兔羽は別段驚いた様子もなく、次の言葉をペルシャ猫にかけた。

「あれ、持って来ている？」

「もちろんですよ」

兔羽のパートナーでもある喋るペルシャ猫・ディアーナは両目を閉じて額の三日月を光らせると、そこから何かを召喚した。それは三日月状の宝石が嵌め込まれた金色のハート形ブローチだった。デ

イアーナは口で啜えて兎羽に渡すと、彼女はそれを片手でしっかりと握り締めながら高く掲げた。

「セレーネ・プリズムパワー！メイクアップ！」

するとどうだろう。ブローチからまばゆい光が炸裂し、兎羽を包み込んだのである。光の中で兎羽は衣服が変わり、変身をしていく。光が消えた瞬間、兎羽の姿は完全に変わっていた。短い水色のスカートの胸部には彼女の变身アイテム「ハート・セレーネ・ブローチ」が装着した丈の長い赤いリボンが結ばれる。一見セーラー服に似ているが誇り高き“戦士”を象徴づける衣装。額にはV字のティアラが装着され、兎羽は目の前の敵に戦士としての威光を見せたポーズを取ると、

「月を守護に持つ愛と正義のセーラー服美少女戦士、セーラーセレーネ！」

と名乗り、腕を十字に組んで、

「月の女神に代わって、お仕置きよ！」  
と最後に台詞を決めた。

突然変身をした兎羽に黒髪の少女は最初驚いていたのかすぐには動かなかつたが、やがて

「破壊スル」

の声とともに地面を蹴り、兎羽、いやセーラーセレーネとの距離を一気に縮めて彼女の顔に拳を素早く放った。

「はっ！」

だがセレーネは瞬時に拳を左手で捌くと一瞬の隙を突いて逆に黒髪の少女の腹部に強烈な膝蹴りをお見舞いした。だが彼女は全く苦痛の表情をせず、今度は右足を高く上げてセレーネに鋭い蹴りを浴びせようと試みた。相手の素早い攻撃にセレーネは辛うじてかわしたが、かわした途端に今度は手刀が眼前に迫り、危なく彼女は右手で捌いた。相手もかなり戦闘力が高い。このままではやられるのも時間の問題だ。セレーネはそう感じると、もう一度相手の腹部に拳を当てた後すぐに地面を蹴って後方に跳び、敵との距離を取った。

そして無言のまま片手を頭上に挙げる。すると彼女の手に光が集ま  
つていき、その中から1メートル程のロッド状の武器が召喚された。  
先端は三日月の形状をしている。セーラーセレーネの武器・セレー  
ネロッドだ。セレーネはそれをくるくると高速で回転させ、器用に  
扱うと先端で目の前の空間に光輪を大きく描き始めた。

「セレーネ・ヒーリング・エスカレーション！」

そして先端を黒髪の少女に向けた次の瞬間、無数の三日月状の光  
弾が放たれ、黒髪の少女に浴びせられた。

「ギ・・・ギャギャガガガッツ！！」

光弾を次々と浴び、黒髪の少女はようやくやく苦しむように表情を歪  
めた次の瞬間、驚くべきことが起こった。突如少女の身体が黒い砂  
と化したのだ。やがて可憐だった少女の身体は両足から肩まで徐々  
に砂となって消滅していく。数秒後には敵は完全消滅し、セレーネ  
は、ふう、と息を吐いた。

「やったわね、セーラーセレーネ」

「ええ・・・なんとか」

足元にいる彼女のパートナー・ディアーナが声をかけ、彼女も額  
の汗をぬぐって答えた。

だがそれも束の間だった。

背後から大きな爆発音が轟き、セレーネとディアーナはハツと巨  
城のほうへ振り返った。そして大きく目を見開いた。

巨大な“悪魔の手”が数本も生え、巨城を取り囲んでいた。城の  
周辺から生えた黒い悪魔の手はぐにやくにやくと手首をねじりながら  
も大きくそして鋭い五本の指を広げて今にも獲物<sup>エサ</sup>を捕らえようと蠢  
いているように見えた。まるで全てを支配すると宣告するかのよう  
に。

「何・・・あれ・・・？」

「このままでは国王様と王妃様が・・・。急がないと・・・」

ディアーナが悪魔の手に愕然とし、すぐさまセレーネが巨城に駆  
けつけようとしたその時だ。

突如暗がりから何かが飛び出してセレーネの右腕に噛みついた。  
「ああっ！」

突然の襲撃にセレーネロッドを離してしまう。セレーネを襲ったのは狼ほどの大きさを持ち、全身黒い毛で覆われた犬だった。黒い凶犬はセレーネの右腕に食いついて離さず、さらに牙を皮膚の下へ押し込んだ。

「ああああああっっっ！」

「セーラーセレーネ！」

激痛に苦しむセレーネ。突然の襲撃者に驚くディアーナ。セレーネは激痛に苦しみながらも右腕に噛みついて離れない凶犬の頭を左腕で強く叩いてなんとか離そうとした。何度か叩いているうちに凶犬はようやく右腕を離し、地面に降りると後方に跳んで彼女から距離を取った。

「あっっっっっっっっっっ！」

「セレーネ、大丈夫・・・？」

噛みつかれた右腕を抑え、膝を着いたセレーネに心配そうな表情で尋ねるディアーナ。しかしセレーネはディアーナに微笑み、なんとか立ち上がるうとした。

「大丈夫よ、ディアーナ。早く国王様と王妃様を・・・」

その時だった。背後からまるで嘲笑うかのような、しかし鳥肌が立つほどの冷たい声が聞こえたのは。

「そんな怪我で、まだ戦えるって、本気で思っているの・・・」  
「？」

セレーネは一瞬で凍りついた。そしてゆっくり、ゆっくりと首をねじり、後ろを振り返る。するとそこには・・・死神が、いた。今この場の空間さえも切り裂いてしまいそんな鋭利に光る大鎌を持った、17歳ぐらいの少女の姿をした死神が。

黒いリボンで結ばれたツインテール。

腹部にへビの目のような紋様が描かれた漆黒の衣装。

左腕に装備された三本の鋼鉄製の鉤爪。

右目を隠した海賊のような黒の眼帯。

そして死神の足元にはたった今セレーネの右腕を深く傷つけた黒い凶犬がはっ、はっ、と舌を出して息を吐きながら飼犬のように寄り添っていた。

死神は少しだけ腰を低くして凶犬の頭を優しくなでる。

「おまえは……!」

その姿を確認した次の瞬間、死神は右足を上げ、履いていたブーツのヒールで膝を着いていたセレーネの背中へ勢いよく振り降ろし、彼女をそのまま地面に強く踏み倒した。

「ああああっ!」

「セーラーセレーネ!」

駆け寄ろうとするディアーナ。だが瞬時に凶犬に殺気に満ちた両眼で睨まれ、「うつ・・」と動きを封じられる。もはやセーラーセレーネはさらなる激痛に苦しみ、死神に逆らって立ち上がる気力は残っていない。そんなセレーネに死神はさらに追い討ちをかけるように彼女の背中をヒールでぐりぐりと踏みにじって言葉をかける。

「痛い?痛いよね?でも、私が感じた痛みと比べたら、まだいいほうなのよ」

「……一体、何者なの、おまえは……?こんなことをして……何が目的……なの?」

はあ、はあ、と息を吐き、かすれた声で死神に尋ねるセレーネ。すると死神は彼女の背中から足を降ろすと、彼女の銀髪をガツと強く?み、ぐいつと顔のすぐ近くまで引き寄せた。

「うつ……」

「さっき自己紹介したのに聞いてなかったのかしら?まあいいわ。もう一回言っただけ。私の名前はね……」

そして死神は燃え上がる巨城を背景にゆっくりと眼帯を取り外し、隠していた右目を露にした。

「全てを無へ誘う漆黒の墮天使、キュアリベリオン……!」

死神の右目は血が溢れ出たように真紅に染まっていた。

## プロローグ（後書き）

「DX2NEXT」のプロローグよりも長かった。次回はプリキュア全員登場です。

## 流星

高鳥山は頂上まで約700メートルと日本に存在する山の中ではたかとりやま決して高いほうではないが、それでもその町では市内最高峰と言われ、時折登山者が何人も訪れている。最初は人間がようやくすれ違えるほどの狭さの山道から始まり、両側から雑木林の木の枝がはりだすわ、足元に所々木が倒れているわで非常に歩きにくく、遂には急な登りとなって初めて登山する人はほぼ口を開かず足元に目を配らせながら歩くこととなる。

が、それもせいぜい30分程度で、そのうち傾斜も緩やかになり、左右も見晴らしがよくなるので列を作って歩いていた登山者は大抵このポイントで乱れがちになる。

しかし緩やかな山道も長くはなく、道は再び急な上り坂となる。高鳥山の尾根筋には大小の峰がいくつも連なっていて、それらを何度も上り下りしてからようやく主峰に到着するのだ。高鳥山直下にはなだらかな広い鞍部あんぶがあり、そこに19人の少女たちはいた。

「うわあ〜。凄い眺めです〜！」

赤髪のツインテールの少女が感激したように言う。彼女の目の前には壮大な山脈が広がっていた。

「えりか、見てください。凄い眺めですよ」

少女はえりかと呼んだ青髪のセミロングの少女に振り返ったが、彼女は野原の上で大の字となつて寝転がっていた。

「えりか・・・？」

「つぼみ、なんでそんなに元気なの？私、歩き疲れてもうくたくただよ〜」

えりかはつぼみと呼んだ赤髪の少女にそう言うと、はあ〜っと大きく息を吐いた。えりかに続いて同じように大の字になっている茶髪のショートカットの少女もかなり疲れた様子で言った。

「本当だよね〜。なのになんでほのかとひかりは疲れないわけ？」

「私だつて疲れているわ。でもあともうちよつとだし、頑張りましょ、なぎさ」

「そうですね。こついうのはきつと気持ちの問題だと思います。頑張りましょ、なぎささん」

「へへ、気持ちの問題かあ。ねえ舞、舞ならどついう気持ちで登るの？」

「そうですね。私は絵が好きだから、こついう景色はいい題材になるんじゃないかしらと、楽しい気持ちで登るわ、咲」

「そうか。さすが舞。なぎささんも今度はそついう気持ちで登るといいよ」

「ううん、難しいかもしれないけれど、咲が言つならやってみるよ」

咲の励ましになぎさがようやく上体を起こした一方では、

「うわ〜ん。りんちゃん、私もう歩けな〜い！おんぶして〜！」

「アホかつ！あともうちよつとなんだから立ち上がりなさいよ、のぞみ！」

「まあありません、もう少し休憩してからにしましょうよ」

「あのねうらら、この娘はちよつとでも甘やかすとすぐ調子に乗るんだから、ここは厳しくしたほうが為になるの」

「うわ〜ん。りんちゃんの鬼〜！」

「うるさいっ！大体、みんなで登山に行こつと言つたのはのぞみでしようが！ねえ、かれんさん、こまちさん」

「え・・ええ。そうですね」

「でもやつぱり少し休憩してからのほうがいいんじゃないかしら？ねえ、くるみさん」

「いいえ、悪いけど、私もりんの意見に賛成。大体のぞみは体力なさすぎるのよ。ここは今すぐ頂上まで突つ走るわよ。ほら、早く立ちなさい！」

「ふえ〜ん。くるみも鬼〜！」

なにやら大変そつである。大変といえば、こちらも、

「だつは〜・・・疲れたあ〜っ。もう一步も歩けない・・・」

「ちよつとラブ、休憩するのはいいけれど、そのまま寝ないでよ。ラブだつて、のぞみさんが考えた登山計画に賛成したじゃない。最初の元気はどこに行つたのよ？」

「だつてミキたん、まさかこんなに高くて傾斜がメチャクチャなの、初めてなんだもん。寝転びたくもなるよ、ねえブツキー」

「え・・・わ、私はまだ大丈夫だけど・・・。そうだ、せつなちゃん  
は？」

「私も大丈夫。でも確かに傾斜がかなりあるわね、この山」

「でしょでしょ？あ、そうだ！せつなのアカルンで一氣に頂上へ・・・」

「「それはダメツ！！！！」  
「へ・・・？」

「それじゃ山登りの意味がないでしょ。苦労して苦労して苦労して、やっと頂上に着いてこそ目標を達成できた喜びが大きいんじゃない。そんなズルいこと、完璧な私がゼ〜ツタイ許さないからね！」

「・・・は〜い（トホホ。ミキたんも鬼だ）」

「何か言つた？」

「い、いえ・・・」

「こちらは大変そうである。で、最初に戻つてえりかはというと、  
「えりか〜。もうみんな立ち上がり始めましたよ。立ってないのは  
もうえりかだけです。そろそろ行きましようよ〜」

「嫌だつてば〜。あとちよつとくらい休ませてよ」

「まだ寝転び、起き上がるうとしなかった。つぼみに服を引っ張ら  
れても起きるのに抵抗するえりかにふたりの少女が傍らで呆れたよ  
うにため息を吐いて、彼女に寄つた。」

「えりか、ダメだよ。人に迷惑をかけちゃ。みんな頑張っているん  
だから、えりかも頑張ろうよ」

「え〜、だけどいつき、これマジでハンパないよ。私もう限界だよ  
」

「あ、そう。じゃあみんな、ほっときましょう」

「へ？ゆりさん・・・？」

「いつまでも構っていたら日が暮れるわ。私たちまで他のみんなに迷惑をかけるわけにはいかないはずよ。それを分らない人に登山する資格はないわ」

「え・・・や・・・じよ、冗談ですよ、ゆりさん。さあ、元気も出たし、みなさん、早く行きましょう！」

ゆりの厳しい言葉にえりかは慌てて立ち上がって拳を頭上に挙げて山道を歩き出した。

「さすがゆりさんですね！」

つばみが笑って振り返ると、ゆりもくすつと悪戯っぽく微笑んだ。少女たちの名前が大体判明したところでそろそろ彼女たちが何者かを説明しよう。

そう。19人の少女たちはみな伝説の戦士・プリキュアだった。彼女たちはそれぞれ自分たちが暮らす世界を守るために別世界に住む妖精たちの力からもらったアイテムを使用して変身し、これまで世界を侵略しようとしてきた強大な闇の戦士たちと戦い、そして救ってきたのである。数ヶ月前にも彼女たちは宇宙を舞台に究極の闇と称する怪人と戦い、そして世界を滅亡から守ったのだ。それ以来、都合がよければしょっちゅう会うようになり、交流を深めていったのである。そして今回、プリキュアたちはさらに交流を深めるためにこの高鳥山の登山を計画し、久々に集結したのである。彼女たちだけでなく、妖精たちも合流し、ともに登山していた（もつとも、ほとんどがアイテム等に変身してプリキュアたちの衣服のポケツトやリュックの中にといたり、空を飛んだりと楽をしていたが）。さて。

「うおっっ。すっごいいい眺めっっ！」

遂に頂上に到着したえりかが両目をキラキラ輝かせながら感激したように叫んだ。彼女に続いてなぎさ、のぞみ、ラブも「おおっっ！」と感嘆の声をあげた。それもそのはず彼女たちの目の前にはさ

つきよりも見事な景色が広がっていたのだ。大自然の壮大な山脈はもちろんのこと、町までもが豆粒のように見え、あまりの光景にもはや「感動」の二文字以外に思いつかなかった。おまけに空気も風もとても気持ちいい。

「凄いです！とつてもきれいです！そうだ。写真撮らないと・・・」  
つぼみは背中のリュックからカメラを取り出して、カシャ、カシヤ、と二、三枚撮影した。

この景色を、真夜さんにも届けてあげたいですね・・・。  
ふと、カメラを降ろして、つぼみは遠い所にいる友達のことを思い出した。数ヶ月前に出会い、ともに笑いあい、深い絆を刻んだひとりの少女。今はそう簡単には会えないけれど、いつかまた会える。つぼみはそう信じて、彼女との再会を待ち続けていた。

今頃真夜さんは何をしているんでしょう・・・。  
そう思い、つぼみが青空を見上げたその時だった。

青空にキラツと何かが光った。

「え・・・？あれは何ですか・・・？」

「え・・・・・・？」

つぼみの言葉に、他のプリキュアたちも全員空を見上げた。すると光は尾を引いて勢いを増し、地上へと徐々にマツハを超えるスピードで接近してくるではないか。しかしまだピンと来なかつたなごさが

「何あれ？流れ星？」

と大ボケ発言をし、それを聞いたえりかが

「えっ？本当？じゃあお願い事しなくちゃ！背が高くなりますように。背が高くなりますように。」

「えりか、やつぱり気にしていたんですね。・・・って、あの流れ星、こつちに来ています！」

「みんな、早く逃げろっ！！！！」

ラブが叫び、みんなが悲鳴をあげて走り出した次の瞬間、

ドゴオーンツツツ！！！！

山頂を光が激突した。

流星（後書き）

次回、強敵出現。そして新たなる戦士、降臨！

## 異邦人

光が激突した直後、周辺をもの凄い衝撃と爆風、そして煙が逃げた彼女たちを襲った。この衝撃にさすがの妖精たちもびっくりし、次々と彼女たちのポケットやリュックから飛び出して、地面に降りた。

「ココ!?何が起こったココ!?」

一番にココが叫ぶ。しばらくして煙が消え始め、彼女たちがさつきいた場所にぼっこりと穴が空き、クレーターができていた。だが衝撃は大きかったのにクレーターは小さく、直径を測ったとしてもせいぜい4、50センチ程度しかない。しかしそれよりも驚いたのはそのクレーターの中に誰かが横たわっていたことだった。もちろん、クレーターが小さいのでその中に横たわっている誰かも大体30センチ程度と小さい。何者かが横たわっているのに気づいたプリキュアたちと妖精たちははおそろおそろクレーターに近づき、小さな驚きの声をあげた。

クレーターの中で横たわっていたのは少女だった。貴公子のような空色の立派な服装をしており、髪は全体としては赤いが、少々黄色や緑、紫も混じっている。身長30センチ程度の少女は気を失っているのか両目を閉じ、微動だにしない。この少女たちの存在にさしものプリキュアたちも戸惑い、互いに目を合わせたりした。

「何だろ、これ?」

「小人かしら?」

「まつさかあ。こまちさん、小人なんているわけないじゃん。人形なんじゃないの?」

まずりんが言葉を発し、こまちが小人説を示したが、なぎさに否定された。するとほのかが

「なぎさ、触ってみて」

「えっ?わ、私が?」

「本当に人形かどうか、触ってみれば分かるでしょ？確かめる必要があると思うわ」

「い、いや、でも……」

「そうだよ。こういうのなぎささん得意じゃん。触ってみて！」

「いつから私の得意分野になったのよ？分かったわよ。触ればいいんですよ。触れば……」

ほのかに続いてのぞみにも言われ、なぎさはブツブツ言いながらおそろおそろ人差し指を伸ばした。そして指の先が触れるまであと1センチ程度の時だった。

ぱちつ、小さな少女が目を開けたのだ。そして、

「無礼者！」

と、瞬時に立ち上がり、触れようとしたなぎさの指を強く蹴った。「痛っ！」

と即座に指を抑えて引っ込めるなぎさ。小さな少女はクレーターの中で立つと驚いているプリキュアと妖精たちを睨み、口を開いた。「何者ですか、あなたたち！？この私をハピネスランド第一皇女ユカ様の騎士、キティと知っていたの狼藉ですか！？」

「ハピネスランド？」

キティと名乗った小さな少女の言葉にえりかが鸚鵡返しに問うと、ナッツがハツとしたように言った。

「聞いたことがあるナツ。ハピネスランドはナッツたちの国・パルミエ王国と同じようにパラレルワールドに存在する幸せの国と聞いているナツ。君はその国から来たんだナツ？」

するとキティは敵意の目をやめ、意外そうに見開いた。

「ハピネスランドを知っている……？あなた方は一体何者……？」

だがすぐにハツとし、周囲を見回すと、またもプリキュアと妖精たちを睨んだ。

「！……ユカ様は？ユカ様は一体どこに？……あなたたち、ユカ様をどこに隠したの！？」

「ユカ様って、さっき言ってたお姫様のこと？」  
祈里が聞いた。

「そうです。ユカ様は私と一緒に逃げてきたはずなんです」  
「逃げてきた？」

と、かれん。

「それなのに私がいて、ユカ様がない・・・。あなたたち、ユカ様をどこに隠したの？ユカ様に何かしたら私が許さないっ！」

「ちょ、ちよつと待ってよ。ここに来たのは君だけで、そのお姫様はどこにもいなかったよ」

「嘘吐くと、ますます為になりませんよ！」

「知らないと言っているでしょ！大体あんた、人の指蹴っついて、何その態度!？」

「みんなが言っているのは本当ラピ。フラッピたちは山登りに来て、今頂上に着いたばかりなんだラピ。それなのにハピネスランドの皇女様を誘拐してフラッピたちに何の得があるラピ？」

いつきが弁解してもまだ敵意を見せていたキティだったが、なきさに怒鳴られた後、フラッピに指摘され、それももつともだと気づいたようだ。敵意に満ちていた表情は途端に不安の面持に変わる。

「それじゃあ、ユカ様は・・・おそらく、別世界を移動する時に次元の波に飛ばされて離れ離れに・・・。なんていうことを・・・私がいながらこんなことに。これでは兎羽さんに顔向けができない・・・」

視線を下に向けるキティ。誤解が解けたのはよかったが、プリキユアと妖精たちは瞬時に元気をなくした彼女にどう言葉をかければいいのか分からなくなってしまった。

だがふいにその彼女に声をかけた者がいた。

「コチラヤミ045。ユカ様ノナイトガヒトリ、キティ確認・・・」

その機械的な声はプリキユアたちの背後から聞こえ、みんなはハツと振り返った。するとそこには10人の黒い長髪の少女が立っていた。半脱ぎ状態の袖の長い白シャツに黒くて短いスカート。驚い

たことに10人の少女は10人とも同じ顔をしており、肌の白さまでそっくりで気味が悪いとすら感じた。

「き、姉妹？」

眉をヒクヒクさせながら美希が言うと、

「違うミポ！あの娘たちからもの凄い邪悪な気配がするミポ！」

「……………ええっ!？」

とミッブルが叫んでみんなは驚いた。するとキティがクレーターから飛び出し、彼女たちの前に立って両腕で構えを取った。それを見て、つぼみが驚いたように言う。

「あなた……!」

「みなさん、疑ってすみませんでした。ここから先はみなさんを巻き込むわけにはいきません。ヤミたちの狙いは私です。私が相手をしている間にみなさんは早く山を降りてください！」

「ヤミ？あの人たちの名前ですか？」

「さあ！早く！」

「でも、相手にするって、どうやって……?」

その時だった。キティが地面を蹴り、高く跳躍したのだ。宙へと跳んだキティはみるみるうちに人間大まで身体が大きくなっていく。一気に1メートル60センチほどまで巨大化したキティはそのままくるり、と華麗に一回転すると彼女の貴公子のような服装が一瞬にして変わったのだ。赤いジャケットとその下にある黒いシャツ。桃色に開いたフリフリのスカートとその下につけている黒のスパッツ。さらに赤い髪がさらに長くなり、桜色のベレー帽が頭部に被せられた。驚くプリキュアと妖精たちをよそに地上に着地したキティは華麗にポーズを決めると、

「ドールキティ見参！」

と名乗った。

「ドール……キティ？」

「プリキュア……じゃないよね？」

「何者……かしら？」

「でもなんだかカッコいいでしゅ〜」

「なんか分からんけど、メツチャ決まっとするで」

「キュアキュア〜」

驚いた表情のまま舞、りん、せつなが眩き、ポプリ、タルト、シフォンが感激したように言う。ドールキティは鋭い両目で10人のヤミと呼んだ少女たちに向くと、

「はっ！」

と地面を蹴って、走り出した。彼女が走り出したと同時にヤミたちも瞬時に両目を鋭くして一気に駆け出した。その刹那、ドールキティと10人のヤミたちが衝突する。ドールキティはまず最初に襲ってきた一人目の胸に拳を当てて吹っ飛ばすと、パン！と両手を合わせた。すると彼女の両手からヨーヨーのような武器が召喚された。「ライトスピナー、受けてみなさい！」

ドールキティはライトスピナーと呼んだヨーヨーを巧みに操るとそれを向かってきたヤミたちに次々と直撃させる。ライトスピナーを身体に受けたヤミたちは途端に強い衝撃を受けて後方に吹き飛ばされ、木の幹や地面に叩きつけられる。さらにドールキティの背後からふたりのヤミが走りながら接近したが、彼女はすぐに続けてライトスピナーを背後へ飛ばし、ふたりを弾き飛ばした。

「っ、強い・・・」

彼女の戦闘能力の高さに思わず感嘆の声を吐くくるみ。だが、それは敵のヤミたちも同じだった。ドールキティに飛ばされたヤミたちは即座にゆっくりと立ち上がり、ぱん、ぱん、と衣服に付いた汚れやゴミを手で払う。不思議なことにあれだけ吹き飛ばされたにもかかわらず、彼女たちはみな痛みを感じていないようで表情は少しも歪んでいなかった。一步一步と歩き始めるヤミたちを目にし、ドールキティの眉間にしわが寄る。

「破壊スル」

ひとりが機械的な声でそう言うと、ヤミたちは再びいつせいに襲いかかった。ドールキティはすぐさまライトスピナーを操り、接近

してきたひとりに投げたが、彼女はたやすくかわした。

「あっ・・・」

そして一瞬でドールキティの懐に入り、彼女の腹部を強く殴った。  
「かはっ・・・」

ひるんだ瞬間、さらにふたりが素早くしゃがみ込み、片足を回して彼女の両膝の関節部分に強烈な蹴りを与える。

「うっ・・・」

痛みにうめくドールキティの両腕をまたふたりが？んで、残りが動きを封じた彼女に向けて片腕を伸ばし、電流が走る黒い光球を生らせて次々と容赦なくぶつける。

「あああっっ！」

吹き飛ばされるドールキティ。背中から地面に叩きつけられた彼女はすぐに上体起こそうとしたが、

「ああっ！」

そうはさせるかと、即座にヤミに腹部を踏まれ、激痛に身動きが取れなくなった。

「・・・最後二聞ク。ユカ様ハドコダ？ドコニ隠シテイル？」

「うっ・・・く・・・知らない。知っていたって、あなたたちには絶対に教えないっ！私は最後までユカ様を守る！」

「・・・破壊スル」

冷たい視線でドールキティに尋ねたヤミだったが、彼女の返事を聞くと、即座に片腕を伸ばし、黒い光球を発生させた。「くっ・・・」と目を細め、唇を噛むドールキティ。万事休すと思ったその時だ。

「っっっっちよーっ」と待ったあーっ！！「っっっ」

突然響いた大勢の声に反応し、ヤミは放とうとした光球を瞬時に消して振り向いた。ドールキティも他のヤミたちも声が出した方向に視線を飛ばす。彼女たちの視線の先には19人の少女が挑むような目で立っていた。

「あなたたち、早く逃げてと言ったじゃないですか！？なぜまだいるんです!？」

驚いてすぐさまドールキティが叫ぶと、彼女たちを代表して、つぼみとえりかが前に出た。

「事情はよく分かりませんが、たったひとりをこんな大勢で相手にするなんて、いくらなんでもひどすぎます。そんな卑劣なことをして恥ずかしくないんですか？もしそうなら私、私・・堪忍袋の緒が切れましたあーっっ！！」

「全く同感だよ。お姉さんたち、私より年上なくせに戦うんなら正々堂々としなよ。それが分からないって言うんなら、海より広い私の心もここらが我慢の限界よっっ！！」

「みんなー！！」

つぼみとえりかは振り返り、17人の少女たちに呼びかけると、全員、うん、とうなずいた。その瞬間、メップル、ミップル、ポルンそれからフラッピ、チヨッピが変身アイテムに姿を変え、なぎさ、ほのか、ひかり、咲、舞の手に飛ぶ。シプレ、コフレ、ポプリもつぼみ、えりか、いつきのそばへと飛んだ。そして全員変身アイテムを手にして、いっせいに高く叫んだ。

「プリキュア！オープン・マイ・ハート！」「」

「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」「」

「ルミナス！シャイニングストリーム！」「」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」「」

「プリキュア！メタモルフォーゼ！」「」

「スカイローズ・トランスレイト！」「」

「チェインジ！プリキュア！ビート！アアアップ！」「」

叫んだ瞬間、彼女たちの身体がまばゆい光に包まれ始めた。

異邦人（後書き）

次回、変身&戦闘。

## 苦戦

光に包まれた19人の少女たちはそれぞれ身体を光の流れに任せ、次々と衣服が変わり始めていく。

つばみは桃色を基調とした衣装。えりかは水色を基調とした衣装。いつきは金色を基調とした衣装。ゆりは藤色を基調とした衣装。なぎさは黒を基調とした衣装。ほのかは白を基調とした衣装。ひかりは鮮やかな桃の布地と金色の装飾を施した衣装。咲は赤紫色を基調とした衣装。舞は銀白色を基調とした衣装。のぞみ・りん・うらら・こまち・かれんは襟の立った二の腕までの袖の服と短いスカートが施された桃・赤・黄・緑・青を基調とした衣装。くるみは紫を基調とした衣装。ラブ・美希・祈里・せつなはそれぞれ桃・青・黄・赤を基調とした衣装に髪飾りとイヤリング。

変身した19人の少女は優雅に、あるいは飛び降りるかのように着地すると、それぞれポーズを決め、名を名乗った。

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花！キュアムーンライト！」

「ハートキャッチプリキュア！」

「光の使者、キュアブラック！」

「光の使者、キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！」

「闇の力の僕たちよ！」

「とつととおウチに、帰りなさい！」

「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てをひとつにするために！」

「輝く金の花！キュアブルーム！」

「煌く銀の翼！キュアイーグレット！」

「ふたりはプリキュア！」

「聖なる泉を汚す者よ！」

「アコギな真似はお止めなさい！」

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじけるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！Yes  
プリキュア5！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ  
！」

「ブルーのハートは希望の印！つみたてフレッシュ！キュアベリー  
！」

「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ！キュアパイン  
！」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッシ  
ョン！」

「レッツ！」

「プリキュア！」

「これ以上の横暴は、私たちが許さないっ！！！！」

19人のプリキュアがここに揃い、全員いつせいに叫んでポーズを決める。するとその瞬間、彼女たちの周囲に無数の光の粒子が舞い上がるかのように弾けた。

「プリ・キュア？あなたたちがあの伝説の戦士……？」

19人のプリキュアの登場にさしものドールキティも目を大きく見開く。するとドールキティを踏みつけていたヤミも彼女の身体から足を降ろし、プリキュアたちに視線を向け、瞬時に両目を細める。

他のヤミたちもプリキュアたちに向き直り、鋭い視線を飛ばした。プリキュアたちも10人のヤミに敵意の目を向け、身構える。そして、

「伝説ノ戦士プリキュアヲ確認。・・・破壊スル！」

とドールキティを追い詰めていたヤミがそう発した刹那、彼女たちは同時に地面を蹴って走り出し、相手との距離を一気に詰めて攻撃を開始した。

「はあーっ！」

まずブロッサムとヤミの拳が衝突する。だが、衝突した瞬間、ブロッサムは全身に強い衝撃を受け、後方に撥ね飛ばされた。

「あああああーっっ！」

「ブロッサム!?・・・って、うわわっ!?!」

飛ばされたブロッサムに一瞬振り向いたマリンをヤミの鋭い蹴りが起こした黒い太刀風が襲う。マリンは慌てて宙返りをしてかわしたが、黒い太刀風は彼女の背後にあった樹木を切り裂き、嫌な音を立てて横様に倒れた。

「嘘……。なんであんなお姉ちゃんがこんなの出せるのよ……?」

着地したマリンは倒れた樹木を見て、啞然となった。

サンシャインとムーンライトも互いにヤミと一対一の激しい勝負を繰り広げていた。ブロッサムやマリンと比べて戦闘力は抜群に高い両者だが、その両者もかなり苦戦を強いられていた。プリキュアの力を込めた打撃技を次々とヤミの身体にぶつけるのだが、ヤミはまったくひるんだ様子もなく反撃してくるのだ。おまけに打撃を与えた時を通して感じたのだが、ヤミたちの身体はまるで鎧のように強固で、鉄に拳をぶつけているようにすら感じた。

「ムーンライト・シルバークインパクト！」

なんとか隙を突いてムーンライトがヤミの腹部に強力な閃光技を与えたが、ヤミは二、三步後退しただけだった。

一体何者なの……?」

はあ、はあ、と呼吸を繰り返しながらそう思った後、ムーンライ  
トが再びヤミと拳を交えた一方でブラック・ホワイト・ルミナス・  
ブルーム・イーグレットもふたりのヤミを相手に苦戦をしていた。

「うわあああああつっ！」

「きゃあああああつっ！」

ブラックもホワイトもヤミの高い戦闘力にあつという間に吹き飛  
ばされる。

「このおっっ！」

「くっっ！」

ブルームとイーグレットも果敢に立ち向かうが、

「わあああああつっ！」

「あああああつっ！」

即座にヤミに蹴飛ばされ、背中から地面に叩きつけられた。ふた  
りにとどめを刺そうとヤミは地面を蹴り、青空へ高く跳躍すると、  
ブルームとイーグレットに向けて右足を伸ばし、急降下キックを開  
始した。

「はあっっ！」

しかし、ここでルミナスが虹色のバリアを張り、ヤミのキックを  
弾いてふたりを守った。バリアに弾かれたヤミは宙返りして地上に  
降りると、両腕を前方に伸ばした。その瞬間、ヤミの両手から赤と  
も黒ともつかない邪悪な光線がルミナスのバリアに向けて一直線に  
発射された。光線がバリアに直撃した瞬間、ルミナスは「うっっっ」  
と表情を歪めた。

「この力、なんて凄まじい……。ダメ、抑えきれない……。」

次の瞬間バリアに亀裂が大きく入ったと思つたら、瞬時に砕け散  
り、光線が3人に直撃した。

「っっあああああああつっっっっっっ！」

邪悪な力による衝撃で3人は弾き飛ばされた。

プリキュア5のメンバーやキュアピーチたちも残りのヤミを相手  
に苦戦していた。

「はあっ！」

とルージユが攻撃を仕掛けるが、ヤミはさりりとかわし、彼女の背後へと素早く移動する。

速い……！

ルージユが振り返った瞬間、ヤミが繰り出した手刀が眼前にまで迫る。

「たあっ！」

だがレモネードがヤミに跳び蹴りを与え、ルージユを助けた。「サンキュー、レモネード！」とルージユが礼を言った一方でヤミは五歩後退し、すぐに走り出す。それを見て、ミントが

「プリキュア！エメラルドソーサー！」

と両腕を交差させて技を飛ばしたが、バキンッ！

なんとヤミはすりりとした片足を伸ばした回転キックでミントの技を一瞬にして粉々にしたのだ。

「そんな……！」

これには技を放ったミント自身だけでなくルージユとレモネードも開いた口が塞がらなかった。

ドリームとアクアはふたりしてヤミをひとり、相手に激闘を繰り広げている。アクアはヤミに腹部を蹴られ、後方に飛ばされたが、すぐに体勢を整えて着地し、腕を交差した。

「プリキュア！サファイアアロー！」

ヤミに狙いを定め、数本の水の矢を迷わず撃つ。だが、ヤミは驚いたことにアクアの放った水の矢を次々と片手で捌き始めた。最後の一本を捌かれ、アクアは信じられない気持ちになった。

一体どうなっているの？どうしてあんな芸当ができるの……？  
そう疑問を覚えた瞬間、今度はドリームがヤミにキックを仕掛ける。だがヤミは視線はアクアに向けたままキックしようとしたドリムの足を片手で？むと、

「えっ？うわ、うわ、うわわわわわっ！？」

強い力でドリームをぐるぐると振り回してアクアへと投げ飛ばす。衝撃で十歩ほど後退したものの、アクアは見事ドリームの身体をキヤッチした。「ドリーム、大丈夫？」と問うアクアだが、ドリームは彼女の両腕の中で目を回していた。

「はっ！やあっ！」

ドリームが目を回している一方でローズも奮闘していた。素早く、正確に相手の身体にパンチやキックを放つが、ヤミは全て片腕で捌き、ひとつも当たらない。いい加減痺れを切らしたローズは拳に最大級の力を込め、

「はああーっ！」

と繰り出したが、ぱしっ、と簡単に相手に？まれた。「なっ！？」とローズが驚くと、ヤミは？んでいないも片方の手を彼女の腹部へとかざす。するとその手から黒い閃光が走り、爆発と衝撃が彼女を襲った。

「わああっ！」

吹っ飛ばされ、樹木に激突するローズ。しかし、さすがは単独でもプリキュア5以上のパワーを持つ彼女。腹部を抑え、苦痛の表情をしても倒れはしなかった。

「プリキュア！ラブサンシャイン！フレエツシュ！」

ピーチはふたりのヤミに向け、武器のピーチロッドでハートの模様を描いて高速で飛ばしたが、ふたりともたやすくよけ、ひとりがあっという間にピーチの懐に入る。ハッと表情をしたピーチにヤミは無言のまま彼女の腹部に黒の閃光を発生させ、爆発と同時にピーチを吹き飛ばした。

「っっっピーチ！？」

振り返るベリーとパインとパッション。彼女たちもそれぞれの武器で攻撃しようとしたが、相手はそんな暇も与えず、瞬時に彼女たちも黒い光球を次々と飛ばして直撃させた。

「っっっきゃあああああっっっ！！！！」

あまりの大苦戦に離れて見ていた妖精たちも目を疑い、ムーブと

フープが口を開いた。

「プリキュアが苦戦しているムプ……」

「あの娘たち、とても強いフプ……」

「一体何者なんだロプ……？」

「プリキュア、負けないでルル……」

シロップとルルンが心配そうな表情で見守る。

「……はあ、はあ、はあ……」

プリキュアたちは全員ヤミたちから距離を取った。全員激しい戦いをしたために身体が傷つき、呼吸が荒くなっている。だが対するヤミは10人が10人と衣服が汚れたり、切り裂かれていたりしていても大きな傷は付いておらず、息切れすらしていない。まるで「疲れる」ということを知らないようだ。

「はあ、はあ……はっ。一体、何なんですか、あなたたちは……？」

ブロッサムが尋ねたが、次にヤミが発したのはただ一言だけだった。

「プリキュア………破壊スル！」

次の瞬間、十人全員が高速で走り出し、プリキュアたちに迫った。あまりの速さにプリキュアたちはハッとしたのが限界で、防御どころかわすことすら追いつかない。ヤミたちはすでに目の前まで迫っていた。このままではやられてしまう。全員が思わず目を瞑ったその時だった。

「はあっ！」

ドールキティがプリキュアたちの前に立ち、ライトスピナーを握り締めた右腕をヤミたちに向けて伸ばしたのだ。瞬間、ライトスピナーから陽が差し込んだような強力な光が放たれ、ヤミたちに浴びせられた。

「ギ・ギヤギヤギヤグガガガッ！」

するとヤミたちは初めて表情を歪め、少女とは思えない悲鳴をあげると苦しそうに身体をねじらせた。そして次の瞬間プリキュアた

ちは全員驚きの声を発した。

ヤミたちが黒い砂と化したのだ。10人の少女たちは呆然として  
いるプリキユアたちの目の前であっという間に砂へと変わっていく。  
数秒後にはもうそこにヤミたちの姿はなく、黒い大量の砂が残り、  
次の瞬間風が吹いて、砂を山脈へと運んでいった。

## 苦戦（後書き）

次回、ヤミの正体とハピネスランドの現状が明らかになる！

## 出発

とりあえず戦いを終えたプリキュアたちは変身を解除した（だがくるみは疲労が限界に来てミルクの姿に戻った）。ドールキティも変身を解き、もとの貴公子のような空色の服装に戻り、また30センチ程度のサイズへと小さくなる。キティは山頂にあるベンチに跳んで腰掛けると、プリキュアたちに向き直った。

「あなたたち、あの伝説の戦士プリキュアだったんですね。道理で妖精や精霊と一緒にわけです」

「ハピネスランドにもプリキュアの伝説は伝わっているミルク？」

ミルクが聞くとキティはうなずいた。

「ええ。プリキュアの活躍は過去の時代から耳に届いています。別世界にて少女でありながら邪悪な侵略者を相手に戦う勇敢な戦士と。こうしてみなさんと会うのは私も初めてですが」

「じゃあ自己紹介が必要だね！私、桃園ラブ。そしてこっちにいるのが・・・」

とラブが一番に名前を名乗り、他のプリキュアや妖精たちもそれぞれ自己紹介していった。最後にゆりが名乗り終わると、キティも口を開いて自分の名を言った。

「改めてご挨拶します。私はキティ。またの名をドールキティ。現ハピネスランド第一皇女であらせられるユカ・カヤマ・ハピネス様をお守りする騎士人形であります」

「あ・・やっぱり人形だったんだ」

なぎさが言うときティは「はい！」と元気に答えた。

「私は国王様の三代目の騎士<sup>ナイト</sup>であった方によって作られ、魂を吹き込まれて誕生しました。以来、私はハピネスランドの王位継承者となる方々を代々守ってきています。現在皇女であらせられるユカ様が21人目なのです」

「でもよくできていますね。とても人形には見えません・・・」

「でもユカ様に呼び出されるか、危機を感知しないと自分の意志では動けないんです」

ひかりが感嘆したように言うと、キティはちよつとだけ苦笑した。「それで、どうしてそのハピネスランドのナイトさんがこの高鳥山に？それにあのヤミと呼んだ娘<sup>こ</sup>たちは何なの？」

ゆりがメガネを人差し指でツツと軽く持ち上げながら尋ねた。するとキティは瞬時に表情を曇らせた。

「あのヤミという少女たちは実は人ではありません。自動人形<sup>オートマトン</sup>……つまりロボットなのです」

「……ロボット!?」「……」

途端にその場にいる全員が驚いて高く声をあげた。

「あれがロボット？ありえない。だってどっからどう見たって人間だったじゃん。だよね、ほのか？」

「でもプリキュアである私たちと互角、いえそれ以上に強かったわ。全然息切れしていなかったし、ロボットなら納得できるわ」

「だけどポルンは感じたポポ。あのロボットたちからはもの凄い邪悪な気配が出ていたポポ。怖かったポポ……」

「ココ！確かにとてつもなく嫌な気配がしていたココ。なんであんなロボットが現われたココ？」

「そう言えば、あなた最初そのお姫様と逃げてきたと言ったわね？今、あなたの国はどうしているの？」

かれんが問うと、キティはさらに表情を曇らせ、沈んだ声で呟いた。

「ハピネスランドは今、支配にさらされています。突如大量のヤミたちを手下にした邪悪な闇の戦士、キュアリベリオンによって……」

「えっ……?」

キティの最後の台詞につぼみは一瞬我が耳を疑った。つぼみだけではない。他のプリキュアや妖精たちも彼女の言葉が一瞬信じられなかったようだ。彼女たちを代表してつぼみがキティに問う。

「あの、すみません・・・今、なんて言いましたか？」

「ですから、ハピネスランドはキュアリベリオンという闇の戦士に支配されてしまったのですと・・・」

「・・・キュ、キュアリベリオン!？」

その瞬間、全員が同時に驚愕の声をあげた。誰もが目を大きく見開き、信じられないと表情に出ている。彼女たちの反応にさすがのキティも気づいたようだ。

「知っているんですか、キュアリベリオンを？」

「あ・・・は、はい。あれは8月1日のことなんですけれども・・・」  
つぼみはキティに全てを話した。ワンダー・プラネットのこと。

キュアリベリオンのこと。キュアセイバーのこと。全部話し終える  
と、キティは思わず眉を吊り上げた。

「そんなことがあったんですか。なるほど・・・」

「もう一回聞きます。本当にキュアリベリオンと名乗ったんですね？」

「ええ。間違いありません。それに彼女の服装もみなさんが会った  
キュアリベリオンとほぼ一致しています。ただ、私が見たキュアリ  
ベリオンは右目に眼帯を付けていたり、片腕に鉤爪を装備していま  
したが」

「でもこれってどういうこと？まさかまた真夜さんがキュアリベリ  
オンに？」

「それはないと思うわ。真夜さんは光を取り戻したんだもの。そう  
簡単にまた闇に心を支配されるはずが・・・」

「じゃ、じゃあキュアリベリオンの偽者って、どう？」

「可能性はあるけれど、でもどうしてキュアリベリオンの名前を語る  
の？プリキュアの名前を傷つけるつもりならキュアセイバーでも  
いいじゃない？」

「・・・これは徹底的に調べるべきだと思うわ」

「そうだね。ボクも同感だよ」

咲と舞が話し合った後、美希が顎に手をやりながらそう言い、い

つきも彼女の意見に賛同した。

「確かにそうね。キュアリベリオンと名乗った以上、本当に真夜さんなのかどうか確認する必要があると思うわ。それにハピネスランドが彼女に支配されている聞いてしまった今、ほうっておくわけにはいかなくなったわね」

「そうですね。私も気になりましたし、見捨てるわけにはいきません」

ゆりとうららとも賛同する。そして当然つぼみも、

「私もハピネスランドに行きたいです！キュアリベリオンが本当に真夜さんかどうかだけでも確かめないと……！」

「よっしゃあつ！じゃあみんなでハピネスランドにいくぞ〜！けつて〜いっ！」

「えりか〜、それ私の台詞〜！」

「いやいやいやのぞみ、そういう問題じゃないって。みんな大切なことを忘れてない？行ってくたって、どうやって行くの？パラレルワールドなんだよ、パラレルワールド。外国じゃないんだよ」

りんが全員に言ったが、「大丈夫よ」とせつなが前に出て変身アイテム・リンクルンを取り出した。

「アカルンの力を使えば、簡単にハピネスランドに行けるわ」

「あ、そうか！せつなちゃんのアカルンなら……」

「あ、そうだったね、ブッキー！せつなのアカルンは瞬間移動だけじゃなく、パラレルワールドも行き来できるんだよ！それを使えば、みんなハピネスランドに行けるよ、キティさん！」

ラブがキティに希望の声をかけたが、キティは沈んだ声のまま答えた。

「それは素晴らしいですが、先にユカ様を探さないと……。それにこれは私たちの世界の問題です。別の世界の住人であるみなさんまでご足労をいただくわけには……」

「もう別の世界とか、そんなことを言っている場合じゃないナツ！」  
その時ナツが叫び、キティは彼に目を向けた。ナツに続いて

シプレ、コフレ、タルトも口を開いた。

「別の世界でも支配されていると聞いて、黙っているわけにはいかないですう〜」

「そうですね〜。それにこのままほっつておいたら、僕たちの世界にも影響が出るかもしれないですう〜」

「そうやで。お姫さんも大事やけど、国民も大事や。ユカ様はわいらが必ず見つけるさかい、キティはんはプリキュアはんたちとハピネスランドに行くんや!」

「みなさん・・・」

妖精たちに顔を向けていたキティにこまちが一步進んで声をかけた。

「キティさん、せつなさんの力でハピネスランドに行けたとしても、私たちはハピネスランドのことを全然知らないの。ここは住人であるあなたの力が必要になると思うわ。お願い。私たちに力を貸して。」

その台詞にキティはほんの少しだけ口を開き、すぐに閉じる。そしてゆっくりとプリキュアたちの顔をひとりひとり見た。彼女たちの眼差しは強く、迷いはどこにもなかった。なんてきれいな目をしているのだろう。その目を通して、やっぱり彼女たちは伝説の戦士と呼ばれるプリキュアなのだなと強く感じ、キティは意を決して、ベンチの上で立ち上がった。

「分かりました。しかし、ハピネスランドもすでにヤミが数多く徘徊していると思います。厳しい戦いになるでしょう。それでもよろしいですか?」

「覚悟はもうできています!」

つぼみの強い返事にキティはうなずくと、妖精たちにもう一度顔を向けた。

「ではユカ様のほうはよろしくお願いしますね」

「任しときんかい!大船に乗ったつもりでいてくれや!」

タルトがぼん、と胸を叩いた一方でミルクはココとナッツの手を

握り、視線を合わせていた。

「ココ様、ナッツ様、ミルクも行ってくるミル。おふたりとも、お気をつけて・・・」

「ミルクも気をつけて行くココ・・・」

「みんなのことは頼んだナッツ・・・」

ミルクは手を離すと、煙を発し、くるみの姿に変えた。

「それじゃ、みんな準備はいい？」

「・・・うん！！！！」

全員の声を確認すると、せつなはリンクルンの挿入口にアカルンを差し込んだ。そして、

「ハピネスランドへ！」

と目的地の名を伝える。すると次の瞬間、プリキュアたちとキティは巨大な赤い光にあつという間に包まれ、空間から消える。

彼女たちの新たな冒険が今始まった。

プリキュアたちが消えた直後、山頂に残っているのは妖精たちだけとなった。ただし、変身アイテムに姿を変えられるメツプルとミツプル、ポルン、フラツピとチョツピ、プリキュアの種を産み出せるシプレ、コフレ、ポプリはプリキュアたちと一緒に。残ったメンバーはとりあえずキティと約束したとおり、第一皇女のユカを探することに決めた。

「それでタルト、どうやってユカ様を探すんだロプ？」

「あん？」

シロツプが聞き、タルトは振り返った。

「ユカ様を探すと言ったからには何か考えがあるロプ？」

「なーんや、そういうことかいな。決まっとるがな。そんなもん・・・」

「・・・」

「・・・うんうん・・・！！！！」

「ないで！！」

ズッコ!

タルトの答えに全員ズッコケた。

「何も考えないで言ったナツ!？」

「大船に乗ったつもりでって言うからってっきり何か考えがあると思  
ったココ!」

「しゃーないやんけ! ああでも言わんとプリキュアはんたち、安心  
してハピネスランドに行けへんやんか」

「だからと言って、無責任ムブ」

「本当にタルトはどうしようもないフブ。スウィーツ王国の王子が  
聞いて呆れるフブ」

「なんやてえーっ!？」

「みんな、ケンカはやめるルル!」

「キュアキュア〜 プリプー」

その時、シフォンが耳をピコピコ動かした。妖精たちはみなシフ  
オンに振り向き、注目する。すると次の瞬間、シフォンの額が突如  
エメラルドに輝き始め、さらにその光を強く発したのだ。まばゆい  
エメラルドの光はあっという間に妖精たちの頭上を覆っていく。

「うわあああああああああっ!!!」

妖精たちはそのまぶしさに全員目を瞑った。

日本から太平洋を渡って到着する自由の国・アメリカのニューヨ  
ーク市内に本部を置く国際医療団体。その施設の一室内にハピネス  
ランドの第一皇女であるユカ・カヤマ・ハピネスはベッドの上でハ  
ツと目を覚まし、上体を起こした。

「ここ・・・は？」

「目が覚めた？」

横から声が聞こえ、ユカはすぐさま目を飛ばす。するとそこには  
黒い長髪の、17歳くらいの少女が椅子に腰掛けていた。

「あなたは・・・？」

ユカが尋ねると、少女は口を開き、こつ名乗った。  
「私は雨牙真夜あまがま。またの名を、全てを希望へ導く救世の光、キュア  
セイバーよ」

## 出発（後書き）

せつなにアカルンという移動手段があつてよかったなあとつくづく  
思いました。

次回、キュアセイバー遂に登場！

## 野獣

13時間前。午後8時……。

ニューヨーク市内の人気のない路地にて真夜はパートナーのロモと帰路に着いていた。彼女の手には医学関係や環境問題をまとめた本が入った紙袋が持たれている。彼女の傍らを背中の羽を動かして飛んでいたロモはそれをジト目で見、呆れたようにため息を吐いた。

「全く、買ったばかりの本をマクドナルドでそのまま忘れるなんて真夜ちゃんもうっかり者ロモ」

「だからごめんって、言っているでしょ。それに私一人じゃちよつと心細いし……」

「だから早く帰ろうと言ったんだロモ。ニューヨークは昼はともかく夜は怖いと聞いているからロモは外に出たくなかったロモ」

「市民でも拳銃の所持が許されている国だからねえ……。まあ大丈夫よ、きつと」

「どうしてそんなこと自信持つて言えるロモ？」

「自信があるってわけじゃないけど……そうね、あの娘たちが移ったのかもね」

「あの娘たち……？」

ロモモが尋ねると、真夜は微笑みながらパートナーに振り返った。

「ロモモも会ったでしょ？私の新しい友達」

「……プリキュアたちのことロモ？」

「そう。今頃何をしているのかな、みんな」

「もう8時だから寝ているか、テレビでも見ているロモ」

「……ロモモ、日本とニューヨークは時差がかなりあるから、もう向こうは明日の朝か昼になっているわよ」

「そう口モ？」

そう会話をしているうちに真夜と口モモは広い公園に出た。公園内を横切り公道に出ようとしたその時、ふと口モモの耳が直角にピン！と立った。

「どうしたの、口モモ？」

「誰かの気配がする口モ」

「え・・・？」

「こっち口モ！」

口モモはぴゅっ、と素早く飛んで周辺の茂みの中に飛び込んだ。そしてしばらくして、

「わあああああああーっ！！！」

と悲鳴をあげて茂みから飛び出し、真夜の胸に飛び込んだ。

「ど、どうしたの！？」

「真夜ちゃん！お、女の子が、女の子が死んでいる口モ！」

「ええっ！？」

口モモの衝撃発言に驚き、真夜はおそろおそろ茂みに寄った。そしてガサガサッと茂みを掻き分け、奥を覗いた。

口モモの言うとおり、女の子が目を瞑り、横たわっていた。おそらく年齢は10歳くらい。しかし真夜は彼女が普通の女の子ではないということに服装から読み取った。女の子はスカートこそ短いもののドレスのような衣装を着ている。そして彼女の首には六角形に輝くエメラルドグリーンペンダントが掛けられていた。一瞬コスプレかとも思ったが、それにしても風貌がとても高貴に感じる。どこの娘なのだろう。真夜がそう思った時だった。

「う・・・うう・・・」

女の子の口からわずかに声が漏れ、うっすらと両目を開けたのだ。両目を開いた少女は真夜と目が合うと、ハッとした表情になり、がばっと彼女に抱きついた。

「え、あ、ちよっと・・・」

突然抱きついてきた10歳の少女に真夜が戸惑うと、少女は顔を

上げ、口から泡を飛ばす勢いで叫んだ。

「お願いです！かかまってください！」

「え？かかまうって、どういうこと？」

「今日だけでいいんです！助けて！」

「きゅ、急に言われても、あなた、一体・・・？」

「！・・・真夜ちゃん！」

その時、ロモモが背後から張り詰めた声で真夜に言い、彼女は振り向いた。そしてハッと息を呑んだ。

公園の至る所からなにやら黒っぽい大きなもやのようなものがひとつ、ふたつ現われ始めていた。黒いもやは全長2メートルくらいで不気味に光る目が二つある。

「！・・・来た！」

黒いもやを見た途端、少女は震えだした。その様子に気づいた真夜は少女に目を移し、また黒いもやに戻す。黒いもやは全部で五つ、公園内から現われ始め、彼女たちの前までずりずりと這いずるよう接近する。やがて黒いもやは姿を変え、全身黒い毛で覆われた大きな野犬がその中から現れる。

「狼？」

「違うロモ。真夜ちゃん、犬の姿をしているけれど、こいつら闇の力で生まれたんだロモ。こいつらから邪悪な気配が思いつきりする

ロモ」

「闇の・・・？もしかしてこの娘を狙っているの？」

真夜は再び少女に目を移す。少女は真夜に抱きついたまま目を瞑り、かなり怯えた様子でいた。少女に目を移した瞬間に凶犬たちは敵意に満ちた眼で睨み、威嚇するように激しく吠え出す。凶犬たちの咆哮に少女はさらに怯え、真夜の服をぎゅっと強く握った。

「大丈夫よ」

すると真夜は腰を降ろし、彼女と視線を合わせ、優しく微笑んだ。

「事情はよく分からないけれど、安心して。あなたは私が守るから」

「え・・・？」

最後に目に涙を溜めていた少女の頭をなで、真夜は立ち上がると、ロコモに声をかけた。

「ロコモ！」

「オツケーロコモ！」

彼女の声に応えてロコモは煙を発し、ペンダント状のアイテムに姿を変える。真夜は素早く右手でそれを？み、左手の人差し指で、チリーン、と響きよく弾くと、頭上へ掲げ、叫んだ。

「プリキュア！セイント・リバーズ！」

その瞬間、ペンダントが白く発光し、彼女を全身まで包む。光のガーデンでスキップしながら天使のような羽毛を身体に集めていき、衣装が施される。二の腕までの袖の純白の衣装に天女のような肩飾り。花が開くような形に裾が広がったスカート。胸部には白い薔薇があしらわれたリボンが施された後で黒い長髪が銀に染まっていき、水色のカチューシャが装着される。さらにその上に短く薄い透明のベールが被せられ、背中から妖精のようなシャープな六枚の透明の長い翅はねが生えた。

最後に真夜は変身アイテムのペンダントを首を掛けると、翅はねを広げて地上に舞い降りた。

その一部始終に少女は言葉が出ないほど驚く。変身を遂げた真夜は優雅にポーズを決めると、

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！！」

と名乗りをあげた瞬間、彼女の背後に神々しい光が煌いた。

「キュアセイバー……。もしかしてプリキュア……。？」

ようやく声を発した少女だが、それも束の間、バウツ！と吠えて飛びかかってきた凶犬にすぐさま悲鳴をあげた。

「はっ！」

だがセイバーが凶犬を瞬時に蹴り、急いで彼女を抱きかかえた。そして夜空へ高く跳躍し、凶犬たちからかなり距離を取った位置へ着地して彼女を降ろす。降ろした後、セイバーは再び首に掛けていたペンダントを人差し指で弾いて、チリーン、と鳴らした。その刹

那、ペンダントから二つの白い光球が飛び出し、彼女の両手に降りて武器・リライフシンバルが召喚された。

「ロモモ、あなたはその女の子をお願い。私はあいつらをなんとかするから！」

「分かったロモ！」

ペンダントに変身したロモモは煙を発して妖精の姿に戻ると、少女の傍らに寄った。それを確認し、セイバーは再び凶犬たちに向き直った。五匹の凶犬はみなギラリと光る眼でセイバーを睨み、触るだけでも痛そうな牙を向けながら、はっ、はっ、と荒い息を吐いている。セイバーも同様に細めた両目で睨み、声を発した。

「ただの野犬か狼だったら、まだ手加減するけど、闇の手先なら話は別よ！どこからでも来なさいっ！」

そう言い終えた瞬間、5匹の凶犬はじゃあ遠慮なく、と返答するかのように一気に走り出した。素早い動きであっという間に距離を詰めて地面を蹴り、まず最初に一匹が跳躍して牙を放つ。だがセイバーは隙を突いて腹部を蹴り飛ばし、次に襲いかかってきた二匹目も回し蹴りで地面に強く叩きつけた。

「セイバー！サウンド・ウェイブ！」

次の二匹もジャーントツ！と鳴らしたリライフシンバルから放たれ、大きく空間を震わせた音波で苦しめて動きを封じると、

「セイバー！リカヴァリング・アレスト！」

シンバルから銀の光の環を二つ発射し、サウンド・ウェイブで苦しんでいた二匹を捕らえ、強烈な光の力で浄化する。だが、

「うっ！」

突如背後から飛びかかってきた五匹目に爪で右肩を引っ搔かれ、左手で抑えた。セイバーに傷をつけた凶犬は、はっ、はっ、と舌を出しながら呼吸をすると再び素早く走り出し、彼女に襲いかかった。

「厄介ね。でも！」

だがセイバーも右肩に怪我をしながらも両腕を大きく広げて急いでシンバルを鳴らした。瞬間、シンバルから無数の白い光の粒が弾

けだす。

「セイバー！ホーリイ・アタック！」

そう叫ぶと、光の粒は尾を引き、光速で次々と凶犬に直撃し、無数の光を受けた凶犬は最後の咆哮をあげると、黒い塵となって消滅した。

ふうっ、と息を吐いたのも束の間。即座に残り二匹の凶犬が眼前へと迫り、発達した後ろ足を活かして立ち、牙と前足の爪で襲う。セイバーは慌ててリイフシンバルを盾にしてなんとか防御すると、腹部がから空きになった一匹に思いつきり膝蹴りを与えた。きゃんっ！と吠え、一匹を飛ばすと、セイバーは残り一匹も鼻を横から殴りつけ、ひるんだ隙を突いてシンバルから強力な光を浴びせ、浄化した。

残り一匹。セイバーは体勢を整えた凶犬と睨み合うと、片足に白い光を集め始めた。徐々に白い光は彼女の足に集まり、パワーを高めていく。最大限のパワーを片足に溜めたセイバーは走り出すと、もう一度夜空に向かって高く跳躍した。同時に凶犬も咆哮をあげて高く跳び上がる。満月を背景にセイバーは一瞬凶犬と目が合うと、

「はあっ！」

と凶犬の顔に光を最大限にまで溜めた足を伸ばし、強烈な蹴りを炸裂させた。

アオオオオオオンッ！！

無念の咆哮をあげ、背中から地上へ撃墜した凶犬に対し、セイバーは優雅に着地する。地面に激突した凶犬は弱りながらも一度体勢を起こそうとしたが、すぐに力尽きて倒れ、黒い塵となって消滅した。

「やったロモ！さっすがセイバーロモ！」

敵を全て倒したセイバーの胸にロモモが喜びながら飛び込む。両手を広げ、ロモモを受け入れたセイバーだが、

「痛っ・・・！」

すぐに傷ついた右肩を抑え、ロモモは彼女から離れた。

「セイバー、大丈夫口モ？」

「大丈夫よ、これぐらい。それより口モモ、あの女の子は？」

「あの女の子なら、あそこに……あっ！」

口モモが振り返った先では少女は倒れていた。驚いてすぐさま駆けつけ、彼女を抱き起こすセイバーだが、少女は眠っているようだった。

「……よくこんな所で眠ってられる口モね。セイバー、どうする口モ？」

「ほっつておいたら、凍え死ぬわ。仕方ない。私の部屋に連れて行く。」

セイバーは変身を解くと、少女をなんとか腕に抱きかかえ、口モモとともに公園を後にした。

だが翌日、彼女から思いも知らない真実を突きつけられるとはこの時少しも思っていなかった。

野獣（後書き）

次回、真夜もハピネスランドへ！

## 過去の自分

「キュアリベリオン……ですって！？本当にそう言ったの、ユカ？」

「う、うん。確かにそう言ったよ」

真夜とロモモは一瞬で愕然とした。

翌日、ユカと朝食を取り、真夜とロモモはその後、彼女から詳細を全て聞いた（ちなみに彼女が昨日着ていたドレスは汚れたため洗濯に出し、今は別の部屋に暮らしている10歳の、真夜と同じ境遇に遭った少女の服を借りて着ている）。彼女がパラレルワールドに存在する幸せの国・ハピネスランドのお姫様であること。突如ハピネスランドを何者かが大軍を率いて襲撃してきたこと。その首謀者がキュアリベリオンと名乗ったこと。

「キュアリベリオンはヤミというロボットと黒い犬たち、さらに異能力を持つマイナス七人衆と呼ばれる幹部たちを部下に、あつという間に私が住んでいた城を支配したの。父上と母上は私を逃がすために城に残って……私の騎士<sup>ナイト</sup>だった兔羽も、そして一緒に次元を超えたはずのキティもどこかの世界に飛ばされちゃって……もう私には誰もいない。私はひとりぼっち……」

悲しく沈んだ声になってうつむくユカにその時の記憶がまざまざと蘇る。

次々と倒壊していく建物を背景に炎の海を大鎌を振りかざして平然と歩くキュアリベリオン。

彼女のあとに続くマイナス七人衆と呼ばれし十代前半から後半の少女たち。

さらにそのあとに不気味なほど正確に列を作って歩く無数のヤミと凶犬たち。

記憶を外へ追い出したくてユカは頭を激しく振り、髪を両手で掻きまわった。

そんな彼女に真夜はもう一度声をかけた。

「ユカ、私からあなたに話さなきゃいけないことがあるの・・・」

真夜の声にユカは涙を堪えた目で彼女に向く。真夜は一旦目を閉じるとすぐに開いて驚愕発言をした。

「実は・・・キュアリベリオンは過去の私なの！」

「え・・・？」

真夜が言った意味が理解できなかったユカに真夜は自分の過去を話した。一年前、異国での戦争にて両親と友達を失った悲しみで世界に憎悪を抱き、闇の力に触れてキュアリベリオンに変身したこと。8月1日に遂に彼女は世界を滅ぼそうとしたこと。だが他のプリキユアたちによつて間違いに気づき、滅亡を回避できたこと。全てを話し終えるとユカはハツと息を呑み、両手で口を塞いだ。

「あ・・・あなたがキュアリベリオンだった・・・！！？言われてみれば、キュアリベリオンに凄く似ている・・・！！」

「待つて口モ！確かに真夜ちゃんはキュアリベリオンだった口モ。でも今の真夜ちゃんはキュアセイバーで、世界を守るために戦うプリキュア口モ。ユカもセイバーに助けられたこと、覚えているはず口モ」

口モモが弁解するように言うと、ユカは複雑そうな表情をした。

「そりゃ覚えているけど・・・じゃあ、ここにいる真夜さんがかつてキュアリベリオンだったとして、私の国を襲ったキュアリベリオンは一体誰なの！？」

「正直私にも分からないわ。偽者？でも私がキュアリベリオンだとしてもやりそうなことだわ・・・」

思わず眉間にしわを寄せ、顎を拳に乗せて考え込む真夜。だが彼女が考える時間はすぐに終わった。

突然カーテンが閉められている窓の外が騒がしく聞こえ、「ん？」と真夜は反応した。

「な、何口モ？」

「・・・口モモ、ユカをまたお願い」

一步、一步と喧騒が聞こえる窓に近づく。そして窓まであと半歩という位置で真夜は足を止め、小さく息を吸うと、意を決してカーテンを素早く開けた。するとそこには……。

「!……あなたたちは!」

「ん?……あ!ま、真夜はん!」

「真夜?……ということは、ここはニューヨークナツ?」

「プリプ」

そこにいたのは手を叩いて喜んでいるシフォンを一番上に山積み状態になっているココ、ナッツ、シロップ、タルト、ルルン、ムーブ、フープの妖精たちだった。

「あれ?みんな!ひさしぶりロモ!どうしてこんな所にいるロモ?」

「話せば長くなるし、わいらもロモモに会えて嬉しいんやけど……

・まず助けてつかあさいっ!」

みんなを乗せ、顔を真っ赤にして歯を食い縛っているタルトが叫んで、真夜とロモモは慌てて妖精たちを部屋の中に入れた。突然の来訪者に、ハピネスランドのお姫様は目をぱちぱちさせた。

妖精たちから話を聞いたところ、どうやら彼らはシフォンの能力で彼女の部屋の外へ一瞬で移動したらしい。シフォンの額が光ったと思ったら、いつの間にかここに来てしまったというわけだ。

ロモモと同じで時々不思議な力が出るのね……。

真夜は椅子に腰掛けながら哺乳ビンでドリンクをちゅうちゅう吸い取っているシフォンをちらと見た。だが次に高鳥山での出来事を妖精たちから聞いて、真夜はまたもや愕然となった。

「みんながハピネスランドに……!?!」

「そうココ。みんな、キュアリベリオンが真夜かどうかを確かめるためにキティと行ったココ。でもきつと戦いを終えるまで帰らないつもりなんだココ!」

「でも真夜ちゃんはこのにいるロモ。ハピネスランドには行ったこ

ともない口モ」

「真夜・・・、ハピネスランドにいるキュアリベリオンに心当たりはないルル？」

ルルンが聞くと、真夜は顎に手をやり、しばし考え込んだがすぐにあきらめた。

「私にも分からないわ。私自身、キュアリベリオンは過去の自分として封印したはずなんだから」

すると今まで黙っていたユカが前に出て妖精たちに聞いた。

「あの、関係ないけれど、キティは元気だった？」

「ん？ああ、キティはんなら心配いらんで。起きていきなりブラックはんの指を蹴ったくらいやったんやから」

「そう。よかった、無事で・・・」

ユカは安堵したように微笑んだ。

「でも怖くなるほど凄い偶然ナツ。ハピネスランドを支配しているのがキュアリベリオンで、逃げてきたユカ姫を助けたのがキュアセイバーである真夜だなんて・・・」

「本当に偶然かしら？まるで磁石が互いに引き寄せ合うかのよう・・・」

「それにしてもどうしてキュアリベリオンはユカ姫を狙うフプ？」

「それ、ムーブも気になってたムプ」

「ううん、キュアリベリオンが欲しいのは、このペンダントだと思っ・・・」

ユカはエメラルドグリーンペンダントを手にして、みんなに見せた。

「これ、ハピネスランド初代国王の時代から代々伝わるお守りで、小さいけれども凄い力が込められているらしいの。実際、私はこのペンダントの力で次元を超えてこの別の世界に来たし、前国王だった私のお祖父様も亡くなる前にこれを悪しき者に決して渡してはならないと言ってた。もし渡したら、それこそ全世界の破滅とも・・・」

「

「全世界の破滅・・・ロプ？」

「うん・・・」

するとしばらく無言で考えていた真夜がユカの肩に手を置き、腰を低くして彼女の目を見て言った。

「ユカ、そのペンダントの力で私たちをハピネスランドに連れてってくれるかい？」

「・・・えええっつ！？」

これには全員が驚いた。だが真夜は真剣な眼差しで冷静に続ける。「私も確かめてみたいの。キュアリベリオンが何者か・・・ううん、そいつがキュアリベリオンと名乗った以上、私が行かなきゃならないと思うの。わざわざ自分の身を危険にさらすようだけどもお願い、連れて行って」

「でも、ペンダントで次元を超えるのはかなり負担がかかるの。そのせいで私はキティと離れちゃったし、真夜さんがよくても口モモが・・・」

「大丈夫口モモ！」

口モモが拳を握り締めて張り切るように口を挟んだ。

「どんなに辛くても口モモは耐えてみせる口モモ。こっ見えても口モモはタフなんだ口モモ」

「ココたちももちろん行くココ！」

「プリキュアのことか心配ナツ！」

「わいも同じ気持ちや！こっなったら真夜はんの服に噛みついてでも離さんで！」

「・・・私にくっつくのはいいけど、噛みつかないでほしいわ。でも、ありがとう」

真夜はもう一度ユカの目を見た。

「ユカ、あなただってお父さんやお母さん、そして民たちが気になるでしょ？このままほっつておくわけにはいかないよあなたも気づいているはずよ。それに・・・感じるのよ。万が一、万が一だけでもキュアリベリオンが私と似たような存在ならハピネスランドを支

配しただけで終わるとは思えない。もしペンダントを狙っているなら、それでとんでもないことをやらかす気がするの」

「……」  
「かつてキュアリベリオンだった私が言っても説得力ないかもしれないけれど、私を信じて。あなたは必ず私が守るから。約束する。たとえこの命に代えても……！」

「……分かった。真夜さんのこと、信じる」  
「ユカ……」

真夜が思わず微笑むと、ユカは手を差し出した。それを見て、「え？」とした表情で真夜はユカに視線を戻す。ユカの目は濁りは少しもなく、どこまでも澄み切っていてとても綺麗だった。真夜はもう一度微笑むとユカの手を優しく握り、ふたりは互いに笑い合った。数分後、ふたりは施設の庭に移動し、身体に妖精たちをしつかりと貼り付け、ペンダントの力で光とともに空間移動を開始した。

これから出会うことになるであろう最大の敵がいる戦地へ。

壁全体が黒く変色し、全く別の城へと変貌を遂げたハピネス城。

その皇宮にて7人の少女たちを前に、黒い制服を着た長髪の少女がまるで黒い花が咲いたような、あるいは悪魔の手が開いたみたいな形の玉座に片足を組んで座っていた（玉座の傍らには小さな円形のテーブルがあり、そこに鋼鉄製の鉤爪と黒い大鎌が寄り添うように置いてあった）。

ふいに少女はハッと何かに気づいたような表情になり、眼帯をしている右目に手を当てた。

「疼く……疼くわ、この目が」

眼帯をした少女がそう呟くと、彼女の前にいる7人の少女のうち、旧日本兵のような軍服と軍帽を身につけた背の高い少女が声をかけた。

「……どうしましたか？」

「ん・・・？」

「普段笑わないあなたが珍しく笑っていたものだから・・・」

「・・・そう。私、笑ってたの？ふうん・・・」

眼帯をした少女はさらに口角を上げ、笑みを広げた。

「早く来て・・・真夜」

## 過去の自分（後書き）

今回はハピネスランドに到着したプリキュアオールスターズsid  
e。そして三人目の新ヒロイン登場！

## 隠れ家

「ここがハピネスランド……なんですか？」

「……はい。私も信じたくありませんが」

小高い丘に立ったつばみが蒼白な顔立ちで聞くと、キティは悲しそうに目を伏して答えた。

20人の少女たちの目の前に広がるのは幸せの国とは程遠い漆黒の闇に包まれた世界だった。空は薄暗く、星すらも見えなくて、ヨーロッパ風の街並みはゴーストタウンのように気がなかった。あまりにも静寂な世界。その全貌にプリキュアたちは思わず声が出なかった。

「今、夜なんですか？」

暗い空を見上げてひかりがキティに尋ねた。ちなみに今のキティは再び人間大に巨大化している。

「いえ、まだ昼です。おそらく強大な闇の力で陽が差し込まないようにしたのでしょう。闇にとって光は天敵ですから」

「……キュアリベリオンは今、どこに？」

なぎさが問うと、キティは指を指した。彼女が指した方角には黒く、壮大な巨城があった。

「きつと、あそこです。あそこに国王様と王妃様、おそらく兔羽さんも……」

「兔羽さん？」

今度は舞が聞くとキティは少し誇らしげに話し始めた。

「私とともにユカ様をお守りする騎士<sup>ナイト</sup>として、フルネームは月野葉<sup>ツキノは</sup>兔羽<sup>とほね</sup>といます。まだ若いですが私よりもしっかりしていて優秀な方です。彼女は鏡の星と月の住人を両親に持つディアーナという普段は猫の姿をしている使者の力を授かり、セーラーセレーネという月と鏡の属性を持つ誇り高き戦士に変身してこれまで一緒に戦ってきました」

「セーラーセレーネ……」

えりかが反芻<sup>はんすう</sup>するように呟くと、キティは再び悲しげに目を伏せた。

「しかし、兎羽さんは私とユカ様を逃がすためにひとり残ってしまった……。必ず国王様と王妃様を助けると言いましたが、あのヤミの数ではおそらく捕まって、城に……」

「……」

これ以上言葉が続かなくなったキティにみんなは声をかけられなくなった。よほど敵は強かったのだろう。かつてキュアリベリオンと戦った時も彼女は単独にもかかわらず19人のプリキュアを圧倒するほど強かった。そんな彼女が率いる軍団なのだ。弱いわけがない。ヤミ10人でも苦戦した自分たちに立ち向かえるのだろうか。彼女たちの間に不安が走った。

「……行くわよ」

だが、その不安を押し込め、ゆりが丘を降り始めた。

「え？ゆ、ゆりさん？」

咲が驚くとゆりは止まり、彼女たちに振り返った。

「何をしているの？私たちはもう後戻りはできないと分かっているこのハピネスランドに来たはずよ。それに……たとえキュアリベリオンが真夜さんだったとしても彼女の脅威をこれ以上さらすわけにはいかない。どんなに苦しくても止めるのがプリキュアのはず。それを忘れたの？」

「……あ……！」

ゆりの台詞にみんなはハツとなった。そして互いに目を合わせ、口元を引き締めきりりとした表情でもう一度ハピネスランドを見るとまずラブが口を開いた。

「そうだった。私たち、大事なことを忘れていた」

「怖いけど、怖がってられないもんね！」

「私たちの世界を守るためにも……」

「精一杯頑張るしかないわね」

「そうね。どこまで出せるか分からないけれど、やれるだけやってみるわ！」

祈里、うらら、せつな、こまちが続いて言うとのぞみが拳を高々と上げて叫んだ。

「よし！元気が出てきた！みんなで張り切って行つくぞ！それっ！りんちゃん、早く早くっ！」

「って、声がでかいっえに走ったら転ぶでしょうが！待ちなさいっ！」

「私たちもおふたりに続いて行きましょう！」

「っっっっっんっ！！！！」

つぼみの声に伝えてみんなも丘を降り始めた。最後にキティが降りると、すぐさまゆりの隣に並び、声をかけた。

「彼女たちの扱いがうまいですね」

「一応最年長だから……。昔から皇族に仕えてきたあなたには負けるけれど」

「……ひとつ教えますが、私は人間の年齢にすると15歳なんですよ」

「えっ……？」

ゆりがキョトンとすると、キティはくすくす笑って街へ降りていった。

静寂に包まれた街はどの建物も無人で、誰も住んでいなかった。

鳥の声すらも聞こえない。まるで街全体が死んだような静かさにプリキュアたちのほとんどは不気味を通り越して恐怖を感じ始めた。

「え、えりか、どうして私の後ろに立つんですかあ？」

「つぼみこっこの得意じゃ……」

「得意じゃないですよっ！！！！」

「っっっっっしいいっ！！！！」

つぼみの怒鳴る声に全員が口到人差し指を当てて注意した。

「・・・妙ですね」

先頭を歩いてきたキティが止まり、美希が聞いた。

「キティさん、妙つて、どうしたんですか？」

「静かすぎるんです・・・」

「それは街の人たちがみんな逃げたか、捕まったから・・・」

「そうじゃなくて“誰一人も歩いていない”ことです。この街はキュアリベリオンが支配しているはず。それなのにヤミすら一人も見えない。・・・まさか！」

ハツと、キティが頭上を見上げる。すると街灯に監視カメラが彼女たちの姿を捉えていた。

「しまった！罠かつ！」

その時、彼女たちの周囲に、すたつ、と20人くらいの少女たちが高所から飛び降りるように現われた。ヤミだ。可憐な少女の姿をした自動人形オートマトンはとも機械でできているとは思えない裸眼をプリキユアたちにいつせいに向けた。

「第一皇女ユカ様ノナイトガヒトリ、キティ及ビ伝説ノ戦士プリキユアヲ確認。破壊スル！」

「さつきよりも数が多いわ！」

「来て早々盛大なお迎えね！」

ほのかとくるみがい、全員変身アイテムを手に取ったその時だった。突然彼女たちの頭上から声が聞こえた。

「目を瞑れっ！！」

「・・・・・・えっ!?!」「・・・・」

その声に全員反応し、上を見ようとしたが、それよりも早く何者かが彼女たちの前に着地した。12歳くらいの少年だった。頭にタバンを巻き、多くのポケットのついたジャケットにカーキ色のパンツにブーツ。映画とかに登場する兵士が来ていそうな感じの、長く使い込んだような薄汚れた格好。着地した少年はすぐさまジャケットを翻すと、

「デステイニーミラクルライト！」

そこからピンク色のペンライトのようなアイテムを素早く取り出し、太陽が降りてきたような強力すぎる閃光をヤミたちに浴びせた。「……ギ・ギヤグアアアアアアッツツ!!!!」「……」ヤミたちは防御が間に合わずに苦しみだして次々と砂と化し始める。

「早くこつちへ!」

少年はデステイニーミラクルライトと呼んだアイテムをヤミたちに浴びせたまますぐにキティの手を取ると、横様に駆け出した。「え、あ、ちよつと……!」と戸惑いながらも走り出すキティに続き、プリキュアたちも慌てて後を追いつめた。このデステイニーミラクルライトの発した閃光のおかげで監視カメラも彼女たちの姿を瞬時に見失った。

少年が連れてきたのは路地裏だった。そこは袋小路だ。

「ちよつと行き止まりじゃない!？」

「心配ねえよ」

くるみが文句を言うと、少年は路地の床に手をかけた。すると床が少しだけ開いた。大の大人が一人くぐれそうな大きさだ。少年はその隙間に飛び込むと、

「早く入れ!」

と中から叫び、みんなも急いで隙間に飛び込み、最後にゆりが隙間を閉じた。

「助かった。ありがとうございます」

「あんたユカ様の騎士、キティだろ?」

暗い地下道で礼を述べたキティに少年は彼女を見つめたまま尋ねた。

「そうですが、あなたは?」

「俺はダイチ。このハピネスランドの住人だ」

「!・・・そうですか。まだ生き残りがいたんですね。するとあなた

の他にも?」

「ああ・・・いる。けどそれよりユカ様は?ユカ様はどこにいるんだよ?」

ダイチが問うと、キティは瞬時に彼から目を離した。

「ユカ様は・・・いません」

「リベリオン軍にさらわれたのかよ!??」

「いえ、それはないと思いますが、見失ってしまったのです」

「何やってんだよ!騎士のくせに役立たず!」

「ちよつと君!助けてくれたことは感謝しているけど、キティさんだつて頑張つて・・・」

「いいいいんです、いつき。彼の言っているのは本当です。今の私は誰も守れなかった木偶人形に変わりありません・・・」

壁に寄り添い、しょんぼりしたように目を下に向けたキティにこれ以上怒つても仕方ないと思つたのか、ダイチは今度はプリキュアたちに視線を向けた。

「おまえたちは、誰なんだ?」

彼に問われ、全員を代表してつぼみが答えた。

「実は私たちは、別の世界から来たプリキュアなんです!」

「プリキュア・・・?あの伝説の戦士と呼ばれる・・・?」

「はい!」

「嘘を吐くな!おまえたちがそのプリキュアってんなら証拠を見せてる!」

「嘘じゃないですうっ!」

その時、つぼみの衣服のポケットからシプレが飛び出して抗議するように言った。コフレ、ポプリもえりかといつきのポケットから飛び出し、ダイチを驚かせる。

「僕たちはキュアリベリオンからこの世界を救うためにここに来たんですうっ!」

「それなのに嘘つき呼ばわりはひどすぎでしゅ!」

メップル、ミップル、ポルン、フラッピ、チョッピも煙を発して

変身アイテムからもとの姿へ戻す。

「証拠が見たいと言っんなら今すぐプリキュアに変身させてもいいメポ！」

「でも見つかりたくないから信じてほしいミポ」

「ポルンはあるまりあの娘たちと戦いたくないポポ」

「お願いラピ。信じてほしいラピ」

「まだプリキュアの体力を保らせてあげたいチョピ」

妖精たちの訴えにダイチは最初驚いていたが、すぐに慣れたように目を細めて妖精とプリキュアをしばらく交互に見つめた。

「……来いよ」

ダイチはプリキュアと妖精たち、そしてキティに言うと、地下道を奥へと進み始めた。それを慌てて追うみんな。やがて前方に黒い壁が見え、ダイチは壁際の石を動かす。すると目の前の壁が音を響かせて開いた。

「入れ」

ダイチに言われるまま、先へ進むとやがて光が見えてきた。

「ここが俺たちのアジトだ……」

アジトに入った途端、何人もの大人や子供たちがいつせいにプリキュアたちに振り向いた。全員しばし無言だったが、それも束の間ですぐに口々に声を発し、喚き始めた。

「あ、あなたはユカ様の騎士、キティ様！なぜここに？」

「そ、それはいずれ……」

「よう、ダイチ。こんなお姉ちゃんたち、どっからかっばらってきたんだ？」

「人聞きの悪いこと言うな！」

「ダイチ兄ちゃん、お帰り〜！」

「おう、ただいま。元気にしてたか？」

「まだ結構民たちが残っていたんですね……」

キティが安堵したように呟くと、ダイチは振り向いた。

「けど、もう何人かはすでにヤミたちに連れて行かれたんだ。今頃リベリオン城で無理やり働かされているんだ」

「アジトはここだけなのですか？」

「いや、俺が確認したのだけでもあと五つはあるぜ。でもこんなに広いのはここだけだろうな」

「そうですか・・・」

「それより、あんたたちに会わせたい人がいるんだ。こっちに来てくれ」

「最後にひとつだけ・・・」

「何だよ？」

「これだけの数で生きていくのは大変でしょう。食糧はどうやって手に入れているんですか？街は監視カメラだらけなのに・・・」

するとダイチはニヤツと笑みを浮かべた。

「助っ人がいるのさ」

「助っ人？」

「自由を愛し、俺たちみたいな弱い者の味方になってくれる怪盗さ！」

今やリベリオン城と人々から名づけられた黒い城。

一際目立つ尖塔の頂上に栗色の、肩のあたりで少しウェーブがしているツヤツヤの髪をした16歳くらいの少女が不敵に笑って立っていた。

少女はリベリオン城を卑下するように見ると衣服のポケットからロザリオを取り出した。そして、

「ゲームスタート！」

と合図するように叫ぶと、それを高く掲げた。

その瞬間、ロザリオの中央から光が放たれ、少女の身体に新体操で使用するような赤色のリボンが意思を持ったかのように巻きつき、

少女を包んでいく。リボンが身体を覆っていくのを感じながら少女は自分の意思と関係なく声を発した。

「強気に本気・・無敵に素敵・・元気に勇氣！」

その台詞とともに彼女の衣服と髪型が変わっていく。巫女の服装に似た、しかしやはり短い赤のスカート。後ろ髪を丈の長い赤のリボンで束ねられたポニーテール。胸には変身に使用したロザリオが装着する。最後に髪の色が栗色から燃えるような紅色に変わり、少女は華麗にポーズを決めると、

「闇より生まれし悪しき者を封印するために・・・怪盗ジエアンヌ！神に遣わされ、ただ今参上ー！！」

と名乗り、ウインクをして、漆黒の街に跳躍した。

隠れ家(後書き)

次回は真夜side。

## 炎の怪盗

真夜もユカと妖精たちとともに漆黒に包まれた無人の街を歩いていた。

「誰もいないロブ・・・」

「しっ！静かに」

壁際に寄って真夜がそつと角の先を覗き見る。彼女の視線の先には街灯に設置された監視カメラがレンズを光らせていた。

「ここから先は行けないわ。向こうに行きましよう・・・」

そう言って、ユカと妖精たちに振り向き、来た道を引き返そうとしたその瞬間だった。

真夜たちの頭上、屋根と屋根の間をいくつもの影が走った。

「えっ・・・？」

「どうしたの？」

思わず空を仰ぎ見た真夜にユカが聞いた。

「今のは・・・？」

彼女はしばらくその場から動かなかった。

闇の空を背景に屋根と屋根の間を赤いショートスカートが颯爽と飛ぶ。その後を黒い凶犬が何匹も追っていた。

巫女に似た服装をし、紅色の髪をポニーテールにした少女はリベリオン城から見事に盗ってきた食糧品を詰め込んだ小麦色の袋を片手で背負い、凶犬たちから逃げていたが、凶犬たちはしつこく、そして足が速い。彼女は高さ50メートルまであるビルの屋上に跳んだものの、その場で追い詰められてしまった。

「あっちゃん。こりゃピンチだ」

と言うものの表情にはまだ余裕が見え隠れしている少女。すると凶犬たちの頭上に、直径10メートルもありそうな巨大な水球が降

り、その水球の上に足を乗せた17歳くらいの和服の少女が見えて、紅色のポニーテールの少女は顔を上げた。

おかっぱの髪形をした和服の少女は見るからに大和撫子という感じの、端正で目元が引き締まった顔をしている。身につけている黒い和服は振袖が異常なほど長く、水に浮かんだ蓮華の絵が描かれていた。黒い和服の少女は見下すような視線を飛ばすと、ニイツ、と薄気味悪く笑みをした。

「見つけましたよ、こそ泥。私はキュアリベリオンの忠実なる僕、ミチと申します。私たちに逆らうとは愚かな御方です・・・」

「・・・こそ泥と一緒にされるなんて失礼ね。私は怪盗。怪盗ジエアンよ。あなたたちのほうがこそ泥よりタチが悪いじゃない。誰もが幸せに満ちていたこの国をいきなり支配して、どれだけの人たちが今も苦しんでいると思っているの？」

ジエアンが指摘すると、ミチは袖で上品に口を隠し、「おーっほっほっほっほ！」と笑い声をあげた。

「生憎ですが、私は幸せな御方を見ると、吐き気がしましてね。ついついその方たちの幸せを壊したくなるのですよ」

「最低ね」

「なんとでも。さあ、盗んだ物をお返ししなさい。そうすれば、命だけは助けてあげてもよろしくてよ」

「バカじゃないの。返せと言われて返す怪盗がいるわけないじゃん。もう少し常識というものを勉強しなよ、お・ば・さ・ん」

ブチ。ミチの額に血管マークが浮かび上がった。

「小娘・・・私はまだ二十前よ！お殺り！」

怒り狂ったミチが片腕を振りかざすと、それが合図として凶犬たちに伝わった。ガウツ！と吠えて、数匹がいつせいに飛びかかる。

だがジエアンはそれを待っていたと言うかのように、にこりと笑った。

「私が何も準備していないと思う？はあっ！」

するとジエアンは瞬時に足元に白いボールのようなものを叩き

つけた。叩きつけられたボールのようなものは即座に破裂し、屋上に煙幕があつという間に広がった。

「何っ!？」

これにはミチも驚き、凶犬たちも一瞬で視界を塞がれた。そして容易に動けなくなった一匹を狙って、

「はっ!」

ジェアン又は胸のロザリオが変化した剣で鮮やかに斬り伏せ、黒い塵と化せた。その調子でジェアン又はさらに三匹を斬り、消滅させた。だが煙幕も消え始めるとすぐにまた一匹が彼女に牙を放った。

「甘い!」

しかしジェアン又はロザリオを今度は新体操で使用するような紅のリボンに変えると、それを優雅に操って凶犬の動きを封じた。

「バカが。たかが一匹動きを封じたところで残りが・・・」

「バカはおばさんのほうよ。よく見てなさい。はああっ!」

嘲笑うかのように言い放ったミチに反論すると、ジェアン又はロザリオを握った手に力を込めた。すると次の瞬間、紅のリボンに火が走り、凶犬をあつという間に火達磨ひだるまにさせたのだ。ぎゃんぎゃん吠え、凶犬は炎に苦しみながらしばらく暴れ回ったが、すぐに黒い塵となつて消滅した。

「火を・・・?炎使いか?」

「私の力だよ〜ん」

愕然となつたミチの問いに答えたのはジェアン又はの懐の中から飛び出した紅の両翼を持つ小さな天使だった。身長は大体20センチ程度で、ぱつちりとした大きな両目に真っ赤に逆立ったショートヘア。衣装はオレンジ色のチャイナドレスに似ており、白くてすらつとした美脚が露あらわになっている。紅の天使はミチに視線を飛ばすと、得意満面に笑みを浮かべた。

「天使・・・?」

「正確には立派な天使になるための修行中の準天使で、炎の星の住人とのハーフだけだね。お父さんの力を受け継いだ私の火は熱いよ

「ちつちやい天使ごときが小癪な真似を・・・！」

「ちつちやいつて言うな！私はこの街じゃ、あまりもとの姿に戻れないんだよ！あゝもう、あのおばさん許せない。ジエアン又、とつとと懲らしめちゃって！」

「はいはい。じゃあ遠慮なくいつくよ〜！」

そう返事すると、ジエアン又はリボンを自由自在に操って次々と凶犬たちを炎で包んでいく。だがここでミチが動いた。

「調子に乗るんじゃないよ、小娘が」

次の瞬間、炎に包まれた凶犬の頭上から大量の水が浴びせられた。炎から解放された凶犬たちは全身の毛を振って浴びた水を外に出すとさらに怒りを交えた眼で睨む。これは予想外だったらしく、ふたりの額に汗が少々流れ始めた。ふたりの表情を見て、ミチは「ふふふ・・・」と今度は口元を隠さずに笑う。

「私の能力は水を生み出し、操る力。あなた方がたとえ炎使いであろうと、水に敵うはずがありません」

「ま、まずいよ、ファン。こりゃ本当のピンチだよ。何か隠し玉ある？」

「ない。さつき使った煙幕が最後」

ファンと呼ばれた紅の天使が汗をだらだら流しながらアハアハ笑って言う。「え〜っ!？」とジエアン又は叫んだ。

「おや？もうおしまいですか？それは残念ですね・・・ふうんっ！」

ミチは腕を振りかざし、直径1メートルほどの水の塊を飛ばした。一度かわしたジエアン又とファンだが水の塊は瞬時に方向転換し、背後からふたりに激突した。

「きゃああああああっっ!!！」

強い衝撃を受け、隣のビルの屋上に叩きつけられるジエアン又とファン。ミチと凶犬たちもすぐさま隣のビルに移る。傷つきながらも濡れた上半身を起こしたジエアン又とファンにミチは邪悪に満ち

た笑みを広げる。

「減らず口を叩かずにはさつさと返せばよかったものを……。くらいな！」

そして今度は10メートル程の水球を作り、吹っ飛ばした。よけようにも全身が痛くて、よけられない。もうダメだとふたりが思ったその時。

突如、ふたりに迫っていた水球が目の前で弾けたのだ。ジェアン又とミチ、両方が「えっ？」と声を出すと、弾けた水球の中にひとりの少女が立っていた。

キュアセイバーだった。彼女はジェアン又とファンに振り返ると、ふっ、と微笑んだ。

「大丈夫？」

「う、うん。ありがとう……」

「あなた……まさかキュアセイバー!？」

驚いているミチが聞くと、セイバーはすぐさま両目を細め、彼女に振り向いた。

「隠しててもしょうがないわね。ええそうよ。私の名前を知っているということは、あなたキュアリベリオンの部下ね？」

「くっ……。あなたを倒せば、キュアリベリオンはきっと喜んでくれる。お殺りっ！」

ミチが激情して喚くと、凶犬たちがいつせいに襲いかかった。

「セイバー！ホーリー・アタック！」

だがセイバーはリライフシンバルを召喚して鳴らすと、無数の光の粒を生み出して凶犬たちに次々と衝突させ、消滅させていった。ミチも続々と水の塊や水球を生み出し、セイバーに向けて飛ばすが、彼女は凶犬たちを倒しながらもシンバルから放った光の粒で続々と水を粒子へと化していった。だが凶犬たちはタフで、簡単に消滅したりはしないのも出始め、さすがのセイバーも疲れが見えてきた。

「はあ、はあ、はあ……。ふっつ、本当に厄介ね。どこからこんなに拾ってきたのよ？」

「さすがに疲れてきたようですね？これで終わりしてあげましょう。」

ミチの声がかから聞こえ、セイバーはハッと顔を上げた。するとミチは掲げた左手に直径50メートルものの、超巨大水球を生み出し、さらにおぞましい笑みを浮かべていた。

「これならそう簡単には破れまい……。さあ、去いねやあつ！」

と投げ飛ばそうとしたその時だった。セイバーのすぐ前にジェアン又とファンが来て巨大水球を仰ぎ見た。

「あなたたち……！」

「ファン、お願い、力を貸して！」

「あゝもう！これ、すっごく疲れるからやりたくなかったのに！しようがない。ジェアン又、しっかり持つてて！」

そうジェアン又に言うのと、ファンは額から炎のような強くて紅い光をロザリオに注がれ、彼女は最大級の声を発した。

「ふあああいやあああああああああつっつ！！！」

ファンの額から光が送り終えた刹那、ロザリオ全体から猛烈な炎が噴き出された。その炎は太陽よりも凄まじく、熱波を浴びた凶犬たちはみな一瞬で塵と化し、巨大水球さえも蒸発させ、ミチの振袖に火を点け、燃やし始めた。

「あちちちつ！このままじゃ……。くう、覚えてなさいっ！」

ミチは火が点いた振袖を慌ててはたくと瞬時に姿を消した。ロザリオから噴き出された炎も5分後には消え、ファンはだらんとうなだれた状態で「あゝ疲れたあゝっ！」と叫んだ。

「凄い……。あれだけいた犬たちも水球も一瞬で消し去った……。……」

「けど、かなりファンが疲れるようだから、あまり使いたくないみたい。ごめんね、ファン……」

セイバーが言うと、ジェアン又は突然光に包まれ、変身を解いた。驚くセイバーの目の前で彼女はもとの栗毛の少女の姿に戻ると、セイバーに微笑み、右手をゆっくりと差し出した。

「本来なら人前で正体を明かすことは怪盗としてルール違反なんですけど、助けてもらった以上、ちゃんと素顔で礼を言うのが私のモットーなの。ありがとう。おかげで助かったわ。私は日沙菜<sup>ひしゃな</sup>るまん。こっちは私の相棒で天使のファン・ハルト」

「天使？」

「と言つても、立派な天使になるために修行するために降りてきた準天使なだけだね。あ、一応このちっこい姿は仮の姿なんだ」

「ちっこいって言うな！でも、私からも礼を言うよ。あなたは？」

ファンから名前を聞かれ、セイバーも変身を解除し、雨牙真夜の姿に戻り、プリキュアとしての名前も一緒に言った後、彼女も笑顔でるまんの手を握った。

リベリオン城、皇宮にて。

「確かにキュアセイバーだったのね？」

「はい。肯定しましたので間違いないかと・・・」

玉座に頬杖をして座る眼帯の少女にミチは跪いて報告をしていた。ミチの周囲には6人の少女が立っている。「ふうん・・・」と呟いた眼帯の少女に野球帽を被った少年のような軽い服装をした14歳くらいの少女が「また笑ってる」と小声で呟いた。

「でもできれば、倒すのは無理でも生け捕りにして連れてきてほしかったわね・・・」

「！・・・も、申し訳ございません」

「次は私が行きましょうか？」

背の高い軍服を着た18歳くらいの少女が前に出たが、眼帯の少女は

「・・・いいえ、あの娘<sup>こ</sup>を連れてきて」

「と言い、軍服の少女は「は？」と聞き返した。

「あの娘<sup>こ</sup>と言いますと？」

「私が連れてきたあいつよ。まだ地下牢にいるでしょ？」

「わ、分かりました！」

軍服の少女が出て行って数分後、両手を縛られた月野葉兔羽が彼女に引つ張られて暗がりから現われた。兔羽は軍服の少女に強引に両膝を着けさせられると、玉座に座る眼帯の少女を下から睨んだ。

「・・・私に何の用？それともいよいよ処刑？」

「そんな残酷なことはしないわ。私は独裁者だけど、まだ天使のように優しいと自分じゃ思ってるのよ」

「悪魔か死神の間違いじゃないの？」

「貴様！」

兔羽の台詞にムツとした軍服の少女が右手を振りかざしたが「やめなさい！」と眼帯の少女に言われ、渋々引つ込めた。彼女に視線を向け、兔羽は眼帯の少女に尋ねた。

「この人たちは何者なの？どうしてあなたに従うのよ？」

「質問、ね。いいわ。答えてあげる。ここにいるみんなはね、まあ簡単に言うとは普通とは違う力をただ持っていただけなのに、そのせいで人を信じられなくなって孤独を強いられて今の世界を憎むようになった犠牲者なのよ」

「え・・・？」

「そしてこの私もそのひとり・・・と言えるかもしれないわね」

そう言うと、眼帯の少女は突然立ち上がった。そして一歩歩いたと思った次の瞬間、彼女は一瞬で兔羽の目の前に現れた。

「なっ！？」

そして腰をかがめ、素早く彼女の顎を右手の人差し指と親指で？み、眼前にまで近づけさせる。

「セーラーセレーネだっけ？あなたはまだ利用価値がある。でもあなたは当然私の言うこと聞く気ないでしょ？だからね、言うこと聞くようにしてあげる。私の目を見なさい・・・」

少女はゆっくりと眼帯を外し、真紅の右目を露にする。見てはいけないと思いつつも兔羽は真っ赤に染まった瞳を奥まで覗いてしまった。その途端、兔羽の意識が朦朧としだす。彼女の様子を確認し

て少女は優しく誘うかのように言った。

「私の僕になりなさい……」

「あああああああつっ！！！」

その声を聞いた途端、彼女は絶叫をあげ、意識を失った。

「兎羽ちゃん……！」

その様子をディアーナは暗がりから目撃していた。兎羽が意識を失った瞬間、彼女は悔しそうに唇を噛んだが、すぐさま振り返って走り出し、城から脱出しようとして試みた。

だが、中庭に出たところで彼女は徘徊していた三匹の凶犬にあつたという間に囲まれた。

絶望が目の前に広がった。

## 炎の怪盗（後書き）

次回ですが、みなさんにお問い合わせがあります。一度「DX2NEXT」スピンオフを読んだ方でもエピソードの後に書いたキュアリベリオンの外伝を改めて読んでほしいのです。そうじゃないと次回の話はよく分からないんじゃないかと思ひまして（内容よく覚えているという方は結構です）。

## 仇

「とまあ、ここが私の家！」

「・・・あまり大きいとは言えないわね」

「まあ正確にはしばらく借りているだけなんだけどね」

ろまんは苦笑して真夜に言った。ミチとの戦いの後、みんなは監視カメラの目をかわして郊外にある彼女の家だという二階建ての建物の中に入り込んだ。どうやらこの辺りは監視カメラはまだ設置されてなく、ヤミも徘徊している様子はないようだ。ユカは安心して彼女の家のシャワールームで身体を洗い流していた。

「それで？あなたがあの伝説の戦士プリキュアなのは分かったけど、どうして別の世界から来て、しかもこの国のお姫様と一緒にいるわけ？」

二階の部屋でベッドに腰掛けてるまんが尋ねた。彼女の隣にファンもちよこんと座る。隠しててもしょうがないと思った真夜はここまでの事情を話した。ただし、自分がかつてキュアリベリオンとして世界を滅ぼそうとしたことだけは黙っていた。

「それで、ビルの屋上のほうで凄い騒ぎが聞こえたから変身して・・・」

「そっかあ。そりゃとんだ迷惑をかけちゃったね」

「ううん、いいの。少なくともユカやロモモ、そしてこの子たちを安心して休ませることができるところができたから」

真夜は妖精たちに振り向いた。だが妖精たちのほとんどは申し訳ない表情をし、つぶらな瞳で聞いた。

「本当に世話になっていいココ？」

「ロモモたちが世話になって迷惑じゃないロモモ？」

「そやで。いくらお礼がしたいからやて、わいらをかくまってあんなら危険な目に遭わすわけには・・・」

「危険はとっくに承知済みよ」

タルトの台詞を切り、ファンが微笑んで言った。妖精たちは彼女を見た。

「さつきも見ての通り、私たちは怪盗。あなたたちも分かると思うけどこの仕事はね、常に危険と隣り合わせなの。だから私もろまんももう慣れっこなのよ。だから大丈夫。あなたたちがここでしばらく厄介になろうと、お互い様よ」

「そういうものルル？」

「そういうものよ」

ファンが悪戯っぽくウインクをルルンにすると、妖精たちはみな無言で頭を下げた（シフォンだけ嬉しそうに手を叩きあっていたが）。

「でも、どうして天使と一緒にあって怪盗を？」

真夜が聞くと、ろまんが答えた。

「うーん、そうね。簡単に言えば、ターゲット獲物に潜む悪魔を封印するためかな？」

「悪魔？」

「うん。ファンが言うにはね、人間界に降りた悪魔は絵画や彫刻とかの美術品の中に潜んで、その美術品を見て“美しい”と思った人の心を蝕んでいくらしいの。悪魔に心を蝕まれた人は性格ががらりと変わって凶悪化し、最終的には身体とともに衰弱して死に至らせてしまい、命を吸い取った悪魔は次の標的を狙って別の美術品の中に住まうんだって。私たちはね、その人から悪魔を解き放つために怪盗として獲物ターゲットをいただきますと予告状を出して……」

ろまんは、ぽん、と何もなかった手から白いチエスピンをマジックのように出現させた。

「これで悪魔にチエックメイトするの」

「た、大変そうね……」

「まあそんな話を聞いてほっとくわけにいかないからね」

「話は分かったけれど、でも怪盗じゃなくてもいいんじゃない？泥棒みたいにくっそりとその人の家に入って悪魔を封印すれば……」

「どこにしまつてあるかも分からない所を当てもなく探し回るより、狙つてますと予告を出したほうが持ち主も警察に連絡してその時に必ず獲物ターゲットを確認のために見せるからやりやすいのよ」

「・・・なるほど」

「それに・・・」

「それに？」

「こそ泥より怪盗のほうがカッコいいじゃん」

「・・・」

本当はそつちが本音じゃないのかと真夜は思った。

「このハピネスランドにも悪魔はいるの？」

「ううん。ここには旅の途中でたまたま寄つただけ。でも見ての通り、こうでしょ？だからしばらく悪魔退治はお休みしてアジトに隠れ住んでいる民たちに密かに城から盗んだ食糧や水や物資を届けているのよ」

「でもこの国に来て、まさかあいつに会えるとは思ひもしなかった・・・」

その時、ファンが唇をブルブル震わせ、怒りを抑えているようかの口調で言った。膝の上に置かれている両手も小刻みに震えている。

「あいつ？」

「・・・キュアリベリオンのことよ」

「え？どういうこと？前に会ったことがあるの・・・？」

真夜が聞くと、ファンの額にきゅっとしわが何本も寄つた。

「会ったことはない。でもキュアリベリオンは仇なの」

「仇？」

「私のお父さんを殺したのよ！」

その台詞に、真夜は大きく目を見開いた。

「お父さんを・・・？」

「そうよ。私のお父さんは惑星デントでギガバトルナイザーとかいう兵器を狙う者を退ける誇り高き炎の戦士だった。でもある日、お父さんは最期の力で私にメッセージを届けたの。キュアリベリオン

という悪の戦士に敗れて・・・力尽きたということを」

「惑星デント・・・ギガバトルナイザー・・・炎の戦士・・・？」

真夜はそのワードひとつひとつに聞き覚えがあった。やがて表情は徐々に青ざめ、唇がわなわなと震えだす。その様子に妖精たちもそしてろまんも気づき始めた。

「ね・・・ねえ、あなたのお父さん・・・あなたのお父さんの名前は、なんていうの？」

「名前？グレンファイヤーだけど・・・」

「！！！」

ファンが言ったその名前に、真夜は一瞬息を呑み、口を両手で塞いだ。全身を雷で打たれたかのような衝撃が走った。

そんな、そんな・・・。

口から手を離し、蒼白な顔立ちになって身体を抱き締める。真夜の様子にファンは直感が働き、急いでベッドの上に立ち上がって尋ねた。

「何？あなた、お父さんを知ってるの？会ったことがあるの！？いつ？どこで！？」

「そ、それは・・・」

「答えてよ！あるの？ないの？どっち！？」

「・・・！！！！！！ごめんなさいっ！！！！」

真夜はその場で崩れるようにしゃがむと頭を床に着けた。突然の彼女の行為にみな「えっ？」となった。真夜は床から頭をゆっくり離すと、ぼそりと呟いた。

「私なの・・・」

「えっ？」

「私がキュアリベリオンだったの！そしてあなたのお父さんを殺したのも！」

「！！！！！！！！！！」

今度は全員が愕然となった。

その後真夜は全てを話した。両親と友達を失った悲しみで世界を

憎み、闇の力に触れてキュアリベリオンに変貌を遂げたこと。そして世界を滅ぼそうとしたこと。そのためにギガバトルナイザーと呼ばれる兵器を求めて惑星デントに到着し、そこでミラーナイトとグレンファイヤーというふたりの戦士と戦い、彼らの命を奪ったこと。ファンは最初こそは啞然としたように口を開いていたが、やがてみるみるうちに目にメラメラと憎悪の炎が渦巻き、歯をぎりりと噛み締め始めた。

「あんたが・・・あんたがお父さんをつ！」

その刹那、憎悪に燃えた彼女は瞬時に人間大へ巨大化して真夜の首を強く締めつけた。

「ぐっ・・・！」

凄い力で首を絞められ表情を歪める真夜。ろまんも妖精たちも彼女の行為に驚き、すぐさまやめさせようとファンを力ずくで離そうとするが、憎しみで己を制止できないファンは首を絞めている両手にさらに強烈な熱を発した。

「よくも・・・よくもお父さんを！お父さんを返せえっ！」

「く・・・あああっ！熱いつ！！！」

「このままだと真夜が死んじゃうフプ！」

「ファン・・・やめろおおおおおっ！！！！！」

遂にろまんが全力を發揮して彼女を背後から引つ張り、真夜の首から手を離させた。首から手を離れた途端、ファンはもとのミニサイズに一瞬で戻り、「くっ・・・！」と真夜から目を逸らす。ごほっ、ごほっ、と喉を抑えて真夜は咳き込むと、妖精たちは彼女に集まった。

「真夜、大丈夫ナツ？」

「苦しそうムプ」

「・・・なんか」

「出てっよ・・・」

みんなが振り向くと、ベッドの上で背中を向けているファンがもう一度言った。

「出てっ……」

「ファンはん……？」

「みんな出てっつてよ！誰の顔も見たくないっ！！」

悲鳴に近い金切り声に、みんなは一言も声が出なかった。互いに顔を合わすと、まず真夜が出て行く。次にろまんが出て行くと、妖精たちも続き、最後にロモモが扉を閉めた。

「あれ？みんなどうしたの？」

バスタオルで頭を拭きながらユカがようやくシャワールームから出てきたが、「ユカはん、今はわいらと一緒にいたほうがええで」とタルトに言われ、不思議そうに首をかしげた。

誰もいなくなった部屋でファンはポケットからオレンジ色の豆粒程度のロケットを取り出した。そして蓋を開ける。そこにはまだ幼い自分と、もう会うことはできない父と母の写真があった。

「お父さん……お母さん……！！」

ファンはロケットに視線を注いだまま、大粒の涙を流しだした。

ファンに追い出され、外に出た真夜は建物が崩壊した瓦礫がれきの上で座っていた。

「ほら」

両膝を抱えて顔を埋めている彼女にろまんが何かを軽く投げて渡す。真夜が受け取ると、それは中サイズのペットボトル飲料水だった。

「大変だったんでしょ？飲んだほうがいいって」

「ありがとう……」

真夜は礼を言ったが、蓋は開けなかった。軽くため息を吐き、ろまんは彼女の隣に腰を降ろした。

「本当なの？あなたがキュアリベリオンだったって……」

「……うん」

「じゃあ、今のハピネスランドを支配しているキュアリベリオンは・

「・・・」

「ごめんなさい、私にも分からないの。それを知るためにも、私は来たから・・・」

「そう・・・」

ろまんは蓋を開け、水を飲んだ。すると、真夜は太陽の見えない黒い空を仰ぎ見て、呟いた。

「・・・私、本当にひどいことしてたのね」

「真夜？」

ごくりと水を飲み込み、ろまんが振り向く。真夜は首の角度を変えないまま、言葉が続けた。

「あの時の私は・・・本当に最低だった。憎しみで自分を忘れ、世界を壊すために他の命なんかどうなってもいいと理不尽に考えていた。そのために私はふたりの戦士の命を奪った。それなのにその罪を今の今までずっと忘れてた・・・。今の私はお父さんとお母さんそして友達を殺したやつと同じよ。あのまま絞め殺されたとしても文句は言えないわ」

「真夜・・・」

真夜は顔を降ろし、ようやくろまんに振り向いた。

「ろまん、知っている限りでいいから教えてくれない？ファンのことを・・・。自分の罪を胸にしっかり刻んでおきたいの」

「・・・いいよ。話してあげる、ファンのこと・・・」

## 仇（後書き）

次回、ファン出生の秘密解禁。

## 因果

ファンのお父さん、つまりグレンファイヤーはね、なんでも光の国の宇宙警備隊の隊長を務める有能な戦士だったらいいんだ。たったひとりでも数百を超える闇の軍勢を一瞬で倒してしまうほど強かったと聞いている。

そのお父さんがね、ある時単独でパトロールに出かけていたら知らぬ星で邪悪な闇の怪人たちに取り囲まれていた天使を見つけて、命懸けで助けたの。言うまでもなくファンのお母さんよ。写真で見かけたことないけど、かなり美人だった。ふたりはそれがきっかけで何度も会うようになり、お互いに惹かれ合うようになったみたい。

もちろん片方は炎の星を出身とする誇り高き戦士で、もう片方は天界で暮らす穢れなき天使。出身も人種も全く違うけれど、べつにそれは双方ともたいした問題じゃなかった。特別なケースだけど天界の住人でも過去に人間や妖精（フェアリー）と結婚したことがあったし、悪魔と結ばなければきっと大丈夫だと思ってたんだろ。でも、お母さんのほうの両親が反対したの。理由は分からない。たぶん、娘可愛さにどこの馬とも知らない男にあげたくなかったんだろ。お父さんは許してもらえぬまで待つと言ったけれど、両親はかなり頑固だったようでお母さんは遂に天使をやめる覚悟でお父さんと駆け落ちしたの。そしてふたりだけで暮らし始めて生まれたのがファンよ。

真夜も大体分かっていると思うけど、ファンはふたりの血が流れているハーフで、天使でありながら炎の属性も持っている特別な娘なんだ。だからファンが天使として天界での修行を始めた時は他の天使たちから興味本位の目で見られたらしいんだ。もちろん、天使がちよっと変わっているからってファンをいじめたりはしないけど、たとえいじめられたとしても強き魂を持つ炎の戦士と優しい心の天使を両親に持つファンだから、きつと誰よりも負けずに天使として

の成績を伸ばしていったと思うよ。そんなファンをお父さんとお母さんは誇りに思っただろうね。

でもそんなファンに不幸が訪れたの。お母さんが死んだのよ。人を惑わして魔道に誘おうとした悪魔と必死に戦ってなんとか封印したものの、ひどい怪我を負ってそのまま光が弾けるように消えたんだって。ファンはお母さんの最期を看取ることができなかつたらしいの。だからかな？お母さんみたいな優しい天使を目指して、ファンは人間界に潜む数多くの悪魔を封印する修行に出て、そして私に会ったの。この人間界では次元が違うために天使はほとんど大きな力を発揮できなくて小さな姿で行動するのがやつとらしいんだ。そこで私という人間のパートナーに協力を頼み出て、一緒に悪魔退治をしているてなわけ。私は二年前にファンと出会って、怪盗ジェアン又として今まで多くの国で数多くの悪魔たちを封印してきた。これからもファンのためにも悪魔にチェックメイトし続けるつもりよでもそんな最中にファンに二度目の不幸が訪れた。そう。お父さんが死んだという知らせよ。突然赤い光のようなものがファンに届いてそこにお父さんからの最後のメッセージが込められていたらしいの。自分は死んだ。殺したのは悪の戦士キュアリベリオンてね。こうしてお父さんの最期も看取れなかつたファンはお父さんを殺したキュアリベリオンを憎んだ。このハピネスランドに来て、支配者の名がキュアリベリオンと聞いた時のファンの顔はもの凄く、とても天使の顔とは思えなかつた。たぶん・ううん、きっとキュアリベリオンを自分の手で倒したいと思っている。でもまさかここで昔キュアリベリオンで、お父さんを殺した人が出てくるなんてね・・・

。何かの因果かもしれないね・・・

ろまんはここでペットボトルの水を再び口につけた。真夜はやはり飲まないまま、ペットボトルを持つ手をただ見つめた。

「惑星デントでグレンファイヤーを倒した時、彼は死ぬ寸前に娘に

自分の最期を伝えたと言ったのを覚えているわ。あの時は彼の娘にいつか会う時が来るのかしらと思っただけけど、本当に会うなんてね……。もしこれが因果だと言うのなら、私は罪を償うためにも死ぬべきかもしれない……」

「正直言つて、私はフアンの気持ち分かる……」  
「けほつ、とろまんがペットボトルの飲み口から口を離すと少し寂しげな目で言った。真夜は彼女のほうを見た。」

「私も両親がいない。幼い時に私を置いてっちゃったんだ。生きていくかどうかも分からないし、幼いながらも自分を置いてったふたりを恨んだこともあるよ。でもやっぱり血が通った親だもん。もし殺されたと聞いたら、たぶん私、仇を討つと思う」

「ろまん……」

「でもフアンは天使なんだ。悪魔を封印することは許されても、人間を殺すのは許されるはずがない。そんなことをしたら、フアンは天界の掟を破ったとされ、処刑されてしまうよ。もう私にはフアンしかないし、フアンだって私しかないはず。もう失うなんて嫌だよ、そんなの……。ねえ真夜、死ねば罪を償えると本気で思う？」

「えっ……？」

「答えて。死ねば本当に罪を償えるの？……私は違ふと思う。きつとそれは『逃げ』だと思うよ。物を盗んで逃げる職業の私が言うのも変かもしれないけど」

「……そうね。確かに私は逃げたいのかもしれないわね。あまりにも辛い真実を知って……。ううん、本当に辛いのはフアンなのに、私はそれを無視しようとしていた。つくづく嫌な女だわ、私は」

「でも、今の真夜はキュアセイバーなんだよね？」

「うん……？」

「真夜はやつと間違いに気づいて、もう一度光を取り戻せたんだよね？でもそれで真夜の罪が消えたわけじゃない。なのに真夜はどう

して今の今まで生きてこられたの？」

「それは……自分が犯した罪を背負って、本当に優しい世界を作りたから……」

「じゃあ今まで忘れてたんなら、今からファンのお父さんを殺した罪を背負いなよ。そしてどうすればファンに許してもらえるようにするかで罪を償えるんじゃない？」

「……確かにそうかもしれない。ろまん言うことは正しいと思う。でも『許す』よりも『憎む』ほうが簡単よ。かつての私がそうだったように……」

「でもほうつておくわけにはいかないでしょつと……」

「ここぞろまんが立ち上がった。そして真夜に向き、右手を差し出して言った。

「私も何か考えてあげるから。そうね、手始めにキュアリベリオンを倒す方法でも考えようよ」

「キュアリベリオンを倒す……？」

「そ。真夜が昔キュアリベリオンだったとしても、今の私たちの敵はハピネスランドを支配しているほうのキュアリベリオンなんだから。もし私たちの力でキュアリベリオンを倒せば、ファンも少しは真夜に心を許してくれるかもしれない。それに思うんだ。真夜がこのハピネスランドに来たのも何かの因果じゃないかって。真夜はキュアリベリオンが誰なのか分かんなくてもこの現実を無視するわけにはいかないでしょ？」

「それは……そうだけど」

「じゃ、一緒に頑張ろうよ。私もいい加減悪魔退治をこれ以上休むわけにはいかないし、少しでも力になるからさ……」

そう言って、彼女は最後に、にこつ、と笑った。彼女の笑顔を見て、真夜も少し元気が出た。

「ありがとう……」

そう礼を言って、真夜はろまんの手を取り、立ち上がった。そして彼女も微笑み返した。

「……………ふっふふ」

「あははははっ」

瓦礫がれきの上でふたりの少女はともに声に出して笑い合った。

だがそれも束の間の時間だった。

「……………」

「どうしたの、真夜？」

突然笑うのをやめ、目を鋭くし、周囲を見渡した真夜にろまんが不思議そうに聞いたが、彼女もすぐに何かを感じて周辺を見回し始めた。

突然、瓦礫がれきの周囲に10人ほどのヤミたちが空から降ってくるように現われ、ふたりはすぐに包囲された。突如現われ、髪型をまとめるでコピーしたかのような無表情の同じ顔を持つ少女たちに真夜は思わず全身に鳥肌が立った。

「何……………こいつら？」

「こいつらはリベリオン城で量産されているという噂の自動人形オートマトンのヤミたち……………！どうしてここに？監視カメラはまだないのに……………」  
すると、その疑問に答えるかのように暗がりから凶犬が一匹、鼻をヒクヒクさせ、歯茎も見える牙をさらけ出した状態でグルグルル……………と唸りながら現われ、真夜は瞬時に理解した。

「匂いよ！私たちの匂いを嗅ぎ取って来たのよ！」

「あちゃ、しまったあ…。普段はそういう痕跡も残さないようにしているんだけど、今日は忘れてた！」

「こつなつたら、やるしかない！口モ……………」

「おまえの相手はヤミではない……………」

真夜がろまんの家にいる口モモを大声で呼ぼうとした時、誰かの声が聞こえた。途端に彼女の目の前にいるふたりのヤミが互いの間隔をさらに広げる。すると彼女たちの間を通過して、真夜の前に誰かが現われた。

それは17歳くらいの少女だった。だが彼女がただの少女ではないということは一目で理解できた。

一見セーラー服に似ているが、水色のスカートは短く、神秘的なオーラを放っている誇り高い戦士の衣装。膝まで届いている水色のブーツと肘までの白い長手袋。まるで月の光に反射したら輝きそうな鮮やかな長い銀髪に額に装着されたV字のティアラ。胸には金色こんじきの円形ブローチが装着されており、右手には先端が三日月状になっている長いロッドが握られていた。

「誰？あなた？」

突然現われた戦士に、真夜は即座に両目を鋭くして聞くと、彼女はこう答えた。

「私の名はセーラーセレーネ。キュアリベリオンが忠実なる僕……」

戦士の両目は、ほんのりとだが赤く染まっていた。

## 因果（後書き）

次回は再びオールスターズside。

## 予言

プリキュアたちとキティはダイチにアジトの奥にある書斎のような場所に通された。

「凄いわ。本がこんなにたくさん・・・」

天井にまで届く一面の本棚を見て、こまちが感嘆したように呟いた。こまちだけでなく、他のプリキュアたちも部屋いっぱいの本棚を見渡し、その圧倒さにはばし声が出なかった。プリキュアたちとキティはしばらく書斎を眺め回していると、ダイチがさらに奥へ進み、しばらくして誰かを連れて来た。それは地にまで届くほど長い白髭を生やし、杖をついた老人だった。

「この方は？」

「長老だよ。この国で一番長生きしている」

キティが尋ねると、老人の手を取りながらダイチが答えた。

「初めましてキティ様、ヒシと申しますじゃ。話はダイチから聞いております。ご無事で何より・・・」

「よしてください。私は皇女のユカ様を守りきれなかった木偶人形です。本当はあなたがた民たちも私たちが命を賭けて守らなければならなかったのに・・・」

「いやいや、どんな方であれ、命は大切にせんといかん。おそらく心優しいユカ様もきつとあなたの無事を願っておる。そう自分を責めず、これからどうすべきかを考えなされ。・・・ところで、この娘たちがあの伝説の戦士プリキュアか？」

ヒシがようやくプリキュアたちに振り向くと、ダイチが答えた。

「そうだよ。俺もまだ変身したところは見てないけど、妖精や精霊がくっついているんだ。間違いないと思う」

するとそれを証明するかのようにパートナーたちの衣服の中からそれぞれメップル、ミップル、ポルン、フラッピ、チョッピ、シプレ、コフレ、ポプリが飛び出した。くるみも煙とともにミルクの姿

になった。妖精たちの姿をヒシは興味深く観察すると、髭をなでて言った。

「ありがたいことじゃ。まさか別の世界からプリキュアが来てくださるとは。もしかしたら予言が示しているのはみなさんのうちの誰かかもしれない・・・」

「予言・・・チヨピ？」

チヨツピが不思議そうに聞くと、ヒシは「左様」と答えた。

「初代国王陛下が老境に入った時に未来を透視し、子孫や民たちのために残したという予言じゃ。その内容はこう聞いておる。“月の光が闇に完全に食われ、悪魔の数字が並びし時、空から強大な悪魔が降りて世界を破滅に追いやる。されど別の世界より選ばれしふたりの勇士が持つ金と銀の剣（おん）にて悪魔を破り、世界を救わんとす”・・・とな」

「“月の光が闇に完全に食われ”・・・？」

美希がそこまで復唱した時、ぽん、と舞が相槌を打った。

「もしかして・・・皆既月食のことじゃないかしら？」

「そうか！・・・って、皆既月食って何？」

途端にハツとしたように声を出した後ののぞみの台詞にほとんどのプリキュアがズッコケた。もちろん、その後すぐさま怒ったようにツッコミを入れたのはりんだ。

「のぞみ！あんた中学生でしょ！皆既月食マジで知らないの!？」

「い、いや、聞いたことはあるんだけどね、どういう現象だったかな？って・・・」

「ったく、こんな常識も知らないのは世界中探してもあんたくらいよー!」

「・・・いや、私たちもよく知らないんだけど・・・」

「え・・・ええ〜っ!？」

恥ずかしそうに手を挙げたなぎさ、咲、ラブ、えりかの4人には本気でびつくりした。

「なぎささんたちも？本当なんですか？マジで皆既月食知らないん

ですかっ!？」

「・・・う、うん。私、勉強はマジ苦手だからさ・・・」

「聞いたことはあるんだけど、自分に関係ないことはすぐ忘れちゃうほうだから・・・」

頭と頬をぼりぼり搔いたなぎさとラブにりんは啞然とした。

「ま、まあまあ、とにかくりんちゃん。ここにその皆既月食つての、知らない人がこんなにいるんだからさ。教えてよ」

のぞみが気詰まりとした空気を少しでも何とかしようと(そもそもその原因は彼女なのだが)りんに言うと、彼女は「はあっ」とかなり長いため息を吐いて口を開いた。

「しょーがないな。いい?なぎささんたちもよく聞いてくださいよ。そもそも皆既月食つてのは・・・」

「・・・うん。皆既月食つてのは・・・」

「・・・あれ?」

「・・・あれ?」

「ええっと・・・月が太陽に隠れるんだっけ?それとも地球が・・・」

「・・・りんちゃん、ひょっとしてりんちゃんも分かんないんじゃ・・・?」

「・・・」

「・・・あっ・・・あははははははははははっ」

「りんちゃんも人のこと言えないんじゃなっ!っ!」

「うるさいっ!私のはうまく説明できないのであって、のぞみみたいに知らないんじやないのっ!」

「ふえくん、痛い・・・!」

怒ったりんはのぞみの両頬を引っ張った。

「りんも知らないんじやどーする、なぎささん?」

「任せてよ睨。ここはね・・・ほのか、お願い!」

なぎさが彼女の目の前で、ぱんっ、と両手を合わせるとほのかも

「はあっ」とため息を吐いた。

「もっしょうがないんだから」。分かりやすく説明するから、みんな

なもちゃんと聞いてよね」

「……………は、いつ！！！！」「……」

「蘆薈女王」のほのかの一声でみんなは生徒のように静まって彼女の解説を聞き始めた。

月食とは地球が太陽と月の間に入り、地球の影が月にかかって欠ける現象であり、満月の時に起こる。日食とは異なるのは月が地平線より上に見える場所であれば地球上のどこからでも同時に観測・観察できる点だ。そして皆既月食というのは月の全ての部分が本影（地球によって太陽が完全に隠された部分）に入って満月が赤黒く見える現象であり、一部分だけが本影に入って見えなくなる現象が部分月食である。

皆既月食の解説を終え、ほのかが一礼をすると、みんなは思わず拍手して彼女を讃えた（ゆりだけが感心したような笑みを浮かべていたが）。

「なるほど」。皆既月食は分かったけどさ、その後の“悪魔の数字が並びし時”てのは？」

「おそらく666のことを指しておるのじゃろう。666は悪魔を表す数字と呼ばれておるからの。たぶん、666が並ぶ時間を指しておるんじゃないかとわしは考えとる」

えりかが次の疑問をあげると、ヒシが答えた。

「ということは、皆既月食が起きる夜の6時6分6秒ということ？」

「おそらくそうじゃろう。あるいは6月6日の6時も考えてみたが、その日は皆既月食は起こらず、何事もなく過ぎていった」

いつきが述べると、ヒシは肯定した。すると今度はかれんが尋ねた。

「おじいさん、次の皆既月食はいつなんですか？」

「うむ。もし今年このハピネランドで皆既月食が起きるとするならば、それはいつかをずっと計算したところ、明日じゃと分かったんじゃない」

「……………明日！？」「……………」

全員びつくりした。

「それじゃ、もう時間がないんじゃないですかっ!？」

とまずうらら。その後で祈里、ひかり、ミルクが泡を飛ばす勢いで声をかける。

「明日の6時6分に何が起こるの!？」

「強大な悪魔って何なんですか!？」

「明日、世界は破滅するってことミル!？」

「おい!そんないつぺんに聞いて長老が答えられるわけがねえだろっ!」

「そうですよ。ここはみなさん、冷静になってください」

ヒシを庇ってダイチとキティが言った時。

「あの!みなさんっ!」

突然つぼみが声をあげ、全員彼女に振り返った。

「こ、これは、あくまで私の考えなのですが、もしかしたらキュアリベリオンはその予言を知って、その悪魔を降ろそうとしているんじゃないでしょうかっ!？」

「……ええっ!？」

彼女の言葉に、みんな驚いた。

「私、ずっと考えていたんです。もし今のキュアリベリオンが昔の真夜さんと似たような存在でしたら、もしかしたらハピネスランドを支配したのはその予言に沿って悪魔を地上に降ろして世界を滅ぼす準備をするためじゃないかと……」

「確かに考えられるわね。真夜さんがかつてキュアリベリオンだった時は世界を本気で滅ぼそうとしていたし……」

「もしハピネスランドを支配しているキュアリベリオンも同じ目的だとしたら……」

「ちょ、ちよつと待ってくれよ。その国王陛下が予言をしたのはかなり昔なんだぜ。それから今日まで何回皆既月食が起こったと思っ  
てんだ?もし予言が本当ならとっくにこの国は滅びているんじゃないのか?」

考え込んだせつなとゆりの台詞にダイチが慌てて言う。しかし、その後すぐに「もしかしたら・・・」とキティが何かを呟き、シプレが聞いた。

「キティ、どうしたんです？」

「前国王様・・・つまりユカ様のお祖父様なのですが、まだ生きていらした時にユカ様にお守りのペンダントについてこうおっしゃっていたんです。これを悪しき者に渡してはならない、渡したらそれこそ世界の破滅、と・・・そういえば、次元を超えて逃げる前にヤミはユカ様のペンダントを狙っていました！」

「何と、それは確かなのですじゃな、キティ様？」

「ええ・・・」

キティの返事を聞くと、ヒシは「ふむ・・・」と再び髭をなでた。

「それが本当となると、明日はユカ様のお守りのペンダントが必要となる。おそらくキュアリベリオンはそのペンダントの力で悪魔を降ろすつもりなのじゃろうとて」

「だけど逆を言えば、そのペンダントがなけりゃ、予言は外れるんだろ？」

「それはそうかもしれないメポ。でもユカ様がそばにいない今、キュアリベリオンもきつと血眼になって探していると思うメポ。なんとかココたちがユカ姫を見つけて匿っていることを祈るしかないメポ・・・」

ダイチの指摘にメップルが心配そうに言うと、ヒシは再びキティに声をかけた。

「ふむ。わしのほうで明日までにそのペンダントと予言のことを調べてみよう。もしかしたら悪魔の正体分かるかもしれない。キティ様、すまぬがペンダントの特徴などを教えてもらってよいか？」

「あ、はい。ペンダントにはエメラルドグリーンのお宝が六角形に嵌められてまして・・・」

キティがペンダントの特徴をヒシに話し始めた一方でプリキュアたちは残りの予言について話し合っていた。

「だけど気になるのはそのあとの“別の世界より〜”ってやつだよね。これって、私たちプリキュアのことを指してるんだよね？」

「この世界にはプリキュアはいないようだし、タイミング的にも考えるとそうとしか思えないわね」

なぎさの指摘にほのかも賛同した。

「でもどうして19人じゃなく“ふたり”なのかしら？ 私たちの中から直接その悪魔にとどめを刺すふたりが選ばれるということかしら？ それに、“金と銀の剣”って・・・？」

「あ、それなら聞いたことあるぞ」

「……ええっ！？」

かれんが疑問を持ちかけた時、ダイチがそう言ったのでまたもやみんな驚いた。

「このハピネスランドに古くから伝わる伝説なんだけどな、過去に幾多の世界を守ってきた戦士が眠る幻の神殿がどこかあってよ、神殿の奥にその金と銀の剣（おんぎんけん）が納められているんだってさ」

「その神殿はどこにあるんでしゅ？」

ポプリが聞いたが、ダイチは首を横に振った。

「分かんねえよ。俺だってその予言を聞くまでただの伝説だと思ってたしよ。長老もさすがに知らないと思うぜ」

「じゃ、意味ないじゃん！」

ダイチの返答になぎさはガツカリしたように言った。その時だった。

「ドール……キティ」

ふいに書斎の入口のほうで小さな声が聞こえ、みんなはドアに注目した。するとそこにはひどく全身に傷を負った猫がいた。猫の額には三日月が描かれていた。みんながその傷ついた猫を見ると、猫は口を開き、驚いたことに言葉を話した。

「ドールキティ……いるんでしょ？」

「猫が喋った!？」

「あなたは、ディアーナ！」

えりかが驚いた瞬間、キティが急いで駆け寄り、ディアーナと呼んだ猫を両腕で抱え起こした。

「ディアーナ？確かあなたのもうひとりのナイトの・・・？」

「ええ。兔羽さんのパートナーです！ディアーナ、大丈夫ですか？どうしてこんな傷だらけに？」

ゆりの問いに答えた後、キティはディアーナに尋ねた。彼女の両腕の中でディアーナは言葉を発した。

「逃げてきた・・・リベリオン城から。凶犬に囲まれたけれど、なんとかかわして・・・でも兔羽ちゃんが・・・セーラーセレーネがキュアリベリオンに操られて、キュアセイバーという人を捕まえるに・・・」

「えっ・・・？今、なんて言いました？」

「セレーネがキュアセイバーというプリキュアを捕まえに行った・・・。その人のそばにはユカ様もいる・・・。早く・・・行って」

つばみが聞くとディアーナは再び答え、気を失った。

この時、ハピネスランドは夜に入ろうとしていた。

予言（後書き）

次回、プリキュアVSセーラー戦士！

## 敗北

真夜はすぐさま口モモを呼んで、変身アイテムに姿を変えたパー  
トナーを人差し指で弾いた。チリーンと響きの良い音と、「プリキ  
ユア！セイント・リバーズ！」のかけ声とともに真夜の身体が光に  
包まれる。純白の衣装に背中から生えた六枚のシャープな翅はね。真夜  
はキュアセイバーに変身を遂げた。

「ろまん、ここは私が。あなたはユカと妖精たちをお願い！」  
「分かった！」

ろまんが急いで家まで走ったのを確認すると、セイバーはセーラ  
ーセレーネと名乗った少女と向き直った。

「キュアセイバーは、私がやる・・・！」

セレーネはセイバーを包囲しているヤミたちに言うのと、ゆつくり  
と前進を始めた。彼女の手に武器のセレーネロッドが握られている  
のを見て、セイバーもリイフシンバルを両手に召喚した。互いに  
視線を合わせたふたりの戦士は最初は言葉を交わさなかったが、し  
ばらくしてセイバーのほうから口を開いた。

「あなた、キュアリベリオンの部下なんでしょ？じゃあ、私のこと  
も聞いているはずよね？『現在いま』のキュアリベリオンは一体何者な  
の？この国を乗っ取って何を企んでいるの？」

「・・・それを知ってどうする？今、私がおまえに答えることではな  
い。どうしても知りたければ、直接キュアリベリオンに聞けばいい」  
「・・・やっぱり、そう簡単には教えない、か。だったら・・・今は  
自分の身と大切な仲間を守らなきゃいけないみたいね！」

次の瞬間、セイバーは駆け出し、相手との距離を素早く縮めた。

「はっ！」

「ふんっ！」

拳と拳が衝突しあう。ふたりの戦士の戦いが始まった。

家の中に飛び込んだるまんは慌てて扉の鍵をかけた。

「ココ!?何が起こったココ!?」

るまんの顔色を見て、ココが叫ぶように聞く。他の妖精たちとユカも心配そうに出てきたが、るまんは彼らに構わず急いで二階へ駆け登った。そしてフアンのいる部屋のドアを蹴破るように開いて叫んだ。

「ファン!」

「ろ、るまん!?」

フアンの目にはまだ涙が溜まっていたが、彼女はすぐに手で拭いた。

「ファン、大変なの!外にヤミたちがいる!ううん、ヤミたちだけじゃない。キュアリベリオンの手下まで出てきたの!」

「えっ?」

「それで今、真夜が戦ってるの!」

「真夜・・・が?」

「ファン、私たちも戦おう!早くこのロザリオに力を注いで!」

るまんは急いで変身アイテムのロザリオをファンに見せたが、ファンは

「・・・なんで?」

と言った。

「なんでって・・・ファン、あなたの力を借りなきゃ、私はジェアンヌになれないんだよ!知ってるでしょ?」

「ジェアンヌになって、どうするの?」

「決まってるでしょ!真夜を助けるのよ・・・」

「だったら、嫌・・・!」

ファンはそっぽ向いた。

「ファン・・・?」

「あいつはお父さんを殺したんだよ。なんで、私があいつを助けなきゃいけないの?」

「ファン！今はそんなこと言っている場合じゃ・・・」

「知らないよ、あんなやつなんか！リベリオン軍にズタズタにやられちゃえばいいっ！」

「あんた天使でしょ！見捨てていいわけが・・・」

「あいつのために力を貸すくらいなら、天使なんてやめたほうがマシよ！」

「ファンのバカ！この分からず屋ッ！」

ろまんとファンの言い合いは一階にいる妖精たちにも聞こえていた。みな心配の表情をして、二階を見上げている。

「ろまんとファンが喧嘩しているルル・・・」

「いくらキュアセイバーが強いといっても、一人で大丈夫ロプ？」

「とにかくナッツたちはここでじっとしてユカ姫を守るしかないナツ」

「それしかないなら、みんなでユカ姫を守るムプ。・・・ところで、そのユカ姫はどこにいるムプ？」

「・・・えっ!?!?」

ムープの問いにみんなは声に出した。そして、確かに今の今までそばにいたユカがいなくなっていることに気づいた。慌てて周囲を見回すと、さつきろまんが鍵をかけた玄関の扉にユカ姫が張り付いているのが見えた。その扉にはわずかに小さい穴が空いていて、ユカはそこから外を覗いているようだった。

「ユカ姫、そこにいたら危ないナツ！すぐに奥のほうに隠れるナツ！」

慌ててナッツが近寄って言ったが、ユカの耳には届いていなかった。彼女は外でキュアセイバーと互角に戦っているもうひとりの戦士の姿に注目していた。

「キュアセイバーと戦っているあれって・・・まさか！」

目を大きく見開いたユカの額に、一筋の汗が流れた。

セイバーはセレーネと激闘をこれでもかと感じてしまうほど、闘り合っていた。ふたりが最初に拳をぶつけ合ってから、まだそんなに時間は経過していないが、セイバーはもう一時間も戦っているような気がした。そんな感覚を与えてしまうほど、セーラーセレーネは強かった。セイバーが拳を繰り出せば、彼女は片手で捌き、キックを放つと、いとも容易くかわした。逆に彼女の拳や蹴りも凄まじく、かわすかリリースシンバルで防御するかが精一杯で、思わずセイバーが拳を出すと、彼女のほうも拳を繰り出し、ふたりはぶつかった衝撃で、後方に弾かれるように跳んだ。

このセーラーセレーネというやつ、強い……。

ぶつかった衝撃でじんじんと痺れる手をばた振りながら、セイバーは素直な感想を頭に浮かべてセレーネを見ると、相手のほうも同様のダメージを受けていたようで同じ動作を取りながらセイバーをその赤く染まった瞳で睨んでいた。

「こうなったら、一気に決めるしかない！」

セイバーはそう決意すると、リリースシンバルをジャーンジャーンツ！と何度か鳴らした。その度にシンバルから無数の光の粒が弾け飛ぶ。ある程度光の粒子を生み出したセイバーは両手を大きく開いて技名を発した。

「セイバー！ホーリー・アタック！」

ジャーンツツ！！

そして空間を揺さぶるほど大きくシンバルを鳴らす。途端に光の粒子が尾を引いて次々と光速で敵に向かって突進を始めた。目も開けていられないほどのまばゆい光の大群がセーラーセレーネを一気に襲う。

「ふん……」

だが彼女はわずかに鼻を鳴らすと、握っていたセレーネロッドを掲げ、横様に素早く払った。その刹那、彼女の目の前の空間に白銀の巨壁が出現した。まるで鏡が何重も貼り付いたようなその巨壁はセイバーが発射した光の粒子の猛威を次々と受けても、傷一つ付く

ことなく破れなかった。

「そんな・・・！」

これにはさすがのセイバーも愕然となった。セレーネは目の前の巨壁を消すと、今度はロッドの先端をセイバーに向けた。そして、

「セレーネ・ミラー・ドーム！」

と声を発した次の瞬間、セイバーの周囲にドーム状の白銀の巨壁が現われ、彼女をあつという間に閉じ込めた。もつとも閉じ込めたといつても、頭上の空間だけ穴が大きく空いたように開いており、高くジャンプすれば容易に抜け出せるのだが、セイバーはあまりの突然に警戒し、すぐにその行動を取らなかつた。

「鏡のドーム・・・？一体、何の真似？」

「おまえがどこまで耐えられるか、試させてもらう」

頭上から声が聞こえ、セイバーはハッと顔を見上げた。すると穴が空いた空間にまで跳躍したセレーネが額のティアラに手をかけて叫んだ。

「セレーネ・ティアラ・アクション！」

すると彼女のティアアラが光を発して円盤状になり、ドーム内に投げ込まれた。投げ込まれた光のティアアラはドームの壁にぶつかると跳ね返り、また別の壁にぶつかって・・・そのままセイバーの背中に直撃した。

「ああっ！」

途端に襲いかかった激痛にセイバーは叫びをあげた。だがティアアラは容赦なくその後もセイバーを襲う。壁に弾かれる度にティアアラはさらに高速を発揮して、セイバーを傷つけた。腹部、肩、足、腕と次々とティアアラの直撃を受け、遂にセイバーは地に膝を着いた。

「はあ、はあ、はあ・・・うっ！」

膝を着いたセイバーの背中をまたもティアアラが衝突する。このままでは倒れるのも時間の問題だ。

こうなったら、一か八かだけど、壁を壊すしかない・・・！！

セイバーはそう心に決めると、震えながらもなんとか立ち上がり、

右足に力を込めた。力を溜め始めた右足に白い光が集まり始める。セイバーが力を溜め始めている間にもティアラは彼女の身体を傷つけていたが、セイバーは表情を歪めながらも耐えた。そして力が最大限に溜まったのを感じた瞬間。

「はああっ！」

セイバーは助走を開始し、白銀の巨壁に向かって跳躍して光が溜まった右足を伸ばした。

最大限の力を込めたセイバーのキックが巨壁に炸裂する。だが、彼女のキックを受けても巨壁はひびひとつも付かず、セレーネは少し口の端をあげて嘲笑した。

「無駄だ。そんなもので容易に破れるものか」

だがセイバーも負けていなかった。光を集めた右足に限界に近い力を込め、大きく声を発した。

「まだまだ！はああああああああっ！！」

その瞬間、ビキツ、と巨壁に小さく亀裂が入った。「何っ!?」とこれにはセレーネも驚く。亀裂はクモの巣状に徐々に広がっていき、

パリンッ！！

と音ともにドームは瞬時にガラスの破片と化して崩壊した。

「まさか・・・そんな!？」

戻ってきたティアラを左手で受け止めたものの、まだ驚きを隠せないセレーネ。鏡のドームを壊したセイバーは俯きながら破片の雨の中を歩き出すと、右手の拳を握り締め、力を溜め始めた。そして迷うことなく、セレーネを正面から見据えた。

「もうそろそろ、決めるわ。覚悟しなさい！」

そして一気に地面を蹴って駆け出し、素早く相手の懐にまで入った。自慢のドームが壊されるという現実に一瞬でも呆然としていたセレーネがハツとした瞬間にはもう遅かった。セイバーの拳がもう眼前にまで迫っている。これで決まった、とセイバーは確信した。

「やめてええええええッッッ！！！」

だが悲鳴にも似た声が轟き、その声にセイバーは相手の眼前スレスレのところまで拳を止めた。ハツとなり、すぐさま声が聞こえた方向に視線を飛ばすと、そこにはユカが涙を堪えた両目で外に出ている。彼女の後には妖精たちもいる。

「ユカ!？」

「ごめんココ!ユカ姫を止められなかったココ!」

驚いて声を出したセイバーにココが謝ったが、その後すぐにユカが「お願いっ!」と訴えるように泣き叫んだ。

「その人を傷つけないで!その人は、私の騎士<sup>ナイト</sup>なの!」  
「何やて!？」

ユカの言葉にタルトをはじめ、他の妖精たちも驚く。セイバーも驚き、セレーネに振り向こうとした瞬間。

「はあっ!」

「かつ・・・!」

セレーネの膝蹴りを腹部に受け、セイバーは二歩後退した。

「ひ、卑怯な・・・」

「戦いの途中に余所見をしていたおまえが悪い」

セレーネはユカのほうに目を向けると、ヤミたちに言い放った。

「ヤミ!ユカ様だ!すぐにペンダントを回収しろ!」

「了解!!!」

セレーネの命令を受け、数人のヤミたちがユカと妖精たちが殺到した。

「やめろっ!」

騒ぎを聞きつけ、ろまんが二階の窓から飛び降りて、ユカを助けるようにしたが、変身していない彼女にヤミたちを相手にできるはずがない。彼女はすぐに数人に両手を?まれ、動きを封じられた。

「嫌・・・ダメ!これは私の・・・っ!」

ユカも渡すまいと精一杯ペンダントを守ったが、とうとうひとり手が伸ばし、ぶちっ、と通っていた紐が切れると同時にペンダントを奪い取った。

「ああっ！」

絶望の声をあげるユカ。ペンダントを奪ったヤミはすぐに集団から離れると、

「コチラヤミ012。目的のモノを回収。直チニ帰還スル」

と呟くと、すぐに暗がりの中に姿を消した。

「いけないっ！」

セイバーが急いで追いかけてようとするが、セレーネが冷たい目で立ち塞がった。

「どけっ！」

焦りで多少苛ついた口調でセイバーは拳を素早く拳を放ったが、セレーネは容易にかわし、彼女の腹部に瞬時にセレーネロッドの先端をかざした。

「！・・・」

「今のおまえは、誰にも勝てない・・・！」

そうセレーネが言い放った次の瞬間、ロッドから強力な光球が発生した。

「ああああああああっっっ！！！！」

爆発と閃光、そして衝撃を全身に受け、セイバーは吹き飛ばされる。地面に背中を打ち、さらに勢いよく地面を転がっていった彼女はそのまま塀の壁に強く衝突した。

「うっ・・・うっ」

激痛にうめき、声を出したものの、もはやセイバーもそこまでが限界だった。彼女は気を失った。

「真夜ちゃんっ！」

口モモが変身アイテムから妖精の姿に戻り、彼女に急いで寄る。

その途端、セイバーは変身が解除され、真夜の姿に戻った。「真夜！」とろまんやユカたちも叫んだが、ヤミたちに取り囲まれ、身動きができなかった。

「真夜ちゃん！すっかり・・・すっかりする口モモ！」

真夜の身体を微弱な力ながらも揺さぶり、なんとか目覚めさせよ

うとするロモモ。だが、絶望はさらに追い討ちをかけた。ふたりのヤミが近づき、ひとりが真夜を両腕で抱きかかえたのだ。

「な、何をするロモ？真夜ちゃんをどうする気ロモ？・・・って、うわわっ!？」

ロモモももうひとりのヤミの手に捕まり、最初は手足をじたばたさせて暴れていたが、すぐに手から流された黒い電流を浴びて悲鳴をあげると目を閉じてぐったりとなった。

「連れて行け・・・!」

セレーネが命令すると、ふたりのヤミも暗がりのほうに足を向けて消えた。

「アトハドウサレマスカ？」

ろまんとユカたちの動きを封じたヤミたちのひとりが尋ねる。セレーネは赤に染まった両目でしばらく彼女たちを見つめていたが、

「ほうつておけ。もはや何もできまい。私たちも城のほうに・・・」

「・・・待ちなさいっ!!!」「・・・」

戻るぞ、とセレーネが言おうとした時、背後から何人もの声が聞こえ、全員が振り返った。

彼女たちの視線の先には、20人の少女たちがいた。

## 敗北（後書き）

次回、洗脳されたセレーネを救えるのか？そして、捕らわれた真夜の運命は！？

## 解放

20人の少女たちは言うまでもなくプリキュアたちとキティだった。

「みんな！」

「キティ！」

プリキュアたちの姿を確認してココとユカが感激したように叫ぶ。プリキュアたちの位置からもユカと妖精たちの姿が見え、一番のぞみが声を発した。

「ココ！ナッツ！無事だったんだね！」

「ユカ様・・・ご無事で！」

のぞみに続いてキティも安堵の声を出した。

「ちよつと何？なんでこんなな人が集まってんのよ？」

あまりの騒ぎに二階の窓からファンも顔を出す。だがパートナーがヤミたちに動きを封じられているのを見ると、

「ちよ、コラアツ！ろまんから離れるおっ！」

とすぐさま喚いて外に飛び出し、小さいながらもヤミたちに身体をぶつけようと突進しだったが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヤミたちは自らろまんから離れた。ユカを包囲していた者たちも離れていく。あまりのあっさりさにろまんもファンも妖精たちも思わず二度瞬きをした。

だが代わりにプリキュアたちが即座に敵意を出した両目で睨みだした。ヤミたちが彼女たちの前に集まり、列に並び始めたからだ。乱入者の登場に彼女たちは即座に敵と見なし、戦闘体勢に入ったのだとプリキュアたちはすぐに理解した。ひとりが呟くように小さく声を発した。

「コチラヤミ016。乱入者出現。コレヨリ破壊・・・」

「待て・・・！」

最後まで言い終える前にセレーネが前に出て、制止した。彼女を見て、キティが一瞬愕然と声を出した。

「兎羽さん……！」

「この人が、セーラーセレーネ？」

咲が聞くと、キティはうなずいた。すると「キティ！」とユカが呼び、彼女は振り向いた。

「今の兎羽は私やあなたが知っている兎羽じゃない。きっと誰かに操られている！」

「……ディアーナが言っていたのは本当だったんですね」

キティが再びセレーネのほうを見ると、彼女は赤く染まった冷たい目で背後にいるヤミたちにこう言った。

「おまえたちは城に戻れ。彼女たちは私が始末する」

「シカシ……」

「命令だ」

「……了解シマシタ」

ひとりがそう応答すると、すぐさま横道へ駆け出した。他のヤミたちも後を追いついて、暗がりには飛び込んで姿を消す。わずか1分でヤミたちは全員消え、セレーネはロッドをプリキュアたちに向けて構えた。

彼女の行為を見たキティが瞬時に両目を細くし、プリキュアたちに声をかけた。

「みなさんはユカ様たちをお願いします。私は兎羽さんを……」

「え？でも……」

「それはあなたの仕事でしょ？ここは私たちが出るよ」

つぶみとえりかが言ったが、キティは続けた。

「いいえ。これは私が決着をつけないといけない問題です。あの時、やむをえなかつたとはいえ、私は兎羽さんをひとりで残してしまったことをずっと後悔していました。そのために兎羽さんがどんなに苦しい戦いを強いられたか。その兎羽さんが今も苦しんでいるんです。だから、私は兎羽さんを今度こそ助けたいんです！ですが、

・万が一のことが起きたら、その時はユカ様をどうかお願いします！」

「あ、キティさんっ！」

とつぼみが叫んで手を伸ばしたが、遅かった。キティは助走をつけて高く跳躍すると、空中でくるり、と一回転し、変身した。赤いジャケットと桃色のスカート。長くなった赤い髪の上に被せた桜色のベレー帽。着地して彼女は華麗にポーズを決め、名乗りをあげる。「ドールキティ見参！」

そしてすぐさま武器のライトスピナーを召喚してセレーネに飛びかかった。

「おまえが相手か。来い！」

セーラーセレーネもロッドの先端から光球を飛ばし、ドールキティを攻撃する。

「はあっ！やあっ！」

だがドールキティは器用にライトスピナーを操り、光球を次々と撃破した。そしてそのまま勢いをつけてセレーネに拳を放ち、それを見たセレーネはすぐに両腕を交差して防御した。彼女の両腕に拳を当てたドールキティはその後後方に跳ね返るように宙返りして着地すると、再び走り出し、セレーネに素早く拳を放った。彼女の素早い攻撃にセレーネも片手で捌けず、また両腕を交差して防御したが、その威力は大きく、五歩も後退した。両腕を降ろしたセレーネを見て、ドールキティは、ふっ、と微笑んだ。

「懐かしくくないですか？あなたがまだ騎士修行に明け暮れていた時はよくこうして練習試合をしていましたね。最初のうちは私が勝っていたのですが、あなたはあっという間に上達して私でも簡単には勝てなくなってしまった」

「何を言っている？」

突然話しかけたドールキティにセレーネは不審げに言ったが、彼女は微笑んだまま続けた。

「誰よりも人を敬い、努力するあなたを私は好きでした。しかし、

私はあなたを見捨ててしまった。もうこれ以上苦しんでいるあなたをほうっておけません・・・！」

ドールキティは口元を引き締めて表情を厳しくし、言い放った。

「あなたは私が必ず助けます、兎羽さん！」

「何をわけの分らないことをっ！」

セレーネはドールキティにロツドの先端を向けた。だがその途端、「ふんっ！」と声とともにドールキティがライトスピナーを投げ、糸で絡ませた。驚いたセレーネにドールキティは両腕で引っ張って彼女からロツドを奪取すると、自身も武器を地に捨て、戦う意思がないことを伝えたが、逆に彼女に屈辱を与えたようでセレーネは赤く染まる瞳をらんらんと燃やして怒りの言葉を発した。

「おのれえ・・・っ！私を愚弄する気か!？」

「兎羽さん、お願いです。目を覚ましてください！あなたはそんなひどい方ではないはずですよ！」

「うるさい！さつきからわけの分からないことを何度も何度もっ！」  
武器を奪われたセレーネは走り出してドールキティの懐に素早く入り、シュ、シュツ、と空を切るように彼女に拳を繰り出したが、ドールキティはかわし、さらに腹部に向けて片足を高く挙げて蹴りを飛ばしたが、これも空を切る結果となった。

「す、凄い・・・！」

いつの間にかプリキュアたちと並んで見物していたるまんが感嘆のため息を吐く。それはユカと妖精たちを保護していたプリキュアたちも同じだった。それほどまでふたりの騎士の戦いは壮絶だったのだ。お互い武器を持たず、拳だけをぶつけ合う勝負。片方が攻撃を放てば、もう片方は片手で捌き、相手の暴走を止めるために鉄拳を素早く返す。それは同じ少女とは思えぬほど手に汗を握るほど熱く、そして美しくも見えた。だがふたりの戦いを見ていた、まだ10歳のユカはとても冷静に見ていらなかった。

彼女の目にはこの戦いが醜く、そして悲しいと見えていたのだ。ふたりとも彼女の騎士なのだ。腕を鈍らせないため互いに試合をす



んで、らしくないよ。これからも力を合わせて八ピネスランドを守つていこうよ。だからお願い。もう戦うのはやめて！私はふたりとも、大好きなんだからあつ！！」

「ユカ様……」

「……うっ……うっ……うっ……」

その時、セーラーセレーネに変化が起きた。突然混乱したように両手で頭を抱え始めたのだ。そして表情が歪み、次の瞬間、彼女は甲高く悲鳴をあげた。

「うわあああああああつっつっつ！！！！」

「兔羽さんっ！」

彼女の悲鳴に、ドールキティが声を発した。分かっている。セレーネの中にいる本当の彼女の心が闇と戦っているのだ。セレーネは身体をねじらせ、苦しそうに何度もうめいた。だがこれ以上彼女の苦しむ様子を見ていられない。ドールキティは一度捨てたライトスピナーに手を伸ばし、セレーネロッドを離すとそれを急いで変身アイテムのブローチが装着したりボンが結ばれている胸に当てた。

「兔羽さん！今、助けます！思い出してください！」

そう叫んだ瞬間、ライトスピナーからもの凄い光が炸裂し、セレーネを包み始める。

その光は邪悪なる者を浄化し、清らかな心を持つ人を癒す光。優しく、温かい。

その光を全身に浴びたセレーネは少しずつ記憶を取り戻し始めた。ほんのりと赤く染まっていた瞳がもとの色に戻っていく。

やがて光が消え、セーラーセレーネは優しい笑みを浮かべたま変身を解除し、騎士の衣装をした月野葉兔羽の姿に戻った。彼女の笑みを見て、みな笑顔になった。

「ありがとう、ユカ様、ドールキティ。ふたりのおかげよ」

「兔羽……よかった。本当によかった！」

ユカが泣きながら彼女に抱きついた。突然抱きついてきた小さな皇女様に兔羽は小さく驚いたが、すぐに微笑みを浮かべ、彼女の頭

を優しくなでた。

この小さな奇跡に、プリキュアたちも妖精たちもほとんどが目に涙を溜めた。

「感動的ですわね！」

つぼみが目頭に溜まった涙の粒を拭ってえりかに言う。

「本当だね！でも私たち、何かを忘れてしているような……  
……あつ！！！」

突然大声を出したえりかにみんなは注目した。

「一体何なの、えりか？せつかく感動していたのに、油差して……

」

「それを言うなら『水差す』でしょ」

「それどころじゃないよ！私たち、真夜さんがここにいて聞いて、来たんじゃないっ！！」

涙を拭きながら文句を言ったなぎさにほのかがつっこみを入れたが、えりかはそんなことは構わずに叫ぶとみんな一瞬でハツとなった。

「そうだわ……。ナッツさん、真夜さんは今どこにいるの？」

こまちが急いで聞くと、ナッツは途端に俯いて答えた。

「ごめんナツ。真夜は……真夜は、リベリオン城に連れて行かれたんだナツ！」

「……ええええええっっ！？」

「ん……？」

真夜は目を覚ました。床がひんやりと冷たい。どうしてこんな所で眠っていたのだろうかという疑問が湧いたが、彼女は記憶を呼び起こす前にそばで両目を閉じて倒れているロモモを見つけ、身体を揺り動かした。

「ロモモ、起きて」

「んん……あれ？真夜ちゃん？ここ、どこロモモ？」

ロモモは起きると、すぐに背中の中の羽を動かして宙に浮かんだ。

「分からない。どうしてこんな所に？確か、私はセーラーセレーネという人と戦って……」

その時だった。背後から骨の髄まで凍りついてしまいそうな冷たい声が聞こえたのは。

「やっと会えたわね……真夜」

ハツとなり、真夜はすぐに背後を振り返った。するとそこには……自分がもうひとりいた。

玉座に座り、頬杖をつきながらも邪悪な微笑みを向けている自分が。

髪型も、目の鋭さも、瞳の黒さもまるで同じ。ただわずかに異なる点があるとすれば、真夜が私服を着ているに対し、彼女は漆黒の制服を。そして右目のほうには海賊をイメージさせる黒い眼帯が装着されていた。

「あなたは……!」

真夜が聞くと、彼女は笑いながら答えた。

「アムキマヤ雨牙真夜よ」

同じ顔をした彼女の返事に、真夜はすぐに警戒心を出して言った。

「何を言ってるの……雨牙真夜は私じゃない!」

すると彼女は、ふう、とため息を吐いた。

「やっぱ、これじゃ分かんない、か。仕方ない。これなら覚えてい  
るでしょ?」

「何……?」

真夜が聞き返すと、彼女は玉座から立ち上がった。するとどこからともなく、一匹の黒いアゲハ蝶が飛んできて、彼女の手にとまった。まさか、と真夜の額から一筋の汗が流れ出す。彼女は、ふふつ、と微笑むと、クロアゲハがとまった手を高く掲げて叫んだ。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション!」

次の瞬間、クロアゲハが黒い炎と化し、彼女を全身へ燃え広がっていく。黒い炎の中で彼女は目を閉じ、身体をうねらせると、無数

のクロアゲ八が集まり始めた。彼女の身体に集まったクロアゲ八たちは一瞬で漆黒の衣装へ変わる。襟の立った二の腕までの袖の服。首筋にぞんざいに掛けられた、締まっていないネクタイ。腹部に描かれたヘビの目のような紋様。その下に施された黒と白のチエックの短いスカート。両足にブーツが施されると彼女は髪を掻きあげ、髪型を二つの黒いリボンで結ばれたツインテールに変えた。

完全に姿を変えた彼女を目の前にして、真夜も口モモも言葉を失う。彼女は静かに玉座の前で着地すると、目を開いてこう名乗った。

「全てを無へ誘<sup>こび</sup>つ漆黒の堕天使、キュアリベリオン！」

彼女の背後で大量のクロアゲ八がいつせいに舞い踊った。

## 解放（後書き）

次回、いよいよ・・・と書きたいですけど、まずは対話です。

## 伝説の神殿

変身した彼女が名乗りをあげた後も真夜とロモモはしばらく声が出なかった。特にロモモは身体が恐怖を感じて身体が小刻みに震えていた。真夜もあまりにも目の前の現実がすぐには信じられず、肩や手などが震えているのを感じていた。キュアリベリオンと名乗った自分と同じ顔を持つ彼女はそんな様子でいる真夜とロモモを見ると、笑みを浮かべたまま玉座に座り、足を組んだ。

「懐かしいでしょ？どう？かつての自分を見た感想は？」

「ち、違っっ！」

真夜はようやく声を発したが、その声はかわいていた。だが真夜の返事に彼女は言葉の刃を飛ばした。

「何言ってるの？違わないでしょ？これはかつてのあなたが変身を遂げた最凶最悪の姿。あなたはこの姿を以て世界を滅ぼし、全ての命を根絶やしにしようとした。その記憶を忘れたとは言わせないよ」「うっ……うっ……」

口調は穏やかだがその刃に真夜は全く反論できない。というよりむしろ正論だ。理由はどうあれ真夜が過去に世界を滅亡に追いやるうとしたのは本当だ。そのために真夜は自らを非情冷酷にし、パートナーすらも邪険にしたのだから。その過去をなかつたことにするのはできない。できるはずがない。

「い、一体、おまえは誰ロモモ！？」

震えながらもロモモも勇気を振り絞って声を発す。すると玉座に座る彼女はそばの円形のテーブルに置いてあった鋼鉄製の鉤爪を片腕に装着しながら答えた。

「言ったでしょ。雨牙<sup>アマキマヤ</sup>真夜。またの名をキュアリベリオン。まあでもあなたも“真夜”だし、私のことはキュアリベリオンでいいよ。みんなそう呼んでるし……」

「ふざけるなロモ！真夜ちゃんかふたりもいるわけないロモ。おま

えは真夜ちゃんに化けた偽者ロモ。真夜ちゃんに化けてこのハピネスランドを支配して、一体何を企んでいるロモ！」

ロモモが激情に走った声で叫ぶと、わずかだが初めてリベリオンの表情が歪んだ。

「偽者、ね……。私が何者かは真夜、あなたがよく分かっているはずよ」

「えっ……。？」

「この姿でもまだ分からないのかしら？だとしたら、失望するわ」

「一体、何を言っているの！？」

真夜は聞いたが、リベリオンは無視して再びロモモのほうに言った。

「何を企んでいるって聞いたわね？いいよ。そっちの質問には答えあげる……。？」

リベリオンは再び口角を上げて冷たい笑みをした。

プリキュアたち一同はとりあえず監視カメラの目をかわしながら再び地下アジトに戻った。もちろん、真夜がさらわれたと聞いてつぼみが救出に向かおうとしたのだが、ゆりに止められたのだ。彼女が言うには自分たちが行ったところで逆に捕らわれてしまうのは目に見えている、ここは一旦隠れ家に戻ってどうすればいいかを考えるべき、とのことだ。ゆりの意見につぼみもやむをえずに従い、ひとまずその場をあとにした。なお、ろまんとファンも同行することになった。ろまんは自ら怪盗ジェアンヌだと明かしたうえでこれまでの経緯をプリキュアたちに話し、ファンの父親がキュアリベリオンだった時の真夜に殺されたことも明かして、そのうえで真夜を助ける力になりたいと申し出た。当然ファンは反対したが、結局折れて、渋々ついてきた。セーラーセレーネと怪盗ジェアンヌ。ふたりの新たな仲間が増えたことにプリキュアたちは喜んだが、今はこの現状をヒシに報告しなければならぬ。一同はアジトに到着すると、

再び書齋に通された。

長老ヒシはありとあらゆる古文書を机上に山積みにし、ペンダントや初代国王が残した予言について何か手がかりがないかと読み漁っている最中だった。古びた机のそばには怪我した箇所を包帯で巻いたデイアーナが横になつていたが、書齋に入ってきた兎羽の姿を確認すると、満面の笑みで彼女の胸に飛び込み、しばし再会の喜びを分かち合つた。が、すぐにヒシに振り向いて挨拶すると最悪の現状を語つた。

「なんと、ユカ様のペンダントが……。それは本当なのですじゃな、兎羽様？」

「はい。ごめんなさい。私のせいで……」

「兎羽さんのせいじゃないですよ。悪いのは兎羽さんの心を操る卑劣なやり方をしたキュアリベリオンです」

兎羽は本当に申し分けなさそうに謝つたが、キティは彼女の肩に手を置いて励ました。

「しかし、これはいよいよ最悪じゃ。キュアリベリオンのほうは条件が揃つてしまった。このままでは明日予言に出てくる悪魔がこの国に降臨してしまう……」

「おじいさん、悪魔の正体、まだ分からないの？」

咲が聞いたが、ヒシは首を横に振つた。

「こつ近いところまでは来ているとは思うんじやがの、まだ実体は？めておらん。よほど古くから伝わる邪神なのかもしれん。しかし、初代国王陛下が予言し、世界を破滅に追いやるというやつじゃ、並大抵の存在ではなからう」

「あゝこのままじゃ、明日世界は滅んじやうよ！私たちになんとかできないの〜っ!？」

えりかが頭をヤケクソ気味に掻きまつた時だ。

「やつぱり、金と銀の剣を探さないといけないのかしら……？」

と舞が呟き、全員彼女に注目した。咲が不思議そうに聞いた。

「舞、どういうことナリ？」

「予言に続きがあつたでしょ？別の世界から来た選ばれしふたりの勇士が金と銀の剣(剣)で悪魔を倒すつて。もしその“選ばれしふたりの勇士”が私たちの中の誰かなら、私たちはその金と銀の剣(剣)を明日までに見つけなければいけない。そういうことじゃないかしら？」

舞の考えにいつきが賛同した。

「確かにそうだね。もしそのふたつの剣じゃないと予言に出てくる悪魔を倒せないと言うのなら、ボクたちは一刻も早くその剣を見つけないやいけない。ぐずぐずしていたらこの国だけじゃなく、全ての世界が滅亡に追いやられてしまう・・・！」

「でも、どうやって探すの？分かっているのはどこかの神殿の奥にあるというだけで、もう夜になった今から探し出すのは至難の業よ」  
美希がそういつた時だった。

「私、知ってるよ。その神殿」

「……ええっ!?」「……」

突然ファンが腕を組みながらぶっきらぼうに言い、全員彼女に視線を向けた。すぐさままるまんが聞く。

「ファン、それ本当なの？」

「まあね」

「それで、どこにあるの？」

するとファンは人差し指を上に向けて言った。

「空よ」

「……そ、空!?」「……」

「私为天界から地上に降りる途中、ちらつとだけだけど雲の隙間にそれっぽい建物を見たのよ。あとで天使長に聞いたらそれは過去に世界を何度も守りぬいた戦士たちが眠るといわれる伝説の神殿なんだってさ」

「きつとそれに間違いないココ!それで、その神殿は空のどこにあるココ?」

ココが確信したように叫んだ後で聞いたが、

「さあ?」

とフアンの一言で、みな一瞬で目を点にした。

「だって、本当にちらつとしか見たことないし、あの時の私はるまんに会うまでパートナー探しに明け暮れてたんだもん。その予言を聞くまでずっと忘れてたし・・・」

「じゃ、意味ないじゃん・・・」

なぎさが本日二度目のガツクリ台詞を吐いた。するとフアンはそっぽを向いて冷たく言った。

「でも仮に行き方を知ってたとしても、私は言いたくない。言ったらどうせ私のお父さんを殺したあいつを助けに行くんでしょ？」

「!・・・フアン、今は真夜がどうのこうの言ってる時じゃないですよ！憎むのは勝手だけど、明日世界が滅びるかもしれないんだよ！天使がそれを無視していいの!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

るまんが怒鳴ると、フアンは一瞬パートナーを睨んだが、すぐに視線を外した。その彼女を兎羽の足元にいたディアーナが少し目を鋭くして見ていたが、フアンは気づかなかった。

「キュアキュア〜プリプー」

その時突然シフォンが机上で山積みになっていた本のそばに転がっていたペンライトのようなアイテムを片手で握って嬉しそうに宙に浮かんで笑いながら振り出し、みな振り返った。

「シフォン、どうしたの？」

「あ、それ、俺のデステイニーミラクルライト・・・!」

シフォンの行為にラブとダイチが声を出す。ダイチの言うとおり、シフォンが振っていたのはヤミたちに包囲されたプリキュアたちを救ったあのデステイニーミラクルライトだった。

「キュアア〜 プリプー」

「シフォン、一体どないしたんや？」

さらに喜びの声を発し、タルトが聞いた次の瞬間だった。

ミラクルライトから突然強力な光が放たれ、その場にいる全員を包んだ。あまりのまぶしさにみな目を瞑る。すると全員の脳裏に何

かの光景が映し出された。

それは巨大な建造物の光景だった。美しい純白で塗られた石壁。正面から上へと続く壮大な大理石の階段。天井はどこまであるのか分からないほど高い。紅のカーペットが敷き詰められた大広間は広く、そしてその奥にぽつんと誰か人物の彫刻像がある。長髪で頭部に王冠のような装飾をし、鎧を身につけた女性のようだ。その女性像の足元にふたつの剣が突き刺さっている。高度な輝きを放つゴールドとシルバーの鞘。光景はそこで途切れ、ミラクルライトから放たれた光が消えると同時に全員ハツとなった。

「今のは・・・一体？」

まずりんが声を出す。するとせつなが瞬時に理解したように言った。

「もしかして、今のが空にある伝説の神殿じゃない？」

「きつとそうだよ！でも、どうしてあのミラクルライトから・・・？」

のぞみがシフォンの持つミラクルライトを見ながら疑問を投げると、今度はダイチが口を開いた。

「もしかしたら、あのミラクルライト、神殿から降ってきたのかもしれない・・・」

「え？どういうこと？」

ユカが尋ねると、「実は・・・」とダイチは話した。

「あのミラクルライト、空から降ってきたんだ」

「空から？」

「ああ。ハピネスランドがキュアリベリオンに支配されてからまもない雨の日のことだった。俺がなんとか監視カメラの目をかわして食糧を手に入れた後急いでアジトに戻ろうとした時、突然そいつが目の前で雨と一緒に降ってきたんだ。最初はただのペンライトと思っただけ、それからヤミに捕まった時に目をくらませてやろうと光を当てたら、その途端すっげえ光が出てよ、一瞬でヤミを消しちまったんだ。俺、びっくりして、こいつはハピネスランドを守るため

の武器を天から授かったんじゃないかと運命みたいなのを感じて、それでデステイニーミラクルライトと名づけたんだ」

ダイチの話が終わると、えりかが思いついたように声を発した。

「ねえ、思っただけだよ、ひよっとしてこのミラクルライトが私たちを神殿まで導いてくれるんじゃない？」

「え？ どういうことですか、えりか？」

つばみが尋ねた。

「だからさ、みんなも見たじゃん？ 私が思うにさ、あれってズバリ神殿が私たちを呼んでいると思うんだよ。だとすれば、このミラクルライトを照らしていけば、光が神殿まで案内してくれるかもしれないじゃん。もう時間もないし、世界を守るためにきつと神殿も早く剣を手に入れなさいと私たちに伝えてる気がするんだ」

「……ううん……」

えりかの意見にほとんどが唸った。だがここで兔羽が賛同した。

「私はえりかちゃんの言うとおриだと思う。というより、そうしか考えられない。今の光景とダイチ君の話からしても神殿とミラクルライトが無関係なはずがないと思うし、明日世界が滅びるかもしれないというタイミングを考えてみても、神殿が私たちを呼んでいると考え、ミラクルライトに賭けるべきだと思う。どっちにしろ、もう時間がほとんどない以上、私たちはすぐにでも神殿に行かなきゃ全ての世界が……」

「ちよつと待ったっ！！！」

その時、ずっと話を聞いていたファンが兔羽の前に飛び、一瞬で人間大に巨大化した。驚く一同をよそに兔羽とほぼ同じ背の高さになったファンは彼女と視線を合わせると、こう言った。

「どうしても行くの、神殿へ？」

「ええ」

兔羽は当然と言うふうに答えると、ファンは唇を噛み締めた。

「じゃあ剣を手に入れたら、当然すぐにあいつを助けに行くよね？」

その台詞にろまんがすぐに怒って言う。

「ファン！まだそんなことを！もうこれは真夜だけじゃない。全世界の危機なんだよ！それを聞いて止めないわけにはいかないでしょ！」

「そんなことは分かっているよ！でも・・・でも、あいつは私のお父さん、グレンファイヤーを殺したんだ！あんなやつ、お父さんの分も苦しんで死んだほうがいいのに、それでも助けなきやいけないと思うと私は・・・私は、世界なんてどうなつてもいいとさえ思っちゃうんだよっ！！！」

「ぱあんつつつ！！！」

ファンは瞬時に平手打ちされた。彼女の頬を叩いたのはプリキュアたちでもキティでもなかった。ろまんでも兎羽ですらもなかった。彼女に平手打ちをしたのは突如出現した少女だった。年齢は15歳くらい。水色のセミロングヘアで、艶あでやかな紫のスカートが広く開いた服を着ているが、怪我をしているらしく、所々に包帯を巻いている。目はきりりと鋭く、額には三日月が描かれていた。突如現れた少女に兎羽とキティ以外全員が驚いて、思わず一歩後退し、うららが聞いた。

「あ、あなた、一体誰なんですか？  
すると兎羽が答えた。

「・・・ディアーナよ」

「「「「え・・・えええええっつ！？」」「」「」

「またも全員驚いた。すぐさまなぎさが尋ねた。

「マ、マジ？ディアーナは猫じゃ・・・」

「これが本来のディアーナなの。だけどね、ここじゃ次元が違うから猫の姿じゃないと体に悪影響が出るのよ。この姿でいられるのはわずかな間だけなの・・・」

兎羽が説明すると、少女に変身したディアーナは頬を片手で抑えているファンにこう言った。

「あなたは、まだ分からないの？」

「な、何よ？いきなり・・・」

「あなたは天使なんですよ？それなのに憎しみでヤケになって、それで立派な天使になれると本気で思ってるの!？」

「う、うるさい！私の気持ちなんて誰にも分かるわけないよ！お父さんを殺された悲しみや悔しさというものがどんなに苦しいかも知らないくせにつ！」

「いいえ、分かるわ！」

「えっ……？」

「ファン、あなたのお父さんはグレンファイヤーと言ったわね？じやあ、そのお父さんからミラーナイトという人の名前を聞いたことない？」

「ミラーナイト？確か、お父さんの友達で同じ宇宙警備隊の隊長をしていた優秀な鏡の騎士と聞いたことがあるけど、それが何なのよ？」

「……私の父よ」

「……はい？」

「ミラーナイトは私の父の名。そして父もキュアリベリオンと戦い……命を散ったわ！」

「え……!？」

## 伝説の神殿（後書き）

次回はディアーナの出生の秘密が明らかになります。

## 連鎖

「そうよ。私の父、ミラーナイトはあなたのお父さんと同じ宇宙警備隊の隊長を務め、鏡の星を出身とする優秀な騎士だった。私はその父と別次元に存在する月の王国の住人だった母から生まれたのよ。でも母は生まれながらの病弱で、私を産んですぐに病気が悪化して打てる手は全部打ったけど結局助からず、光の粒子となってこの世から去ったの」

「そ、そうなの？」

ファンが聞くとディアーナはうなずいた。

「だから、私は母の顔を写真でしか知らない。でも父が言うには病弱な自分よりも他の人を常に優先することを忘れない誰よりも優しい人だったらしいわ。さらに私を生めば自分は死ぬかもしれないということも事前から聞いていて、父は一度は母を失いたくない一心で拒絶を勧めたそうよ」

「でも、現にあなたは今ここにいます。ということは……」  
「うららが言つと、彼女は振り向いて言った。

「そう。母は断つたの。せつかく宿つた命を失いたくない、たとえ自分の身がどうなるうと私たちの子供を生みたいと母は言つて、自分の命を引き換えにして私を生んでくれたの。私はその話を聞いて、本当に母は誰よりも優しい人だったと理解し、母の愛に感動したわ。それで私はそんな優しい母と宇宙警備隊の隊長を務めながらも私に愛情を注いで育ててくれた強い父のようになりたいと夢を持って、人間界に降りて邪悪な存在から人々を守るこの任務しごとに就いたのよ」  
「そう……だったんだ」

なぎさが低い声で言つと、ディアーナはファンに向き直つた。

「次元が違うために猫の姿を借りないと生きていけない人間界で私はこのハピネスランドに到着し、そして王位継承者を守る騎士修行に明け暮れていた兎羽ちゃんと会つたの。そしてほとんどもとの姿

に戻れない私の代わりに戦うことを約束してくれて、兎羽ちゃんに鏡の属性を持つ父と月の属性を持つ母の両方の力を持った変身アイテム『ハート・セレーネ・ブローチ』を授けてセーラーセレーネに変身させたのよ。時には私もわずかな間だけれど本来の姿でキティとも一緒にこの世界に侵略してきた悪を成敗してユカ様を、そして民たちを守り続けてきたわ。そんな私を宇宙の平和を守り続けていた父はとても喜んでくれて、応援してくれた。でも・・・一年前のある日、銀の光が私のもとに届いたの。それには父からの最後のメッセージがあった・・・」

ディアーナは悲しそうな表情になって目を伏せた。

「メッセージはこう書いてあった。惑星デントでギガバトルナイザーを手に入れようとしたキュアリベリオンにグレンファイヤーと一緒に戦いを挑み・・・敗れ果てた、と」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員、沈黙した。

「父の死を知って、さすがの私もショックを受けたわ。一週間はご飯も喉を通らなかった。そして一度は父を殺したキュアリベリオンを憎んだ・・・」

「だったら・・・」

「でも、父がいつも言っていたのを思い出したのよ・・・！」

ファンが言いかけようとした時、涙を堪えながらも顔を上げたディアーナが言った。

「父は私が幼い頃から仕事に出かける前に必ずこう言っていた。たとえ自分が戦いに負けてもう帰ることができない時があったとしても、それは戦士としての宿命だ、殺した相手を決して憎んで仇を取ろうと考えるはいけない、憎しみは憎しみを生み出し、その連鎖は永遠に終わらないって・・・」

「憎しみは、憎しみを生み出す・・・」

「そう。それが父の教え。悔しいし、簡単には納得できなかったけど私はそれを守り通すことに決めたの。もし破ったら、父はきつと

私に失望すると思ったから。だから、たとえ私がキュアリベリオンと戦うことになっても、父の仇を取るために戦わない。この世界を守るために戦うわ。その真夜という人が過去にキュアリベリオンだったとしても、今の私たちの敵はこのハピネスランドを支配しているほうのキュアリベリオンのはずよ。そしてそのキュアリベリオンはこのハピネスランドを含めて全ての世界を滅ぼそうとしている。・  
・・・あなたはそれを無視していいの？このままほうっておいたら、あなたや私と同じような人が何人も出るかもしれないのよ？天使としてそれを許していいの！？」

「うっ・・・うっ・・・」

ファンは言葉が詰まった。全く反論できない。そこまでディアーナの言うことは筋が通っていた。

彼女の言うとおり、憎しみは憎しみが生まれない。誰かを憎み、その誰かを殺したとしてもまた新たな憎しみが生まれ、いつ果てるとも尽きない連鎖が永遠に続いていくのだ。それに、たとえ憎んだ相手を殺したとしても、その相手に奪われた愛する人が帰ってくることはない。結局憎しみの果てには何も無い、永遠の無しか存在しないのだ。

けど、だからといって、やはり愛する人を奪われた悲しみや怒りはそう簡単には癒せないし、許すこともできないのも事実だ。たとえ憎しみの先には何もないと分かっているとしても、やはりファンはどこかやりきれない思いがあつて、唇を噛んだ。

「あの・・・ちよつといいかな？」

その時、のぞみが小さく手を挙げた。全員が彼女に視線を向けるのぞみは「えへへへ・・・」と笑うとファンに言った。

「ファン、あなたはまだ真夜さんが許せない？」

「・・・」

ファンは答えなかった。のぞみは続けた。

「そりゃそうだよね。大好きな人を殺されたんだもん。簡単に許せるはずがないよ。・・・でもね、真夜さんもお父さんとお母さん、

そして友達を殺されたんだよ」

「え……？」

「悪い人の手でね、目の前で真夜さんの両親と友達は死んだの。真夜さんはそれがきっかけて世界を憎んで、キュアリベリオンになったんだよ。でも真夜さんは気づいたの。自分がやっていることは間違っているって。こんなことをやっても悲しいだけなんだって……」

。時間がかったけれど真夜さんはようやく憎しみを捨てて光を取り戻し、キュアセイバーになることができたの。今では自分がやってきたことをすごく反省して、償いのために世界を少しでも良くしようとして一生懸命勉強しているんだよ。もちろん、それであなたとデИАーナのお父さんを殺したことがなかったことにはできないし、許してほしいとも言わないよ。でも、もし真夜さんが世界を滅ぼしていたら、きつと数え切れないほどの憎しみと怒りと悲しみをひとりで背負い、ずっと苦しむことになっていたと思う。それだけは間違いないと思うんだ」

「……」

「本当はあなたも気づいていたんじゃない？いくら憎んでも、虚しいだけだつて。本当の敵は別にいるって。もし気がついていたらなら、そのために戦おうよ。ね？」

のぞみがそこまで言った後、ファンはしばらく目を逸らしていたが、やがて身体がみるみる縮小し、もとのミニサイズに戻った。ろまんが小さな歓声を発す。

「ファン……！」

「……まだ自分の気持ちに整理が着いていないけど、とりあえず神殿に行くのを邪魔するのはもうやめる」

ファンの台詞を聞くと、デИАーナも安堵したように微笑みを浮かべて、瞬時に猫の姿に戻り、首をふるふると振った。

「まあとにかく、仲間割れが収まってよかった。ところで、神殿には誰が、どうやって行くんじゃない？」

ヒシが問いかけると、全員振り返った。

「神殿は空にあるんじゃない？みなさんは空を飛べるのかの？仮に全員飛べたとしても、もう時間も遅いし、いつ神殿に着けるかも分からない。明日のことを考えて、何人かは残るべきじゃとわしは思うのだが」

ヒシの言うことももつともである。一同はすぐに互いに視線を合わせた。

「わ、私が行きます！」

すると、手を挙げたのはなんとつぼみだった。

「つぼみがロプ？」

すぐさま驚いたようにシロップが言うと、

「しょーがない。私も行くよ」

とえりかも手を挙げた。つぼみが彼女に振り向くと、えりかはニヤニヤ顔でつぼみの肩に手を置いた。

「えりか……」

「まあまあ、ここは私たちに任せといてよ。ちゃちゃ〜と行って、剣を手に入れたら、ビュバーツと帰ってくるから。幸い、私たちはコフレたちのおかげで飛べるし」

「でも飛ぶんだったら、私たちもキュアブライト、キュアウィンディに変身すればできるよ」

「ふたりだけじゃ心配だね。私たちも一緒に……」

「うっん、咲さんと舞さんは残ってて。ボクが行くよ」

そう言って、前に出たのはいつきだった。「いつき……」とつぼみが声に出した。

「たとえ何か出たとしても、ボクがふたりを援護するから。咲さんと舞さんはここで休んで、明日のために力を蓄えていてください。

ここはボクたちに任せて」

「ポプリもいちゆきのために頑張るでしゅ〜」

「じゃあ、私も行ったほうがいいわね」

ゆりも前に出始めた。

「ゆりさん……!」

「ミラクルライトの力で少しは見たとはいえ、神殿に何かあるかはまだ分からないし、もしかしたらキュアリベリオンが手を出している可能性も否めないわ。少しでも多くいたほうが安心できるでしょう？」

えりかが言うのと、ゆりは微笑んだ。

兎羽とろまんも拳手した。

「私も行くわ。万が一キュアリベリオンの手が伸びていたら、ヤミたちと戦ってきた私のほうが慣れてる。少しは役に立つはずよ。ディアーナの力を借りれば、私も空を飛べるから。いい？ディアーナ？」

「もちろんよ。私はこの姿じゃ飛べないからここで待つけど」

「私も行きたい！その伝説の剣（剣）をこの目で見てみたいの。あ、べつに狙っているわけじゃないよ。でも、もしヤミやその手下が来たとしても、私の足なら剣（剣）を持って逃げる自信はあるよ。私もファンから力を借りれば空飛べるし、もう邪魔しないって言ったんだからべつにいいよね、ファン？」

「べつにいいけど・・・私は行かないからね、ろまん！」

「分かってる分かっているって」

「兎羽さん、あなたが行くのなら私も・・・」

と、キティが兎羽の前に来たが、彼女は騎士人形の両肩に手を置いた。

「キティ、もういいよ。キティは私を助けるために十分頑張ったでしょ。あなたは休んで」

「し、しかし・・・」

「第一、あなたは飛べないでしょ？それにあなたはここでユカ様やプリキュアのみなさんを守る任務があるはずよ。こっちは私たちに任せて。なるべく早く戻るから、あなたはみんなをお願い」

「・・・すみません」

キティは一礼した。するとえりかが元気よく拳を振り上げて言った。

「よつしゃ、決まった！じゃ、早速行こう！もう時間はないし、  
」はいっつけえ〜っ』だよ！」

「……………」

「それを言うなら『善は急げ』じゃないですか？」

「おおっ！それだよそれ！」

つぼみが訂正すると、えりかは指差して言った。いつきは「あは  
はは……」と苦笑いをし、ゆりも呆れて額に手を当てた。一同は、  
大丈夫かな〜こんなんで、と急に心配になったが、ゆりと近い年齢  
の兎羽とろまんも同行するのだし、任せてみようと考え、全員書斎  
を出始めた。最後にキティが書斎のドアを閉じると、一人残ったヒ  
シはため息を吐いた。

「はあ……やつと静かになったのお。さて、早く悪魔の正体を突  
き止めねば……」

そして机上に山積みになっていた古文書のうち、中でも最も古そ  
うな本を取り、開いた。そして一ページずつ目を素早く通してめく  
っていく。だが13ページ目を開いた時、ヒシは途端に目を大きく  
開き、手を止めた。

「な、なんと……………!？」

そこに綴られた文章を急いで目を通していく。通し終えた瞬間、  
本を持つヒシの両手はガタガタと震えだした。

「ま、まさか、キュアリベリオンは本当にこんなやつを降臨させよ  
うとしておるのか？だとすれば、なんとしても止めねば、明日全て  
の世界が終わる……………!!！」

そのページには恐るべき文章が記されていた。

## 連鎖（後書き）

！ 次回、悪魔の正体が明らかに！そして、ふたりの真夜が遂に激突！

## 悪魔

一同は外に出ると、まずは周囲に誰もいないことを確かめた。幸い、この路地裏は監視カメラからも死角だ。つぼみ、えりか、いつき、ゆり、兎羽、ろまんはそれぞれ変身アイテムを持つと頭上に高く掲げた。

「キュキュプリキュア！オープン・マイ・ハート！」

「セレーネ・プリズムパワー！メイクアップ！」

「ゲームスタート！」

光が彼女たちを覆い、流れに身を任せて姿を変えていく。光が消えて姿を完全に変えた少女たちはそれぞれポーズを決め、名を名乗った。

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花！キュアムーンライト！」

「キュキュハートキャッチプリキュア！」

「月を守護に持つ愛と正義のセーラー服美少女戦士、セーラーセレーネ！」

「闇より生まれし悪しき者を封印するために・・・怪盗ジエアンヌ！神に遣わされ、ただ今参上！」

「シプレ！」

「コフレ！」

「ポプリ！」

「キュキュはいですう（でしゅ）っ！」

ブロッサム、マリン、サンシャインが呼びかけると、妖精たちは光のマントに姿を変えてそれぞれパートナーたちに装着した。それを見たムーンライトは、ふっ、と微笑み、自身もマントを出現させ装着する。ムーンライトもかつてコロンという妖精のパートナーが

存在したのだが、戦いの犠牲になって滅びてしまったのだ。そのせいで彼女は心に傷が残り、一時期変身ができなくなってしまったのだが、コロンの魂は生き残り、彼女にココロの種がたくさん入ったココロポットを与え、その力で再びキュアムーンライトに変身させることができたのだ。今でこそコロンはもうそばにはいないが、彼女は妖精の力を借りなくても変身が可能となったし、マントを召喚して空を飛べるようになっていた。

「ディアーナ、私に力を貸して」

「ええ！」

「ファン、私にも！」

「分かってるよ！」

ディアーナとファンの額から光が放たれ、ブローチとロザリオに注がれる。光が送り込まれた瞬間、ふたりの背中から白い天使のような両翼が生えた。

「すっごくいつ・・・！」

「へへへへっ・・・」

ラブが素直に感服すると、ジエアン又は少し恥ずかしそうに笑った。

「みんな気をつけて」

「何かあったら、すぐに逃げて」

「無理はあまりしないでください」

「大丈夫だって。すぐ戻ってくるから！」

「みなさんは、どうかこの場所をお願いします」

なぎさ、ほのか、ひかりが言うと、マリンはVサインをし、ブロッサムは礼儀正しく腰を折り曲げて言い、シフォンからデスティニーミラクルライトを受け取った。そしてスイッチを入れ、希望の光を発すると、光は夜空へ一直線に伸びた。みんなはそれを見て、互いにうなずき合った。そしてふわっと6人の少女たちは身体を宙に浮かせた。

「兔羽、きつと帰ってきてね」

「はい。必ずお戻りすると約束します」

ユカが心配そうに言うと、セレーネは笑顔でうなずいた。

「じゃ、行ってくるね〜！」

マリリンが手を振り、6人の少女たちは光の案内に従って徐々に夜空を目指して飛んでいき、小さくなり始めた。数分後にはもう見えなくなり、残った者たちは互いに顔を下げた。

「それで、私たちはこれからどうする？」

りんが聞くと、キティが口を開いた。

「みなさんはもうお疲れでしょう？明日に備えて少しは眠ったほうがいいです」

しかし、美希が口を挟んだ。

「待って。万が一ブロッサムたちが遅れるかもしれないでしょう？そうだったら、キュアリベリオンを私たちでなんとか止めなきゃならないわ。ここは一度作戦を考えてからのほうがいいんじゃない？」

「確かにそうね。相手はキュアリベリオンだけじゃない。ヤミたちや他の幹部もいるみたいだし、ここはどう攻めるかを考えたほうが・・・」

「おい、プリキュア！ちょっといいか？」

美希の意見にせつなが賛同した時、彼女の言葉を切って、路地の床を開けてダイチがひょこっと顔を出した。全員が彼に振り向くと、ダイチは言葉を続けた。

「長老がすぐ来いって言うんだ」

「え？ヒシさんが？」

ラブが尋ねると、ああ、とダイチは答えた。

「とにかくすぐに来てくれってさ。大事な話があるみたいだ。急いでくれ」

そう言うと、ダイチは顔を引っ込めた。みんなは一瞬顔を見合わせたが、すぐに一人ずつ地下道に入ってしまった。

「おじいさん、話って何なんですか？」

書斎に通され、祈里が最初に尋ねると、ヒシは机上に両肘を着き、

合わせた両拳を額に当てた状態で深刻そうに目を瞑り、俯いていた。老人の額からはわずかだが汗が流れている。ヒシはゆっくりと目を開いて顔を上げるところ言った。

「初代国王陛下の予言に出てくる悪魔が分かったんじゃない？」

「……………えつ……………」

「古い書物の中にそれは記録されていた。ユカ様のペンダントとの関係も分かった。今から約400年前、まだこのハピネスランドが建国されるずっと前のことじゃ……………」

「そ、それで、その悪魔って何なの？」

現ペンダントの持ち主であるユカ本人が聞くと、ヒシはごくりと唾を飲み込んで重い口を開いた。

「その悪魔の名は……………」

「ヤマタノオロチよ」

「なっ!？」

その言葉に、名前に、真夜は一瞬めまいがしてよろめいた。ロモもも驚いたショックで背中中の羽を動かすのを止め、危うく床に激突しそうになった。彼女とパートナーの様子を見て、リベリオンは楽しげに笑う。

「や、ヤマタノオロチって、あの……………」

「そう。日本神話に登場するあいつよ」

リベリオンは真夜の問いに答えた。

ヤマタノオロチ。それは日本神話に登場する大怪獣である。八つの頭を持ち、真紅の目を持つその体は八の谷と八の峰にまたがるほど巨大と伝えられている。日本神話ではオロチの生贄に選ばれたクシナダヒメを助けるためにスサノオノミコトが強い酒をオロチに飲ませて眠り込んだ隙に一本ずつ首を斬り裂いて倒したという。

「で、でもあれは伝説じゃ……………」

「伝説が全て架空のものだって誰が言った?もしそう言うんなら、

今まで数多くの世界を守ってきたプリキュアの伝説もあなたは否定することになるよ」

「・・・じゃあ、まさか・・・」

「そうよ」

真夜が言うと、リベリオンは答えた。

「かつてヤマタノオロチは実在したのよ。ただし、日本じゃなく別世界のこの地にね」

「！・・・」

真夜もロコモも黙った。

「今から約400年前にヤマタノオロチは突如この世界に現れた。なぜ日本の伝説の怪獣がこの世界に現れたのかは私にも分からない。もしかしたら、何かのひょうしで日本に実在していたのが次元を渡ってこの世界に降りたのかもしれないし、たまたま姿が似ていたのが長い眠りから覚めてそう名づけられただけなのかもしれない。とにもかくにもヤマタノオロチはこの世界を暴れ回り、破壊の限りを尽くそうとした。けれど、そこに別次元を飛んで来た数人の少女の戦士たちが現れてオロチと戦ったのよ。戦いはかなり熾烈を喫したらしいわ。でも激戦の末、遂にオロチを倒したのよ。でも、オロチの中に潜む邪悪なエネルギー生命体はまだ死んではいなかった・・・」

ヤマタノオロチの中に潜む邪悪エネルギー生命体の存在には戦士たちも気がついていてた。しかし、もう体力が限界を超えていた。このままほうつてしまったら、再びオロチは復活してしまう。そう考えた戦士たちは最後の力を使用することを決意した。

「そこで、これが出てくるわ」

「それは・・・！」

ロコモが叫んだ。リベリオンが片手に持って見せたのはユカが首に掛けていたあのエメラルドグリーンのペンダントだった。

「そう。この国でお守りとされるペンダント、これにはね、その生命体が今も眠っているのよ」

「何ですって!？」

「戦士たちはこのペンダントにオロチの生命体をなんとか封印して一応決着を着けた。そしてこの地に暮らす人々に決して悪しき者に渡してはならないと伝えて託し、次元を超えて帰ったのよ」

本来なら二度とオロチが復活せぬよう戦士たちがそのペンダントを持つべきだった。しかし、オロチが暴れ回ったこの世界での傷跡はあまりにも大きかった。空は昼でも暗い闇に覆われ、森も海も死に、もとのように戻すにはかなりの時間を要すると判断せざるを得なかった。戦士たちはこの世界を哀れに思い、ペンダントに全員の力を込め、あらゆる自然と命を蘇らせ、世界を復活させた。聖なる者が持てば、強大な闇も光の力に変えられる。戦士たちは今後この世界を脅威から守るために正しい目的で使用することを約束し、ペンダントをお守りとして人々に預けた。人々は約束を守った。世界は復興を完全に遂げ、国を作り、これからの未来も人々が幸せに暮らせることを願って「ハピネスランド」と名づけた。いつしかヤマタノオロチと少女の戦士たちの戦いは伝説化し、時が流れていくにつれて人々の記憶から忘れ去られていくようになったが、それでもペンダントは正しい目的で使用し、悪しき者に渡さないという約束は初代国王から受け継がれ、現皇女のユカ・カヤマ・ハピネスの代までずっと守られてきた。

「でもそれが甘さゆえの命取りとなったわね・・・」

リベリオンは手に持っているペンダントを左目でまじまじと見つめた。

「現にペンダントはこうして私の手に渡ったわ。明日の午後6時6分6秒の皆既月食、世界が一瞬だけ闇に覆われる時間に私が召喚術を行えば、生命体は封印が解かれ、ヤマタノオロチは再びこの地に降臨するのよ・・・!」

「・・・ヤマタノオロチを、自分の僕にするつもりなの?」

真夜が聞くと、リベリオンは彼女を見、首を横に振った。

「違うわ。私がヤマタノオロチになるのよ」

「・・・は？」

「ヤマトノオロチはね、存在そのものが邪悪<sup>マイナス</sup>なのよ。怒り、悲しみ、憎しみ・・・それらマイナスエネルギーを糧<sup>かて</sup>にしているの。そんなやつと世界を憎んで生まれ、強大な闇の力を持った私が一体化したらどうなると思う？私はオロチの中にある全ての力を支配し、あつという間に全世界を破滅に追いやることができるのよ」

「そんなことができるはずがないロモ！」

「できる自信はあるわ。今の私はね、真夜、あなたの憎しみだけを背負っているんじゃないのよ・・・」

「ロモ・・・？」

ロモモが言ったが、リベリオンは余裕たつぷりに返した。今のリベリオンの台詞に真夜もロモモも何かがひっかかるような気を感じたが、何がどうひっかかるのかどうも分からなかった。するとリベリオンは急に不機嫌そうな表情になり、ペンダントをそばの円形のテーブル上に置いた。

「まだ分からないのかな？今のはすごいヒントだと思ったのに・・・」

「何を言っているの？それより、自分がヤマトノオロチになって、世界を滅ぼして、それからどうするつもり？」

「・・・はあ？」

真夜の指摘にリベリオンは一瞬呆けた顔になった。

「もしあなたが私と同じように世界を一度滅ぼした後で優しい世界を作るつもりなら、それは無理よ。邪悪生命体であり、破壊することしか知らないオロチに人と人が優しく接し合う世界を作ることなんて・・・」

「誰が優しい世界を作るって言った？」

「え・・・？」

真夜がそう声を出すと、リベリオンはまたも不機嫌そうに表情が歪んで目を逸らした。

「確かに“前の私”はそう目指していた。でも“今の私”は違う。」

私は新しい世界を作らない。壊して壊して全部壊して……永遠の無を生み続けるだけよ」

「そんな！そんなことしたら、あなたの部下はどうするのよ？」

「部下？ああ、あの娘たちね。みんなにも私の真意はとうに伝えているわ。みんなはね、とつくに世界に絶望して自身の存在すら消したがつているのよ。だから世界が終わると同時に、私がみんなも終わらせてあげると約束したの」

「！！そんな、そんな……！！」

真夜は衝撃を受けた。本気で信じられなかった。

自分がキュアリベリオンだったあの時は確かに世界に絶望していたが、わずかながらも新しく優しい世界を作ると希望を持っていた。そのためには冷酷非情と呼ばれようとも構わないと思っていた。しかし、今目の前にいるキュアリベリオンは過去の自分をも完全に超えている。全ての世界を滅ぼし、あらゆる命を奪うことしか考えていない。そのためには自分の僕さえも悪魔に捧げるつもりなのだ。もはやこのキュアリベリオンは悪でもない。邪悪の塊だ。そしてその塊をこれ以上野放しにしてはならない。真夜は口モモに振り向いた。すると口モモも一瞬で理解したようですぐさま変身アイテムに姿を変えた。

「キュアリベリオン！」

「！！……」

玉座に座る彼女は真夜を見た。真夜は今にも飛びかかるのを必死で抑えているような表情をしていた。

「あなたがたとえ過去の私でもそうじゃなくても、私はあなたをこれ以上好きにはさせない。今すぐにあなたを倒す！」

そして変身アイテムのペンダントを人差し指で弾き、頭上に掲げた。

「プリキュア！セイント・リバーズ！」

叫び終えた刹那、真夜の身体が白の光に覆われ、光の中で彼女は姿を変えていく。光の中で変身した真夜は優雅に着地し、リベリオ

ンを睨んだ。

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！」

と名乗ると、「はっ！」と同時に床を蹴って走り出した。風よりも速い疾走。セイバーは高く跳躍し、宙返りすると白く光が輝きだした右足を伸ばし、勢いを発揮した。

「これで終わりよっ！！」

そしてミサイルほどの速さで玉座に衝突した。轟音と煙、そして衝撃波が空間全体に広がる。だが煙が晴れ、セイバーはハッと両目を見張った。

彼女が力を溜めて強く放った右足はリベリオンの片手に強く握られていた。ぎり、ぎりり、と震えているが、リベリオンは玉座に座った状態のままセイバーの輝く右足を容易に受け止めていた。

「こんなものの、キュアセイバーの力って・・・？」

「くっ・・・！」

セイバーは急いで後方に弾かれるように跳んで再び宙返りして着地し、リベリオンをもう一度見た。するとリベリオンは冷たい左目を細くし、玉座からゆっくりと立ち上がった。

「真夜、ひとつ私からも言わせてもらおうわ。今まで好きなようにしていったのはね、あなたのほうなのよ」

「・・・？」

「自分のことを棚に上げ、人の行為だけを責める・・・。あなたは腐った傍観者そのものね。でも、少し安心したわ。あなたがそうなら、これで私も心置きなくあなたを憎むことができる・・・！」

「一体、何のこと・・・？」

「もういいわ。あなたには何も期待しない。だから壊す。何もかも・・・！」

その時、リベリオンの身体全体から黒い炎のようなものが一瞬燃え上がった。

悪魔（後書き）

次回、第一部終了！

## 絶望（前書き）

なんとなくですが、前半はカイザーベリアル陛下のテーマをイメージしてほしいです。

## 絶望

立ち上がったリベリオンを見て、セイバーは両腕で構えを取った。だがその途端、首に掛けているペンダントに変身したロモモが急激に震えているのを感じて、セイバーは声をかけた。

「ロモモ……？」

「怖いロモ。凄く嫌な気配ロモ……」

かなり怯えている様子だ。セイバーも額から汗が止まらなかったが、それでも退くわけにはいかないとリベリオンに目を送っていた。リベリオンは左腕に装備している鋼鉄製の鉤爪を口元にまで持つてくると、一瞬、一番近い先端を、ぺろ、と舐めた。そしてそのまま鉤爪をゆっくりと降ろした瞬間。

ふっ、と視界から消えた。

「！」

そして即座に背後に気配を感じ、ハッと振り返る。

その途端、セイバーは腹部に右手をかざされた。そしてその右手から強力な波動が発射される。

「あああああああつっ！！！！」

セイバーは即、後方に吹っ飛び、凄い勢いで背中から床に叩きつけられた。それを見て、波動を放った張本人、キュアリベリオンは本当にガツカリしたように呟いた。

「真夜、得意だった瞬間移動も忘れたの？」

「くっ……う……！」

かなりのダメージを受けたが、セイバーはなんとか両腕を立てて身体を起こした。そして震える両足に力を込めて立ち上がると、

「はああっ！」

即座に駆け出して、リベリオンと距離を詰め、眼帯をした右目に力を溜めた拳を素早く繰り出した。

「よっ……と」

だがリベリオンは容易にかわすと、シャツ！と素早く左腕の鉤爪を飛ばして攻撃する。セイバーは一度目はかわしたが、リベリオンはさらに二度目三度目の猛攻を繰り返した。このままでは殺られる。そう思ったセイバーは瞬時に両手にリリイフシンバルを召喚すると、それで鉤爪の猛攻から防御した。キーン、キーン、と衝突と金属音がぶつかり合う。キインツ！と七度目の音が響いて鉤爪とシンバルが交わった時、リベリオンは冷たい左目でセイバーに問うた。

「真夜、あなたは何を怯えているの？」  
「怯えている？」

「そうよ。ロモモだけでなく、あなたも怯えているわ。ひよつとして気づいているんじゃない？勝てないんじゃないかって……。まあ無理もないかもしれないわね。あなたが今相手にしているのは過去の自分……。亡霊なんだから！」

「！・・・そんなこと、ない！」  
「どうか？でもそんな腰が引けていたら私を倒すなんて、夢のまた夢よ！」

リベリオンは一旦鉤爪をシンバルから離すと、一瞬の隙を突いてセイバーの腹部に強烈な蹴りを入れた。うめき声を出し、腹部を抑えてセイバーは二歩後退する。さらにその隙を突いてリベリオンは「リベリオン・デストロイド・ボール」

と右手に紫の小さな電流が走る黒い光球を発生させ、剛速球で飛ばした。黒い光球がセイバーの腹部に直撃した瞬間、爆音と煙、衝撃が一瞬で彼女の全身に激痛を与える。セイバーは煙の中、床を転がったもののすぐに体勢を整えて起き上がり、リリイフシンバルを構えた。だが表情はやはり激痛で歪み、はあ、はあ、と息も乱れている。

「リベリオン・デモンズ・カッター」

そんな弱っている彼女をリベリオンは躊躇なく次の技を繰り出す。両腕を伸ばして黒い鉤爪のような邪気の刃が無数の数で飛ばされ、四方八方から問答無用でセイバーに襲いかかる。

「セイバー！ホーリイ・アタック！」

セイバーは急いでシンバルを鳴らし、同じぐらい無数の光の粒を生み出してそれらを光速で放って続々と邪気の刃を弾いたが、わずかに向こうのほうが数が多かった。光の粒子が弾けなかった残りの刃がセイバーの周囲でカーブを描いて高速で襲いかかった。

「あ・ああつ！」

最初の一つ二つはシンバルで打ち砕いたが、残りは防げず、セイバーは無残にも背中や足、腕を切りつけられた。血が流れた腕を抑え、傷だらけになっていくセイバーをリベリオンは左目で高い所から見下ろすように見つめた。

「無様ね、真夜。あなたそんなに弱かったかしら？」

そして両膝を折り曲げ、その場で座り込んで言った。

「それとも、私が強くなりすぎたのかな？」

「！・・・」

その台詞に、キツとなり、セイバーはリベリオンを睨みつける。

そして両腕を大きく開いて高く叫んだ。

「セイバー！サウンド・ウェイブ！」

ジャーントゥ！

シンバルの音が鳴り響くとともにそこから発生した音波が空間を震わせ、巨大な波を起こす。空間の津波は一瞬で大きくなってリベリオンを襲い、しゃがみ込んでいた彼女は素早く立ち上がった。

「なるほど。考えたわね。でも・・・」

リベリオンは鉤爪を装備した左腕を高く挙げ、声を発した。

「リベリオン・ソニック」

そして瞬時に左腕を振り下ろす。その途端、左腕から赤と黒の邪気が混じった強烈な衝撃波が放出された。衝撃波は空間の津波を一撃で破ると、そのまま一直線に津波を生んだセイバーの全身を瞬時に呑み込んだ。

「きゃあああああああああつっつっつ！！！！」

その猛威のレベルはまるで竜巻。身体だけでなく精神にまで激痛

を与える威力にセイバーはさつきよりも大きすぎるダメージを受け、床に強く叩き伏せられた。

「あ……かはっ……」

あまりの痛みに片目から涙が少し溢れる。しかし、それでもセイバーは両腕で立とうと抗った。リベリオンはそんなセイバーを見て、ただ一言、

「つまらない……」

と呟くと、立ち上がるうとする彼女にゆっくりと鉤爪の先端を向けた。すると鋼鉄の先端から三本の紅色の光の触手が生まれ、まるで意思を持ったかのように伸び、セイバーの傷ついた身体にへびのように巻きついた。

「くっ……ああっ!!」

強く巻きつかれ、ダメージも大きいゆえに全く動けないセイバー。だがリベリオンの非情さはこれで終わらなかつた。次の瞬間、先端から強力な電流が放たれ、触手を通してセイバーに浴びせられたのだ。

「ああああああああっつつつつ!!!!」

ただでさえすでに大きなダメージを受けているのに、さらに強力なダメージ。リベリオンは冷たい左目を向けたままその触手から解放させることなく彼女の全身に電撃を浴びせ続ける。絶叫を轟き続けるセイバー。どのくらい時間が過ぎただろうか。ようやくリベリオンは放電攻撃を止める。するとセイバーは触手の中でぐったりとなった。リベリオンはすぐに触手からも解放し、セイバーは両膝を着き、床に倒れ伏した。その途端、セイバーは光に包まれて変身解除され、真夜の姿に戻された。ロモモペンダントから妖精に強制的に戻されて傷ついた身体で床に倒れ、身動きしなかった。

「……」

リベリオンは目を閉じて動かない真夜を見つめると、ふん、と鼻を鳴らして踵かかとを返し、その場を去ろうとしたが、

「……待ち……なさい」

すぐに声が後ろから聞こえて振り返った。見ると真夜が顔だけを  
気力で上げ、薄目ながらも開いた瞳でリベリオンを捉えていた。

「あなたを……このままにはさせ……ない。私だけじゃない……  
このハピネスランドには……すでにプリキュアたちが……何人も  
いる。私……が無理でも……他のプリキュアが……あなたの計  
画を……きつと止める……!」

「……いいもの見せてあげようか？」

リベリオンは、パチン、と指を鳴らした。すると彼女が座ってい  
た玉座の背後の壁が左右に開き、そこから巨大モニターが現れた。  
すぐにモニターに注目し、一体何のつもりかと訝しげに考える真夜  
するとモニターに画像が入り、映像が映し出され、真夜の薄かった  
両目が一瞬で大きく見開いた。

そこに映し出されたのは広い空間に蟻の這い出る隙間もないほど  
詰めて正確に並んでいるヤミの大群だった。その数、ざっと見ただ  
けでもおそらく五百を軽々。あまりにも圧倒すぎるその数に真夜は  
一瞬で声を失った。

「何体ヤミを量産したと思っているの？ 一体でも高い戦闘力がある  
やつがこんなにいけばいくらプリキュアといえども敵うと思う？ 光  
が弱点と分かったとしても、ヤミもそう簡単にやられるほどバカじ  
やないわ。ヤミだけじゃない。私のかわいい犬たちもいるし、仮に  
城に入れたとしてもマイナス七人衆がいる。少なくとも時間稼ぎに  
はなつてくれる。オロチさえ降ろしてしまえば、もう全て終わり。  
何もかもがなくなる……」

リベリオンはもう声も出ない真夜の耳に囁き、とどめを刺した。

「あなたにはもう何も無い。絶望の恐怖を味わうがいいわ……」  
「!……」

もはや真夜の瞳に色はなかった。リベリオンは彼女から目を逸ら  
すと歩き出し、その場を去った。

絶望に何もかも打ち砕かれた真夜は顔を床に伏し、気を失った。



して、ぐっ、と声を漏らしてなぜか口惜しそうに唇を噛んだ。

「真夜……どうして“私”を置いていったのよ……」

彼女の眼帯をした右目からはわずかだが水の粒がこぼれていた。

ブロッサムたち6人はまだ夜空を飛んでいた。一応ミラクルライトが導いている光を辿っているのだが、もう飛行し続けてすでに一時間は経過しているような気がする。

「ねえ〜ブロッサムウ〜、まだ着かないのお〜？」

マリリンが退屈の表情で聞く。最初こそはあっという間に小さくなった街や国を眺めていたり、雲の隙間を飛んだりしたりして楽しんでいたが、慣れてくれば急に面白味がなくなるといったもの。あくびすら出てしまい、

「マリリン！根気よく探さなきゃダメですう！」

とマントに変身しているコフレに叱られた。

「ねえ、見て！あれ！」

サンシャインが何かに気がついて指差した。彼女の指差す方向には巨大な入道雲が遠くに見えていた。

「なんか季節外れな入道雲だね」

マリリンが率直な感想を述べると、

「そーじゃないでしょ！ミラクルライトを見てみなよ」

とジェアンヌがツッコミを入れた。ミラクルライトから放たれた光はまっすぐ入道雲に続いていた。

「ひょっとしてあの雲の中に？」

「おそらくそうね」

同年齢同士のセレーネとムーンライトが言うと、ブロッサムは口元を引き締め、両目を鋭くした。

「みなさん！行きましよう！」

振り返って声をかけ、一直線に入道雲に向かっていく。ブロッサ

ムに続いて他のみんなも入道雲を目指した。そして一気に入道雲の中に突っ込み、突破しようとした。だが。

「!.....」

入道雲の中に入ったブロッサムは突然意識が朦朧とし始めた。目の前がくらくらとする。上を飛んでいるのか下を飛んでいるのかも分からず、失速しだした。そのままぐるぐるっと宙を回転する。一体、どうしたんだろうと思った瞬間、彼女の意識は遠のいた。

「ブロッサム。ブロッサム！」

「ううん・・・？」

誰かが呼ぶ声が聞こえてブロッサムは目を開けた。そしてゆっくりと顔を上げると、そこには心配そうなマリンの顔があった。

「マリン？あれ？私・・・？」

「あゝよかった。ブロッサムだけ、なかなか起きないから、どこかぶつけたんじゃないかと思って心配したんだよ」

マリンのそばにはサンシャイン、ムーンライト、セレーネ、ジェアンヌもいた。シプレ、コフレ、ポプリもそれぞれパートナーの近くで宙に浮かんでいた。

「そうでしたか。私、気を失ってたんですね。.....あれ？」

ふいにブロッサムは自分が眠っていた場所がやけに柔らかいような感覚を？んで視線を下に向けた。するとそこはまるで綿を敷き詰めたようで、最初は分からなかったが、ブロッサムはすぐにびっくりして立ち上がり、慌てて周囲を見回した。

「マ、マリン、ここ雲の上じゃないですか？ということはここは天国なんですか？私たちは死んじゃったんですか？」

するとマリンはあ？という表情をした。

「なに寝ぼけてんの。あれ見なよあれ」

そう言っただけで彼女が親指で指した方向には.....

美しい純白で塗り固められた壁。首が痛くなるほど高い天井を支

える何本もの円柱。壮大な大理石の階段が口を開いて待っているギリシャあるいはローマ神話をイメージさせる巨大建造物。

「こ、これ、もしかして……」

「ええ。きつと伝説の神殿よ」

ブロッサムが聞くと、セレーネは答えた。

ミラクルライトを見ると、光はもう消えていた。

「ここに、伝説の剣（けん）が……！」

ブロッサムは、ごくり、と生唾を飲むと他のみんなと視線を合わせた。

みんなはうなずくと、口を開いて歓迎している階段に向かって足を振り上げ、進み始めた。

## 絶望（後書き）

第一部終了。次回はオリキャラ紹介。その後少しだけ休みます。

## キャラクター紹介？

キュアセイバーと新たな仲間たち

今回は新たな世界を舞台にプリキュアたちだけでなく、プリキュアとは全く異なる戦士に変身して戦う三人の仲間やパートナーの協力を得てキュアリベリオン率いる軍団と戦う。

あまきまや  
雨牙真夜 / キュアセイバー

「DX2NEXT」から引き続き登場。17歳。ももとはたったひとりで闇の組織と戦い、世界を守った光の戦士・キュアセイバーだったが、戦いが終わった後異国にて邪悪怪人アルティメットの手により両親と友達を失った絶望で世界を憎み、闇の力に触れて悪の戦士・キュアリベリオンに変貌を遂げ、世界を滅亡に追いやることをする。だがプリキュアたちのおかげで希望の光を取り戻して再びキュアセイバーに変身し、アルティメットからもう一度世界を滅亡から守りぬく。現在はパートナーのロモモとともに両親が在籍していたニューヨークに本部を置く国際医療団体の施設にて暮らしている。リライフシンバルを武器に戦い、「セイバー・サウンド・ウェイブ」「セイバー・ホーリィ・アタック」「セイバー・リカヴァリング・アレスト」「セイバー・セイクレッド・フラッシュ」などの技の他、最大必殺技「プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ」を放つ。今回は別の世界に存在するハピネスランドにて過去の自分であるキュアリベリオンの存在を知り、新たな戦いへ出る。

ロモモ

「DX2NEXT」から引き続き登場。白い子犬のような外見を持

つ妖精で真夜のパートナー。真夜がキュアセイバーに変身する際はペンダント状の変身アイテムに姿を変える。男の子で身体は小さいが、真夜のためなら命を投げる覚悟さえも持つほど勇敢で、口モモ自身も知らない強力なパワーを発揮することもある。今回は過去の真夜が変身していた悪の戦士・キュアリベリオンにセイバーとともに戦いに臨む。

#### 月野葉兔羽ノセーラーセレーネ

幸せの国・ハピネスランドにて現皇女ユカ・カヤマ・ハピネスの護衛を務める騎士で、変身アイテム「ハート・セレーネ・ブローチ」を使用して鏡と月の属性を司る戦士・セーラーセレーネに変身する。17歳。以前から皇族を護衛する騎士を目指して修行し、戦闘能力を高めていった。その際にディアーナと出会い、彼女の意志を理解して猫にならないと姿をほとんど保てない彼女の代わりに戦うことを約束し、セレーネに変身することを決意する。武器のセレーネロッドからは月の力を増幅した光球を放ち、鏡の力を発揮したバリア、さらには相手を鏡のドームに閉じ込める「セレーネ・ミラー・ドーム」他、最大必殺技「セレーネ・ヒーリング・エスカレーション」を発射する。また額のティアラを円盤状に投げて攻撃する「セレーネ・ティアラ・アクション」も技とする。修行中の師でありともにユカ姫を守る騎士人形のキティも認める美しくも勇敢な戦士である。ちなみに「セレーネ」はギリシャ神話に登場する月の女神の名であり、彼女の名にちなんだ小惑星も存在する。モチーフは1992年〜1997年まで放送された『美少女戦士セーラーMoon』シリーズの主人公月野うさぎノセーラーMoon。

#### 日沙菜ろまんノ怪盗ジエアンヌ

キュアリベリオンに反抗しながら彼女が支配した城で食糧や物資を盗んで民たちに与える炎の属性を持つ神出鬼没の怪盗。その正体はパートナーの天使であるファン・ハルトとともに美術品に住まい、人の心を蝕む悪魔を封印しながら旅を続ける16歳の少女である。旅の途中で天使の修行のために人間界に降りたファンと出会い、ミニサイズゆえに自身の力では悪魔を封印できない彼女の代わりに怪盗として悪魔と戦い続けることを決心する。変身アイテムのロザリオは剣やリボンといった武器にも変化して炎を纏った攻撃を行い、チエスピンで悪魔を封印する。ハピネスランドには旅の途中に寄っただけなのだが、そこでリベリオン軍の猛威を受け、支配に苦しむ民たちを助けるために立ち上がる。モチーフは1999年〜2000年に放送された『神風怪盗ジャンヌ』の主人公日下部まるん/怪盗ジャンヌ。

#### キティノドルキティ

セーラーセレーネと同じユカ姫を護衛を任務とし、三代目の騎士ナイトの手によって作られ魂を吹き込まれて以来、王位継承者を守り続けてきた騎士人形。人間年齢に直すと15歳。普段はミニサイズだが戦闘及び緊急の際には人間大に巨大化してパワーアップ形態のドルキティに変身し、ライトスピナーというヨーヨーに似た武器で戦う。代々皇族を守り続けてきた騎士とあって誇り高き魂を持ち、自身や護衛する者に容易に近づく者は即座に疑ってかかるが、その反面責任感も強く、わずかなことでも後悔しないように常に自分自身も厳しくしている真摯な性格。そのため現皇女のユカ姫及びプリキュアたちを自身の身体が崩壊してでも守ろうと心に決めている。モチーフは1998年〜1999年に放送された『スーパードールリカちゃん』の主人公ドルリカ。

## ディアーナ

月野葉兔羽「セーラーセレーネのパートナーで、もとは別次元に存在する月の王国の住人。実はキュアリベリオンに敗れた鏡の騎士・ミラーナイトの娘で、父の鏡の属性と病死した母の月の属性の両方を受け継いでいる。優しき母と強き父を目指して人間界に降り、ハピネスランドに来たが、次元が異なるためにこの国では猫の姿にならないと身体を保てなかった。その後、騎士修行に明け暮れていた兔羽と出会い、彼女に変身アイテムのブローチを渡してセーラーセレーネに変身させた。わずかな間だけだが、自身も本来の姿である15歳くらいの少女に姿を変えて、セレーネ同様に鏡と月の属性を活かした能力を使用して戦うことが可能。なお「ディアーナ」もローマ神話に登場する月の女神の名で、小惑星も存在する。モチーフは『美少女戦士セーラームーン』シリーズに登場する喋る猫、ルナ。

## ファン・ハルト

日沙菜ろまん「怪盗ジエアンヌのパートナーで、立派な天使になるための修行を行う最中の準天使。人間年齢に直すと15歳。実はキュアリベリオンに敗れた炎の戦士・グレンファイヤーの娘で、優しき天使だった母の力と炎の属性を持つ父の力の両方を受け継いでいる。父を殺したキュアリベリオンを憎んでおり、かつその張本人である真夜も一時憎んだが、現在は倒すべき敵はハピネスランドを支配したキュアリベリオンと認識している模様。人間界には修行として美術品に住まい、人の心を蝕む悪魔を封印するために降りたが、次元が異なるためにミニサイズにならないと身体を保てない。人間界に降りた後は旅を続けていたろまんとの出会い、彼女に変身アイテム

ムのロザリオを与えて怪盗ジェアンヌに変身させた。彼女もディアーナと同じわずかな時間だけ本来の人間大の姿に戻って炎と天使の属性を活かした能力で戦うことができる。モチーフは『神風怪盗ジャンヌ』に登場するジャンヌのパートナーで準天使のフィン・フィッシュ。

#### キュアリベリオンとマイナス七人衆

今回はなぜか同一人物だったはずの真夜「キュアセイバー」とは別の存在として再び登場し、ハピネスランドを支配し、ヤマタノオロチを降臨させて本来の目的である世界の破滅を果たそうとする。マイナス七人衆は生まれながら異能力を持っていたために他の人間たちに汚い陰謀に嵌められたり、ひどく差別されたり、両親からも見捨てられたりした十代前半から後半の少女たちで、世界に絶望していたところをリベリオンと出会い、彼女の僕となった。

#### アマキマヤ 雨牙真夜／キュアリベリオン

「DX2NEXT」から引き続き登場。世界に絶望し、自ら闇の力に触れて誕生した最凶の戦士で、初めて普通の人間が変身した悪のプリキュア。ワンダー・プラネットに現れた時にはギガバトルナイザーを武器にたったひとりでプリキュアたちを圧倒した強さを持つ。真夜が希望の光を取り戻して再びキュアセイバーに変身した際にキュアリベリオンとしての彼女も消滅したはずなのだが、今回なぜか真夜とは別の存在として復活、再び世界の破滅を目論む。今回は新たに100年前に多くのプリキュアとの戦いの末に封印されたという大鎌「希望狩」を武器に最大必殺技「プリキュア・リベリオン・ヘル・ファイア」を披露する他、「リベリオン・デストロイド・ボール」「リベリオン・デモンズ・カッター」「リベリオン・ソニック」などギガバトルナイザーを手に入れる前の技も発動する。さら

に前回同様悪魔の手を地面から生やして操る他、左腕に装備した三本の鋼鉄製の鉤爪から紅の光の触手で相手を捕らえ、強力な電撃を浴びせたり、眼帯をした真紅の右目で催眠をかけたたり、闇の力で凶犬たちを生み出したりとワンダー・プラネットに現れたりベリオンよりもパワーアップし、邪悪化している。はたして彼女の正体は何なのか。そして真夜を憎む理由は・・・？

### ミチ

リベリオンの僕でマイナス七人衆の一人。17歳でおかつぱの黒い振袖の和服美人。水を生み出して操る能力を持ち、巨大な塊あるいは水球に変化させた攻撃を行う。

### キク

マイナス七人衆の一人。18歳で長い黒髪を後ろで縛っている。七人衆の中では最も背が高く、最年長。旧日本兵をイメージさせる軍服と軍帽を身につけている。人の心を読む能力を持つ千里眼で、隙を突いてサーベルで太刀風を起こして攻撃する。

### スズ

マイナス七人衆の一人。13歳で藍色のセミロングヘア。七人衆の中では最も背が低く、最年少。リベリオンを「お姉ちゃん」と呼んでいる。実は帯電体質で激情に走ると全身から強力な放電を放つ。そのため普段はビニールのレインコートを着て放電をなるべく防いでいる。おどおどした性格の持ち主。

## ヨツバ

マイナス七人衆の一人。17歳でおさげ髪。凶悪科学者で知能がかなり高く、七人衆どころか世界的権威にさえ及ぶ。戦闘型の自動人形・ヤミを生み出した張本人でもあり、その他にも身体を超人化させる薬品などの開発を行っている。白衣を着、ぐるぐるメガネをいっつもかけているが、外すと両目の引き締まった美人。

## カノン

マイナス七人衆の一人。14歳で金髪。黒いゴスロリ風の衣服を着て、フランス人形をいつも胸に抱いている。どんな空間や季節と関係なく様々な花を咲かせる能力の持ち主で、毒針や燐粉を浴びせて戦う。

## ツバキ

マイナス七人衆の一人。15歳でショートヘア。黒いスーツを着ているが、ネクタイは締めていないクールビズ。敵をクリスタルのような透明の物体に閉じ込め、物体ごと爆発させる能力を持つ。七人衆の中で最も言葉遣いが丁寧で、紳士的な態度の持ち主。

## アキラ

マイナス七人衆の一人。14歳でツバキと同じくショートヘア。少

女だが少年のような服装をいつもしており、野球帽を被っている。そのためか言葉遣いも少年に近く、活発的。身体から黒いコードのような触手を生やす能力の持ち、敵を攻撃する。

ヤミ

七人衆の一人、ヨツバが生んだ戦闘型の自動人形。オートマトン人間年齢に直すと17歳程度。一体でもプリキュアと戦い合えるほどの高い戦闘力を持ち、闇の力を増幅した技をも発動する。闇の力も加えたためか強力な光が弱点であるが、その弱点でさえも簡単には受けないほどの身体能力も誇る。

その他のキャラクター

ユカ・カヤマ・ハピネス

ハピネスランド現皇女にて次世代王位継承者。10歳のまだ幼い少女だが人を思いやる優しい心の持ち主で、その人のためなら自身さえも投げ捨てて懸命に働きかける。約400年前に世界を暴れ回ったヤマタノオロチの邪悪エネルギー生命体が封印された代々のお守りのペンダントを持っていたことで、キュアリベリオンに狙われる。モチーフは『スーパードール リカちゃん』の準主役の香山リカ。

ダイチ

ハピネスランドの住民。12歳。リベリオン軍に襲われた際にはなんとかアジトに逃げ込んだが、彼の両親は城のほうに連れ去られ、

生き残った者たちでなんとか反撃のチャンスを探っている。伝説の神殿から降ってきたデステイニーミラクルライトを使用してプリキユアたちをヤミの大群から助けたが、彼が持つそのアイテムが後々運命の鍵となる！

ヒシ

ハピネスランドの住民で最高齢を誇る老人。アジトの奥にある書齋で数多くの書物を時間をかけて全て読んだ経歴があり、かなりの博識。初代国王が残した予言をも知っており、それがどういう意図を示しているかを探り、予言に登場する悪魔がヤマタノオロチだと突き止めた。

## キャラクター紹介？（後書き）

またしばらく休止します。ですが今度は二週間も休むつもりはありません。なんとかストーリーをまとめたら、なるべく早く再開します。第二部をお楽しみに。

守護者（前書き）

第一部執筆開始！ and Special Thanks 夢原信  
者さん、GASHさん、ABCさん！

## 守護者

ブロッサムたちを見送ってからのどのくらいの時間が経過したのだろうか。闇の力によって太陽の光が遮られているから今は夜なのか朝なのかも分からない。

アジトに残った者たちはほとんどがかなりくたびれた様子で毛布に包まり、眠りに入っていた。妖精たちは完全に熟睡し、キティも今はもとのミニサイズに戻って人形化し、小さな戸棚の上で休んでいる。だがプリキュアの何人かはまだ起きていた。

「眠れないの、かれん？」

両目を開いたまま暗い天井を仰向けで見っていたかれんはふいに横からこまちに声をかけられた。

「こまち……。ええ、そうみたい。少し緊張しているのかな？もうすぐ世界が終わるかもしれないと聞いて……。しかもそれがあのヤマタノオロチっていうもんだから」

「でも、みんなはそうでもないみたい」

こまちはくすつと笑って人差し指で指すと、そこには寝息をたてて完全熟睡しているのぞみ、りん、うららの姿があつた（くるみはミルクの姿でナッツの隣で眠っていた）。3人の姿を見て、かれんもつい笑みをこぼした。

「みんな呑気ね。世界が終わるかもしれないのに、ちつとも危機感がないんだから……」

「でもこういうのぞみさんたちを見ていると、なんだか安心するわ。かれんもそう感じない？」

「……確かにそうね。みんなのこういう姿を見ていると、なんとなくだけれど大丈夫って励まされる気がする。不思議なものね」

「ふふっ……」

こまちは小さく声に出して笑った。

「私たちも寝ましょ、かれん。睡眠不足で戦えなかつたらそっちの

ほうが困ると思うわ」

「そうね。分かったわ。少しほつとしたし、ありがとう、こまち」

「私は何もしてないわ。お礼なら明日のぞみさんたちに言ったほうがいいわよ」

「うん・・・」

かれんとこまちが目を閉じた頃、隣の部屋ではほのか、ひかり、舞の3人も起きていた。3人はそれぞれいびきを掻き、毛布を抱き枕状態にして眠っているなぎさと咲を見て、互いに呆れたような笑みをした。

「なぎささんも咲さんも、なんと言いますか・・・すごいですね」

「ひかりさんにまで言われて・・・もおくなぎさったらう、自分のことじゃないけど少し恥ずかしいわ」

「同感です・・・」

互いに蒲団が向かいになっているほのかと舞は顔を合わせると、同時に困ったように笑いあった。

「でも、なぎさらしいってどうか、なぎさはやっぱりこうじゃないとなぎさじゃないっていつも思っちゃうのよね」

だがほのかはすぐにパートナーの寝顔を再び見ると、そう口に出した。するとひかりと舞も、全くその通り、と言つかのようにもうなずいた。

「そうですね。なぎささんがこうでないと私たち安心できないと思います」

「咲もそう。咲はいつもこんな感じだから・・・でも咲がいつもこうだから私は咲と親友になれたし、パートナーにもなれたと思う。咲と一緒になら私、きつと大丈夫って頑張れる気がするの」

「そうね。舞さんの言うとおり。舞さんには舞さんの、咲さんには咲さんの良さがある。お互い足りないところを補っていくことであなたちはもつともつと強くなれるの。私となぎさとひかりさんも同じ。お互いに力を合わせてフォローしていけば、必ずどんな困難にも乗り越えていける。それを信じて、私たちも舞さんたちも今ま

で頑張つてくれた。そうでしょ？」

ふたりはうなずいた。

「だから、私たちは後悔のないように全力で支え合つて戦いましょう。きつとそれはなぎさと咲さんも分かっているはずだから・・・！」

「「はい！」」

3人は互いに各々の意志を確認すると、体力温存のために毛布を被つて睡眠に入った。

一方、そのまた隣の部屋でも美希と祈里がすやすやと眠りに着いたラブとせつなを微笑ましく見ていた。

「ううん・・・カオルちゃん、ドーナツもう一個・・・」

「ラブうゝ食べすぎよお・・・」

「本当にこのふたりは、眠つても仲が良いわね」

美希が少々あきれた声で言うと、祈里も続いて口を開いた。

「でもラブちゃんとせつなちゃんらしいっていうか、安心しちゃうね」

「確かに」

美希はふと天井に視線をやった。

「プロツサムたち、もう神殿に着いたかしら？大丈夫だといいいんだけど・・・」

「大丈夫だよ。きつと戻つてくるって、私信じてる。美希ちゃんもみんなのことを信じようよ」

「・・・そうね。ブルーのハートは希望の印って謳う私が希望を信じていないでどうするのって感じよね・・・」

ふたりは互いに目を合わせて小さく笑うと、

「私たちももう寝ましょ、ブッキー」

「そうだね、美希ちゃん」

と枕に頭を乗せ、目を閉じた。

全員これから始まるうとする戦いに、全世界の命運を手に握つて・・・。

ディアーナは一軒家の屋根に座って遠くからリベリオン城を眺めていた。今のところ、敵に動きはない。まだ定刻どころか満月さえも出てくるのに至らない時間帯だからだろうか。

「ディアーナ……」

ふとディアーナは背後から声をかけられ、振り向いた。ファン・ハルトが立っていた。

「交代よ。あとは私がする。少し休んでなさい」

「え？だけど……」

「さつきからもうずっと座りっぱなしでしょ？私はもう十分休んだんだから大丈夫。あとは任せときなよ。何かあったらすぐ知らせるから」

「……ありがとう。じゃあお願いするね」

ディアーナは彼女のそばを通り過ぎた位置で足を止めて、ちよつとだけ振り返った。

「あの……さつきはごめんなさい。叩いたりして……」

「ん？……ああ、いいよ。もとはといえば私が悪いんだし、それに……」

「？」

「おかげで目が覚めたよ……感謝してる」

彼女の返事を聞いたディアーナは嬉しそうに笑みを満面にすると、地上に目を向け、飛び降りた。

大理石の階段を登り終えると、今度は大広間が待っていた。広さは家六軒はまるまる入れそうで、天井は首が痛くなりそうなほど高かった。

「剣はあの奥ですね……」

ブロッサムは少し離れた距離にある、巨大な扉を見つけて言った。床から始まって高さは約10メートルはあるうか、見るからに重く、

開けるのに一苦労しそうだ。ふたりの草冠を被った女性の天使らしい彫刻が施されてある。ブロッサムはその扉に向けて足を運び始めた。

「待って、ブロッサム」

だがムーンライトが止めた。ブロッサムが振り向くと、ムーンライトは片手を前に出した。すると手から銀の光球が発生し、彼女はそのまま扉を見据え、光球を飛ばした。

バリバリッ！！

光球が扉に直撃した瞬間、目の前の空間に電撃が走り、ブロッサムは驚いて後退した。電撃にぶつかった光球は一瞬で爆発と衝撃に呑み込まれて消滅した。その一瞬にプリキュアたちだけでなく、セレーネとジェアンヌも目を見張る。光球が爆発を起こした後も扉の前の空間にはしばらく青白い電気が走った。

「……な、な、な、何なんですうつつ！？」

シプレ、コフレ、ポプリの3匹がパニック気味に慌てだす。ムーンライトは眼光を鋭くして口を開いた。

「一瞬だけだったけど、少し空気が張り詰まったのを感じたの。どうやら簡単には剣の場所へ通さないみたいね」

その時だった。

「おまえたちは何者か？」

突然頭上から女性の声が聞こえたのだ。ブロッサムたちはすぐに反応して天井を見上げたが、そこには誰もいなかった。もちろん、彼女たちの周囲にも声の主はいない。

「答えよ。おまえたちは何者か？」

「そういうあんたこそ誰なのよ？」

二度目が聞こえ、マリリンが声をあげて聞き返すと、声はすぐに返事を返した。

「私はこの神殿を守る者。この神殿に眠る剣を守るのが私の役目」「やっぱり、剣はここにあるんですね！」

ブロッサムが言うと、声はすぐ反応して問うた。

「おまえたちは剣を求めに来たのか？」

「はい！」

「ならば今すぐ立ち去れ。強い力を求めるあまりに剣を与えるわけにはいかない！」

「なっ・・・ちよっ・・・ち、違います！ 私たちは力を求めて剣を探しに来たのではありません！世界の危機を救うために剣が必要と聞いてハピネスランドから来ました！今ハピネスランドはキュアリアオンに支配されて多くの人たちが苦しんでいるんです！」

ブロッサムが弁解するように叫ぶと、サンシャインも続けて声をあげた。

「しかもキュアリアオンは皆既月食の時に強大な悪魔を呼んで全世界を滅ぼそうとしているんです！悪魔を倒せるのはこの神殿にある伝説の剣だけと聞きました。それで私たちはブロッサムが持っているこのミラクルライトに導かれてここに来たんです！」

ブロッサムはデステイニーミラクルライトを手に持ち、スイッチを入れて光を放ちながら問うた。

「このミラクルライトはもしかして神殿から降ってきた物なんじゃないですか？あなたもハピネスランドが今どうなっているか御存知なんじゃないですか？本当はずっと待っていたんじゃないですか？私たちがミラクルライトに導かれて神殿に来るのを・・・」

「・・・確かに、私はハピネスランドの事態を存じている。そしてキュアリアオンがかつて私と仲間たちが封印したヤマタノオロチを蘇らせようとしていることも・・・」

ヤマタノオロチ・・・！？

その名を知り、全員驚愕した。ブロッサムが急いで尋ねた。

「それが悪魔の正体なんですか！？」

「そうだ。『私たち』は万が一にもヤマタノオロチが復活した場合を考えて伝説の剣、ゴールドソードとシルバーソード、そしてミラクルライトを作り出した。そして来るべき時が来ればその光で神殿まで導けるようにミラクルライトを地上の者たちに託したのだ。お

まえの言うとおり、私は待っていた。ヤマタノオロチを倒し、世界を救うために剣を求めて神殿に来る者を・・

「でしたら・・！」

ブロッサムは期待のこもった表情をしたが、

「だが剣をそう簡単には渡すわけにはいかないのだ」

その台詞にすぐに曇った。すると今度はマリリンが食いかけた。

「なんでよ！？世界がもうすぐ終わっちゃうかもしれないだよ！ヤマタノオロチが復活しようとしているんなら、今こそその剣を使う時じゃない！あんたは全ての世界が滅んでもいいって言うの！？」

「そんなことはない！無論私とて全世界の破滅など望んでいない。

だが剣は誰にも扱えるわけではない。仮に扱える者が現れたとしても、剣の力は強大。その者が力におぼれ、誤った扱いをしてしまえば最悪、光の力が世界を脅威にさらす恐れもある。別次元の宇宙に存在する光の国でも過去に力を求めて掟を破り、悪に染まった戦士が光の力で自身の国を壊滅にまで追い詰め、全宇宙を支配しようとした。辛うじてそれは阻止できたが、『私たち』も同様にそれを避けねばならないのだ。容易に人を信じて剣を託すわけにはいかない」

「じゃあ、どうすれば信じてもらえるのよ！？」

マリリンが金切り声に近い声で聞くと、守護者はしばらく黙っていたが、やがてこう伝えた。

「試練を受けてもらう」

「」「試練？」「」

ブロッサム、マリリン、サンシャインが声を揃えて言った。

「そうだ。おまえたちには過去に世界を守った戦士たちと手合わせをしてもらう。もしおまえたちの想いが本物であれば、必ず乗り越えていけるだろう。だが強制はしない。引き返すなら今だ・・！」

「・・・・・」

全員黙り、顔を合わせた。

「どうする？」

まずマリリンが口を開いた。

「私たちも・・・受けなきゃダメだよな？」

ジェアンヌが人差し指で頬を掻いて言うと、セレーネは少し深刻そうな表情になって声を発した。

「しかし、剣を手に入れるためには・・・他に方法はないわ」

「そうですね。それしかないのなら・・・！」

最後にブロッサムが言うと、全員覚悟を決めた表情でうなずき、前を向いた。そして全員を代表してブロッサムが守護者に伝えた。

「試練を・・・受けます！」

「良い答えだ。では試練の場へ案内する」

すると彼女たちの周囲に霧が発生し、あっという間に蔓延した。

「マリン！」

「ブロッサム！」

「サンシャイン！」

霧に怯えてコフレ、シプレ、ポプリが慌ててパートナーの胸に飛び込む。だがその途端に霧はさらに濃くなり、彼女たちはもう互いの姿が見えなくなり始めた。ブロッサムは不安の面持のまま、シプレを胸に抱いて立ち尽くしていた。やがて霧が晴れ、周囲を明らかにしていく。そして霧が完全に晴れた瞬間、ブロッサムもシプレも思わず瞬きをした。

ブロッサムが立っていたのはさっきの大広間ではなかった。全く別の空間だった。

大きなチェス盤がある。ブロッサムは黒い駒の側に立っていた。

チェスの駒はブロッサムよりも背が高く、石のようなもので作られていた。

「これはチェス・・・ですよね？」

「チェスをするのが試練なんですよ・・・？」

ブロッサムとシプレが顔を見合わせたその時だった。

すっ、と静かに白のナイトの影から誰かが現れた。緑を基調とし、黒いリボンが結ばれた衣装<sup>コステューム</sup>。そして鮮やかなエメラルドグリーンの長髪をした14歳くらいの少女。

「あなたは・・・？」  
ブロッサムが彼女の存在に気づいて尋ねると、少女はすました微笑を浮かべた。

マリンとサンシャインのふたりは花畑の中に立っていた。花はみなコスモスで周囲を見渡しても地平線にまで届いていないのかと思うほどかわいく咲き誇っていた。

「ここ、どこ？」

呆然とマリンが言うと、

「！・・・マリン、あれ」

ふとサンシャインが何かに気づいて前方を指差した。そこには同年齢くらいのふたりの少女がこちらに歩いてくるのが見えた。

ひとりは黒のアンダー上に右半身が曲線的なデザインをした緑で左半身が鋭角的なデザインをした黄の衣装。コスチューム髪型と瞳の色も同色に分かれたポニーテールとオッドアイ。

もうひとりも同様に白のアンダー上に右半身が曲線的なデザインをした赤、左半身が鋭角的なデザインをした青の衣装。コスチュームやはり同色に分かれている三つ編みとオッドアイ。

「あれ？あの姿、何かに似ているような・・・？」

マリンがそう呟いた時、ふたりの少女は足を止め、不敵に笑みをした。

ムーンライト、セレーネ、ジェアンヌもそれぞれ別の空間に立っていた。ムーンライトは透き通った青空が広がる小高い丘の草原の中。セレーネは遊園地テーマパークのアトラクションの一つとして存在しているような鏡の迷宮。ジェアンヌは入ってしまったらもう二度と出てこれなくなりそうなほど深い深い樹海の中。そして3人ともその空間に現れた少女を前にし、臨戦態勢を瞬時に取った。

ムーンライトの前に立つのは、曲線的なデザインで広く開いた空色のスカートに銀の甲冑を装着し、腹部が露出している黒の上着を着て、赤く丈の長いリボンで髪型をポニーテールに結んだ金髪の16歳くらいの少女。

セレーネは、両肩が露出してスカートの先が鋭角になり、胸に水色のリボンが結ばれた乳白色の服を着、白のダイヤを中央に装飾した水色のリボンを頭部の両側に結んでいる黒い短髪の15歳くらいの少女。

そしてジェアンヌは、まるで真紅の両翼を全身にまとったかのようで、胸に黒いリボンが結ばれている丈の長いスカートをしたドレスを着、勾玉の形に酷似した緑の宝石を中央に装飾した黒のリボンを紅の長髪に結んだ同じく15歳くらいの少女。

彼女たちも両腕で構えを取り、戦闘の準備に入った。

そして6人の少女たちは全員同時に凜としたポーズを決め、名を名乗った。

「救済と新生を司りし閃光・・・キュアエルス！」

「希望司る風と雷の戦士、キュアテンペスト！」

「勇気司る炎と氷の戦士、キュアブレイズ！」

「二つの力の戦士！ダブルフォースプリキュア！」

「溢れ出す熱き魂、キュアスピリット！」

「穢れなき光映すは純真な心、キュアミラージュ！」

「希望照らす勇気の火、キュアバースト！」

今ここに、12人の戦士たちによる試練の幕が開かれた。

## 守護者（後書き）

キュアエルスは夢原信者さん作の「プリキュアオールスターズ」伝説の戦士の日常」に登場し、外伝「キュアエルス・ビギンズナイト」では主役となっています。

キュアテンペスト、キュアブレイズはGASHさんが生み出したキャラで、同じく「伝説の戦士の日常」に登場し、外伝「ダブルフォースプリキュア！」では主役です。三作とも興味を抱いた方はぜひ読んでみてください。

なお、キュアミラージュとキュアバーストはABCさんが生み出したキャラで、キュアスピリットのみ私が生み出しました。

次回、戦士VS戦士！

## 試練

キュアエルスと名乗った少女を前にして、ブロッサムもシプレも両目を大きく見開いた。

「キュア・・・エルス？プリキュアなんですか？」

「もしかしてあの娘と戦って勝つことが試練なんですか？」

「過去に世界を守った戦士って・・・もしかしてプリキュア!?」  
ブロッサムがそこまで言った時。

「はあっ!!!」

とかけ声とともにキュアエルスが地を蹴って一気に距離を縮め、強力な拳をブロッサムに放った。

「くっ・・・うあああああーっ!!!」

とつさに両腕でガードするが、拳が激突した瞬間、あまりの威力にブロッサムは即座に後方に弾き飛ばされた。

マリンとサンシャインもキュアテンペスト、キュアブレイズと名乗ったふたりのプリキュアを相手に拳を交えていた。

「っ、強い・・・!」

サンシャインは最初こそテンペストと拳をぶつけ合っていたものの、相手の猛攻についていけず、やむなくサンフラウィーjisを張って防御した。だがテンペストは殴る度に力を増幅させた連続パンチをひまわり型の防御壁にかけ声とともにまるで阿修羅よりも手が多く見えるほどのスピードでぶつけていく。やがて防御壁の中心から小さく亀裂が入り、サンシャインは息を呑んだ。

「これで決める・・・!」

サンフラウィーjisに傷を入ったのを見たテンペストはそのまま両手に力を溜める。右手に風の力。左手に雷の力。ふたつの属性の力を両手に溜めたテンペストは、ぶうんっ!と両腕を回し、勢い

をつけて叫んだ。

「プリキュア！テンペストブレイク！」

そして両手を前に繰り出した刹那、防御壁がまるでガラスが割れたかのように粉碎した。そしてサンシャインは爆風と衝撃を全身に受け、悲鳴をあげながら吹き飛ばされた。

「サンシャイン！・・・う、わわっ!？」

一瞬振り返ったマリンの頭上から今度はブレイズの急降下キックが炸裂する。ギリギリかわしたが、間髪入れずすぐに彼女の回し蹴りがマリンの腹部に直撃した。

「うわあーっ!！」

吹き飛ばされ、尻餅で着地するマリン。痛そうにさすりながら立ち上がると、ブレイズは立てた人差し指を頬に当て、悪戯っぽくウインクを言った。

「ごめんね でも勝負は勝負。手を抜くワケにはいかないの」

「くっ・・・（このブレイズってやつ、声かも姉に似ててなんかヤダ）。だったらこっちもだよ！」

マリンは片手を前に出して円を描いた。そして一旦手を引っ込め、全身に力を入れてすぐに両手を前方に差し出した。

「マリン・シュート！」

瞬間、彼女の手から弾き出されるように無数の小さな水の塊がまるで群れを成すかのような形で一気にブレイズを襲った。だが。

「はっ!！」

ブレイズは即座に走り出し、素早い身のこなしで次々と水の塊を華麗にかわしていく。そして瞬時にマリンとの距離を詰めると、

「はあっ!！」

と高く跳躍した。そして右足に炎の力を、左足に氷の力をまとわせた。

「プリキュア！ブレイズスマッシュ！」

そしてマリンを標的に定め、自身を独楽ユラのように高速で回転させ、急降下を開始した。

「ヤバツ・・・！」

マリンがそう口に出した次の瞬間、それはあっという間に彼女の眼前にまで迫った。

コスモス畑に、強い衝撃波が広がった。

「はあっ！」

「たあっ！」

草原の中でムーンライトとキュアスピリットの拳が激突した。一瞬で両方の拳から衝撃波が発せられる。両者とも拳をぶつけた状態のまま歯を食い縛ってしばらく動かなかったが、

「あうっ・・・！」

遂にムーンライトが衝撃の反動に耐えられず、後方に撥ね飛ばされた。すぐに宙返りをして体勢を整え、着地したものの、ぶつけた拳がじわりと痛むのを彼女は感じた。

なんて重い拳。まるで鉄球を殴ったかのよう・・・。

ムーンライトが少し表情を歪めると、スピリットは地を大きく蹴り、上空へ高く跳躍した。彼女が跳び上がったのに気づいて、ムーンライトもすぐに目と口元を引き締め、高く舞い上がる。

数秒後の青空にふたつの閃光が炸裂したのは言うまでもない。

「くっ・・・どこ？どこから来る・・・？」

セレーネは鏡の迷宮の中で苦戦を強いられていた。相手がどこから攻撃を仕掛けてくるのか全く読めない。無数の鏡にキュアミラージュの姿が映り、どれが本物なのか分からないのだ。相手もセレーネの姿は無数に映っているはずなのだが、彼女のほうは見分けがつからしく、正確にセレーネを攻めてくる。なのでセレーネはロッドでバリアを瞬時に張り、攻撃を防ぐのが精一杯だった。

「でもこのままじゃやられるのも時間の問題・・・！」

その時、背後に気配を感じた。

「そこ！」

振り向きざまにロッドを向け、光球を飛ばす。だが、光球が直撃したのはキュアマミラージュではなく、彼女の姿が映った鏡だった。バラバラと、破片が粉状になって細かく散る。

「しまっ・・・！」

「大ハズレ」

振り返ると、ミラージュはすぐ目の前に来ていた。彼女は走りながら片手に鏡の破片に似た青い鋭利な物体を三枚召喚すると、

「プリキュア！ミラージュ・フラメント！」

それを手裏剣のように投げた。三枚の破片は次々とセレーネの身に衝突し、彼女は悲鳴をあげるもすぐに相手にロッドを向け、光球を発射した。が、またも結果は彼女の姿が映った鏡が粉々になるだけだった。

焦燥感もが彼女を襲い、額から汗が流れ始めた。

一方ジェアンヌはというと、その優れた脚力を活かして・・・猛スピードで逃げていた。

「ちよっと！マジで私を焼き殺す気いっつ！？」

まあ逃げるなど言うほうが無理な話かもしれない。彼女が走った跡にはキュアバーストが両手から飛ばした火球で次々と火柱が上がったのだから。

「コラアッ！逃げるなあっ！ちゃんと私と戦えっ！」

「無茶言うなあっっ！！！」

「なら潔く燃え散れ！」

「ヤに決まってるでしょーがっ！！！」

「やかましいっ！プリキュア！バースト・クラッシュ！」

バーストは両手を前に差し出して火球を飛ばした。火球は高速であっという間に逃げるジェアンヌの背中に追いついていく。ハッと

ジェアンヌが走りながら振り返った瞬間。

轟音とともに火柱と灰色の煙が高く上空に上った。

燃え盛る炎と溢れ出る煙の中にジェアンヌの姿は見えない。やられたのだろうか。バーストがそう思った時。

「こつちよ！」

頭上から声が降って、バーストは急いで顔を上げた。そして瞬時に目を見張った。

太陽を背に、ジェアンヌが高く舞っていた。彼女は上空からバーストを見据え、得意げに笑みを浮かべると、

「それっ！」

そのまま彼女に目がけて急降下を開始し、指先に五本の白いチェスピンを持つと、

「行つけえっ！！」

それらを素早く投げ飛ばした。バーストはとっさに片腕でガードしたが、ジェアンヌの投げたチェスピンは彼女の腕に次々に刺さると、威力は小さいが、爆発を起こし、ひるませた。

「うあっ・・・!?」

「へっへっくん、どう？本来なら悪魔にしか使わないんだけど、命が惜しいからね。容赦はしないよ」

一矢報いたり、と表情に表してジェアンヌが言うと、彼女の言葉を聞いたバーストは傷ついた腕を抑えたまま、なぜかになまりと笑った。

「！・・・何がおかしいの？」

「いいや、嬉しいのさ。『容赦はしない』と本気を出してくれて。

これで少しはマシな戦いになれそうだ」

そう言うと、バーストは抑えていた腕を高く掲げ、叫んだ。

「プリキュア！バースト・ドラゴン！」

次の瞬間、バーストの手から炎が猛烈に噴き出したかと思うと、すぐに長く太い胴体を露にし、巨大な龍の姿へ変わった。炎の龍は胸前で腕を組んでいるバーストの背後にゆっくり降臨すると、樹海

中の葉を一瞬で全て吹き飛ばしてしまうのではないかと思うほど空間を激震させる咆哮をあげた。

「あ．．あははは。あんなのって、あり．．．？」

ジェアン又は青ざめた表情で笑うしかなかった。

「プリキュア！ライジング・クラッシュ！」

エルスは右足に電撃をまとわせた必殺キックの一撃でブロッサムを飛ばした。ピンクフォルテウェイブを粉碎した。巨大エネルギー弾が一瞬で破裂し、欠片が粉と化してエルスの周囲に降り注ぐ。

「そんな．．．！」

必殺技が破られ、ブロッサムは愕然となった。だがエルスは愕然とする暇もそう長く与えずに疾風のごとく駆け出し、相手が構えを取るよりも素早く彼女はブロッサムの懐に入った。大きく両目を見張ったブロッサムを見て、エルスは彼女の胸に軽く拳を当てると、

「はあっ！！！」

と声と同時に衝撃を發した。悲鳴を轟かせて吹っ飛び、ブロッサムは黒馬の駒に背中から強く叩きつけられた。体中が痛い。だが彼女は激痛に表情が歪んだものの、辛うじてその場で倒れることだけは避けた。胸を抑え、はあ、はあ、と呼吸を繰り返すブロッサムにエルスは初めて声をかけた。

「どうしてあなたは剣を求めんの？」

「え．．．？」

「答えて。どうしてあなたはこんな苦しい戦いをしてまで剣を手に入れたいの？」

「そ．．．そんなの決まっています。世界を守るためです。私たちが早く剣を手にしなないと、全ての世界が滅びるかもしれないんです！」

ブロッサムはエルスの問いに、至極当然の回答を出した。今までだって彼女はただただ世界を守るために戦ってきたわけだし、それ

がプリキユアとなった自分の使命だと確信さえしていた。そしてヤマタノオロチが覚醒しようとしている今、世界を破滅から救うには予言に残された伝説の剣しかないのなら、たとえ苦しくても手に入らなければならない。それが世界を破滅から防ぐ唯一の手段というのならそれで間違いはないはずだ。

だが、ブロッサムは返答を聞いたエルスが次に言ったのは、ただ一言だけだった。

「・・・それだけ？」

「え？」

ブロッサムはその一言に再度瞬きした。

「確かに世界を守るのも大切だよ。でも、それだけじゃダメなんだよ・・・」

「えっ？え・・・？」

「世界を守りたいという気持ちだけじゃあなたはこの試練は乗り越えられない。本当の答えはあなたの中にあるはずだよ」

「私の・・・中に？」

彼女の言葉にブロッサムがそう口に出した瞬間、再びエルスが仕掛けてきた。とっさに横に跳び、代わりに黒馬の駒が彼女の拳の犠牲となる。すぐに移動をして素早く放つ相手の拳をかわしながら、ブロッサムは急いでエルスが言った意味を考え始めた。だが、どんなに考えても少しも分からなかった。

「世界を守るため」だけでは駄目だというのは一体・・・？

**試練（後書き）**

次回、試練終了。はたして勝者は・・・？

## 解答（前書き）

キュアエルスたちオリジナルプリキュアが存在が意外にもあまり知られていかなかったようなので、彼女たちの説明を「守護者」の回のがきがきに少し書きました。

## 解答

巨大な盤上で轟音が次々と起こり、煙が高く上がる。そして白兜を被ったナイトの駒が一瞬で粉々になった。

「うあああああーっ!!」

キュアエルスに蹴り飛ばされ、ブロッサムは倒れ伏した。立ち上がろうとするも、疲労と激痛が一気に襲いかかり、すぐに膝を着いて、ごほっ、ごほっ、と咳を繰り返した。体中がボロボロになっているブロッサムにエルスは表情を変えぬまま、拳を握り締め、力を溜め始めた。

「一体………何がいけないんですか？」

だが、ふと漏らしたブロッサムの言葉に反応し、エルスは拳を解いた。ブロッサムは桃色に潤う瞳を彼女に向けると、全てを吐き出すかのような勢いで叫んだ。

「どうして『世界を守るため』だけじゃダメなんですか？あなたは、ただそのために戦ってきたんじゃないんですかっ!？」

するとエルスは目を閉じて首をゆっくりと左右に振り、すぐに開いて言った。

「確かに『世界を守るため』にも私は戦ってきたよ。でも、それだけじゃないの。逆に尋ねるけど、あなたも数多くの戦いを乗り越えてきたんでしょ？その中には怖くて逃げ出したことや苦しくて嫌になったこともあるはずだよ。だけど、あなたはそんな苦しみや恐怖も全部乗り越えてこられた。……答えて。最初は弱かったはずのあなたがここまで強くなれたのはどうしてなの？」

「私が……強くなれた理由？」

ブロッサムはエルスの問いをそのまま自分自身にも問いかけた。

確かに、最初自分は弱かった。臆病で引っ込み思案で人と触れ合うのを苦手としていた。そんな性格ゆえに敵に「史上最弱」という不名誉な称号をも付けられてしまっていた。

しかし、今は違う。少しずつだが確かに自分は変わり始め、強くなっている。弱かった自分はどうしてここまで強くなれたのだろうか。……答えはすぐに出た。

えりかと会ったからだ。いつき、ゆり、それからたくさん仲間たちと邂逅を果たしたからだ。みんなと出会い、ともに絆を深め合っただからこそ、殻に籠っていた自分は自ら殻を破って変わることができた。みんなかけがえのない友達。決して簡単には壊れない友情だから、だから、絶対に失いたくない。

そこまで考えた時、ブロッサムはハッと気づいた。頭の中でもやもやとしていたものに一筋の光明が射し出した。

「あ・あ・あ・ああ・・・！」

闇が次第に晴れていく。光が少しずつ輝きを増していく。彼女はその光の中で今まで出会ってきた人たちの顔を走馬灯のように思い浮かべた。愛する人たち。親友。一日を悔いなく懸命に生きる人たち。そして最後に脳裏に浮かんできたのは・・・・・！

「私、私・・・分かりました！」

ブロッサムは自分でも気づかないうちに咲き誇るような笑顔になっていた。彼女は両手を胸にやり、笑顔のままエルスを見た。

「確かに私は世界を守りたいです。でも・・・それ以上に大切な人たちを失いたくないんです！私がこうして少しずつ変わって強くなれたのはみんなと出会えたから・・・！」

そしてブロッサムは目と口元を引き締め、エルスを正面から見据えた。

「そして今、私の大切な友達が敵に捕まっています。私はその友達をなんとかしても助けたい。たとえ世界を守れたとしても、私は友達を失いたくないんです！だから・・・だから、私はこの戦いに勝つてみせます！」

その時だった。無表情だったエルスがもう一度、笑みをわずかに見せた。ずっと戦いを見ていたシプレも感動したように目を潤ませて笑っていた。

ブロッサムはタクトを構え、かけ声とともに走り出した。

マリンとサンシャインも同様にテンペストとブレイズから戦う意味を問われ、自分の中で答えを見出していた。

「確かに私たちは『世界を守る』ためにも戦ってきたよ。でもそれ以前に私たちが今まで頑張ってきたのは……」

「ともに生きる人々を決して失いたくないと頑張り続けるブロッサムを見てきたから……！」

戦いで傷ついた身体を懸命に立ち上がらせ、テンペストとブレイズに視線を飛ばす。立ち上がったふたりを見て、離れた位置で様子を窺っていたコフレとポプリはすぐに満面笑顔になって手を叩き合った。

「私はね、そんな頑張り屋のブロッサムが大好きなんだ。だから、私はそんなブロッサムをこれからも支えていきたい！」

「ブロッサムだけじゃない。みんながいつまでも幸せに笑っていてくれるように……そのために、私はどんなに苦しくてもきつと勝ってみせる！」

そしてふたりはビシッ！と両腕で構えを決めた。彼女たちを見て、テンペストとブレイズは互いに笑みを浮かべてうなずき合うと、自分たちも構えを取り、瞬時に眼光を鋭くした。

「……はあああああああつっ！！！！」「……」

そして全員同時に地を蹴って、駆け出した。

「私はかつてひとりだったわ……」

草原の中でムーンライトは視線を下に向け、スピリットに話していた。

彼女の頭の中に蘇るのは過去の記憶。あの時の自分は仲間を必要とせず、たったひとりで戦っていた。それは戦いが激しさを増せば

必ず仲間も傷つくことになる。そうなるくらいなら、傷つくのは自分ひとりだけでいいと結論に至った彼女の優しさでもあった。しかし、それはやはり無理があった。結果、彼女はかけがえのないパートナーを目の前で失うことになってしまった。それが要因で彼女は心がひどく傷つき、もうプリキュアとして戦うことはできないと深い絶望に瀕していた。

「でも、つばみやみんなに会って、私は仲間の大切さを知ったわ。だから・・・私はみんなのために戦い続ける！もう二度と大切なものを失いはしない！」

ムーンライトは顔を上げ、前を向いた。そしてエンブレムに手をやり、タクトを召喚した。

スピリットは彼女の悟ったような表情を見ると微笑み、一本ずつ指を折り曲げて拳を作った。

次々とミラージユの攻撃を受けて、セレーネの身体は傷だらけになった。はあ、はあ、と息が荒くなる。けれども、一度も倒れはしなかった。

「私は負けない。危険を顧みずに私を助けてくれたキティやユカ様のため、そして今もなおキュアリベリオンと戦い続けるプリキュアや民たちのためにも、私は倒れるわけにはいかない。必ず戻ると約束をしたのだから！」

セレーネは周囲の鏡に無数に映るミラージユをひとつひとつ見据えながらロッドを強く握り締め、決死の覚悟で構えた。

「さあ来い！私の力つてのは、ここからが本番よ！」

彼女の表情、そして熱の入った声に、鏡に映る全てのミラージユが微笑を浮かべ、即座に両手に数枚の破片を召喚した。

ジェアン又はバーストが手から召喚した炎の龍に苦戦を強いられ

ながらも彼女の問いかけに対して、挑発的に笑みを浮かべて答えた。  
「『世界を守るため』だけじゃダメだって？そんなの当たり前よ。  
私は怪盗。世界を守る柄じゃないもん」

「だけど、とジェアン又は続けた。」

「私は人を救うためなら精一杯頑張る。悪魔に心を蝕まれる人たちをもとの優しい心の持ち主に戻せるのなら私はこれからも悪魔に苦しめられる人たちを救い続ける！まだまだ悪魔はたくさんいる。私は全ての悪魔を闇に帰して人々にいつまでも幸せでいてもらいたいんだ。そんな人たちのために、私はここで挫くわけにはいかないのよっ！」

その台詞一文字一文字ずつに彼女の本気と情熱を感じ取り、バーストは、ふっ、と微笑をすると再び片手を掲げ、炎の龍をジェアン又に向けて飛ばした。

テンペストとブレイズは手を繋ぎ、必殺技の態勢に入った。

「私たちも行くよ、サンシャイン！」

「うん！」

相手の行動を見、マリンはフラワータクト、サンシャインはシャイニータンバリンを召喚し、手に持った。そしてマリンはタクトを大きく振りかざし、サンシャインはタンバリンを軽快に叩きながら音を響かせた。

一方で互いに繋ぎ合った手に力が最大限にまで達したのを確信したテンペストとブレイズは、

「プリキュア！デュアルブレスター！！」

と叫び、マリンとサンシャインに向け、炎と風の力が合わさった強化光線を一気に放出した。

だがマリンとサンシャインも準備ができていた。

「花よ煌け！プリキュア！ブルーフォルテウェイブ！」

「花よ舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

マリンはブルーの花の形をした巨大エネルギー弾を、サンシャインは無数のひまわり型エネルギー光弾を剛速球で発射した。炎と風が合わさった光線にまずマリンのブルーフォルテウェイブが直撃する。さらにその後からサンシャインのゴールドフォルテバーストが間髪入れず次々と炸裂し、光線を押し戻し始めた。

「ええっ・・・!?」

テンペストとブレイズは驚き、踏ん張ったが押し返せない。それどころか、マリンとサンシャインの技に身体までもが徐々に押されていく。逆にマリンとサンシャインはパワーをさらに増強化させて光線を押していき、声を揃えて叫んだ。

「はああああああああああっつつつつ!!!」

そして遂に光線を破り、エネルギー弾がテンペストとブレイズに命中した。ふたりの背景に巨大な青い花とひまわりが咲き誇る。マリンはタクトにあるクリスタルドームを、サンシャインはタンバリンをそのまま弧を描くように回し始める。そしてそのままエネルギーを送ると、テンペストとブレイズはすました笑みのまま全身が光に覆われた。そして光が完全に消えた瞬間、テンペストとブレイズは私服を着た少女の姿に戻された。

変身が解けたふたりは顔を見合わずと、まずテンペストが頭の後ろに両手をやって言った。

「あゝあ、あたしたち負けちゃったね」

「うん。でも私、悔しくないよ。全力を出して負けたんだから」

「ま、それもそうだね」

そしてふたりはマリンとサンシャインに笑顔で振り向き、祝福を贈った。

「おめでとう。ふたりとも合格だよ!」

「私たちとはここでお別れ。すぐにさっきの広間に戻されるから」

「え? そうなの? そういう仕組みなの?」

マリンが尋ねると、ふたりはうなずいた。すると4人の周囲に先ほどの霧が発生し始めた。霧はあっという間に濃くなり、コフレと

ポプリが慌ててマリンとサンシャインの胸に飛び込む。手合わせをしたふたりの少女の姿を徐々に隠し始める。

「あ、ちょ、ちょっと待った!」

だが姿が完全に見えなくなる前にマリンが手を挙げて呼びかけ、ふたりの少女は不思議そうに彼女に目を送った。するとマリンはこう聞いてきた。

「ね、名前聞いていい?」

「名前?」

「そう。だって、お互い一生懸命頑張ったし、もう会えないかもしれないしさ・・・ダメ?」

ふたりは顔を見合わずと、くすっと笑ってもう一度マリンに向いた。

「あたし、神名遙」

「私は江神麗華。忘れないでね」

ふたりは自身の名を伝えると、霧の中に消えていった。

ムーンライトの拳とスピリットの拳が再度激突する。両者とも拳をぶつけたまま一歩も退かない。

「はああああああっ!」

だがムーンライトが声の限りをあげて叫んだ次の瞬間、彼女の拳からさらに強い衝撃が発せられ、それを全身に受けたスピリットは即座に後方に撥ね飛ばされた。すぐに体勢を整えて着地し、急いで相手を見やると、ムーンライトはすでにタクトを大きく振りかざしていた。

「花よ輝け!プリキュア!シルバーフォルテウェイブ!」

タクトの先端から銀の花の形をした巨大エネルギー弾が発射され、スピリットはよける間もなくあつという間に一撃を受け、動きを封じられた。命中してしまつた以上、どうあがいても無駄だと悟つたスピリットは目を瞑り、抵抗なく光に包まれた。光が消えた途端、

草原に変身が解かれたスピリットの姿がムーンライトの目に映った。ムーンライトは普通の少女になったスピリットに近寄ると、彼女は相手をまっすぐ見据えたまま手を差し出した。

「完敗です」

「いいえ、あなたのおかげで私はまた少し強くなれた。感謝しているわ」

彼女の言葉を聞いてムーンライトは微笑し、差し出された手を優しく握り、次にこう尋ねた。

「最後に名前、聞いてもいいかしら？」

「名前？私のですか？」

「ええ」

彼女はちよつと恥ずかしそうに笑うと、

「立花沙羅たちばなせらです」

と言った。

ふたりの周囲に霧が立ち込めた。

セレーネはロッドに光を最大限に溜め、それを頭上に高く掲げた。瞬間、太陽が降ってきたかのような強烈な光が炸裂して鏡に次々と反射していく。迷宮全体に光が行き届き、セレーネに接近していたミラージュはあまりのまぶしさに目を瞑り、思わず声を出した。

「うああっ!」

「そこね!」

ミラージュの声に反応し、セレーネは急いでロッドから光を消すと、すぐさま振り返って最大級の光球を先端から発射した。見事。光球は鏡に映った虚像ではなく、本人に直撃し、巨大光球を全身に受けたミラージュは変身を強制解除され、少女の姿に戻された。黒の短髪の少女は口惜しそうに上半身を起こすと、目の前に立つセレーネを見上げて言った。

「まさか、光を反射してまぶしさでつい出してしまった声で位置を

測定するなんて・・・」

「姿は無数にあっても、声はひとつだけだからね・・・」

「見事よ」

立ち上がった少女が言うと、セレーネは首を振った。

「まだまだよ。もっと早く気づけたはずなのに、修行が足りないわ」

「でも、あなたは私に勝った。少しは強くなってるはず・・・」

「ありがとう」

セレーネは笑うと、対戦相手だった彼女も笑った。しばらくして笑うのをやめると、セレーネは彼女に名前を聞いた。

「名前？」

「うん。いい教訓になったと思うし、覚えておきたいの。ああでも嫌なら・・・」

「いいよ。私は莉緒。リオ鏡莉緒！覚えててね！」

「ありがとう。あなたのこと、忘れない」

弾けた笑顔で彼女が名を言うと、迷宮に霧が広がり始めた。

ジェアン又はロザリオを剣に変えた。そしてその刃に炎をまとわせると、それを振りかざし、バーストを真正面から見据えた。

「もう、私もいい加減この試練を終わらせたい。この一撃で決めるから！」

「面白い。なら私も次の手で決めよう。さあ、いつでも来い！」

バーストが挑発すると、ジェアン又は炎の剣を両手に握り、かけ声とともに一気に走り出した。一步一步地面を踏む度に接近する彼女にバーストは手を掲げて炎の龍を生み出し、猛スピードで解き放つ。目の前まで迫り、大きく口を開いた龍にジェアン又は一瞬臆したが、

「負けるもんかあつ！！」

とすぐに両目を鋭利に変化させて頭から恐怖を追い出し、龍の口に炎の刃を突っ込み・・・そのまま力を入れて龍の胴体を斬り

裂いた。

「何っ!？」

一瞬で炎の龍が火の粉と化して散る。ジェアン又はそのまま一気に走ってバーストとの距離を詰めると、素早く剣を振り下ろして刃にまとつていた炎を彼女の全身に浴びせた。

「うああああああああああっ!!・・・あ、あ、あ、あれ？」

一瞬で火焰地獄を頭から浴び、バーストはショックでつい変身解除してしまったが、すぐに不可解なことに気づいた。全く熱くないのだ。衣服を見ると、燃えるどころか、焦げてすらいない。どうなっているか、パチン、とジェアン又が指を鳴らした。すると彼女を包んでいた炎が一瞬で消え、バーストはさらに混乱した。

「こ、これは一体・・・？」

するとジェアン又は種明かしした。

「それ、幻だよ」

「幻!？」

「そ。いくら私が炎の属性も持っているからって、さすがに焼き殺すなんて寝覚めが悪いからね。どうだった？私の炎のお味は？」

「おまえ・・・性格悪いな」

「騙しは怪盗にとつて十八番オハコなんですね。で、変身を解いたということとは私の勝ちってことかな？」

「うっ・・・」

バーストは言葉に詰まったが、すぐにあきらめたように、ふう、と息を吐いた。

「ま、技が破られた時点ですでに私の負けは決まっていたのだろうな。見事だ。おまえの勝ちだ」

「サンキュ。ついでに名前も聞いてもいい？」

「名前？」

「うん。一応死力を尽くして戦った者同士だし、ウザったいやつだったけれど、嫌いじゃないよ、あなたのこと」

「ウザったいって、おまえ。．．．まあいいか。私の名は累レイ。岬累みさきレイだ」

「累か。似合わない名前ねえ．．．」

「おいっ！」

彼女がそうツツコミを入れた瞬間、樹海を霧が覆い始めた。

ブロッサムはタクトを大きく振り、もう一度必殺技の準備を開始した。エルスも自身の専用武器、ライトニングロッドを召喚し、剣の形に変える。そして刀身にエネルギーを最大にまで溜め始め、剣先をブロッサムに向けた。同時にブロッサムもタクトをエルスに向け、ふたりは同時に技名を発した。

「プリキュア！ピンクフォルテウェイブ！！」

「プリキュア！ライトニング・スラッシュャー！！」

ブロッサムタクトからピンクの花の形をした巨大エネルギー弾が、ライトニングロッドから斬撃となった強力な光エネルギーが発射され、ふたつのエネルギーは衝突した。お互い、歯を食い縛り、武器を持つ手に力を込める。どちらも威力は五分五分だ。壮絶なエネルギーのぶつけ合いに、シプレはごくつと生唾を飲み込んだ。だがしばらくして歯を食い縛っていたブロッサムが喉がはちきれんばかりの声を轟かせ、タクトを握っていた手にさらに力を込めた。

「はああああああ．．．はあーっっっ！！！」

「なっ．．．！？」

次の瞬間、ブロッサムのピンクフォルテウェイブが増強化し、エルスの斬撃を呑み込み始めたのだ。驚愕するエルスの目の前で斬撃はみるとピンクの巨大エネルギー光弾の中に取り込まれて増幅し、エルスに接近していく。エルスは最後の最後まで目を逸らさず、ライトニングロッドにエネルギーを注いでいたが、

「う．．．くう．．．ああっ！！！」

遂に彼女も全身にエネルギー弾を浴びて変身が解除された。エネ

ルギー弾は風船が破裂するかのよう弾けて消滅し、彼女はブロッサムの前で倒れ伏した。

「だ、大丈夫ですか!?!」

慌てて駆け寄ろうとしたブロッサムだったが、彼女はすぐに両腕を立てて起き上がると、ふうーっ、と息を大きく吐き、表情に笑みを見せた。

「大丈夫。ありがとう。あ、おめでとうも言うべきだよな?」

「い、いえ、そんな。私がこの試練に合格できたのはあなたのおかげでもありますし・・・」

「ううん。私はちよつと質問しただけ。最終的に答えを出せたのはキュアブロッサム、あなたの力だよ。世界を守るのは私たちプリキュアの使命。だけど、仲間や友達、そして大切な人たちを決して失いたくない、絶対に守りたいって心がどんなに苦しかったとしても、怖かったとしても、それでも私たちが戦える理由になり、力にもなるの。あなたは自分でそれに気づいた。だから、試練を乗り越えられたんだよ。あなたはこれからもそれを胸に刻んで、みんなのために戦い続けてね」

「は、はい!」

ブロッサムが感激したように返事をすると、盤上の周囲に霧が濃く発生した。

「ブロッサムウーッ!」

シプレが急いでブロッサムの胸に飛び込む。

「お別れだね」

と少女は少し寂しげに言うと、ブロッサムに背を向け、霧の向こうに足を向けた。

「あ・・・待ってください!」

しかし、ブロッサムが呼び止め、彼女は振り返った。ブロッサムは透き通った眼差しで彼女を見つめ、口を開いた。

「あの、お名前・・・あなたのお名前を教えてくださいませんか?」

その言葉に、少女はちよつと驚いた反応を示したが、すぐにすま

した表情になり、答えた。

「御子。光明寺御子だよ」

そして彼女はゆっくりと踵かかとを返し、霧の中に足を踏み入れた。

## 解答（後書き）

キュアエルスたち6人はやっぱり後々参戦させようかなあと考えています。ごめんね、キュアリベリオン。

## 剣と天使

霧が晴れると、そこはさっきの大広間だった。ブロッサムはすぐに周囲を見渡し、全員の姿を確認して安堵のため息を吐いた。

「みなさんも、試練に合格できたんですね！」

「トーゼンだよ。あんなの軽い軽い」

「剣を求める者たちよ……！」

マリンが鼻から息を吐いて胸を張ると、再び守護者の声が彼女たちの頭上から降ってきた。

「おまえたちの想い、『私たち』にも伝わった。おまえたちを信じて剣を託そう。奥に進むがよい。……だが、ひとつだけ伝える。剣を手に入れても必ずしも剣がおまえたちに応えてくれるとは限らない。剣を抜くことができるのは“選ばれしふたりの勇士”のみ。それを肝に銘じよ！」

そして重い扉がふたつに裂け、両側の壁がスルスルと滑るよう見えなくなった。みんなは半分緊張、そして半分覚悟の面持で中に足を踏み入れた。

さっきの大広間よりも広い空間がそこにあつた。その広さ、例えるなら、学校の講堂三個分はありそうで、床は紅のカーペットがわずかな隙間もなく敷き詰められていた。そしてその空間の奥にミラクルライトが見せた女性の彫刻像が置いてあり、足元に金と銀の、鞘に収められたふたつの剣が輝きながら突き刺さっていた。

「あれです！」

ブロッサムが指を指し、みな急いで彫刻像へ駆け寄る。彫刻像の顔が見えた時、ムーンライトは一瞬ハッと小さく息を呑んだ。

これは……キュアアンジェ！？

その彫刻像の顔に施されているのは間違いなく400年前に初めて世界に降臨したという最強にして伝説のプリキュア、キュアアンジェだった。以前、試練の場であるプリキュアパレスにてこれまで幾

多の世界を守ったという歴代のプリキュアたちの石像の中でキュアフラワーだったつばみの祖母・薫子に見せてもらったことがある。またフランスに旅行に行った際にも彼女と戦った強敵の回想にもその名が登場したことがあった。

もしかして過去のヤマタノオロチを倒した戦士たちはキュアアンジェを含めたプリキュアたちなのかしら・・・もしそうだとしたら、試練の相手がプリキュアなのも納得がいく・・・。ムーンライトが深刻に考え込んだ時、ブロッサムがゴールドソードを、マリリンがシルバーソードの柄つかを両手で？み、引っ張ってみた。「うううん・・・！」  
「くうううううううっ・・・ダメだ」

歯を食い縛り、顔を真っ赤にして精一杯の力で引っ張るが、剣は抜けない。

「どれ、私たちも・・・」

「ええ」

「シプレたちもやるですう！」

「コフレも手伝うですう！」

ジェアンヌとセレーネ、シプレとコフレも手を貸し、一緒になつて引っ張つてようやくふたつの剣は抜けた。

「くっ・・・重いっ！」

両腕でゴールドソードを抱え持つブロッサムが小さく悲鳴をあげる。持ち上げられないわけではないが、長時間持つと腕の感覚が麻痺してしまいそうなほど、ふたつの剣は相当の重量があるものだった。

「あははは・・・もしかして剣を使いこなせる“選ばれしふたりの勇士”って、相当な力持ちな人ってことじゃないの？」

マリリンも同様にシルバーソードを抱えて苦笑しながら聞くと、

「マリリン・・・たぶん、それはないと思うよ」

「とりあえず剣を抜いてみましょう。そうすれば、誰が“選ばれし者”か分かるはずだわ」

サンシャインに否定され、ムーンライトに促されてふたりは柄を握って引つ張った。

だが抜けない。

「え？」

「うぬぬぬぬ〜っ！」

ふたりはありったけの力を入れて引つ張ったが、刀身は鞘から抜けなかった。ふたりに続き、サンシャインとムーンライトも引つ張ってたが、やはり抜けない。一応セレーネとジェアンヌにも渡してみたが、結果は同じだった。

「どうなってるの？錆びてるわけじゃないよね？こんなにキラキラしてるんだし……」

ジェアンヌがもつともな疑問を口にすると、セレーネがしばらく考え、意見を述べた。

「たぶん、こういうことじゃない？ここにいるみんなは剣を抜けないイコールは剣に選ばれていない。つまり、“選ばれしふたりの勇士”はここにはいない……！」

「それじゃ、その“勇士”はアジトにいるみんなの中にいるということ？」

サンシャインが聞くと、セレーネは

「その可能性が高いと思う」と答えた。

いえ、あともう一人……。

しかし、ブロッサムが心当たりのある人物の名を伝えようとしたその時。

一度目の衝撃。高い天井から無数の破片が降った。

二度目の衝撃。今度は床が揺れた。

「じ、地震？」

「空で地震があるか！」

マリンのボケにジェアンヌがツッコミした直後。

三度目。四度目。五度目。

強い衝撃が立て続けに起こり、立っていられず、全員膝を折り曲げて座り込んだ。

「……ななな……なんですうっ!?」「」

恐怖に怯え、妖精たちも互いに抱き合い、震えだす。衝撃の正体はすぐに判明した。

「聞こえるかプリキュアーツ!!」

神殿中に声が轟く。すると神殿の意思なのかそれともシステムなのか、彼女たちの頭上に巨大スクリーンが現れ、映像が映し出された。鷹か鷲をイメージさせるシャープで、透き通るような色で統一された巨大な宇宙船……あれは……。

「あれは、ワンダー・プラネットに行く時に私たちが乗った……!」

ブロッサムが声をあげた。確かに、あれは過去ワンダー・プラネットに行く際にプリキュアたちを乗せた宇宙船に違いない。確か名前はスペースホークだった気がする。その宇宙船のボディに搭載された機関銃やミサイルが神殿を破壊しているのだ。次々と建造物が崩壊し、炎上する。

「なんて、ひどい……!」

セレーネが呟くと、再び声が轟いた。

「聞こえるかプリキュアーツ! 私たちはキュアリベリオンの忠実なる僕、キクとミチだ。私たちの要望はただひとつ。今すぐ出てきて剣を渡せ。そうすれば、命だけは助けてやる。もっとも、その命もあと6時間程度で終わりだな!」

「6時間!? じゃあ今お昼なんですか!?!」

「え? じゃあ今12時くらい? うっそお!?! もうそんなに時間が経ってるの?」

ブロッサムとマリリンが驚愕すると、三度目の声が響いた。

「5分時間をやる。それまでに出てこなければ、ここがおまえたちの墓場になる。よく考えて決める。残り6時間を有意に使ったほうがいいと私はお勧めするがな」

「・・・そんなこと最初から決まってるじゃない！みんな、ここは私たちのガッツを見せてやるよ！」

襲撃が止み、マリンが立ち上がり、みんなに振り返ると、ブロッサムもサンシャインもムーンライトも表情を引き締めて強くうなずいた。

「待った！」

だが、セレーネとジェアンヌが止めた。ふたりを見たプリキュアたちにまずセレーネが言った。

「あいつらは私たちに任せて、みんなは早く地上に戻ってください！」

「・・・ええっ？」

「で、ですが・・・」

ブロッサムが何か言おうとした時、今度はジェアンヌが口を挟んだ。

「私もあのミチというおばさんにはちよくと借りがあってね。はじめを着けたいんだよ。それに、今は重たいだけの何の役に立たない剣をふたつも抱え込んで、満足に戦えると思う？」

「う、うう・・・」

「ごもつともな指摘にブロッサムは声が詰まると、ムーンライトが言った。

「分かったわ！」

「ムーンライト！？」

「みんな、ここはふたりに任せましょう。今の私たちは全ての世界を守らなければいけない使命があるはずよ。タイムリミットが迫っている以上、少しでも時間は無駄にできないわ」

「私もムーンライトの言うとおриだと思う。急がないと、ヤマタノオロチが復活してしまう。少しでも早くみんなの所に戻って、“選ばれしふたりの勇士”を見つけないと・・・！」

サンシャインにも続いて言われ、ブロッサムもマリンも決断した。ブロッサムはふたりに振り返った。

「ひとつだけ約束してください。必ず帰ってきて！」

「もちろん！！！」

ふたりはそう返事するとすぐさま駆け出し、神殿の入口へ向かい始めた。

プリキュアたちはふたりの後姿を見送ると、光のマントをその身にまとった。

「5分、経ちました」

宇宙船の中でミチは隣の席に座るキクに伝えた。キクは、ふつ、とおぞましく笑みをした。

「愚か者めが・・・まあいい、どうせみな死ぬんだ。だったら、その前に私が壊してやる。壊れるー消えてしまえ！美しいものなど・・・！」

興奮気味にキクがミサイル発射装置に手をかけようとした時。

「待って！あれ・・・」

ミチが止めた。すると、神殿の入口からセレーネとジェアンヌが現れ、こつちを見て睨んだ。ふたりの顔を確認、キクとミチは一瞬で両目を見張った。

「あいつはセーラーセレーネ！・・・そうか、催眠が解けたのか。道理でキュアリベリオンのもとに戻ってこないわけだ」

「あのこそ泥娘、なんでこんな所に・・・ええい、思い出しただけでも忌々しい！」

「どうする？」

「プリキュアではないといえど、キュアリベリオンに齒向かう愚かな方たちには違いない・・・」

「このミサイル発射スイッチを押して一気に片を着けてもいいが・・・」

「うんと苦しむ姿を見なければ気が済まない」

「決まりだな・・・！」

そう言うと、キクはハンドルに手をかけ、高度を下げた。徐々に機体がふたりの前に降下していく。機体が大分降下したところでブルッサムたちは泉のある神殿の庭園からそっと飛び立った。

必ず、無事でいてくださいね……。

ブルッサムは途中ちよつとだけ振り返ったが、すぐに前を向いて、目の前の入道雲に突っ込んだ。

剣と天使（後書き）

次回、キュアリベリオン、総攻撃開始！

## 決戦（前書き）

シリーズ初！『プリキュアオールスターズDX3』がノベライズ化し、公開直前に発売されるそうです！

## 決戦

キュアリベリオンは頼杖をついた状態で玉座で足を組み、目の前で横たわる真夜を見ていた。傷だらけになった彼女はまだ目を覚まさない。彼女のパートナーであるロモモも少しも動かなかった。そんなもうひとりの自分を目に映し、少し痛めすぎただろうか。キュアリベリオンは考える。肉体だけでなく精神にも打撃を与えた挙句、最後は深い絶望へ叩きつけたのだ。簡単には目を覚まさないのも無理はないかもしれない。

だが・・・と、リベリオンは眼光を鋭くした。

全ての元凶は真夜なのだ。このくらいで終わらない。終わりにはさせない。真夜には自分が味わった苦しみと悲しみと同程度の絶望を与えないと自分がここまでやってきた意味がない。そのために自分はここまで来た。

なぜなら・・・真夜は自分との約束を破り、勝手に幸せになろうとしていたから。

だから自分は真夜を許さない。世界もろとも真夜の全てをメチャメチャに壊す。・・・それが彼女のこれから起こそうとしている最後の「復讐」であり、「願望」でもあった。

すやすやと気持ちよく寝て・・・あなたの大切なロモモを壊せば、一気に目が覚めるかしら？

リベリオンがそう考えた時。

「お姉ちゃんっ!」

とととととと・・・誰かが走ってきて、リベリオンの前で止まった。13歳くらいのビニールのレインコートをまとった少女だった。少女の名はスズ。いつもおどおどとしていてまだ幼くも見えるが、彼女もリベリオンの僕でマイナス七人衆の一人だった。

「スズ?どうしたの、そんなに慌てて?」

リベリオンが聞くと、スズは腰を折り、ぜっ、ぜっ、と呼吸を繰

り返して伝えた。

「す、すぐ司令室に来てください。プ、プ、プリキュアが戻ってきたんです！」

「・・・何？本当なの？」

「は、はい！」

「分かった。すぐ行く。みんなに伝えて」

スズが去ると、リベリオンは組んでいた足を崩してゆっくりと立ち上がり、そばの円形テーブルに置いていたヤマタノオロチのエネルギー生命体が封印されているペンダントを手に取った。

そして、ちら、と眠り続ける真夜に視線を送ると、すぐに司令室に向け、足を伸ばした。

リベリオンが司令室に到着するまで5分もかからなかった。司令室に集まっていた残りの七人衆の面々であるヨツバ、カノン、ツバキ、アキラはリベリオンの姿を確認すると即座に跪こうとしたが、リベリオンは「そのままでもいい」と言った。

「それよりプリキュアたちが戻ってきたという情報は真実なの？」

「はいはい。昨夜同様地上に降りようとするとところをカメラが捉えてましたよ。なんなら見ます？」

リベリオンの問いに答えたのは常に白衣を着、ぐるぐるメガネをかけているヨツバだ。彼女は各監視カメラが映している数多の映像モニターの前で車輪付きの椅子に座り、くいつ、とメガネを軽く上げた。

「剣は？伝説の剣は持ってたの？」

「ああはい。画像を拡大したら、キュアブロッサムの手とキュアマリンの手に両方とも確認できました」

「そう（キクとミチ、しくじったか？それとも別の邪魔が・・・？）

リベリオンはすぐに懐から懐中時計を取り出した。時刻は午後1

時を過ぎていた。

「あと5時間程度・・・・・・・・・・ヨツバ、あなたには本当に悪いと思うけれど・・・」

リベリオンが重い口を開こうとした時、

「分かっていますよ」

「何・・・？」

「いよいよ私のヤミちゃんたちをみーんな、動かすのでしょうか？もうどのくらい長く付き合っていると思っているんですか？あなたの考えなんて、お見通しですよ。私だけじゃない。みんな、あなたについていくと決めた時からとくに覚悟はできてるんですよ」

ヨツバが言くと、スズも、カノンも、ツバキも、アキラも、表情に笑みを浮かべてうなずいた。

「・・・ごめん、みんな」

「謝ることないですよ。むしろあなたには感謝してるんですから。世界に絶望していた私たちをあなたが拾ってくれなかったら、私たちは今日まで生きてこれなかった・・・・・・・・・・さあて、

カーニバルの始まりよ！行っけえっ、私のヤミちゃんたち！」

ヨツバが複数のモニターの下に取り付けられていた一際大きいスイッチを拳で思いつきり押しした瞬間。

カツツツ！！！！

巨大な空間で待機していた全てのヤミたちがいっせいに目を開いた。

ハピネスランドに降りて変身を解き、急いでアジトに戻ったつばみたちは見事神殿から手に入れた伝説のゴールドソードとシルバースードを見せ、敵の強襲にセレーネとジェアンヌが残ったことを伝えると、ふたつの剣をみんなに渡し、抜けるかどうか試してみた。ところが、誰がやっても剣はふたつとも抜けなかった。一応人間サイズに巨大化したキティにも試してみたが、長年皇族に仕えてきた

彼女でさえどんなに力を入れても剣は1ミリも手応えはなかった。

「どーなってるの？これ、偽物なんじゃないの？」

「そんなことないよ。確かに神殿の奥にあったやつなんだから！」  
剣を疑った咲にえりかが突っかった。

「でも咲さんがそう言うのも分かる気がするよ。ボクたちじゃないなら、てつきりここにいるみんなの誰かだと思っていたのに。予言に登場する“ふたりの勇士”って、プリキュアじゃなかったのかな？」

いつきが首をかしげると、「いいえ」とゆりが声を出した。

「予言に出てくる伝説の勇士がプリキュアなのはほぼ間違いないと思うわ。400年ほど前にヤマタノオロチを倒し、復活を阻止するために伝説の剣を作ったのが過去のプリキュアならきつとその剣を扱えるのもプリキュアのはずよ」

「だけど、みんな剣を抜けなかったのよ。私たちの他にプリキュアなんて……」

美希がそこまで言った時だ。

「いえ、まだ一人います！」

つぼみが声を張り上げ、全員振り返った。つぼみはこっちを見たみんなの顔をまじまじと見つめ、次の言葉を口に出した。

「みなさん、お忘れですか？このハピネスランドに、もう一人、別の世界から来た人のことを……」

「……？……真夜さんッ！！」「」「」

みんなは最初こそ頭に疑問符のマークを浮かべていたが、すぐに思い出したようでハッと互いに顔を合わせた。うらがが急いで発言した。

「そうです、真夜さんです！ハピネスランドには真夜さんも来ています！」

うららの後にくるみも続く。

「相手はあのキュアリベリオンだし、止められるとしたら、きつと真夜しかいないわ！」

だがここでりんが頭を掻きながら口を挟んだ。

「いやでも・・・みんな、よく思い出してよ。予言に登場する伝説の勇士は『ふたり』なんだよ。たとえひとりが真夜さんだったとしても、もうひとりとは一体誰なの？」

りんのもつともな指摘にみんな沈黙した。だが今度は今まで黙っていた妖精たちが口を開いた。まず最初にメツプルが言う。

「でももし勇士のひとりが真夜なら、今すぐ会うべきメポ！」

「そうミポ。こうしている間にも時間が迫っているミポ」

ミツプルも続いて言った。フラッピとチョッピもふたりの意見に賛成した。

「フラッピたちもそうすべきだと思うラピ。もう時間があまりないラピ」

「チョッピはあの娘が心配チョピ。ロモモのことも。いずれにしろ、早く助けに行つたほうがいいチョピ」

ココ、ナツツ、タルト、シフォンも自分たちの意見を述べた。

「きつと剣が抜けないのは何か理由があるココ！」

「時間が迫っている今はとにかく、自分たちに何ができるかを考えて行動に移すべきナツツ！」

「せや！どうせ遅かれ早かれリベリオンとは対峙するんや。それやったら、早いほうがええで！」

「プリップー キュアア」

・・・シフォンのは意見とは言わないか。

だが妖精たちの言い分に全員覚悟を決めたようだ。互いに表情を引き締めてうなずき合い、一番になぎさが言った。

「確かにメツプルたちの言うとおりだよ。こうしている間にも世界や真夜さんが危ないんだ。やろう。せめてペンダントさえ取り返せば『山田の音痴』は出てこないんだから！」

「・・・ヤマタノオロチでしょ。でもなぎさの言うとおり、ここは真夜さんを助けること、そしてペンダントを取り返すことに集中してやってみましょ？真夜さんを助ければ心強い戦力になるし、ペン

ダントさえ時間までに取り返せば少なくとも世界の破滅は免れるわ」  
「そうですね。じゃあ改めて昨日徹夜で考え抜いた作戦をもう一度確認してみましよう。ああ、つぼみさんたちは初めてでしたね。今から説明しますので、よく聞いててください」

ほのかが言った後でキティが作戦の内容を説明すると、えりかが「ええーっ!？」と声を出した。

「私たちが?そんなんで大丈夫なの!？」

「これが私たちの考え抜いた精一杯の作戦なんです。もちろん危険リスクは大きい。ですが、おそらくキュアリベリオンは全てのヤミを起動させて私たちを潰そうとするでしょう。ヤミは強いですが、目の前にいる者を敵と認知したら躊躇することなく破壊を実施するまさに猪突猛進型。これならばうまくいくと思うんです」

「でも、みなさんを囷にするようなやり方は・・・」

するとつぼみの両肩に、ラブとせつなが手を置いた。

「大丈夫。心配ないって。私たちは強いから・・・!」

「私たちのことは構わず、作戦が成功することのみを考えて精一杯やりなさい」

「で、ですが・・・」

するとつぼみが前に出て、にっこり顔でつぼみの手を握った。

「安心して。私たち、絶対に負けないから。今までだってピンチは何度もあったけど、ゼーんぶ乗り越えてきたんだもん。きっと今度もうまくいくよ。そうでしょ?」

「あ・・・」

つぼみの顔を見た途端につぼみは急に心配が解消された気がした。確かにこれまでも危機はあった。でも全て切り抜けた。それはみながみな、最後まで全力を出して戦ったからだ。如何なる強敵が相手でもみんな世界を守るために懸命に戦い、そして勝利した。それは仲間を信じる気持ちが強く、何よりもあきらめない心を武器にしていたからだ。だからだろう。今度もきつと負けない。その気持ちがつぼみからつぼみへと注がれていた。

本当に不思議な人。つぼみは正直に思い、そして微笑みを返した。彼女の表情を見て、のぞみは手を離し、お決まりのポーズを取った。「よし、これからみんなで真夜さんと世界を助けに行つくぞ〜、  
けつて・・・」

「みんな！大変よ！」

だかのぞみのお決まりの台詞は突如現れたファンに途中で切られる結果となった。

「なあに〜ファン？せっかく私が決めるところだったのに・・・」

「それどころじゃないのよ。キュアリベリオンが遂に動いたのよ！」

「~~~~ええっ!?!~~~~」

「本当ですか!?!」

キティが聞くと、ファンは急いでうなずいた。

「ええ。城からうじゃうじゃとヤミが出てきてる。まだ敷地内にいるけど、街に出てくるのも時間の問題よ」

「敷地にいるのでしたら、まだ間に合う。・・・みなさん！」

キティはプリキュアたちに振り返った。そして視線を下に向けて口を開けた。

「・・・本来なら、関係のないみなさんを巻き込んでしまい、本当に申し訳なく思います。ですが、ここまで来てしまった以上、みなさんも無関係と言えなくなってしまいました。全てはみなさんを巻き添えにした私の責任です。この木偶人形の私をどうか許してください・・・」

突然のキティの謝罪にプリキュアたちは最初驚いたが、すぐに優しく笑みをした。そしてえりかかつぼみが声をかけた。

「何言ってるの？世界の危機って時にもう関係も無関係もないよ。」

キティが現れなかったとしても、いずれ私たちも戦っていたよ。ね、つぼみ？」

「はい！それにキティさんは木偶人形じゃありません。一国のお姫様やお友達、そして国民のみなさんを大切に思い、そのために一生懸命に戦う勇敢な騎士です。私はあなたと一緒に戦えることを誇り

に思いますよ」

「えりかさん・・・つばみさん・・・ありがとうございます」

キティはふたりの言葉に感激したように頭を下げると、すぐに背を向けてアジトの入口へ向かおうとした。

「キティ！みんな！」

戦いの地へ向かおうとした全員にユカが後ろから大きく声をかけた。みな10歳の皇女に振り返った。

「あ・・・えつと・・・ぶ、武運を祈ってるから」

「ありがとうございます、ユカ様」

止めたのはいいが、その後はもじもじして小さく言ったユカにキティは笑顔で返事をした。すると、彼女の前につばみが来て、デステイニーミラクルライトを渡した。

「これはあなたが持つててください」

「え？でも、これは・・・」

「大丈夫。信じていれば、きっとあなたを守ってくれますよ。ここにいるみなさんをお願いしますね」

「・・・はい」

ユカはミラクルライトを受け取った。それを見たキティは即座に背を向き、扉を開いた。キティに続き、プリキュアたちもひとり残らず出て行く。彼女たちが去ったアジトでは心配そうに顔を窺う残りの妖精たちをよそにユカがぼつんと寂しげに立っていると、後ろから肩を叩かれ、彼女は弾かれるように振り向いた。

「よ、よう。お姫様」

そこにいたのはダイチだった。

「ダイチさん・・・」

「本当はお姫様も一緒に戦いたかったんだろ？」

途端に単刀直入に聞くダイチに、ユカは一瞬で言葉を失う。

「凶星だな？」

「・・・どうして分かったの？」

「自分も何かしたい、でも何をやればいいのか分からないってやつ

の顔は大抵お姫様と同じ顔をしている」

「・・・そうなんだ。私、そんな顔を・・・」

ユカは元気をなくしたような声で言った。

「・・・ダイチ、むしろ木偶なのは私のほうだよ。私は皇女だけど、あなたのような民一人も救えないもの。むしろ私が持っていたペンダントが全ての世界を滅ぼし、みんなを殺してしまふ。・・・だけど、私は皇女だから、いつもキティや兎羽に守られてばかりで戦うみんなの無事を祈ることしかできない。みんなが頑張っているという時に私はこんなことしかできないただのお飾りだよ」

「そうかな？俺はそうは思わない」

「え・・・？」

「人にはそれぞれその人にしかできない役目ってのがきつとあると思うぜ。おまえにはおまえの、俺には俺しかできない役目ってのがさ・・・そうだろ？みんな！」

ダイチが後ろを振り返って言った。すると、部屋の奥からアジトに隠れ住んでいた民たちが手に武器を持って続々と現れ始めた。

「なんだ気づいてたのかよダイチ。おまえも人が悪いな」

「隠れ方が悪いんだ。特におまえはすぐ分かったぜ、シヨウ」

「ダイチ、はいこれ。作つといた閃光弾、数が少ないから無駄にするなよ」

「悪いなマナブ。これで少しはヤミを倒せるぜ。おまえはここで待ってるよ」

「ねえダイチ。これで大丈夫かなあ？」

「これ斧？かゝつ、どっから見つけてきたんだよノリアキ・・・」

「な、何？みんな、もしかして戦うの？」

皇女の問いにダイチは「ああ！」と返答した。

「俺たちの国なのに、プリキュアに頼りっぱなしにはいかないからな。俺たちも戦いに行くぜ。せめて父さんと母さんたちは助けたい。俺は他のアジトにもみんなが戦いに出たことを伝えた後で行くから・・・」

そう言つて、彼も背を向けようとした時。

「待つて！お願い、行かないで」

と、ユカはダイチの手を握つた。ダイチは振り返つたが、

「ごめんな、お姫様。俺もみんなももう隠れて暮らすのは嫌になつたんだ。どうせあと少して世界が終わるんなら、せめて戦つて終わりたい。それに今言つただろ？俺には俺の、おまえにはおまえにしかできない役目がある。きつとそれはすぐに来るさ。……長老たちを頼むぜ」

ダイチは笑つて手を離すと、男たちと混じつてアジトを出た。

ユカは、ただ呆然とミラクルライトを握り締めたまま妖精たちとともに見送るしかできなかった。

決戦（後書き）

次回、プリキュアVSヤミ軍団！

## 危機

約五百以上の戦闘型の自動人形オートマトン・ヤミは巨大な檜の木の扉がパツと開くと同時に全員片足を前へ踏みだした。足を地に戻すまでのその動作、リズムもタイミングもスピードも寸分の狂いなく全て正確しかしそれゆえに一寸の乱れなく無表情で行進し続ける彼女たちの姿はそこはかとなし恐怖を与え、不気味に感じさせる。蟻の巣から這い出てくるかのように圧倒的集団で城から続々と現れるヤミたちはそのまま一直線に約200メートル先にある巨大な城門へと向かう。そして一人目が出てきてから30分が経過し、ようやく城門の前に到着しようとしたその時。

「……プリキュア!」「……」

「……マーブルスクリュー!」「……」

「……ツイン・ストリーム!」「……」

突如城門の向こうから聞こえた声に、ヤミたちは一瞬で足を止めた。そして次の瞬間。

「……マックス!」「……」

「……スプラアアツシュ!」「……」

城門が撃破され、二つの光線が勢いよく発射された。当然城門の前にいたヤミたちはよける間もなく光線を浴び、断末魔の声をあげる間さえもなく浄化された。浄化から逃れたヤミたちがすぐにもう一度城門を見ると、

「光の使者、キュアブラック!」

「光の使者、キュアホワイト!」

「輝く命、シャイニールミナス!」

「輝く金の花!キュアブルーム!」

「煌く銀の翼!キュアイーグレット!」

の5人が破壊された城門に立ち、目の前にいる無数のヤミたちに強い眼差しを向けていた。5人の姿を見た途端、ヤミたちは彼女た

ちが城門の外から必殺技を放ったのだと理解することもなく、ただ現れた敵に対して直ちに戦闘の態勢を取った。ひとりがいつものように台詞を言い始めた。

「伝説ノ戦士プリキュアヲ確認。破壊ス・・・」

ドゴオツ！

が、鈍い音が響き、彼女は台詞を最後まで言うことなく吹っ飛ばされることとなった。ブラックがすぐさま駆け出して彼女の身体に弾丸よりも早い一撃を与え、大きく殴り飛ばしたのだ。

「だだだだだだだだだっ！」

ひとりを殴り飛ばしたブラックはすぐに次のヤミを背中から地に叩きつけ、両腕で防御を取った次の相手にありったけの鉄拳を与え続けた。ブラックに続いてホワイト、ルミナス、ブルーム、イーグレットも戦闘に入った。ホワイトが高速回転キックで蹴り倒し、背負い投げで飛ばすと、ブルームは精霊の力を込めたパンチとバリアで吹っ飛ばし、イーグレットも同様に精霊の力を溜めたかかと落として続々と撃破した。突然の奇襲にすぐに戦闘に入るのが遅れたヤミたちだったが、さすがに数の差が圧倒的に違う。即座に周囲にいるヤミが4人のプリキュアに黒い光球を発射しようと片手を伸ばした時、

「ルミナス！ハーティエル・アンクション！」

いつの間にか上空に跳躍していたルミナスがハーティエルバトンから技を発動し、ヤミたちの動きを一瞬で制御した。手どころか指の一本さえも動けないヤミたちに、

「…………プリキュア！…………」

今度は後ろのほうから声が聞こえ、

「シューティングスター！」

「ファイヤーストライク！」

「プリズムチェーン！」

「エメラルドソーサー！」

「サファイアアロー！」

ピンクの流星に炎のサッカーボール、光のチェーンと巨大な緑の円盤、そして無数の水の矢が次から次へと直撃した。他のヤミたちが急いで振り返ると、

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじけるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

の6人がやはり同様に強い視線で立っていた。新たな襲撃者の出現にヤミたちはすぐに身体の向きを変えていつせいに走り出したが、  
「ここは私に任せて」

ローズが前に出て、ミルキイパレットを手を取った。

「邪悪な力を包み込む、煌く薔薇を咲かせましょう！ミルキイローズ・メタルブリザード！」

の台詞とともに銀の花吹雪を飛ばし、向かってきたヤミたちをみな巨大な銀の薔薇の中に封じ込め、浄化した。

キュアピーチたちも奇襲を仕掛け、戦闘にすぐさま入った。

「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ！」

「ブルーのハートは希望の印！つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ！キュアパイン！」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッション！」

まずは名乗りをあげると、ピーチ、ベリー、パインは素早くキュアステイックを手を召喚し、

「キュアプリキュア！」

「ラブサンシャイン！」

「エスパワー！ルシャワー！」

「ヒーリングブレイヤー！」

「フレイエツシュウ！！」

相手が攻撃に出るよりも先に技を発動して数人を浄化した。パッションもパッションハープを手に持ち、

「プリキュア！ハピネスハリケーン！」

の声とともに身体を回転させてハートの嵐を巻き起こし、かなりの数を浄化する。そして攻撃に一瞬でもひるんだ隙を突いて、まだ数多くいるヤミたちへ走り出し、拳や蹴りなどの打撃技に入った。

プリキュアたちの戦いは複数のモニターを通して司令室にいるリベリオンたちに伝わっていた。リベリオンをはじめ、みな声を漏らすことなく戦況を静観していたが、どうしても静かにしていられない人間がただ一人。

「あんの女どもおっつ！私のヤミちゃんを次々とぶっ壊しやがつてえっつ！」

ヤミを開発し、量産にも成功に導いた第一人者、ヨツバである。いつもかけているぐるぐるメガネのせいか表情は分かりにくい、ぎりぎりど親指を噛み、身体がふるふる震え、明らかにキレかけていると理解できる。そんな彼女の様子に少々視線を飛ばしながらもツバキが腕を組んで気になったふうに言った。

「しかしそれにしてはプリキュアの方たちは何を考えているのですよ？確かに正面からまっすぐに敵に挑むヤミに奇襲は弱いタイプですが、圧倒的数の前では奇襲後はほぼ正面突破ですね。．．．もしかしてこの戦い自体に彼女たちの策が仕掛けられているのでしょうか？」

すると野球帽を被ったアキラが鼻から笑い飛ばした。

「んなワケねえって。考えすぎだよ。ヤミがこんなに出てきたんだから、ヤケになったんじゃないかねえの？もう時間もあまりねえしよ。なあ？そー思わねえ？」

「え？私？私は、えっと．．．」

「答える必要、ない」

アキラはそばに立っていたスズとカノンに言ったが、スズは突然声をかけられたのに驚いて言葉が詰まり、カノンはフランス人形を胸に抱いたまま少し不機嫌そうにそっぽを向いた。すると、ふたりの代わりにリベリオンが「いいえ」と答えた。

「ツバキの言うとおり、私もプリキュアがただ単に真正面から数百のヤミに戦いを挑んでいるとは思えない。それに……さつきから一組だけ姿が未だに見えない」

次の瞬間、顎に手をやって考え込んでいたりリベリオンの表情が変わった。彼女はすぐに視線をモニターを凝視して低くうなづいていたヨツバの背中に向け、命令を発した。

「ヨツバ！すぐにモニターを操作して映像を切り換えまくって！」

「え？え？急にどうしたんです？」

「いいからメチャクチャにやって！」

「は、はい！」

ヨツバは慌ててモニターを操作し、敷地内に仕掛けていたカメラの映像の切り換えを行った。プリキュアやヤミたちを映していた映像が一瞬のうちに次の映像に切り換えられ、また別の映像に映る。ランダムに切り換えられていくモニターの映像をリベリオンはしばらく眺め通していたが、

「止めて！」

と突然声を発し、ヨツバは操作をやめた。リベリオンは足を組み、再び顎に手をやると、

「やはり思ったとおり……一番右下を見なさい」

と呟き、全員彼女が言った右下のモニターに注目した。

「あ、あいつら、いつの間にならぬ？」

途端にアキラが驚愕の声を出した。

そこに映っていたのはリベリオン城の真上に飛来していたキュアブロッサムたちの映像だった。全員マントを身にまとい、ブロッサムの手にはゴールドソード、マリンの手にはシルバーソードが抱え

られているのが見え、さらにムーンライトの肩にミニサイズ化したキティの姿も確認できた。ブロッサムたちは決死の表情でリベリオン城を見下ろすと、マントを翻し、一気に急降下をし始めた。

「お、おい！キュアリベリオン！？」

アキラが慌てて振り返ると、リベリオンはすました表情で頭に手を当て、軽いため息を吐いた。

「なるほど。正面突破しているように見えるプリキュアはヤミだけでなく、おそらく様子を窺っているだろう私たちの目もごまかすための囷。私たちが戦いに注目している隙を狙って別のチームが城内に侵入してこの私のもとに辿り着こうという算段なわけね。あの人形も一緒なのはおそらく城の内部をよく知っているから。これだけ接近されたら、もう迎撃は間に合わない。城の中で迎え撃つしかない。完璧にやられたわ……」

なんて、言うと思った？

リベリオンは、パチン、と指を鳴らした。すると。

ぬふううっ、と急降下していたブロッサムたちの目の前にとつもなく巨大な黒い「手」が出現した。

「……え？」

一番前を飛んでいたブロッサムがその声を出した次の瞬間、「手」は大きく握り拳を作り、彼女たちをひとり残さず一気に殴り飛ばした。

「……きゃあああああああつっ！！」「」「」

その圧迫力に一瞬で上空から地上へ叩きつけられるブロッサムたち。しかも彼女たちが激突した場所は、ヤミたちのド真ん中だった。

「大丈夫ですか！？」

すぐさま立ち上がり、小さな身体ながらも懸命に声をかけるキティ。ブロッサムとマリンは身体に激痛に走ってうめきながらもそれでも離さなかった剣を抱え、サンシャインとムーンライトも両足を震わせながらも立ち上がった。

メキメキツ、と音が轟いた。振り返ると、さっきブロッサムたち

を殴り飛ばした巨大な黒い「手」の周囲でさらに二本、地中から芽が出てきて茎を伸ばすかのようにまた手が生え、長い手首をぐんにやりとねじらせた。ブロツサムたちはその「手」を前にも見たことがあった。キュアリベリオンが地面から自由自在に生やして操る悪魔の手だ。ワンダー・プラネットで戦った時、プリキュアたちはその悪魔の手に何度も苦しめられたのだ。そして今、再び現れた悪魔の手は三本とも城の玄関である巨大な櫓の扉の前に生えている。まるでここから先は一歩も通さん、と言うかのようなだった。

「みんな、大丈夫？」

傷ついたブロツサムたちにブラックが駆けつけた。彼女に続いて他のプリキュアたちも駆けつけた。みな身体に傷を負い、息が荒れている。奇襲を仕掛けたとはいえ、やはり一体でも戦闘力の高いヤミを複数も相手にするのは相当骨が折れるようだった。まだまだ数が圧倒的に多いヤミたちを見渡し、プリキュアたちはとにかく一塊になって身構えた。しかし完全に包囲され、眼光の強さを衰えさせぬともやはり額から汗が流れずにはいられなかった。ぐっ、とキティが声を漏らした。

「みなさん、申し訳ありません。作戦は失敗です。まさかキュアリベリオンがあんな能力も持っていたとは……」

「もうここまでなの……?」

ベリーも一筋の汗を流しながらあきらめに似た声を出した。だが、ここでブロツサムが精一杯の声を張りあげて叫んだ。

「あきらめてはいけませんっ！とにかく前に進むんです。お城まであと少し……一人でも中に入れたら、まだ希望はあります。私たちの世界と未来、その両方を失わないためにも、私たちは最後まであきらめずに戦わなくてはなりませんっ!!!」

「その通りだよ」

その時だった。彼女の頭上から聞き覚えのある声が降ってきたのは。

「えっ？」

ブロッサムも、みんなも、上空を見上げた瞬間。

まばゆい閃光・・・しかし優しく温かいヒカリが流星のように降り注いだ。

ヒカリは途中で六つに分かれ、プリキュアたちの行く先を阻んでいた悪魔の手に三本とも、次々に衝突した。一気に六つの衝撃を受けて塵と化するように消滅しながら横様に倒れていく悪魔の手。そして三本とも完全に倒れた瞬間、土煙が襲い、プリキュアたちは目を瞑った。が、それもすぐに晴れていき、彼女たちは閉じていた目を開いてもう一度前方を見た。やがて土煙の向こうから6人の少女のシルエツトが浮かぶ。まさかと思い、ブロッサムが目を凝らしてよく見ると、土煙が完全に晴れ、彼女は感激の声をあげた。

「あ・・・ああっ！みなさんはっ！！」

そう。そこに颯爽と立っていたのは。

「希望照らす勇気の火、キュアバースト！」

「穢れなき光映すは純真な心、キュアミラーージュ！」

「溢れ出す熱き魂、キュアスピリット！」

「希望司る風と雷の戦士、キュアテンペスト！」

「勇気司る炎と氷の戦士、キュアブレイズ！」

「二つの力の戦士！ダブルフォースプリキュア！」

そして、ラストを華麗に飾るのは、やはり彼女。

「救済と新生を司りし閃光・・・キュアエルス！」

## 危機（後書き）

次回、オリジナルプリキュアたちの本気ってやつはここからだ！



思わず呟いたキティの問いに答える声が横から聞こえ、彼女は振り向いた。するとそこには得意げに笑みを浮かべて腰に手を当てているファンが宙に浮いていた。

「ファン？ どうしてあなたが？」

「私もいるわ」

すぐ視線を下に向けるとディアーナもいた。ふたりはキティから一旦少し離れると、一瞬で身体を変化させた。ファンは巨大な両翼を広げ、誇り高き炎の戦士と穢れなき純真な天使の血を受け継ぐ人間サイズの姿。ディアーナは気高き鏡の騎士と優しき月の住人の血を受け継ぐ少女の姿。突如本来の姿に戻ったふたりに、キティは最初意図が読み取れなかったが、すぐに理解できたようで両目を見張った。

「まさか、あなたたち・・・！」

ファンはうなずいた。

「戦うよ、私たちも」

「何を考えているんです！？ 別次元から来たあなたたちがこの国で本来の姿を保てるのはわずか・・・」

「国を守るためにみんな頑張っているというのに、私たちだけが何もせずにいられるわけじゃないじゃんっ！」

「！・・・」

ファンの言葉に、キティは何も言えなくなった。すると今度はディアーナが言った。

「キティ、ごめん。勝手なのは承知している。でも兔羽ちゃんもろまんちゃんもいない今、私たちも何かの役に立ちたいの。お願い。体に限界が来たら、すぐ猫の姿に戻るから」

キティはディアーナが言い終わると同時に目を閉じて軽くため息を吐くと、すぐに開いた。

「ここまで来てしまつたら、仕方ありませんね。では、私たちが城に到着するまで援護をお願いします」

「「分かった！」」

そしてプリキュアたちに振り向き、

「みなさん、このまままっすぐ突っ込みましょう！」

「……うん……！！」「……」

と声をかけ、みなりベリオン城を目指して走り出した。プリキュアたちが城に向かっていていることに周囲のヤミたちが気づいてすぐに後を追おうとしたが、

「おっと、ここから先は……」

「私たちが相手よ！」

と、テンペストとブレイズが颯爽とヤミたちの前に着地し、ふたりは専用武器のテンペストスタッフとブレイズソードを手に召喚した。

「破壊スル！」

の声とともにひとりがテンペストに素早く近づいて鋭い蹴りを仕掛けたが、彼女はさらりとかわすと、

「破壊されるのはおまえだ！プリキュア！テンペストストライク！」  
風と雷のエネルギーをまとったスタッフで逆に粉碎した後、

「プリキュア！テンペストストリーム！」

さらに狙いを周囲に定めて強力に溜め込んだエネルギーを発射し、ヤミたちを数人、一撃で浄化した。

「もつもう、テンペストつたら、国民に当たらなかつたからよかつたものの……でも、私も負けてられないわね」

ブレイズもソードを構え、向かってくるヤミたちにへ走り出した。

「プリキュア！ブレイズスラッシュ！」

炎と氷のエネルギーを刀身に込めてヤミを次々と切り伏せ、紅蓮の炎に封じ込めたかと思うと、直後に彼女たちを氷結させ粉碎した。  
「プリキュア！ブレイズスクリー！」

そして同様に彼女も狙いを目の前に定めて強力に溜め込んだエネルギーを一気に浴びせ、ヤミを複数浄化した。

「やったね！」

テンペストが駆けつけ、笑顔で片手を挙げる。それを見たブレイ

ズも微笑んで手を挙げ、ふたりはハイタッチした。

スピリットも専用武器・フィシカルグローブを召喚した。片手のみ装着される鋼鉄のように強固な銀の長手袋だ。彼女はそのまま手袋に力を込めて拳を作り、そして敵に向けて一直線に勢いよく伸ばして喉の奥から声を振り出した。

「プリキュア！スピリット・ウインド！」

刹那、手袋を装備した拳から竜巻が発生し、ヤミを複数、吹き飛ばした。ヤミたちを吹っ飛ばしたスピリットは直後に背後から襲ってきた自動人形をふたり、その鉄拳で粉碎した。

ミラージユも専用武器・ジュエルミラーを手に召喚した。宝玉が裝飾された円形の鏡のようだが、彼女は鏡を高々と掲げると最大限にエネルギーが溜まったのを感じて言い放った。

「プリキュア！ミラージユ・レイ！」

すると鏡から朝日が昇ったかと思うほどのまばゆい閃光が放出され、ヤミたちに浴びせられた。光を浴びたヤミたちはみな瞬時にひし形の鏡のような物体に封じ込められたかと思うと、直後に色とりどりの光の粒と化して消滅した。

バーストも紅の扇の形をした専用武器・バーストファンを両手に召喚した。そしてヤミたちに包囲されている中、扇に炎をまとわせ、華麗に身体を回転させ始めた。

「プリキュア！バースト・ストーム！」

ある程度炎のエネルギーが溜まったのを確信した次の瞬間、彼女は扇を素早く翻し、周囲に炎の旋風を巻き起こした。あつという間に炎の風がヤミたちの身体を襲い、一瞬で砂と化せる。バーストは回転をやめ、開いた扇の一つで隠すように口に当てると、

「私の炎を恐れぬと言う者だけ来い！私は逃げも隠れもせんっ！」  
と宣言した。

一方、彼女たちのリーダー格にも近いエルスは、

「プリキュア！ライジング・クラッシュ！」

電撃を溜め込んだ蹴りをひとりに浴びせた後、専用武器・ライト

二ングロットを召喚してエネルギー弾を次から次へ発射し、敵を鮮やかに倒していた。だが、ひとりが彼女の攻撃をもとめせず、両手で捌きながら高速で接近してきているのが目に映り、エルスは急いでロットを剣の形に変えた。

ガキンッ！

直後にエルスの剣とヤミの鉄拳が激突し、火花が散る。両者は互いに相手の姿を捉えたまま一旦離すと二度三度もぶつけ合い、一歩も退かなかつた。だが四度目が衝突した瞬間、一瞬ひるんだ相手の隙を突き、エルスはヤミの腹部に蹴りを叩き込んだ。そしてすぐに相手から距離を取り、刀身にエネルギーを溜め始めた。

「プリキュア！ライト二ング・スラッシャー！」

そして剣を大きく振りかざして素早く相手の身体を斬り裂いた。

瞬間に起こる爆発。炎と煙がキノコに似た形となって空に高く上がり、爆風が周囲に広がる。エルスは爆風に耐え抜くと、その後も襲いかかるヤミたちを華麗な剣捌きで斬り倒していった。

思いもよらぬ援軍の活躍もモニターを通して司令室に伝わっていた。リベリオンとカノンのふたりのみが表情を変えないままモニターを見つめていたものの、残りはさすがに動揺を隠せないようで額から汗が一筋流れ出ていた。

「プリキュア……何人いるってんだよ」

野球帽の下から覗いたアキラが思わず呟く。だが、それ以上に動揺していた人物がいた。

「キュアリベリオン……私に出撃の許可を」

ヨツバである。彼女は椅子から立ち上がるとぐるぐるメガネを外して三つ編みを解き、上質なウェーブのかかった長髪を露にして振り返った。彼女の素顔を見るのはリベリオンも初めてだったが、モデルとしてデビューしても十分輝けそうと素直に感じてしまっそうなほど端正な顔立ちで、美人だった。しかし、その表情をよく見る

と眉がぴくぴくと微動し、瞳がかなりギラついている。あ、キレたなこりゃ、と誰もがその顔を見て分かった。ヨツバはリベリオンの前まで歩むと、跪いてもう一度言った。

「お願いします。私に出撃の許可を。これ以上、私のヤミちゃんたちが壊されていくのは見てられませんか」

「・・・アテはあるの？」

「はい。この日のために開発した物があります」

そう言うと、彼女は白衣のポケットから何かを取り出した。それは一本の注射器で、中に黄緑色の液体が入っていた。

リベリオンは懐中時計を見た。時刻は2時を回っていた。彼女は時計を懐に戻し、跪いているヨツバに口を開いた。

「分かった。任せるわ」

援軍のおかげでプリキュアたちは城の玄関である巨大な櫓の扉の前にようやく到着した。扉は閉まっていた。

「よし、みんな、扉を開けたら一気に上まで・・・」

走ろう、とブラックが言いかけた時。

ギイイイッツ・・・。

触れてもいないのに、扉が開き始め、ブラックは「へ？」と目を点にした。

「え？え？これ、もしかして自動ドア？」

「そんなわけないでしょ」

ブラックのポケにホワイトがツッコミを入れたその時、扉の奥から誰かが現れた。

「まさかキュアリベリオン・・・？」

ドリームが思わず声を出し、みんな一瞬身構えたが、違った。現れたのはリベリオンではなく、17歳くらいの美少女だった。彼女はトリアスロンの競技で見られる黒のウェットスーツに酷似した服を着用し、なぜか片手に注射器を握っていた。彼女はプリキュア

たちを見ると、

「これはこれは初めまして、プリキュア。私はキュアリベリオンの忠実なる僕、ヨツバと言います」

「キュアリベリオンの・・・？さてはマイナス七人衆の一人・・・

！」

キティが警戒の声を発し、プリキュアたちは再び身構えた。するとヨツバは握っていた注射器を目の前まで持ち上げると、たらりと汗を流しながら言った。

「この薬品、効果が保てるのはせいぜい30分。しかも使用後は想像以上の疲労が襲い、最悪の場合死にも至る可能性も。・・・しかし、どうせあと数時間でみな死ぬ。ならばこのヨツバ、愛しき娘たちを守るためにも戦うことを選ぶ。うああああああっっ！！！」

そして彼女は針を首筋に差し込み、液体を自身の身体の中へ注入した。突然の彼女の行為に驚くプリキュアたち。注射器を手から離れたヨツバは一瞬項垂れたが、

「うおおおおおおおおおおおっっっっ！！！！！！」  
すぐに顔を上げ、男とも女とも区別のつかない咆哮を轟かせた。

すると次の瞬間、彼女の身体に異変が起こった。透き通っていてしなやかだった肩や腕に筋肉が付き、目は両方とも白く剥き出した状態となつて頬や額に歌舞伎役者のような紋様が浮かび上がる。顔には所々血管が浮かび上がり、別人のように豹変した彼女は己の肉おのれ体を白く剥いた目で眺めると、

「素晴らしい。さすが私。毎日徹夜した甲斐があったというもの」

と自画自賛し、プリキュアたちのほうを向いた。豹変した彼女に驚きながらもプリキュアたちは臨戦態勢を崩さなかったが、ヨツバはすぐに彼女たちから視線を外した。

「本来ならおまえたちも叩きのめしたいところですが、まずは・・・

」

次の瞬間、ヨツバは高く跳躍して前方へと跳んだ。ハッとプリキ

ユアたちが振り向くと、そこには・・・。

「あ、危ないっ！」

「えっ!?!」

ブロッサムが叫び、エルスが振り向いた瞬間、彼女の目の前に突如ヨツバがズウンツ！と地響きをたてて降り立った。突然の乱入者にエルスが驚くと、ヨツバは彼女の腹部に素早く手をかざし、「はっ！」と声を出すと同時に衝撃を放った。

「きゃああああああああっっ!!」

衝撃に耐えられず、吹っ飛ばされるエルス。彼女は背中から地面に叩きつけられた。

「エルス！」

「このっ！」

テンペストとブレイズが武器を構え、すぐに攻撃を仕掛けるが、ヨツバは一瞬のうちにふたりの背後に回ると、

「はっ！」

「うああっ！」

「きゃあああっ！」

と両手を背中当てて衝撃を発生させ、吹き飛ばした。その後すぐに俊敏な動きでスピリット、ミラージユ、バーストを翻弄した直後に殴り飛ばし、足を震わせながらも立ち上がったエルスに再び接近しようとした瞬間。

「ぬっっ・・・！」

彼女は突如身体を絡みついたヨーヨーに似た武器に動きを封じられた。束縛された状態で振り返ると、そこには人間サイズに巨大化し、変身を遂げたドールキティが専用武器のライトスピナーを両手に握り締めて立っていた。そばにはファンとディアーナもいて、ヨツバに鋭い視線を送っている。ドールキティは背後にいるプリキュアたちに振り返らずに叫んだ。

「みなさん、私はここに残ります！みなさんは早く城へ！上を目指して走ってください！」

「分かりました！キティさんも気をつけて！」

ブロッサムが答えるとみんなは扉から城内へ次々に突入した。ドールキティはヨツバに目を逸らさぬまま強い口調で言った。

「ここは私が相手です！代々皇族をお守りしてきた騎士人形の誇りにかけて、あなたを倒します！」

「人形ごときが面白いことを言いますねえ・・・」

ヨツバは、ドールキティに振り向いたままにんまりと笑った。

男たちのほとんどが去ったアジトの一室ではユカが沈んだ表情で椅子に座ってミラクルライトを握り締めていた。そばに妖精たちがいるが、どう声をかけたらいいのか分からない。はあっ、とユカがため息を吐いた時。

「ユカ様、ちよいとよろしいかの？」

と声が聞こえ、彼女は振り向いた。視線の先にはヒシが立っていた。

「おじいさん・・・」

「何やら沈んだ顔をしているのう・・・どうされました？この年寄りでよければ聞いてよいかの？」

「はあ・・・」

彼女は気のない返事をした後で自分の無力さやダイチから聞いた話を語った。全てを話し終えると、ヒシは長い髭をなでながら言った。

「ふうむ。なるほど。確かにダイチの言うことも一理ある。人にはそれぞれ必ず役目というものがあるもんじゃ。もちろん、ユカ様にももの・・・」

「でも、私にどんな役目があると言うの？私、分からないよ。みんな戦っているというのに、私も何かしたいのに、何もできない・・・こんな嫌だよ」

「・・・では、行きなされ」

「え？」

長老の言葉に10歳の皇女は顔を上げた。長老は穏やかな目で見返した。

「人には必ず役目がある。しかし、ここにいればその役目が必ずしも来るとは限らん。もしユカ様が何かしたいと思うのなら、すぐにも行動に移すべきじゃ。もしかしたら、そうしたほうが自分の役目が容易く見つかるかもしれん。行きなされ。後悔するのならば、何もやらずに後悔するよりも何かをやって後悔したほうがまだいいじゃろう？」

「おじい・・・さん・・・」

ユカが呟くと、ヒシは優しい笑みをした。すると、

「ルル！ルルンも一緒に行くルル！ルルンもプリキュアたちの力になりたいルル！」

「ココも行くココ！一緒に戦うココ！」

「シロップも気持ちは同じロプ！」

「ムープも力になりたいムプ！」

「フープもフプ！」

「よっしゃ！ほなみんなで行くで！」

妖精たちも笑顔で声をかけ、ユカを励ました。

「みんな・・・！」

ユカは自然と顔から笑みが溢れた。ヒシは皇女の表情に満足げにうなずくと、

「さ、早く行きなされ。ただ、命を投げ出すようなことだけはせぬようにお願いしますじゃ・・・」

「はい！ありがとうございます！」

ユカは長老に元気よく返事をする。妖精たちとともに部屋を出て行き、外へ向かった。

真夜は薄目ながらもようやく意識を取り戻した。

目の前にはパートナーのロモモが横たわっている。しかし、パートナーは少しも動かなかった。

ロモモ……。

真夜はパートナーの名前を呼ぼうとしたが、口が思うように動かなかった。口だけではない。身体全体が重くて力が入らず、指一本さえも思うように動かせない。

ダメだ……身体が重くて少しも動かせない。

真夜がそう思った時だ。グルルル……と唸る声が聞こえた。嫌な予感がして視線をわずかに動かすと、暗がりから黒い凶犬が五匹、牙と歯茎を剥き出しにしながらのっそりと出てくるのが目に映った。ゾクツ、と身震いが起こる。凶犬は足音を出すこともなく倒れている真夜とロモモに静かに接近すると、まず一匹が、はっ、はっ、と舌を出した状態でロモモの前で止まった。そして獲物だ<sup>エサ</sup>というかのような眼光を放ち、よだれが溢れた口を大きく開き始めた。

やめて。ロモモを食べないで……。

そう言いたい、一言も声が出てこない。唇を噛む力さえも出ず、自分はなんて無力なんだろうと不甲斐なく感じた。

ロモモの小さい身体を噛もうとする凶犬の牙が徐々に近づく。やめる。なんとか気力を振り絞り、真夜が声を出そうとしたその時。

ダウンツツ！

銃声が響いた。

ぎゃんっ！と鳴いてロモモを食べようとした凶犬が一瞬で破裂し、消滅した。仲間の最期にすぐに反応して残りが銃声がした方向に振り返り、敵意を露にして激しく吠えたてた。

何？何が起こったの……？

動けないまま真夜がそう思った時。

靴音が聞こえて、暗がりの中から誰かがゆっくりと現れた。

援軍（後書き）

次回はあの男、登場。

## 復活

複数のモニターの一つにドールキティと拳を交わえるヨツバの姿が確認できる。そして別のモニターに目を移し、ひたすら上を目指して階段を駆け登る19人のプリキュアの姿を見た直後、リベリオンはゆっくりと立ち上がった。

「キュアリベリオン？」

ツバキが振り返ると、リベリオンは声を発した。

「ここまで保てば十分よ。私も準備に入る。みんなは侵入者をお願い・ね」

「……はいつ!!」「……」

リベリオンの声に全員はすぐに跪いて返答をした。

リベリオンは一瞬なぜか哀しい目をしたが、すぐにスカートを翻して歩み出すと、暗がりの中へと消えた。

仲間を殺され、怒りを露にしている凶犬たちの前に現れたのは、ひとりの男だった。

男は黒い拳銃を片手に握り、黒い装甲を身にまとっていた。だが、暗がりから徐々に肩から上をさらけ出すにつれて真夜はわずかしき動かせない目を一瞬だけ大きく開いた。

男の顔は銀の髑髏それに煌いていた。なぜか頭部に白い山折帽を被っており、髑髏は帽子に手を当てた状態のまま殺気立っている凶犬たちの前に何の恐れることなく近寄ると、

ドゥンツッ!

素早く銃声を再び響かせて二匹目を破裂させるように撃破した。

二匹も仲間を目の前で殺され、残りの三匹が遂に殺意を剥き出しにして跳躍し、髑髏の男に跳びかかる。だが髑髏の男は鮮やかな銃捌きで銃弾を放ち、二匹をあっという間に消すと、

『SKULL! MAXIMUM DRIVE!』

機械音を響かせ、

「はあっ!」

の声とともに華麗な回し蹴りを最後の一匹に浴びせた。断末魔の声をあげることも許されずに壁に叩きつけられ、消滅した凶犬の最期を見届けた後、髑髏の男は動けない真夜に振り返り、ゆっくりと歩み寄った。

「お迎えが、来たのかしら……?」

おぼろげながらも真夜がそう思うと、髑髏の男は彼女の前で止まり、帽子に手をやった。そして帽子が取り外されて「S」の字に似た傷跡が一瞬見えたかと思うと、次の瞬間銀の髑髏がガラスの破片のように細かく飛び散り……その中から人間の男の顔が現れた。

年齢は推定40代後半から50代前半。眼光は鋭く引き締まっていた。男はわずかに目を開いている真夜を見下ろすと、膝を折り曲げて体勢を低くした。

「そして言った。」

「ざまあねえな。キュアリベリオンとかいうレディはそんなにも強かったのか?」

「あなたは……死神……なの?」

ようやく声を振り絞って真夜は男に尋ねた。ふっ、と男の口からわずかに笑む声が聞こえた。

「死神、か。そうかもしれないな。俺は本来ならこの世に存在するはずがねえ身だからな」

「私を……迎えに来たの?」

「……死にたいのか、レディ?」

「分からない……そうかもしれない。私は……過去に罪を犯した。本当なら……殺されても……文句は言えない身。だけど……このままだと……もうひとりの私が……また罪を犯す。どうすればいいのか全然……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると男はゆっくりとそばで倒れている口モモに手を伸ばし、その黒い指で小さな身体を優しく？むと・・・・・・・・真夜の両手に握らせた。

「え・・・・・・・・？」

真夜が訳が分からずにいると、男は穏やかな視線で口を開いた。

「答えはひとつだ。おまえの手で過去のおまえを止める。それしかねえだろ」

「それは・・そうだろうけど・・私は・・・」

「キュアリベリオンは過去のおまえなんだろう？やつを止められるのは『いま現在』のおまえにしかできないんだぜ。おまえはこのまま過去の自分が全ての世界をぶっ壊すのを黙って見ているのか？」

「だけど・・私は・・・」

「またあきらめるのか？」

「！・・・・・・・・」

「俺が昔会ったプリキュアはたとえ孤独でも愛する人や世界を守るためにあきらめず敢然と戦い続けていたぜ。そいつもこの世界に来ていて今も戦っている。そいつだけじゃねえ。他にもプリキュアが世界を守るために、そしておまえを救うために戦い続けている・・・  
・おまえはそんなやつらの想いに応えられないのか？おまえにとつて大切な友達フレンドなんだろう？」

「みん・・なが・・？」

「ああ。これ以上罪を数えたくなけりや、今からでも遅くはねえ。全力を出して過去の自分を止めてみせる。そして世界を崩壊から救ってみせる。・・・・・・・・最後まであきらめないのがプリキュアだろう？自分の背負った宿命つてやつをよく考えてみるんだな」

男は立ち上がると、手に持っていた山折帽を頭部にやった。再び男の顔が銀の髑髏に戻り、頭部に被せられる。髑髏の男はゆっくりと背を向けて歩き出した。

「待って・・・・・・・・あなたは誰？」

真夜が聞いた。髑髏の男は少しだけ彼女に振り向いた。

「俺の名は・・・仮面ライダースカル」

男がそう名乗った瞬間、真夜の視界がぼやけ始めた。

。  
。  
。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。

真夜はハッと目が覚めた。

すぐに上体を起こし、周囲を見回す。だが、誰もいなかった。

夢・・・？

そう思った。だが、すぐにそばで横たわっていたはずのロコモロが自分の両手の中にいることに気づいた。

夢じゃ・・・ない？

真夜は額に手をやった。男の言葉が蘇り、彼女は思わず眩いた。

「私が背負った宿命・・・か」

「ううん・・・」

するとロコモロも目を覚ました。パートナーは顔を上げて真夜と目が合つと、優しく微笑んだ。

「真夜ちゃん・・・」

「ロコモ・・・」

真夜は、きゅっ、とロコモを抱き締めた。

「ロコモ、今まで以上に厳しい戦いになると思うけど私、やっぱりあきらめたくないの。私の友達も全力で戦っている。だから私も最後まで全力を出していきたい・・・もう一度、私に力を貸してくれる？」

「もちろんロモ。真夜ちゃんのためなら、ロモも全力で戦うロモ！」

「・・・ありがとう」

真夜が礼を述べると、ロモモは煙を発生してペンダントに変身した。真夜は決意の表情でそれを握り締め、立ち上がった。

「プリキュア！セイント・リバーズ！」

声を発した瞬間、白い閃光が真夜を優しく包んでいく。彼女が光のガーデンで優雅に舞うと、白い羽毛が大量に身体に集まり、衣装が施された。天女をイメージさせる煌く純白の衣装。花が開くように裾が広がったスカート。白い薔薇があしらわれたリボン。銀に染まった長髪に水色のカチューシャが装着され、その上に薄く透き通ったベールが被せられた。最後に背中から六枚のシャープな翅はねが生え、彼女はパートナーが姿を変えたペンダントを首に掛けると、凜とポーズを決めた。

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！」

背後に強く優しい光が煌く。

「行くよ、ロモモ！」

「オツケーロモ！」

セイバーに変身を遂げた真夜はパートナーに声をかけると、颯爽と走り出した。

だが、彼女の行く方向には敵意を面に出している無数の凶犬たちが待ち構えていた。

今はリベリオン城と呼ばれているとはいえ、もとはハピネスランドのシンボルである巨城はとてつもなく複雑な構造をしていて厄介だった。ようやく階段が終わったかと思ったら、引き戸の陰とタペストリーの裏の隠しドアを探して見つけて通り抜け、再び階段を登り、廊下を通ってまた隠しドアを探して・・・の繰り返しで、ほとんど全員の足が鉛のように重くなった。こうしている間にも時

間は過ぎていく。とにかくドールキティに言われたとおり、みなはひたすら最上階を目指して前へ進んでいた。そしてまたも長く続く階段を息を切らしながら登り終えた途端、

「これは・・・！」

ドリームが声を出した。プリキュアたちの前には大広間があり、そこから先に四本の分かれ道が見えていた。

「どうしよっか、みんな？」

ドリームは振り返って、みんなに尋ねた。

「さすがに全員で風潰しふうみぢに当たっていくわけにはいかないわね」

「じゃあ、分かれるんですか？」

アクアが少し考え込んで呟くと、レモネードが聞いた。

「もしかしたら、罨かも・・・」

サンシャインが言ったが、

「でも、行くしかないよ！」

「ええ。こうしている間にも時間は進んでいくわ！」

「外で戦っているみんなのためにも、早く決めましょう！」

ピーチ、パッション、ローズが声をかけ、みんな強くうなずいた。

「じゃあ、私たちは一番右端を行くよ」

「私たちも！」

とブラックとブルームが言い、MHとS Sチームの5人が右の道に行くことに決めた。

「じゃあ、私たちはその隣！」

とドリームが声をかけ、プリキュア5チームの6人がその隣の道を。

「それじゃ、私たちはこの道を行くね！」

とピーチたちフレッシュチームの4人は左の道を。

「それでは私たちは・・・」

「最後の道に決まりだね！」

残った道をハートキャッチチームの4人が行くことに決定した。

チーム分けを決めたプリキュアたちにマリンは

「そうだ。みんなでさ、あれやろうよ！」

と声をかけた。みな不思議そうな顔を見ると、マリンは手を差し出し、

「こうやってさ、みんなで手を重ねるんだよ。そして気合をバッチリ入れとくんだよ。やろうよ！」

「おっいいね。みんなもやろうよ！」

ブラックが賛成し、みな集まり始めた。ドリームも張り切った声で「よし、気合入れまくるぞ〜！」

で言っただが、すぐにルージユに

「ドリームは気合の入れすぎで一緒にドジも移さないようにね！」

とイヤミを言われ、みんな声に出して笑い、マリンの差し出した手の上に次々と自分の手を重ねた。全員の手が重なったのを確認してマリンはニイツとはにかむと、

「それじゃあブロッサム、あとはよろしくね！」

と隣に立つブロッサムに言ったので彼女は慌てた。

「え・ええっ!? 私がですか? ええと、ええと、み・・・みなさん！」

ブロッサムはありったけの声を喉から振り絞って宣言した。

「私たちはたとえ離れてても、心はいつもともにあります。だから・

・だから、誓ってください! たとえどんなに辛い戦いになったとしても、必ず生きて・・・また会いましょうっ! ! !」

「「「「「おーっっっ! ! !」」」」」

みんなは声をあげて誓った瞬間に手を離れた。

そしてそれぞれが選択した道へと強い目で向き、戦いの地へ足を伸ばした。

## 復活（後書き）

次回はセレーネ&ジエアンヌVSキク&ミチに戻りますが・・・しばらく更新が遅れるかもです。

## 逆転

ハピネスランドにてリベリオン軍と民たちが全面衝突している中、伝説の剣が眠っていた天空の神殿の外ではセーラーセレーネとジエアンヌ、そしてマイナス七人衆のミチとキクの激突が長時間にも及んでいた。

「貴様らごときがキュアリベリオンに楯突くとは、百万年早いわ！」  
旧日本兵あるいは憲兵をイメージさせる服装のキクが素早い身のこなしで鋭いサーベルで斬りつける。セレーネは挑むような目つきで武器・セレーネロッドを両手で握り締めた。響き渡る金属音。キクはキラリと光るサーベルで、ひゅ、ひゅっ、と風を切りながら剣先を二度三度突き出した。とっさに鏡のバリアを作り、セレーネは刃を防いだが相手はかなりの使い手だ。接近戦は得意分野のようで、刃を飛ばしながら徐々に間を詰め、じわじわと焦りと恐怖を与えてくる。少しでも勝機を生むにはとにかく距離を取ることだとは分かっているのだが、セレーネが少しでもそう考えると、

「させるか！」

キクはさらに刃のスピードを増し、電光石火のように飛ばしてくるのだ。これでは辛うじてよけるかバリアでギリギリ防ぐかのどちらかで、距離を取る余裕など少しもない。

このままだと、いずれやられる。こうなれば、セレーネロッドの光で目をくらませて距離を・・・。

刃をかわしながらそう考えたセレーネは一瞬でも隙を狙って敵にロッドを向けようとするが、

「甘いわ！」

即座にキクは膝蹴りをセレーネの腹部に入れ、彼女がひるんだ一瞬に刀身を横様に素早く振りかざすと、びゅっ！と音と同時に太刀風を身体に浴びせた。

「ああああああああああっっ！！」

まるでムチのように強靱な風の刃に肩や腕、足などを斬りつけられるセレーネ。キクはさらに彼女に素早く接近すると、

キーンツ!

セレーネロッドを弾き飛ばし、金属音を響かせた。くるくるとロッドが舞い、天空の地に叩きつけられる。しまったと思った次の瞬間、剣先を喉元に突きつけられ、ぐうの音も言えない状態に追い詰められた。勝利を確信したキクは「ふん・・」と鼻を鳴らした。

「ロッドから光を放って目をくらませるとはよく考えたなと言いたいが、所詮私の前ではおまえの考えなど、全て無意味だ」

「どうして私の考えが?・・・!!・・・まさか、あなた」

「ほう・・瞬時に閃くとは頭もいいな。しかも正解だ。その通り、私は人の心が読める千里眼さ。手に取るように分かるおまえの考えや策はこの私には通用しない。実行に移す前に殺れば、いいだけのことだからな」

「悪趣味ね」

「ふ、確かに。だがこんな忌まわしき力もあと数時間程度で私や世界とともに・・」

「え?」

セレーネが思わず声をあげると、キクは一瞬ハツとしたように片手で口を抑え、頬も少しだけ桃色に染まったが、すぐに首を左右に振り、平静を装って話を変えた。

「・・・ハピネスランドはもろかったな!」

「!」

「巨大国家にしては城も街もちょっと手を出した程度で面白いほど燃えた燃えた。幸せに満ちていた国を絶望と恐怖に叩き込んでいく光景はまるで玩具を壊すようにあっけなかったわ。所詮、見かけ倒しのちっぽけな存在だったのだな。民も王もおまえもな!」

「・・・あなた・・・言っではいけないことを言っただわね・・・  
・・・・・!!」

その台詞が、セレーネの逆鱗に触れた。セレーネは両目に少々涙

が溜まっているものの、頬は赤く染まり、両手は拳を握り締め、ワナナと震え始めた。

「！．．おい、妙な真似をすると、貴様の喉笛を．．．」

彼女の様子に気づき、警告を告げようとしたキクだが、その警告は即座に切られることとなる。

セレーネは、喉を突いていた刃を右手でさつと強く？んだのだ。

「何っ！？」

突然のセレーネの行為にキクは驚いて急いで彼女の心を覗くが、  
「何だ、これはっ！？」

セレーネの中に溜まっていたのは、彼女の「怒り」だった。何の罪もないのに突如幸せを壊し、多くの人を絶望に追い込んだりベリオン軍への怒りとそんな民たちはおるか国王や王妃さえ守れなかった自分への怒りが一拳に蘇り、火山のように噴火したのだ。目は今まで以上に鋭く尖り、頬もピクピク痙攣けいれんを起こしている。刀身を？んだ右手からどくどくと血が赤く流れているというのに、セレーネは少し表情を歪めなかった。そんなセレーネの状態に、キクは思わず全身に鳥肌が立った。

まさか、私はとんでもないやつを相手にしているのでは．．．．

するとセレーネは表情を崩さないまま口を開いた。

「いいわ。少しだけ私の“本気”を見せてあげる。覚悟しなさいよ．．．」

「何．．．？」

そうキクが聞き返した瞬間だった。セレーネは血で染まった右手を離すと、一瞬のうちにその右手を拳に変えてキクの腹部に叩き込んだ。

「がっ．．．！？」

さらに左手も加わり、胸に十発もの鉄拳が炸裂する。十発目が終わった直後には回し蹴りが直撃し、キクは吹っ飛ばされた。

「なっ．．そんなバカな．．．！」

胸を抑えて立ち上がり、セレーネの心を読み取るうとするキクだが、

「ぐあっ！があっっ！！！」

彼女が相手の心を読み取るよりも先にセレーネが次の一撃を仕掛け、さらにミサイルのように鉄拳と蹴りを続々と発射し、あまりの速さに今度はキクが防御に回る形になってしまった。

「おのれ！」

なんとか反撃を試みようとするサーベルを振りかざして太刀風を放つが、セレーネは高く舞い上がってかわした。そして、彼女が着地した位置に目を移すと……。

「し、しまった！」

弾き飛ばされたセレーネロッドが再び持ち主のもとに戻った。再びサーベルを振り上げ、風の刃を起こそうとするキクだが、

「セレーネ・ティアラ・アクション！」

「うあっ……！」

セレーネが額から離して円盤状に投げたティアアラがサーベルを持つ腕にぶつかり、離してしまった。腕を抑えるキクにセレーネはロッドを再び向け、必殺技の準備に入った。

「セレーネ・ヒーリング・エスカレーション！」

光輪を描き、先端から三日月状の光弾を大量発射。自慢のサーベルさえも持てないキクは無数の光弾が目の前に迫ってきててもかわせず、目を大きく見開いたまま全身を光に覆われた。

「ぐ……うあああああーっっ！！！」

圧倒的な光をなす術なく全身に浴び、倒れ伏すキク。しかし、呼吸が激しくなっても膝を立て、立ち上がろうと試み、顔を前に上げるが、

「！……！！！」

「もろかったのは、あなたのほうだったようね」

セレーネにロッドの先端を喉に突きつけられ、動きを封じ込まれた。思わず舌打ちした彼女はその後目を横に逸らしたが、遂に観念

して頂垂れた。

セーラーセレーネがキクに勝利していた頃、戦場を神殿の庭園に移っていたジエアン又は、

「くっ・うああっ！」

ミチが両手から続々と発射する巨大水球攻撃に苦戦していた。水で形成されているからロザリオから放つリボンや剣の物理攻撃は通せず、得意の炎を浴びせても当然だが効果はなかった。だからさつきから水球をかわしながら相手に接近を試みているのだが、

「ああっ！」

ミチの水球は生み出されるのも発射されるのも早く、かわすことさえ難しい。すぐに全身に強力な水圧を受けて、ジエアン又は何度も悲鳴をあげた。髪も衣装もびしょ濡れになり、身体がボロボロになっているジエアン又を見、ミチは振袖を口に当てて笑った。

「おーっほっほっほっほ。よい気味です。これも私の自慢の袖を燃やしたバチですわ」

「はあ、はあ、はあ・くっ」

両足を震わせながら立ち上がるうとするも、すぐに膝がバランスを崩して倒れるジエアン又に、ミチはほくそえんだ笑みをやめずに続けた。

「ですが、さすがにこのままですとかわいそうになってきますね。どうでしょう？この場ですぐに私に土下座して謝れば命だけは助けてあげてもよろしいですわ。まあいずれにしてもすぐに全ての世界が滅び、私もあなたも終わるとはいえ、少しでも長くは生きたいでしょう？難しいことじゃありませんのよ。さあ・・・」

ミチは促したが、ジエアン又からの答えはこうだった。

「悪いわね。生憎私はあなたのことどうしても好きになれないのよ。だから、あなたに謝るなんて死んでも御免よ。それに私は負けず嫌いでね、たとえ死ぬことになったとしても降参を認めるわけにはい

かないの。よく分かったかしら？お・ば・さ・ん……」  
ブチ。

ミチの額に血管が再び浮き出た。

「小娘エーッ、いいだろう。それが望みなら叶えてやるわ。私の前からとつとと去いね！」

怒りに燃えたミチは両手を高く掲げた。すると直径10メートルの特大水球が召喚され、ジェアン又はたたりと冷や汗を流した。

「げ……。これはヤバいかも……」

ミチが両手を降ろした直後に水球がジェアン又に向けて発射される。身体を起こすことさえ困難に至っていたジェアン又にかわすことなどできず、水球は彼女に直撃した。だが、それだけでは終わらなかった。

「！……がはつつ……！！」

気がつくときジェアン又は水球の中に閉じ込められていた。口から大きな泡あぶくが飛び出し、さらに呼吸が苦しくなった。急いで水球から脱出しなくては。そう考え、水の壁に身体をぶつけるが、水の壁は彼女の身体を受け止め、弾き返した。どうなっているの？息が苦しく感じながらもジェアン又がそう思った時、水球の外に立っているミチが再び笑い声をあげた。

「無駄ですよ。あなたにこの水球は破れません。あなたが持つのはリボンと剣と忌々しい炎のみ。どれにとっても水は大敵です……。せつかく機会を差しあげたというのに、そこで苦しみながら無様に眠るがいい！」

さらに呼吸が苦しくなる。目さえ霞んできた。このままだと本当にままずい。

ふと、ファンをつれてくればよかったかなと思った。もしパートナーをつれてくれば、ふたりで力を合わせてこんなピンチはすぐに切り抜けられただろう。だが、ジェアン又はすぐに、そんなのは「甘え」だ、と考え直した。

確かに自分はファンと一緒にどんな危機も切り抜いてきた。しか

し、いつまでも一緒じゃない。いつかファンと旅を続けることも終わりが来るだろう。父と母の愛と意志を継ぎ、立派な正天使を目指しているファンに対し、自分がいつまでもこうではファンも安心して天界に帰れない。それに・・・もしこのまま全ての世界が崩壊を始めたら、ファンの故郷である天界も滅ぶかもしれない。父と母の両方を失ってもなお希望を捨てずに生きているファンにこれ以上辛い思いをさせたくない！

水球の中でジェアン又はロザリオを両手に握り締めた。ファンの力も込められたもうひとつのパートナー！。彼女は目を瞑り、手に力をさらに込めた。

お願い。私に力を貸して！

彼女がそう想いも込めた時、ロザリオが紅に変色しだした。ジェアン又はロザリオを持つ指が熱く感じていたが、それでも離さずに握り続けた。そして次の瞬間、ロザリオ全体から炎が大きく噴射した。

「なっ・・・!？」

これにはミチも驚愕した。水の中で炎を発生させて何をする気だと思った彼女だが、すぐに異変に気づいた。水球が大きく震えだして、至る所から湯気が発生しているのだ。湯気は次々と発生し、高く上りだした。

「まさか・・・水球を蒸発する気が!？」

すでに水球は大きく震え、泡立っていた。今にも耐え切れず、弾けそうだ。

こ、こんな炎使いの小姑娘に私の水が、私の水が破れるなど・・・。ミチは目の前の光景がどうしても信じられなくて、開いた口が塞がらなかった。だが、現実には容赦なく彼女を裏切った。

巨大水球が、爆散した。

弾け散る水の衝撃。自分が生んだ攻撃に自身が浴び、ミチは思わず「きゃっ！」と叫んで慌てて後退した。ある程度距離を取ったミチは即座に袖を翻して振り返ったが、ジェアン又の姿はなかった。

「あの小娘、一体どこに・・・？」  
「ここよ」

すぐ後ろから声が聞こえ、ミチは首根に何か冷たい針のような物が触れたのを感じた。瞳を動かし、背後を覗くと前髪から水滴を流しているジェアンヌが白のチエスピンで首の肌突きつけているのが見えた。

「チエツクメイト・・・ね」

「くっ・・・いつの間に後ろに・・・」

「火を甘く見すぎたね。火だってね、火力が強いと水に勝てるんだよ。たとえ水の中でも熱くすれば蒸発できるんだから」

「く・・・確かに迂闊・・・でした・・・」

「まあ、一か八かだったし、あまりに熱すぎて私も焼け死にするかと思ったけどね・・・」

ミチは膝を着いた。

ふたりの戦士に敗れたキクとミチは、両手を縛られた。ふたりとも観念したように頭を垂れている。

「とりあえず、どうする？」

ジェアンヌが聞いた。

「うーん、ここにほうっておくわけにはいかないよね。プリキュア みんなも心配だし・・・」

「でも、もし逃げられたら厄介だよね」

「なら殺せ」

突如、キクがそう言った。セレーネもジェアンヌも彼女を見た。「邪魔なら消せば済む話だろう。それに私たちは罪人だ。こうなった以上、ただでは済むまいともう覚悟している」

ミチも続けた。

「もともと私たちは世界から嫌われ、弾き出された身。全ての世界が崩壊を始めると同時に私たちの存在も消える予定でしたのだから、

多少早く消えても変わらないでしょう・・・」

「え？え・・・？」

ジェアンヌがふたりの言った意味に訳が分からずにいると、ふとセレーネが気づいたように聞いた。

「！・・・そういえば、あなた言ってたわね？『この忌まわしい力もあと数時間程度で“私”や世界とともに』って・・・」

するとキクは軍帽の下からセレーネを見た。ジェアンヌもハツと気づいてミチに言った。

「そういえば、あなたも似たようなこと言ってた。一体どーいうことなの？あなたたちはヤマタノオロチを復活させて全世界を滅ぼすのが目的じゃないの？」

するとふたりは、

「・・・確かにそれもある。世界なんて全て壊れてしまえばいいと正直に思っている」

「ですが、私たちの本当の願いはただひとつ。この忌まわしき力から自身を解放すること・・・」

「つまり・・・」

「「死ぬ・・・ということ」」

## 逆転（後書き）

次回はキクとミチの過去が明らかになります。

## 過去と未来

「私はかつてある富豪家の騎士ナイトだったのだ」

「ナイト？あなたも私と同じ・・・？」

セレーネが思わず尋ねると、キクは小さくうなずいた。道理で剣捌きが見事なはずだ。

「その主は優しい方だった。彼は私が人の心さえも読める千里眼だと知っていても普通に接してくれて、かわいがつてもくれた。私も彼と同じ屋根の下で暮らせて幸せだったし、彼のためなら命を投げ捨てても守りたいと決めていた。・・・今思えば恋をしていたのかもしれんな。だが、それも儚い夢だった・・・」

主には妻がいた。妻はキクが千里眼だったことは知らなかったがひどく嫉妬深く、主人と仲の良いキクを快く思わずにいつも辛く当たっていた。キクは主のためにもずっと耐えていたが、妻は遂にキクと主人を引き離すため卑劣な計画を実行したのだ。

「ある日のことだった。庭をパトロールしていた私の携帯に突然奥様から連絡が来た。出てみたら、ひどく怯えた様子で突然強盗が現れ、拳銃で脅して金目の品を盗み、外へ逃げようとしている、今ならまだ間に合うから玄関から出たところを隙を突いて捕まえてくれと言ってきたのだ。私はすぐに屋敷の玄関に向かい、外から待ち構えた・・・」

拳銃を所持していると聞いたので、キクはサーベルを抜いて待機した。そしてドアが開いた瞬間、キクは素早く間を詰め込み、相手の喉に刃を突きつけた。だが・・・。

「出てきたのは・・・彼だった」

「！！？」

セレーネもジェアンヌも目を丸くした。

「彼も、私も、呆然となったよ。私はしばらくしてからハツとなつてすぐに剣を彼の喉から離し、訳を話そうとしたが、その時奥様が

現れて・・・」

妻はキクを指差し、この女が主人を殺そうとした、財産を狙ってずっとこの時を待っていたんだ、とヒステリックに喚いた。その時妻の心を読んだキクは彼女が狂言を起こして自分を嵌めたと理解し、急いで誤解を解こうと主の顔を見たが、

「その瞳は・・・死んでいたよ。信じていた者に裏切られたと言っているようだった。その瞳を見た途端に私は何も言えなくなって・・・」

彼女は逃げた。どこをどう逃げたかは覚えてなかった。気がついたら人気のない村に入り、彼女はゴミが転がる家と家の脇道でうずくまった。主から携帯が何度も鳴ったが、怖くて出ることができず、捨てた。

その後、キクは東も西も分からぬまま方々と歩き続けた。誰も助けてくれなかった。彼女が見る光景は、くだらない理由で始まった戦争が十年も続いたり、こぼれた金貨一枚を大勢で取り合ったり、金儲けを目指して環境を破壊したりといつもいつも穢れていやしく醜いものばかり。いつから人はここまで腐りきったのかと大勢の心を覗く度に彼女は絶望し、どうして自分はこんな力を授かったのかと自身が持つこの能力を呪った。

「だが一番呪っているのは私自身だ。理由はどうあれ私が主に刃を向けたのは事実なのだから。主は私を本当に信頼してくれたのに、私は裏切ってしまった。もうあの時には戻れない。しかし、これ以上腐った世界に生きたくもない。・・・だから、私は死にたかった」

「私も・・・同じ」

ミチが口を開いた。セレーネとジェアン又は彼女を見た。

「私もこの力を持ったために、たったひとりの大切な人を失いました」

ミチには妹がいた。そしてふたりは曲芸師として旅を続けていた。妹にはミチのような水を作り、操る力を持っていなかったがその代

わり身体能力は高く、綱渡りなど軽々だった。どこへ行くのもふたりは多くの人々に芸を見せて喜ばせ、成功を収めていた。

だが、不幸は突然襲った。ミチの水の曲芸が彼女の生まれながらの能力だと判明してしまったのだ。能力だと分かった途端に人々は手のひらを返したように姉妹に冷たくした。わずかな金銭さえ手に入らなくなった。ミチは妹は何の能力も持っていない、自分はもうやめるからせめて妹の芸だけでも見てくれと呼び込み回ったが、誰もが冷え切った目で無視した。稼ぎは一日一日を生きるのに精一杯になり、妹にいつもひもじい思いをさせていた。それでも妹は笑顔で姉を励ましてくれたが、

「ある日、妹は重病にかかりました……」

薬を買う金もなく、病院に行くこともできず、必死に看病したが、妹は衰弱するばかり。ミチはとうとう人々に妹が死にかけていることを伝え、少しでも金銭を貸してくれるようにしつこく訴えた。だが、みな金貨一枚もくれず、目の前で戸をぴしゃりと閉めるばかりだった。妹の体調は悪化し、ミチは妹の回復を必死に神に願ったが、

「妹は……息を引き取りました」

「あ……あ……」

その言葉に、ふたりは何も言えなくなった。

「確かに、私の力が人を騙していたことは否定しません。しかし……この能力を見世物にする以外に何の役に立ったというのです？しかも私だけならともかく、何の力も持っていなかった妹までどうしてこんなに冷たくされなければならなかったのですか？私がやったことは、そんなに罪が重いのですか？だったら、私が代わりになりたかった……どうして妹が死ななければならなかった！？……私はこの力を憎みました。全ては、私がこんな力を持っていたために妹は死んだのです。私は妹を死に追いやった世界に絶望し、崖から身投げしようかと考えました」

「そんな私たちの前に現れたのが、キュアリベリオンだった……」

黒い制服を着た眼帯の少女は、彼女たちに手を差し伸べ、こう言

った。

「私が全て終わらせると約束してあげる。世界も、あなたたちも……だから、私にあなたたちの力を貸して……」

そして、ふたりは彼女の手を握ったのだ。

キクは息を吐いた。

「キュアリベリオンは私たちに言ってくれたよ。ヤマタノオロチを復活させた暁には私たちの憎しみと悲しみも取り込んで世界を滅ぼすエネルギーにすると。そうすれば、私たちは何の痛みも苦しみも感じることなく全てを忘れて永遠に眠り続ける。どうせ死に急ぐのなら私たちの力で世界を絶望と恐怖に叩き込んでやれと。だから、私たちはキュアリベリオンに手を貸すことを決めたのだ。……私たちの話は以上だ。さ、やれ」

「これで、やっと妹のもとへ行ける……」

ミチが吹っ切れた顔を見ると、セレーネとジェアンヌは顔を合わせ、互いにうなずいた。

「ジェアンヌ、お願いするわ」

「分かった」

ジェアンヌはロザリオを剣に変えた。そして頭を垂れて膝を着け、目を瞑っているふたりの前に立つと、手を振り上げ、刀身を光らせた。

ザンツ！

ジェアンヌは剣を振り下ろした………が。

「な、何の真似だ？」

キクが驚いて声をあげた。ジェアンヌが斬ったのはふたりの手を

縛っていたロープだった。

ジェアンヌが無言で剣をロザリオに戻すと、代わりにセレーネが答えた。

「・・・あなたたちには、これからわたしたちに協力してもらおうからよ」

「「協力？」」

「そう。あなたたちの罪は確かに重い。でも、まだ間に合う。今からハピネスランドに行き、ヤマタノオロチの復活を止めることができれば、あなたたちの罪は少しは軽くなると思うから・・・」

「！！・・・罪など軽くならなくていい！どうして死なせてくれないの？どうして妹に会わせてくれないのよ！？」

「それが『甘え』だって言ってるのよ、おばさん！」

突然ジェアンヌが顔を剣幕にして怒鳴った。

「お・・・おばつて、小娘、私はまだ二十前だと・・・」

「そんなのはどーだっていいのよ！さつきから聞いてりやおばさんが言ってることは、死ぬことで罪を償うんじゃない、死んで罪から逃れようとしてるだけじゃない！逃げるのが仕事の私が言うのもおかしいかもしれないけど、そんなの情けないよ。私がおばさんの妹だったら、そんな情けない姉に会おうなんてさらっさらないね！」

「小娘に何が分かる。私の気持ちが・・・」

「分かりたくもないよ！大体、せっかくの力を破壊にしか使わないというのがもう本当に情けない。それじゃ、妹さんも天国で泣いてるよ」

「何？どういことだ？」

「じゃあ聞くけど、おばさんはどうして妹さんと曲芸をあちこちで披露しながら旅を続けたのよ？」

「何？」

「どうして水の芸を人に見せようと思ったの？バレたらどうしようと少しも怖くなかったの？」

「そ、それは・・・」

そういえばなぜだろうとミチは考えた。確かに水を作ったり、操る力は見世物以外で役に立つことはあまりないと確信に至っていた。しかし、ジェアンヌの言うとおり、能力がバレルかもしれないと危険も背負っていた。それでも自分が曲芸を披露し、妹と旅を続けることができたのはなぜだろうか？稼ぐため？いや、それも少しはあるかもしれないが本当は違う。妹ともに曲芸を行った時、人々は自分をどう見ていた？

「！・・・そうか、私は嬉しかった。多くの人が私の曲芸を見て喜んでくれて・・・。だから、私は妹ともっと多くの人に見てほしいと思って旅をしていたんだ。すっかり忘れていた・・・。妹は私と一緒に自分たちの芸を世界中に広めていこうと言ったのに、私は・・・自分の力をこんな・・・こんな愚かなことに・・・」  
ミチは顔を抑え、泣き崩れた。彼女を見て、キクも目頭に涙を溜めた。

「そういえば、主に言われたな。私の能力は主を守るのにとても役に立つと。主は人が良いゆえに騙されやすかったから、もし嵌めようとする輩がいれば私が守ってくれる。私の言うことは信用できると・・・。あの時、もし主と話をしていたら、またともに暮らせたかもしれないな・・・」

「だったら、もう一度話してみたら？」

セレーネが言った。

「何回も電話してきた人なんですよ？あなたのことを今も待っているかもしれない。一度会って、話し合おうべきだと私は思う」

「しかし・・・私は」

「このままでいいと本当に思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もし世界が全て破壊されたら、もう会えない。確かに世界には絶望は多々ある。でも同時に希望も間違いないよ。事実、あなたがご主人様と一緒にだった世界は希望に満ち溢れていた。そうよね？」

「！」

「もう一度希望を求めて生きてみよう。そのためにも・・・お願い、私たちに力を貸して」

「おばさんもそうだよ。今までずっと辛かったんだから、これからきつとよくなるって。・・・だから、その“これから”を守るために一緒に止めようよ。世界の崩壊を・・・」

セレーネとジェアン又は手を差し伸べた。キクとミチは顔を上げた。手を差し出すふたりの笑顔は絶望の未来をあきらめることなく輝いていた。

勝てないな、これは・・・。

ふたりは思わずすました微笑を浮かべ、その手を取った。

過去と未来（後書き）

次回は、ドールキティVSヨツバ！

## 心

リベリオン城敷地内にて民たちがヤミ軍団と戦っている中でドールキテイもヨツバとの戦いに熾烈を極めていた。

だが自身の身体に肉体強化即効剤を射ち込んでパワーアップしたヨツバは強い。30分だけという制限付きとはいえ、威力もスピードも全てを凌駕している彼女はその肉体を完全に使いこなし、鉄拳を怒涛に飛ばしてくる。

「くっ……！」

ドールキテイは両腕を交差させてヨツバの連続攻撃に耐えていたが、遂に一瞬の間を突かれて腹部に弾丸のような一撃を叩き込まれ、悲鳴をあげて飛ばされた。

「ドールキテイ！」

「こんのおっ！」

本来の姿でヤミと戦っていたディアーナとファンがそれぞれ両手から光球と火球を背後から飛ばしたが、ヨツバは振り返ると信じられない速さでかわし、あっという間にふたりの目の前に来ると、

「邪魔だっ！」

「きゃああああああっ……！」

殴り飛ばし、衝撃をその身で受けたふたりは仮の姿へ強制的に戻された。

「ライトスピナーを受けてみな！」

すぐに起き上がって走り出し、ライトスピナーを召喚したドールキテイだが、巧みな動きで相手を翻弄する彼女の武器さえもヨツバを捕らえることはできなかった。彼女はライトスピナーをも超える素早さでドールキテイを惑わすと、彼女の身体に次々と打撃を放ち、ダメージを与えた。

「く……あっ！」

全ての攻撃を防げず、遂に膝を着くドールキテイ。呼吸も荒くな

っている彼女にヨツバはニヤツと笑うと、

「ぐっ・・・！」

「よくも私のヤミちゃんたちを壊してくれましたね。次はあなたが壊れる番ですよ・・・！」

胸ぐらを？まれて身体が宙に浮き、苦痛で表情を歪めるドールキティに手刀を放とうとした瞬間。

「やめてええええええっつっ！！！」

轟き渡る少女の声。ヨツバは手刀を降ろし、ドールキティも胸ぐらを？まれた状態のまま、声がした方向へ顔を向けた。そして両目を大きく開いた。

「ユカ様！」

そこにいたのはハピネスランド第一皇女のユカだった。まだ10歳の幼い皇女は瞳を潤ませながら立っていた。彼女の胸と足元にはアジトに残った妖精たちがほぼ身体を震わせながらも瞳を色あせていない目で見ていた。

「ユカ様、どうしてここに？・・・うぐっ！」

ドールキティが訳が分からずにいると、ヨツバは彼女を離してユカに向き直り、少しだけ頭を下げた。

「これはこれは皇女殿下、こんな戦場に自ら赴くとは敬意を表します。ですが、殿下にはもう用はありません。痛い目に遭いたくなければ、すぐに立ち去ったほうが賢明ですよ」

筋肉が剥き出し、額に血管が浮き出て白目を向けているヨツバの容姿にユカは少し怯えながらも、それでも言葉を続けた。

「どうして・・・どうして、こんなひどいことができるの！？」

するとヨツバは高く笑い声をあげた。

「ひどいこと？確かにそうですね。私がやっていることはひどいです。ですが皇女殿下、私はですね、もっつとひどい目に遭って、心をスタボロにされたんですよ。私の愛娘のヤミちゃんたちもね・・・」

「何が・・・あったと・・・言つのです？」

胸を抑えながら立ち上がるうとするドールキティに、ヨツバは話

し始めた。

「私は子供の頃から発明が大好きでしてね、色々な発明をしては多くの人に見せて役に立ってもらい、喜ばせたものですよ。だから将来も色々な機械を発明をして、人々に役に立ってもらいたかった。私の夢は叶いかけていた。……ヤミちゃんはね、もともとはキボウという名前で介護や子守用に開発したんですよ」

「え……？」

ドールキテイもユカも声を出した。ふたりだけでなく、仮の姿に戻されたダイアーナとファン、そして妖精たちもヨツバの話聞いていて目を丸くした。

「これほど精巧な自動人形オートマトンを生むのはそりゃあ苦労しましたよ。私も何回失敗したか分からないくらいです。ですが、体の不自由な人たちや子持ちの方の負担を少しでも減らすためにあきらめずに何度でも作り直しました。そして、遂に成功したんですよ。……しかし、それが全ての始まりでした」

キボウは完璧すぎた。ミス一つも犯すことなく、介護や子守に役立ち、大勢に喜ばれていた。まだ少女の年齢であるヨツバが開発したということもあって、多くの人が彼女に注目した。だが、それが同時に多くの発明家や科学者を羨ませる結果となった。そして彼らはヨツバを貶めるために同業者と偽ってキボウを利用している施設や家を訪れ、自動人形オートマトンの身体に調整するふりをしてある細工をしたのだ。

「しばらくして、キボウちゃんが暴れたという苦情が何件も来ましたよ。お年寄りをわざと突き飛ばして怪我をさせたり、赤ん坊を危うく二階から離そうとしたり……」

同業者の正体が自分の発明を羨む連中だとは調査で判明したが、キボウを利用する人たちにとってはそんなことは関係なかった。人々はもう安心して利用できないと言い、ヨツバはやむをえず全てのキボウを回収した。だが、人々の不安と怒りはそれで収まらなかった。

「みんなはそんな危なっかしいモノを町の中に置いとくなと暴動に出て……私の研究所を放火しました……！」

「……!?」

みな、絶句した。

「私は辛うじて研究所から脱出できましたが、キボウちゃんたちはみんな燃えました。……それ以来ですね、私が世界を見る目が変わったのは。何も悪いことをしていない私とキボウちゃんを嵌め、全てを奪った世界に私は何もかもが信じられなくなって、もう死のうかとも考えました。ですが、そこにキュアリベリオンが現れ、私に協力をお願いしてきたのです。だから私は、こんな世界を、そして自分自身を永遠に終わらせるために、キボウちゃんを戦闘型のヤミちゃんへ変えて誕生させたんです。どうですか、皇女殿下？まだ幼いあなたでも少しは私の傷ついた心が分かりましたか？」

するとユカはポロポロと両目から涙をこぼし、立ち尽くしていた。ヨツバは自分の過去を話して少しは同情してくれたのかと思ったが、次の瞬間彼女は泣きながら訴えた。

「そんなの……そんなの、間違っているよ！」

「……ええ、確かに間違っているかもしれませんが。ですが、私の決めたことです。間違っているかどうかはいくら皇女殿下でもあなたが決めることでは……」

「そうじゃないよ！あなたは困っている人たちの役に立つためにここにいる自動人形たちを作ったんでしょ！？なのに、なのに、あなたが作った人形は今何をしているか見てよ！これがあなたが本当に望んだこと？あなたは人々を苦しめるために人形を作ったの！？」

「え……?」

そう言われて、ヨツバは周囲を見回した。そして一瞬で啞然となった。

彼女が生み出したヤミは大勢の民たちを痛みつけ、苦しめている。武器を持った者を執拗に殴り、蹴り、身体を締めつけ、多くが苦痛に表情を歪めている。

「離せ！離せよ！」

閃光弾を全て使用したダイチが腕を締めつけられ、拘束されていた。

「あ．．あ．．あ．．あ．．！」

その光景に、今度はヨツバが絶句した。

これがあなたの望んだこと？あなたは人々を苦しめるために人形を作ったの！？

ユカの言葉が頭の中で反芻はんすうされる。ヨツバは目を大きく開いたまま、混乱したように両手で頭を抱えた。

「違う．．．。私は、こんなこと望んでなかった！それなのに、それなのに、私は．．．自分勝手に世界を憎んだせいでみんなを苦しめて．．．こんなの．．．こんなの．．．こんなののために私は発明をしたかったんじゃない！私は、私の発明したものを世界に役立てて、たくさんの人に喜んでもらいたかった。ただ．．ただ、それだけだったのに．．．！」

その時、30分が経過した。彼女の強化された肉体はもとに戻り始めた。筋肉のついた両腕をもとのすらりとした細長いのに戻り、頬や額に浮き出していた紋様や血管も消え、白目だった目も黒い瞳が現れた。全てが瞬時にもとに戻った途端。

「うああああああああああああああああああああっつつつつつつつ！！！！！！」

副作用が起きた。彼女は自身の身体を抱き締め、絶叫をあげた。即座に地面に倒れ、想像以上の疲労と苦痛に喚き、身体をねじれさせる。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。誰か、助けて助けて助けて助けて．．。

心の中で懇願をする。しかし、あまりの激痛に叫び以外の声は出なかった。

これは、本来の自分を見失い、多くの人を傷つけた罰か．．．。痛みに苦しみながらもふとそんな考えが浮かんだ。もしそうだと

したら、自分はこのまま苦しんで逝くべきかもしれない。彼女がそう思った時。

「ドクター、大丈夫ですか？」

ふと、一人のヤミが戦いをやめて駆けつけ、ヨツバを抱え起こした。「え？」と激痛に苦しみながらもヨツバが彼女を見ると、彼女の他にも複数のヤミが戦いをやめ、次々と駆けつけた。ヨツバを抱えているヤミは他のヤミたちに振り返ると、

「医務室カラスグニ痛ミ止メヲ。高熱モ起コシテイル。念ノタメ頭痛薬モ才願イシマス」

「ハイ」

すぐにふたりが城へ向かう。息も乱れながらも呆然となっているヨツバは思わず疑問を口にした。

「どうして・・・？ヤミちゃんが命令以外の行動を取るなんて、初めて・・・」

「あなたが、彼女たちの母親だからですよ・・・」

そう答えたのはドールキティだった。彼女の背後ではユカと妖精たち、そしてディアーナとファンが微笑んでいた。

「人形にも心があります。それは自動人形オートマトンも同じ。自分たちに命を与えてくれたあなたが目の前で苦しんでいるというのに、それを助けない娘がいると思いませんか・・・？」

「！・・・」

「優しい娘たちではないですか？こんな娘たちと一緒になら、きっとあなたはまた人の役に立つ発明を続けられます。だから、もう一度世界に希望を持つてはいかがですか？」

「・・・」

ヨツバはヤミたちを見た。ふと、彼女たちは微笑を浮かべているように見えた。

激痛が次第に治まってきた。ヨツバはヤミたちに目を向けたまま苦悩の表情をし、その目を一旦閉じて小さく呟いた。

「キュアリベリオン・・・許してください！」

そしてヨツバは目を開いて言った。

「他のヤミちゃんたちに伝えて。もう戦うのはやめなさいと。そして今すぐ怪我をした方たちの治療と地下牢に幽閉した国王や民たちの解放を……！」

「……ハイ……！！」「……」

数分後、全てのヤミが戦いをやめ、国民の治療や地下牢に閉じ込めた者たちの救出に向かうことになった。

「一体、どうなってるの……？」

さっきまで敵だったヤミが突然国民を助ける側となり、ダイチは訳が分からずに目をパチクリさせた。そんな彼の隣でユカは弾けるような笑顔でこう声をかけた。

「私、役目を果たしたよ！」

「どうやら……私たちの役目も終わったみたいね」

遠くからエルスがそう呟いた。

「そうだね！でも危ないところだったな」

「キュアアンジェにお願いで外に出たのはいいけど、私たちはもともと『過去』の存在だから、現世では体は長く保てないもんね」

エルの隣でテンペストとブレイズが自身の手を眺めて言った。

彼女たちの両手は透明に透き通り始めていた。その横で同様に身体が透き通り始めていたバースト、ミラージユ、スピリットが笑って言った。

「しかし、キュアアンジェも人が悪い。最初から世界を助けるつもりだったのに、剣を求めに来たキュアブロッサムたちの相手に私たちを蘇らせ、試練を受けてもらうなどと言って……」

「キュアブロッサムたちの想いがどうしても知りたかったのよ。生半可な想いじゃ、世界を守れないからね……」

「あとはみなさんに任せましょう、キュアエルス」

エルスはスピリットにうなずくと、巨城を見た。

「キュアブロッサム、それからみんな……私たちはここまででも、あなたたちならきつと世界を守れる。それは私たちが保証する。私たちの代わりに世界を……よろしく、ね」

そして6人のプリキュアたちは笑顔のまま、まばゆい光に包まれると……消えた。

## 心（後書き）

夢原信者さん、GASHさん、ABCさんには本当に心から感謝します。

次回は、プリキュアVS七人衆残党！

## 関門

ブラック、ホワイト、ルミナス、ブルーム、イーグレットのMH  
& S チームは奇妙な空間に出た。

「ここは・・・？」

「体育館・・・よね？」

一瞬呆然となったブラックとホワイトがそう声を出す。ふたりの  
言うとおり、彼女たちの目の前に広がるのはどの学校にもある一  
般的な体育館の中だった。床は木で作られ、バレーボール用のポー  
ルを立てるための穴が数ヶ所に見えるし、壁面にもバスケット用の  
ゴールリングが確認できる。

「でも私たち、さっきまで城の中を走っていたはずじゃ・・・あれ  
っ？」

ブルームが振り返って素っ頓狂な声をあげた。彼女が振り返った  
先にはさっきまで走っていた道が消え、壁が広がっていた。

「ど、どーなってるの!？」

「!・・・ブルーム、みんな、あそこ!」

するとイーグレットが前を見て指差した。そこにはステージがあ  
り、その薄暗い奥の中から誰かが進み出て来た。

「あなたは・・・？」

ルミナスが尋ねるとその者は両手を野球帽を被った頭の後ろに回  
し、せせら笑いながらこう答えた。

「待ってたよプリキュア。私はキュアリベリオンの忠実なる僕、ア  
キラ。こっから先は通さねえから!」

そしてアキラと名乗った少女の身体全体からぞわぞわと黒いコー  
ドに似た触手が続々生え始めた。少女の身体から触手が生えるとい  
う信じられない光景を前に5人が思わず驚愕した次の瞬間、無数の  
それが強靭なムチとなって彼女たちの身体を打ちつけた。

ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズのプリキュア5チームも全く別の空間に出ていた。

「何・・・どこ？」

周囲を見回してルージュが呟く。6人っている場所はヨーロッパをイメージさせる西洋風の街並みだった。壁が白く塗装された石造りの家がほぼ隙間なく並んで続いている。頭上を見上げると澄み切った青い空が広がり、白い雲さえもゆるゆると流れていた。だが奇妙なことにプリキュア以外にその空間に存在する人間は一人も見えず、異様に静寂に包まれていた。アクアとミントはそれに気づいたが、他はあまりに突然別の空間に出たことに混乱を起こしていた。

「何・・・何なの！？どうして城の中にこんな街があるの！？」

「てゆうか、なーんで城の中なのに空があるのおっ！？」

ローズとドリームが慌てたように声をあげると、

「あ！あそこに誰かいます！」

突然レモネードが前方を指差した。全員がその指先を見やると、そこにはオープンカフェがあり、その白いテーブルの一つに短髪の黒いスーツを着た、しかしネクタイは着用していない15歳くらいの少女がティーをカップに移し、香りを味わいながら優雅に飲んでいた。彼女はティーを一口飲んだ後、プリキュアたちに目を向けると立ち上がり、丁寧に頭を下げ、礼をした。

「初めまして、プリキュアのみなさん。私はキュアリベリオンの忠実なる僕、ツバキと申します。お会いできて光栄です」

言い方もとても紳士的だ。だが、キュアリベリオンの僕と聞いてミントとアクアが警戒心を出して言った。

「キュアリベリオンの僕・・・？」

「じゃあ、私たちの敵なのね・・・！」

ふたりの台詞に他も瞬時に警戒態勢を取って身構える。ツバキは彼女たちがそのような行動を素早く取っても慌てることなく穏やかに微笑んだ。

「そう心配しなくてもすぐには仕掛けませんよ。まだお茶も飲んでいませんしね。よろしければ、みなさんも一杯いかがですか？」

ツバキはカップを持って促したが、プリキュアたちは無言のまま警戒を崩さなかった。彼女は本当に残念そうにため息を吐いた。

「残念ですね。たとえ敵でも最後まで共には飲みたかったですか？」

ツバキはカップのティーを音を出すことなく飲み干すとテーブルに戻し、素早く指を鳴らした。瞬間、プリキュアたち一人一人の周囲にクリスタルに似た形の透明な物体が出現し、彼女たちの全身を一瞬で封じ込めた。彼女たちがみな「え？」という顔をした途端、パチン、と再び指が鳴ると同時に彼女たちを閉じ込めた全ての物体が爆発を起こし、全員、悲鳴を轟かせた。

「……子供？」

思わずベリーはそう口に出した。薄暗い発電所をイメージさせる空間に出たピーチたちフレッシュチームの前に現れたのは、自分たちよりも背が低く、ビニールのレインコートを着た、まだ12か13の少女だった。少女はピーチたちを見ると怯えた目で後ろに一歩下がったが、

「う、うわわっ!？」

途端に身体のバランスを崩して後ろに倒れ、尻餅を着いた。

「あ、大丈夫？」

ピーチが駆け寄ろうとしたが、

「こ、来ないでください!」

「え……?」

「あの……わ、私は、私は、お姉ちゃんの……キュアリベリオンの忠実なる僕のスズです!あ、あなたたちとは敵です。お……お姉ちゃんの所には、い、行かせないんだから!」

「キュアリベリオンの……?」

「あの娘が・・・？」

思わずパッションとパインが絶句すると、スズはすぐさま立ち上がってレインコートを脱いだ。パチパチツ、と静電気が少女の身体から飛び散った。

「お、お姉ちゃんが・・・お姉ちゃんだけが私を助けてくれたんだもん！だ、だから、私がお姉ちゃんを守る！ここから先は絶対に行かせない！うああああああああああっつつつつ！！！」

スズは藍色の髪の毛を一本も残らずに逆立てて絶叫すると、全身からもの凄い放電をほとばしった。

まるで電撃の嵐が発生したかのような衝撃に、ピーチたち4人は悲鳴をあげて吹っ飛ばされた。

ブロッサムたちが出たのは植物園だった。つぼみの祖母・薫子が所有しているものよりも大きくて広い。おまけに世界各国から集めてきたような色とりどりの花が咲き乱れている。だが今の彼女たちに花を楽しむ余裕はなかった。

「名前、カノン。キュアリベリオンの忠実なる僕。以上」

彼女たちの前に現れた黒いゴスロリ風の衣装を着、フランス人形を抱いた金髪の少女はそう名乗ると一度両目を閉じたが、すぐに開いてブロッサムたちを強い目つきで睨んだ。瞬間、彼女たちの周りに花があつという間に開花し始め、そこから無数の胞子と毒針が放たれる。

「みんな、よけて！」

ムーンライトの声に他の3人も跳躍したり、走ったりしてかわしたが、彼女たちの行く先々でも多くの花が咲き乱れて燐粉と毒針が発射され、全身に浴びたブロッサムたちは瞬時に身体が痺れて動けない状態へ追い詰められた。

「おまえたちも地獄つてやつを味わせてやらあつ！」

「申し訳ありませんが、六対一ですからね、手加減するわけにはいきません」

「い、行かせない！お姉ちゃんの所には、何が何でも絶対に行かせないんだからあツ！」

「プリキュアは嫌い。消えて」

立ちほだかる4人の僕たちの圧倒的な能力を前に、プリキュアたちは傷ついた身体を起こして立ち上がるのがやっとだった。

亀裂が広がり、少しでも衝撃を与えればすぐに崩壊してしまうのではないかと思えるほどの黒い大地。その大地からはやはり少し触れただけで倒壊してしまいそうな約10メートルほどの高さの円柱の塔が大体約8本は建っている。上を見上げると、まるで時間が逆流しているかのように暗黒の闇に覆われた空が大きく渦を巻いている。

その不安定な空間の中にキュアリベリオンはいた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・うぐっ！」

リベリオンは苦しそうに自身の胸を？み、表情を歪ませながらも必死で黒い大地に何かを描いていた。息も乱れ、汗も大量に流れている。

「もう少し・・・もう少しだから・・・そうすればあなたたちの憎しみや悲しみも果たせるから・・・！」

彼女は抑えた胸に言い聞かせるように呟くと、その後も地に描き続けていた。

城の外は今、空が黄昏に染まり始めている。

ヤマタノオロチの復活まであと2時間を切っていた・・・。

## 関門（後書き）

次回は極簡単なのですが残党たちの過去も明らかにしていきます。

## 迫害

アキラはステージから一步も動くことなく、身体から数百いや数万も生やした黒い触手を飛ばし、プリキュアたちを攻撃する。ブラツクとホワイトが触手を打ち払ったりして応戦するもすぐに手足を拘束され、次の瞬間床に強く叩きつけられる。バキツ！と床が割れ、ふたりはうめいた。

「よくもブラツクとホワイトを！」

「許せない！」

怒りを露にしたブルームとイーグレットがすぐさま駆け出し、さらにスピードを上げながら全身に光をまとう。そして光が弾けると、ふたりの衣装が変わった。ブルームは黄色の衣装。イーグレットは空色の衣装。ふたりは月と風の力を得たプリキュア、キュアブライトとキュアウィンディにパワーアップした。

「風よ！」

ウィンディが両手に旋風をまよえば、

「光よ！」

ブライトは光球を生み出して二倍、三倍へと増強化させる。そしてふたりは全身から髪の毛がぞわぞわと生えてきたかのような見るのもおぞましい姿をしたアキラに同時攻撃を発射した。まずウィンディの放った旋風がブライトの光球全てを包み込む。ウィンディの力が加わって光球はさらに増強し、勢力とスピードが炸裂して敵に大ダメージを与えるのだ。だがアキラは、

「バカ。そんなの攻撃になるか」

笑みを崩すことなく自身の触手を向かってくる光球に飛ばし、次々と槍のように突き刺した。一瞬で弾け、光の粒子と化する光球。

「そ、そんな・・・!?」

ブライトとウィンディは思わず愕然となった。その隙をアキラは逃さない。すぐに次の触手を飛ばし、ありとあらゆる方向からふた

りを襲った。

「はあっ！」

だがここでルミナスが虹色のバリアを張り、触手を弾いた。その衝撃に、アキラは少しよろめいた。

「おおっと・・・こりゃ厄介だな。けど、どこまで耐えられるか試してやるぜ！」

すぐに体勢を直してバリアを強く打ちつける。最初こそは衝撃に耐えていたルミナスだったが、触手が一つ一つ打ちつける度に表情が歪みだし、額からも汗が流れ出た。

この攻撃・・・まるで自らの想いを手当たり次第にぶつけているよう・・・ダメ、耐え切れない！

次の瞬間、ガラスが割れて破片が飛び散るかのようにバリアが破られ、一番にルミナスは触手に打たれ、悲鳴をあげて撥ね飛ばされた。彼女に守られていたブライトとウインディも精霊の力を込めた両手でバリアを張るも瞬時に破られ、身体を強く叩きつけられる。傷ついた5人にパートナーの妖精たちが急いで声をかけた。

「ブラック！大丈夫メポ！？」

「ホワイト！しっかりするミポ！」

「な、なんとか・・・」

「大・・・丈夫よ・・・」

「ブライト！立ち上がるラピ！」

「ウインディ！もう時間はあまり残ってないチヨピ！」

「そんな・・・こと・・・」

「分かってるわ・・・！」

「ルミナス！怪我はないポポ？」

「大丈夫・・・心配しないで、ポルン」

するとポルンは全ての触手を身体の中に一本も残らずにズズツ・と戻していくアキラに向き、泣きながら怒鳴った。

「ひどいポポ！プリキュアをいじめるなポポ！」

「いじめる？・・・へっ、妖精ごときが笑わせるなよ。私なんかな、

ただこんな力があつただけで何もしてないのに化け物とか悪魔とか嫌になるくらい言われて親にさえ見捨てられたんだぞ！」

「……えっ……!?」「……」

「私だつて、なんでこんなキモい力持つてるんだつて自分が怖くなつたこともあつたさ。けど、私はこの力を人を傷つけるために使つたことなど一度もねえ。なのに、どいつもこいつも私を見て悪魔だ妖怪だとか言つて石ぶつけやがつて……挙句の果てに私を生んだ親にまで怖がられて『おまえなんか私たちの子じゃない!』と面と向かつて言われて家から追い出された私の気持ち分かるか?」

プリキュアたちも妖精たちも声を失つていた。

「そつから先、私はずつとひとりで生きてきたのさ。そりゃあ辛かつたよ。誰も助けしてくれなかつたし、時にはそこに生えていた草やゴミ捨て場に残されていた野菜の皮を口にしたこともあつた。なんでもしてない私がこんなひどい目に遭わなきゃなんねえのかつて思ったし、もう生きていてもいいことないから死のうとも思つたよ。けど、そこにキュアリベリオンが現れて助けてくれたのさ。そして約束してくれんだ。私の代わりにこんなひどい世界を全部ぶち壊し、同時に死にたかつた私も終わらせてくれるつてな。私はキュアリベリオンを信じてついていくことに決めたんだ。私とこの世界を全部終わらせるために……」

「……プリキュア!!!」「……」

「ファイヤーストライク!」

「プリズムチエーン!」

「エメラルドソーサー!」

「サファイアアロー!」

ルージュ、レモネード、ミント、アクアは同時に必殺技を発動した。それぞれ4人の技が手や足から飛ばされ、ツバキに向かつていく。だがツバキは、

「甘い・・・ですね」

と眩くと、指を連続で鳴らし、彼女たちの技を一瞬で封じ込めた。炎のサッカーボールが、金色の蝶のチェーンが、緑の円盤が、水の矢が瞬間にクリスタル状の物体の中に閉じ込められ、空中で固定される。ツバキは最後に一際大きく指を鳴らすと、物体は爆発し、彼女たちの技も一瞬で粉碎した。

「・・・ああつ!?」「・・・」

「ぼうつとして、いいんですか?」

驚愕の声をあげるプリキュアたちにツバキが声をかけ、すぐさま指を鳴らす。一瞬で彼女たちの周囲に物体が現れ、全身を封じ込める。4人がしまったと思つた瞬間、物体が爆発を起こし、傷ついたプリキュアたちは全員目を閉じたまま地に伏した。

「みんな!よくも・・・みんなを!プリキュア!シューティングスター!」

ドリームが鋭い目でツバキを睨み、桃色の光をまもって光速で突進した。だがツバキは彼女の技が直撃する前に即座に指を鳴らした。桃色の流星と化したドリームが瞬時に物体の中に封じられ、動きを止められる。ツバキは再び指を鳴らして物体を爆発させ、ドリームは悲鳴を轟かせて吹っ飛ばされ、身体が塀に激突した。

「やあつ!」

背後から今度はローズが仕掛ける。ツバキは彼女の手刀をかわし、次の打撃技も回避したが、その次に放たれた鉄拳を右手で容易に受け止めると、素早く左手を手刀に変えてローズの首筋を強く打った。

「うつ・・・!」

ひるむローズ。ツバキは彼女の鉄拳を離すと、腰を低くして身体を回転させて右足を伸ばし、ローズの足を蹴飛ばして一瞬だけ宙に浮かすと、その一瞬を狙って彼女の腹部に拳を叩き込んだ。

「きゃああああああああつっ!!」

強い衝撃にローズも飛ばされ、塀に叩きつけられた。ぱんぱん、と払うように両手を叩いたツバキは一息吐いた。

「申し訳ありませんね。私、多少は格闘技の真似事は習っているですよ。だからできることなら私自身も嫌っているこの能力を使うことなく戦いたかったのですが、みなさんは6人のうえにあの伝説の戦士といわれるプリキュアでしょう？私たちの宿願を果たすためにもここはやむをえないのですよ」

「宿願・・・全ての世界を破壊するということ？」

腕を抑えたアクアが聞くと、ツバキは首を振った。

「いいえ。私たちの命が終えるということですよ」

「!?!?・・・どうということ!?!?」

今度はローズが聞く。彼女だけでなく、他のプリキュアたちもツバキの答えに驚いていた。

「私は生まれながらのこの能力を持ったおかげで随分と迫害を受けました。なにしろ封じ込めたものを爆発させる力ですからね、私自身もこの力を恐れて可能な限り、人前では見せないようにしていました。ですがたまたま街の中を歩いていたら、ビルの建設に使用されていた鉄骨が下の道を通っていた子供に直撃しそうになりましてね、危ないと思いつつもこのままでは間に合わないと直感した私は自分でも気づかないうちにこの力を使って落ちてきた鉄骨を空中で止めました。そして子供が急いで避難したのを確認して鉄骨を爆破しました。しかし・・・」

ここで初めて余裕のあったツバキの表情が歪んだ。彼女は屈辱に耐えるかのような激しい目をプリキュアたちに見せた。

「それを見ていた人々は褒め称えるどころか異能力を持つ私を恐れるかのような目でただ見るだけでした。その直後、鉄骨を爆破したことに驚いて次は自分たちの番だと喚いたり、この街から出て行けと叫んだりして私をひどく迫害しました。私は慌てて説明しようと思いました。誰も聞く耳持たなかったのです。それから私は人の命を救ったはずなのに、なぜか凶悪犯のように知られ、行く先々でひどい迫害を受け続けました。間違っているのは世界のほうなのに、なぜ私がこんなひどい目に遭わなければいけないのかとほとほと絶

望しました。そしてどうしてこんな力を持って生まれたのだろうと私は自分が嫌になり、死のうと考えました。ですが、その時にキュアベリオンが現れて全ての世界と私自身を終わらせるために私の力を貸してほしいと言ってきたんです。・・・私は彼女に手を貸そうと決めました。全ては、こんな間違った世界と忌々しい力を持った私自身を永遠に終わらせるため・・・」

キュアピーチたち4人はスズの全身から放たれる電撃にかなりのダメージを受けていた。誰もが全身に傷を負い、手足が痺れ、立つことさえ難しい。

「こうなったら、みんなで力を合わせて・・・」

「ダメだよ、ベリー！」

キュアステイックを向けようとしたベリーをピーチが止めた。

「そんなことしたら、あの娘はもっと怖がるよ」

「怖がる？」

「そう・・・私思うんだけど、あの娘は本当は悪い子じゃない。だから話がしたいんだ」

「話を？」

パインが聞くと、ピーチはうなずいた。

「うん。もしかしたら分かってくれるかもしれない。お願い、みんな。ここは私に任せて・・・」

するとベリーもパインもパッションもかすかに微笑んだ。

「もう本当にしようがないわね」

「でもピーチらしいと言えば、らしいよね」

「ピーチには本当に敵わないわ。・・・じゃあ、任せるわね」

「ありがとう、みんな！」

ピーチはスズに振り返ると、ゆっくりと彼女に歩み始めた。途端に怯えた目で後ろに後ずさるスズ。ピーチは彼女に優しく微笑んで声をかけた。

「大丈夫。何もしないから。私はあなたと話をしたいの。いいかな？」

「あなた、本当はこんなことしたくないんじゃない？だって、もし本気だったら、私たちはとくに死んでいるよ。本当は誰も傷つけないんじゃないかな？」

「でも、もしこのままだと全ての世界が破壊されてたつくさんの人が傷つくよ。それでいいの？嫌だよな？だったら・・・お願い、そこを通して」

「それは・・・ダメッ！」

叫んだ途端、スズはわずかだが電撃をほとばしらせた。電撃をかわし、ピーチは二歩後退した。するとスズは悲しみに暮れた顔で言葉を続けた。

「こんな世界・・・なくなつたほうがいいよ」

「!・・・どうして？」

「だって私は・・・私は、こんな力を持ったせいですつといじめられてきたんだもん・・・。お父さんもお母さんも私のことを怖がつて、外でも私はみんなから逃げられたり、石をぶつけられたりといつもいつもひとりぼっち・・・。私だって、どうしてこんな力があるのか分からないのにどうしてこんなにいじめられなきゃいけないの？こんな力なんか欲しくなかったのに、どうして誰も助けてくれないの？ひどいよ・・・これじゃ私、生まれてこないほうが幸せだった！私をいじめるこんな世界なんか生きたくない！死んだほうがいいよ！だけど、死ぬのも怖くてできなくて、そんな時に助けてくれたのがお姉ちゃん・・・キュアリベリオンだった」

ピーチも、ベリーも、パインも、パッションも、息を呑んだまま黙って聞いていた。

「お姉ちゃんは私に言ってくれんだもん・・・。私も、私をいじめた世界も、全部『なかった』ことにしてくれるって・・・。だから、

・・だから、私は決めたの。お姉ちゃんに協力して最初から全部  
なかった』ことにしようって・・・」

燐粉や毒針を次々と浴び、ブロッサムたち4人は完全に動きを封じられた。身体が痺れて指先すらも動かせない。身動きできない状態の彼女たちにカノンはさらに周囲に咲き乱れる花を操って、植物のツルのような触手で叩きつけた。

「くっ・・・うっ・・・！」

触手攻撃に苦戦している中で表情を歪ませたままムーンライトが気力を発揮して痺れた身体を立ち上がらせた。そして離れた場所に立つカノンを見て、ムーンタクトを構えた。

「花よ輝け！プリキュア！シルバーフォールテウェイブ！」

瞬時にタクトから巨大な銀の花の形をしたエネルギー弾が高速で飛ばされ、カノンに直撃する。だが、

「なっ・・・！？」

ムーンライトは目を見開いた。技が激突した瞬間、カノンは全身から大量の花びらを撒いて姿を消したのだ。一体、どこに？ムーンライトが急いで周囲を見回そうとすると、

「こっち」

後ろから声が聞こえ、振り返った。だが振り返った途端にムーンライトは襲いかかってきた巨大触手に身体を殴られ、彼女は植物園のガラスに強く打ちつけられた。

「・・・ムーンライト！！！！」

ムーンライトのやられ様を目の当たりにし、シプレ、コフレ、ポプリが叫ぶ。妖精たちは戦いが始まってすぐに隠れたので燐粉や毒針を浴びなかったが、プリキュアたちを痛みつけてもなお無表情を続けるカノンに憤慨し、飛び出した。

「シプレ！」

「コフレ！」

「ポプリ、危ない！」

身体が動けなくともすぐにプリキュアたちが声をあげて叫ぶが、妖精たちは強い目つきでカノンに喚きたてた。

「こんなことをして、あなたは平気なのですう？」

「全ての世界が滅びるということは、全ての命が失われるということですよ！君はそれをよく理解できているんですう！？」

「そもそも花はみんなの心を癒すためにあるんでしゅ！なのに、こんなふうにはなを操って・・・間違っているでしゅ！」

すると、カノンの口が静かに開いた。

「私も、花をこんなことに使いたくなかった・・・」

「えっ？」

カノンの言葉にブロッサムが声を出した。

「だけど、みんな言う。気持ち悪い・・・花をいつでもどこでも咲かせたりできるおまえは気持ち悪い・・・」

「!？・・・」

「本当は、色々な花をみんなに見てもらって喜んでほしかった・・・でも、みんな私を見て言う。気持ち悪い。悪魔の子。化け物・・・私の花を見たら、気が変になって操られる噂さえ流れた。でも、そんなつもり、全然ない・・・」

初めて無表情だったカノンの顔が歪んだ。悲しみを堪えている顔だ。思わずフランス人形を抱く両腕に力が入った。

「ただみんなに喜んでほしかっただけなのに・・・誰もが私をいじめる。もう嫌。キュアリベリオンと仲間以外、みんな嫌い。そして・・・私も、嫌い。もう全部消えてなくなってほしい。世界も、私も・・・」

残党たちは、全員同時に声を発した。

「・・・だから、私たちは・・・世界を全て壊す！」

「……それは、違う……!!!!」「……」

だが、即座にプリキュアたちに否定された。みんなは傷ついた身体を起こし、立ち上がって目の前の相手に一人ずつ言い放った。

「確かに世界には間違いもある。だけど！」とブラック。

「間違いを正すことは、誰にでもできるわ！」とホワイト。

「時間はかかるかもしれませんが、困難も待ち構えているとも思いません。ですが！」とルミナス。

「あきらめなければ、きつとゴールは見える！」とブライト。

「そのために多くの人たちが希望を捨てずに戦い続けているの！」とウインディ。

「そんな希望を持つ人たちのためにも、私たちは最後まで絶対にあきらめない！」とドリーム。

「そういうこと。私たちは、その人たちの想いにも応えたい！」とルージュ。

「そして私たちも夢という希望を持って、明日を迎えるんです！」とレモネード。

「たとえ何度打ちのめされても、あきらめなければ夢は叶うと信じているから！」とミント。

「世界が滅び、未来が失われれば、私たちの夢も永遠に叶わなくなるから！」とアクア。

「だから！私たちは、辛くても戦い続けるのよ！」とローズ。

「一人一人が手を繋いで想いをひとつにすれば、世界は変わることをできる！」とピーチ。

「何もしないで絶望に負けるのだけは、許さない！」とベリー。

「最初はひとりかもしれない。だけど……！」とパイン。

「みんなと力を合わせていけば、何もできないなんてことはない！」とパッション。

「私も、みなさんのおかげで変わりました。だから、世界もきつと

変わります！」とブロッサム。

「あきらめずに何回でも挑戦することが大切なんだよ！」とマリリン。  
「世界にはまだまだ希望はある。その希望を見ずに滅ぼすなんてさせない！」とサンシャイン。

「わずかでも希望を失わないためにも、私たちプリキュアはいるのよ！」とムーンライト。

そして完全に立ち上がった19人のプリキュアは、目の前の相手に声を揃えて宣言した。

「だから！私たちは、全ての世界を守る！希望は絶対に失わせない！！！！」

迫害（後書き）

次回、反撃！

## 救済

ブラック、ホワイト、ルミナス、ブライト、ウインディの5人の台詞と強い視線を浴びてアキラは思わず一步後退しそうになったが、その下がりそうになった足をなんとか堪えて拳を握り締め、睨み返した。

「綺麗事を言うな！悪魔だの化け物だのと差別するような醜い心が人にある限り、世界なんて変わりやしない！」

再び全身から大量の触手を生やし始める。プリキュアたちは全員、鋭さを増していた目を悲しみの宿ったものに変えた。

「あんたがどれだけ辛い人生を送ってきたかは知らないよ。だけど、  
」

「世界を憎み、自分も死にたいなんてあまりにも悲しすぎるわ」  
「!?!」

触手を次々に生やしながら、アキラはブライトとウインディの台詞に驚愕したように両目を見張った。続けてブラック、ホワイト、ルミナスも言う。

「確かに体からそんなのが生えてきたら、みんな普通は怖がると思うよ。でもね・・・」

「その力を破壊のために使えば、みんなはもつと怖がるわ。あなたは力の使い方を間違えているのよ。その力を人の役に立たせれば、みんな分かってくれる時がきつと来るわ」

「おふたりの言うとおりです。あなたは力の使い方を誤っています。難しいかもしれませんが、力を正しいほうへ一生懸命になって使えば、きつとその想いはみなさんに届きます」

プリキュアたちはみな必死で彼女の心に訴える。だが全員の訴えはアキラの心に届かなかった。彼女は両目をギラツと鋭くし、血管も浮き出た表情で

「ふざけたことを言ってるじゃねえっ!!」

と一際高く吠えようと、全ての触手を操り、自身を包み込んだ。

「……あ……ああ……！」

絶句するプリキュアたち。アキラは全てを怒りと憎しみに任せ、ありつたけの触手で身体を覆い、人の形へ変貌を遂げていく。やがてアキラは天井スレスレに届くかと思うほど全身が無数の触手で形成された“黒の魔人”に姿を変えた。

「正しいことに使えば分かってくれる？ふざけるな。もう私はキュアベリオンと仲間以外は誰も信じねえって決めたんだ。私を受け入れる時なんか絶対に来ない。もう何もかもぶっ壊してやる、世界も、私自身も……！」

魔人の中でアキラが叫ぶ。“黒の魔人”はプリキュアたちに向くと、触手でできあがっているその巨大な片足を一歩前に踏み出した。途端にバキッ！と床板が割れる。その巨大な姿をブラックは冷や汗を流しながらも、キツと目を鋭くして他の4人に声をかけた。

「みんな……あいつを助けよう！」

「ブラック？」

ブラックの言葉に彼女のパートナーのメップルが聞く。他のプリキュアと妖精たちも彼女に顔を向けた。ブラックは視線を相手に向けたまま、言葉を続けた。

「あいつはずっとひどい目に遭ってきたせいで心が壊れかけているだけなんだ。きっと本当はずっと誰かに助けてほしかったんだと思う。やり直したかったんだと思う。だってあいつ、自分の過去を話していた時、すっごく悲しそうにしていたんだもん。このまま世界も自分も大嫌いなままなのはきつとよくないよ……助けよう、私たちの想いをあいつにぶつけて」

ブラックが言い終えると、みんなは微笑を浮かべてうなずき、再び“黒の魔人”に顔を向けると即座に準備を開始した。

まずルミナスがハーティエルバトンから放った虹色の光線をブラックとホワイトの背後から浴びせた。光線を全身に浴びる中でふたりは両腕を振り回して一定方向に動きを止めた。

「みなぎる勇氣！」

「溢れる希望！」

「光り輝く絆とともに！」

ダアンツ！とブラックとホワイトが片足を前へと勢いよく踏み出した途端、ふたりの目の前に巨大な虹色のハートが現れ、すかさず片手を前に差し出した。

「エキストリーム！」

「ルミナリオ！」

3人が声を張りあげて叫んだ瞬間、ハートから溢れ出すかのよう  
に黄金の光線が発射された。

一方でブライトとウィンディは両目を閉じ、それぞれ腰と腕に付  
随ずいしているプリキュア・スパイラル・リングを起動させる。どこか  
ら溢れ出てくるような大量の光を星型の中心部分に集めていくと、  
ふたりは目を開いて叫んだ。

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

「希望へ導け！ふたつの心！」

「プリキュア！スパイラル・スター！」

かけ声とともにふたつの螺旋状の水流が目の前で交錯していく。

「スプラアアツシュ！」

ふたりが前方へ強く両手を押し出すと、混ざり合った水流が光線  
と化して噴出するように放たれた。

5人が飛ばした光線は途中で融合し、さらに強大になって“黒の  
魔人”へ一直線に突進していく。

「そんなもん、ぶっ壊してやらあっ！」

アキラは魔人を操り、全身から触手を飛ばして四方八方から光線  
を突き刺した。だが光線は粒子化するどころか逆に突き刺してきた  
触手を呑み込みだした。

「何っ！？」

触手を徐々に呑み込み、接近していく光線。光線がそのまま黒い  
無数の触手で覆われた巨体に直撃するまでそんなに時間がかからな

かったのは言うまでもない。

「うああああああああああっつつつつ!!!」

アキラは生まれて初めて喉が張り裂けそうなくらいの絶叫を轟かせた。だが光線を浴びているはずなのに、どこも痛みを感じないことにすぐ気づいた。それどころか、優しくて温かく、まるで誰かに抱き締められているようで心地よくさえ感じた。

ああ・・・この感触、何年ぶりだろう。すごく癒される・・・。全ての触手が消滅したアキラはそのままステージ上に降下し、倒れ伏した。瞬間、体育館の中だった空間に亀裂が入り、一瞬のうち空間は崩壊した。そして代わりに白い洋風の大広間が出現し、みんなは目を大きく見開いた。

「幻だったのね」

ウインディが周囲を見回して言うと、床の上で大の字の状態のまま動こうとしないアキラに、ブラックがゆっくりと近づいた。

「大丈夫？」

「ああ・・・」

顔を覗き込んだブラックにアキラは力なくうなずくと、額に手を当てた。

「ちくしょう・・・と言いたいけど、なんでだろうな？すっげえ胸が温あつたかくて気持ちいい」

「・・・それは、私たちの『助けたい』という想いが届いたからだよ」  
するとブライトが笑って言った。

「『助けたい』・・・?」

「そうだよ。だって、あんたも私たちと同じくらいの歳じゃん？まだまだ人生これからって時に死にたいだなんてもったいなさすぎだよ。世界は無限に広がっている。そして未来も無限に広がっているんだ。だからさ・・・探してみない？あんたの居場所を」

「私の居場所？」

「そう。世界は絶望ばかりじゃない。たとえ普通と違う力を持っていたとしても、きつとあんたを受け入れてくれる所が必ずあるよ。」

もう少しだけ頑張つてさ、探してみようよ。ね？」

ブライトは手を差し伸べた。アキラはその手をじっと見つめたが、一息吐くと結局その手を取らずに上体を起こして立ち上がり、ズボンを両手ではたいた。

「全く・・・私もヤキが回ったもんだな。でも・・・」

アキラは両手を後ろに回し、少しだけだが口角を上げて優しく微笑んだ。

「ま、おまえらという全力で想いをぶつけてきたやつらがいるんだ。もう少しだけ、世界を信じて生きてみてみてもいいかもしれねえな」

彼女の言葉を聞き、プリキュアたちはいつせいに笑顔が満面に輝いて喜んだ。

「よかった。・・・それじゃあ、あんたは急いでこの城を出て。私たちは少しでも早くキュアリベリオンに会って、計画を阻止しなきゃ・・・」

「待つてくれ」

走り出そうとしたブラックをアキラは止めた。ブラックが振り返ると、アキラは次にこう口を開いた。

「伝説の戦士と見込んで・・・頼みがあるんだ」

ツバキは愕然となっていた。プリキュア5の言葉に思わず顔をしかめ、すぐさまそんな口を二度と利けないようにしてやろうと彼女たちを何度も物体の中に閉じ込め、爆発を起こしたが、

「な、なぜですっ!？」

何度爆発をその身で受けても、彼女たちは強い目でまっすぐ見据えたまま、傷ついた身体を立ち上がらせるのだ。遂には倒れることすら耐えられるようになり、ツバキの表情に焦りが生まれた。

「なぜ立ち上がるのですか？自らをそんなに傷つけてまで、どうしてあきらめたりしないのです!？」

「言ったじゃない!」

彼女の問いにドリームが答えた。

「私たちにはともに戦ってくれる仲間がいる！そして絶対に叶えた夢がある！私たちとみんなの未来を守るためにも、ここで倒れるわけにはいかないの！」

「未来？そんなものはいずれなくなります。全ての世界が破壊されれば、残るのは絶望だけが漂う永遠の闇だけです」

「どうしてあなたはそんなに絶望するの！？確かにあなたの力は普通じゃないかもしれない。でも、その力を使わなければ、ひとつの小さな命が消えていたかもしれない！」

「！」

「あなたは少なからずその力で人を救うことができたんだよ。だったら、その力をもっともつと人のために使っていけば、きっとあなたにも未来を自分で切り開くことができるよ！」

「た、戯言を……。そんなことはもうできません。キュアリベリオンと仲間以外、誰も信用できなくなった私に、未来を切り開くなど……」

「未来を自分で切り開くことは、誰にでもできる！私たちがきつとそれを証明してみせる！みんな！」

ドリームが振り返ると、みんなはうなずいて手を挙げ、剣の形状に似た武器・キュアフルーレを召喚した。そしてその先端を重ね合わせていく。

「5つの光に！」

「……勇氣を乗せて！」

「……プリキュア！レインボローズ・エクスプロージョン！」

5人は同じ姿勢、同じ速度でフルーレの先端を相手に定め、前へ強く突き出す。瞬間、桃、赤、黄、緑、青の五色の薔薇が出現して突進していく。五色の薔薇は途中で融合して巨大な虹色の薔薇に変化を遂げ、さらに勢力を上げた。

「くっ……こんなもの！」

ツバキはすぐさま指を鳴らそうとするが、鳴らす直前にローズが彼女の目の前に颯爽と降り立ったために一瞬身体が硬直した。

「邪魔です！」

が、すぐにツバキは指を鳴らそうとした手を手刀に変えてローズに素早く繰り出した。

ぽんっ！

だがローズは突然煙を発して本来の姿であるミルクに戻ると、ツバキの手刀をかわして身体を一回転し、

「ミル！」

の声と同時にツバキの頬にその長い耳を思いつきりぶつけた。

「うあっ！」

さすがにこれは対処できずにツバキは頬に微弱ながらも衝撃を受け、三步後退した。ようやく相手に一矢報いることができたミルクは再び煙を発してローズに戻るとすぐさま横へ跳んだ。

「し、しまった！」

頬を抑えて振り返ったツバキの頭上に巨大な虹の薔薇が降臨する。ツバキは抗うことなく全身を薔薇に包まれていった。悲鳴はあげなかった。だって、全身が隅々まで洗い流されていくような感覚で、とても気持ちよかったから。

これが、彼女たちの想いの力か・・・。

ツバキは無数に舞う花びらの中で目を閉じた。

だとしたら、なんて強いのだろう。未来をあきらめない、何度でも立ち向かっていくその想いを前に、ツバキは全身が満たされ、心が癒されていった。

やがて薔薇は消え、その中からツバキが彼女たちの前に降りる。彼女の身体にはまだかすかに花びらが付着していた。ツバキは目を開いてプリキュアたちの顔をゆっくりと眺め回した。

「キュアドリーム、ひとつだけ聞いてもよろしいですか？一度未来をあきらめた私が、もう一度未来を切り開くことは可能ですか？」

ドリームは微笑みながら首を縦に振った。するとツバキもすまし

た微笑を浮かべて呟いた。

「分かりました。私もあきらめずにもう一度頑張ってみます。私自身の未来を描いて……」

すると、ヨーロッパの街並みのような景色だった空間がガラガラツと音を響かせて崩壊した。空間が崩れ去った後には純白に塗装された洋風の大広間が彼女たちの周囲に広がった。

「幻覚だったのね……」

「ミントが言う」と、

「じゃあみんな、行くよ！」

ドリームが全員に声をかけ、先へ一歩踏み出そうとしたが、すぐにツバキに止められた。

「待つてください。みなさんには頼めた義理ではないということとは重々承知なのですが、お願いがあるので……」

「無理だよ……たとえ頑張っても、こんな体じゃ、誰も私を受け入れてくれないよ。やっぱり、私は消えてなくなりたい……！」

スズは両目から涙を溢れさせると、次の瞬間、激しい口調で言った。

「私はお姉ちゃん以外、誰からも必要とされていないんだ！もうこんな世界に生きたくない！早くお姉ちゃんに全部『なかつた』ことにしてほしい！私も世界も……！」

「生まれきて、誰からも必要とされない人なんかいないっ！」

スズの身体から激しい電撃が飛ばされ、壁などにほとばしる。激情に駆られ、危険な状態にある彼女だが、ピーチは時折電撃を肩や足に受けながらもスズに近づき、その手を強く握り締めた。途端にスズは驚いたように目を大きく開き、電撃が収まる。ピーチはスズの瞳を見つめながら口を開いた。

「少なくとも、私たちは、あなたを絶対に『なかつた』ことにはし

ない！たとえどんな命でも、生まれてきたからには精一杯生きて幸せゲットする権利があるんだよ！」

「幸せ・・・を？」

「そうだよ。それに・・・」

ピーチは優しい笑顔でスズの手を少しだけ持ち上げて彼女の目にも映るようにした。

「あなたの手は、こんなにも温かい。これだけであなたが人間だという証なんだよ。・・・あなたは悪魔でも化け物でもない。ちゃんと心のある人間なんだよ。あなたはこれから先も生きて幸せになっ  
ていいんだよ」

「幸せを・・・？無理・・・無理だよ。みんなから嫌われて、お姉ちゃんたちの他に誰も信じられなくなった私に・・・幸せなんて来ない！来ないんだよおっ！」

バリバリバリツツツ！！！！

スズの全身から強烈な電撃が炸裂した。電撃を胸に受けたピーチは途端に悲鳴をあげて吹っ飛ばされた。

「うわああああああああああああっつつつつ！！！！」

電撃が炸裂する身体を抱え、スズが絶叫を轟かせた。彼女の周囲で青白い電流が次々に走り、爆発を起こす。空間に亀裂が走った。猛烈な電撃が暴れだし、空間が持ち堪えられなくなったのだ。だがピーチは慌てず、ベリーを支えにして立ち上がると、もう一度強い視線をスズに飛ばした。

「不幸になるために生まれてきた人なんかいない！誰も信じられなくなったあなたはその悲しみに沈んだ心、私たちがきつと救ってみせる！」

ピーチの言葉にベリーもパインもパッションも強くうなずいた。

そして4人は電撃を炸裂するスズに向き直り、即座に取るべき行動を取り出した。

「プリキュアフォーメーション！」

ピーチが叫び、全員スタンディングスタートの体勢を取る。瞬時

に全員が準備を終えたことを確認してピーチはもう一度声をあげた。  
「レディ……ゴ―！」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションの順に走り出ていく。

「ハピネスリーフ！セツト！」

パッションの手に赤に光るハートが現れる。パッションは次に「  
パイン！」と叫んでそれを投げた。パインはそれを両手で受け取る。  
「プラスワン！フレアーリーフ！」

赤のハートのすぐ横に黄色のハートができる。パインはすぐに「  
ベリー！」と投げた。ベリーは片手で受け取る。

「プラスワン！エスポワールリーフ！」

今度は青のハートができる。ベリーは最後に「ピーチ！」と叫んで投げた。ピーチはそれを受け取り、決める。

「プラスワン！ラブリーリーフ！」

ピンクのハートができあがり、ハートは四葉のクローバーの形となる。ピーチは身体を回転させると、そのままクローバーを前方に投げた。クローバーは回転しながら巨大化し、同時に4人は跳躍してそれぞれのハートの上に着地した。4人の乗ったクローバーは頭上から降下し、電撃が飛び散るスズの身体を包み込む。4人はいっせいに手を挙げた。

「……ラッキークローバー！グランドファイナーレ！……」

するとスズは透き通った宝石のような物体に封じ込まれ、その中で癒しの光を全身に受けた。全てを満たしてくれるような綺麗で温もりのある、聖なる光。光に包まれ、スズは自然と笑みがこぼれた。気持ちいい……。これがプリキュアの、想いの力なんだ……。私、やっと分かった。私は……。ずっと怖かったんだ。人が怖くて……。とても勇気が出せなくて……。そんな自分が嫌だったんだ。

でも、もう私は怖くない。だって、世界にはプリキュアというこんな私でも幸せになっていいと言ってくれた人たちがいるんだもの。私は、幸せを求めて生きていきたい。

光が消えると、スズは初めて頬が膨らむほどのかわいい笑顔をピ

「イチたちに見せた。彼女の身体から電撃はもう飛び散っていないかった。工場のような空間は崩壊し、やはり同様にもとの洋風の大広間に戻った。」

「ありがとう・・・私、本当に幸せになっていいのかな？」

「もつちろん 私たちの他にもあなたのこと『なかつた』ことにしない人たちがきつといるよ。信じてみよう・・・世界を、人を」

「・・・うん！」

笑って言ったスズに、ピーチも笑顔で応えた。そして彼女は仲間たちに振り返ると、「じゃあ、行くね」と言っつて、先へ進もうとした。

「あ、待って・・・」

だが、スズは彼女たちを止めた。「え？」とピーチは振り返った。すると、スズは少しだけでもじもじして呟いた。

「お願いがあるの・・・」

3人はプリキュアたちに向くと、同時に声を発した。

「「「キュアリベリオンを・・・・・・助けてほしい！

！」「」」

救済（後書き）

次回、ハートキャッチ組も決着！

## チェンジ

キュアブロッサムたちの言葉を聞いたカノンはフランス人形を抱き、無表情だった顔をわずかにしかめた。

「無理。できるはずがない。変わることも……」

すかさずブロッサムが声を飛ばした。

「いいえ、きつと変われます。少しずつですがシャイで引つ込み思案だった私も変わることができたんです。……あなたもお花が大好きで、本当はたくさんの人を喜ばせたかったのでしょうか？あなたのその想いはきつとみなさんにも届きます。だから、嫌いだった自分から一歩踏み出してみてください。怖いかもしれませんが、そこから勇気を出して新しい自分にチェンジするんです！」

「……できない。キュアリベリオンと仲間以外、誰にも心を許せなくなつた私が、今さら変われない」

「……そんなことない！」

マリン、サンシャイン、ムーンライトが声を揃えて訴えた。

「やってみなきゃ分かんないじゃん。何もしないうちにあきらめるのは絶対にダメだよ！」

「今までずっと辛い目に遭ってきたかもしれない。でも、これから先も辛いことが続くとは限らない。自分を傷つけず、希望を見失わないで！」

「あなたのその力も、持って生まれたあなたの一部。あなたが花を咲かせてみんなを喜ばせていきたいという気持ちはまだあるのなら、必ずそれはみんなに届くわ。絶望に任せて、自分で自分の存在を否定しないで！」

次々と言葉をぶつけていく。だが、徐々に表情が崩れ始めたカノンは激しく首を振った。

「やめて。これ以上、惑わさないで……！」

次の瞬間、植物園の床を破り、巨大な緑のツタの触手が続々と出

現し、カノンを包囲する。ツタは彼女の姿を見えなくすると、数本がさらに巨大な塊となっていき、所々に赤紫色をしたグロテスクな花を咲かせた。呆気にとられるプリキュアたち。天井さえもぶち破るほどに成長した巨大植物の中からカノンが自身を抱き締め、悲しみの声を漏らした。

「みんな・・・みんな、嫌い。全部消えて・・・！！」

花から大量の胞子を飛ばし、数本の触手を繰り出す。4人は後方に高く跳んでかわし、着地した。ブロッサムが絶望に暮れる少女を見つめ、強く輝いた目で叫んだ。

「私たちが勇気をあげます！だから、絶望に負けないでください！」  
妖精たちも飛び出して叫んだ。

「今こそ、みんなの力を合わせる時ですうっ！！」  
「でしゅ！」

そしてプリキュアと妖精たちの声に応え、彼女たちの前にハートキャッチミラージュが召喚される。4人は鏡の前で祈りを捧げた。

「・・・鏡よ鏡、プリキュアに力を！」

4人はハートキャッチミラージュのテーブルにそれぞれポプリからもらった銀色の「スーパーパープリキュアの種」をセットし、力を発動させる。4人は身体が光に包まれて衣装が変わっていく。背中に天女の羽衣のようなハートが装飾され、色が淡くなり、スカートも先がとがった。

「・・・世界に輝く一面の花！ハートキャッチプリキュア・スーパースィルエット！！」

全員、それぞれの武器を構え、必殺技を発動させて叫んだ。

「・・・花よ咲き誇れ！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！」

すると4人の背後に純白の衣装をまとった巨大な女神が出現した。淡い桃色の長髪と衣装を翻し、女神は巨大植物へと向かっていく。

「ふんっ！」

まずムーンライトが手をかざし、相手の目の前に女神を降臨させ

ると、

「はああっ！」

次にサンシャインが叫んで女神に片手を少しだけ持ち上げさせる。

「たああっ！」

続いてマリリンがその手を拳へと変え、

「たああああああーつつっ！！！」

最後にブロッサムがその巨拳を振り下ろして絶望に捕らわれたカノン女神の手中に収め、聖なる光の中へ包み込んだ。

「っっっはああああああああああああっっっっ！！！！」「っ」

「

女神の手中に収められたカノンに向けて、ブロッサムとマリリンはフラワータクトのクリスタルドームを回転させ、サンシャインとムーンライトはシャイニータンバリンとムーンタクトで弧を描いてエネルギーを送り込んだ。

カノンは感じていた。気持ちいい、と。

身体の隅々まで癒されていくようで、思わず笑みがこぼれた。そういうえば、笑うのなんて随分とひさしぶりだ。最後に笑ったのはいつだったっけ？

目を閉じている女神を表情を見て、カノンは思う。なんて綺麗で、美しすぎて、せつなくなるほどの表情だろう。感動で身体が震えた。こんなにも美しく、大きな存在が自身を助けてくれたことにカノンは心の底から感謝した。さっきまで自分を苦しめていた絶望が消えていく。身体が温かくなり、軽くなった気がした瞬間、女神は手を優しく降ろし、光の粒子となって消え始めた。やがて多くの花が咲き乱れていた植物園の空間が亀裂を起こして崩壊していく。洋風の大広間が目の前に広がり、カノンは振り返った。もとの衣装へと戻ったプリキュアと妖精たちが微笑を浮かべて立っていた。

「………礼を言う」

カノンはそう言って小さく微笑した。そして続けてブロッサムに言った。

「・・・もう一度、希望を持って生きてみる。大好きな自分になれるように・・・」

「はい！あなたが新しい自分にチェンジできるよう、私たちも祈っています！」

ブロッサムは笑顔で元気よく答えた。すると、カノンは突然微笑をやめ、真剣な眼差しで言葉を続けた。

「あなたたちなら、できるかもしれない。キュアリベリオンを助けることが・・・」

「・・・えっ・・・？」

一瞬、みな彼女が何を言ったのか分からなかった。

「あの・・・どういうことですか？キュアリベリオンを助けるって・・・？」

ブロッサムの問いにカノンはしばし躊躇したように深刻な表情を見せたが、すぐに口を開き、話した。

「あなたたちには言う。キュアリベリオンの本当の姿を・・・」

牙を鳴らし、ギラギラ輝く目を向けながら今にも噛みつかんばかりに唸る無数の凶犬を前に、キュアセイバーは息が切れ始めていた。二、三匹でも連携プレーが得意で厄介なやつらなのに、この数は圧倒すぎる。全部は倒さなくても、これでは先へ進むことすら困難だ。

早く、先へ進まなきゃいけないのに、このままじゃ・・・。

銀髪から汗が流れ、頬を伝わっていく。目の前の敵に集中していたセイバーだが、背後から凶犬が一匹、鋭い牙と歯茎をさらして音もなく接近していることに気がついていなかった。高く吠え声をあげ、牙と前足の爪を剥き出しにして凶犬が跳び上がり、背後からセイバーを襲う。

「しまった！」

セイバーが気づいた時にはもう遅かった。牙と爪はもう眼前にま



## チェンジ（後書き）

みなさん、お待たせしました。次回、あのふたりが遂に参戦です！

## 組曲

突如顔に貼りついてきた猫(?)に凶犬は首を激しく振り回した。途端に「ウニヤツ!？」と叫び、猫は凶犬から離れたが、くるくると宙を舞って着地すると、凶犬たちに向かい、なんと後ろ足で立ち上がり、言葉を話した。

「こんなか弱い女の子をいじめるなんてやめるニヤ。こんなことをして、恥ずかしくないのニヤ?」

「か、か弱いつて・・・てか、猫が喋った!？」

「セイバー、違うロモ。猫に似てるけど、この子も妖精ロモ」

「妖精・・・?」

ペンダント型変身アイテムに姿を変えているロモモが言うと、猫に似た妖精はくるりとセイバーに振り返り、

「ハミイだニヤ。よろしくニヤ」

につこりと、自己紹介をした。ハミイと名乗った妖精の周りにはこれまた7種の色に分けられた小さな妖精たちが宙を舞っていた。すると・・・。

「ハミイイイイイイイイツツツツ!!!」

背後から声が二人分、聞こえた。セイバーが振り返ると、彼女が凶犬たちを次々に薙ぎ倒していった道の奥から少女がふたり、全速力で走ってきているのが見えた。ひとりは茶色のロングヘアで、もうひとりは少し灰色に近いセミロングヘアをしている。

「響いっつ!奏えっつ!」

ハミイはふたりの姿を見た途端に喜んで、急いで駆け出し、響と名を呼んだ少女の胸に飛び込もうとしたが、

「ハア〜ミイ〜イ〜ツ!」

響は怒りに満ちた表情でハミイの両頬をメチャクチャに引っ張り出した。

「あんたね!いきなり全世界の危機だとか言つて、私たちをこんな

ワツケ分からない所につれてきたと思つたら、今度は『あつちから声が出るニヤ!』と言って走り出して・・・あんたを探しまくつたこっちの身にもなれって話よ!」

すると、奏と名を呼ばれた少女も響に続いてハミイを叱つた。

「そうよハミイ! ハミイにもしものことがあつたら、どうするの! 少しは勝手な行動は慎みなさい!」

「ごめんニヤ」。もう許してニヤ。!

「あ、あの、お取り込み中すみませんが・・・」

呆氣に取られていたセイバーが一応声をかける。「ん?」と響が声を出し、ふたりは彼女に振り向いた。殺氣出しまくりの凶犬たちに囲まれているのに、少しも緊張感が湧かないなあ。と思いつつも、セイバーは言葉を続けた。

「ここは危険よ。私になんとか気を引くから、すぐに・・・」

逃げて、と言おうとすると、ふたりはなぜか笑つて言った。

「ありがと。でも大丈夫だよ」

「むしろ逆。ここは私たちに任せといて」

「えっ・・・?」

セイバーがそう声を出した途端、ふたりは手に何かを取り出した。白いハート型のコンパクトのようなアイテムだった。そこに「ドドー!」「レレー!」と、さっきハミイの周りにいた7種の妖精のうちピンクと白のが自ら飛び込んでセツトされる。ふたりはアイテムを握る手に力を込めて同時に叫んだ。

「レツツプレイ! プリキュア・モジュレーション!」

瞬間、アイテムから放たれた光がふたりの全身を覆っていく。光の中でふたりは目を閉じた。徐々に衣装が施されていく。響はマゼンダを基調とした衣装に髪型も茶色からピンクのツインテールに変わっていく。奏は白を基調とした衣装に髪型も艶やかなレモンイエローの長いポニーテールに変わった。完全に姿を変えたふたりは目を開くと、

「爪弾くは荒ぶる調べ! キュアメロディ!」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

と名を名乗り、

「「届け、ふたりの組曲！スイートプリキュア！」」

と揃ってポーズを決めた。

「スイートプリキュア・・・？つぼみたちの他にもまだプリキュアが・・・？」

驚きを隠せないセイバー。ふたりは目を合わせてうなずきあうと、同時に地を蹴って、凶犬たちへ駆け出した。突然の乱入者を即時に敵と判断し、凶犬たちも光る牙と爪をさらして走り出す。

「たああつ！」

メロディは飛び上がって急降下キックを一匹にお見舞いすると、次々に跳びかかってきた凶犬をその拳で殴り飛ばしていく。一方でリズムは優雅な動きで凶犬を三匹、回し蹴りで弾き飛ばすと、さらに身体を高速回転させてぶつかり、多くの数を地に叩きつけた。そしてふたりは背中合わせになり、前方の凶犬たちに視線を飛ばすと、「「せーのっ！」」

と声を揃えて跳躍して宙返りをするそのままダブル急降下キックを飛ばし、一気にかかりの数を衝撃で消滅させた。

「す、凄い・・・！」

「息が完全に合ってるロモ・・・！」

他の凶犬と交戦しながらもふたりの戦い様を見ていたセイバーとロモモが思わず感嘆の声をあげる。彼女のそばにいたハミイは手を叩きながら嬉しそうに笑っていた。メロディとリズムは同時に着地すると、セイバーに振り返った。

「ちょっと、そのの！」

「そ、そこ？え？私？」

セイバーが自身を指差すと、メロディはうなずいた。

「急いでいるなら今のうちだよ」

「えっ？」

「ここは任せて。私たちのことは心配しなくていいから、早く行っ

て！」

「セイバー、もう時間がないロモ！ここはふたりに任せて急ぐロモ！」

メロディに続き、リズムも言っていると、ロモモが声を急いだ。

「・・・そうね。ありがとう、ふたりとも！助かったわ！」

セイバーは礼を述べると、高く跳躍した。そして数がかなり削減した凶犬たちの頭上を越えていく。凶犬たちを跳び越えた彼女は地に降りると、すぐさま走り出して行った。

構えを取るメロディとリズムに凶犬たちは目を光らせながら身体を変化させた。黒いもやのように姿を変えた凶犬たちはそのまま互いと互いを融合し合い、巨大になっていく。やがてもやが晴れ、その中から全長5メートルほどの黒い野犬がぬうつと出てくるように姿を現した。目はさらに凄みを増して光り、牙を鳴らしている。だがそんな巨大な相手を前にしても、ふたりは恐れなかった。

「うっわ、どうするリズム？」

「決まってるでしょ。逆に倒しやすくなったじゃない、メロディ」

「だね！じゃあ行くよ、リズム！」

「オツケー、メロディ！」

ふたりは両手を叩き、両足をステップさせ、手を繋ぐ。するとふたりの前に黄金のハート型のト音記号が出現した。すかさずふたりは前方に手をかざして喉の奥から声を合わせて叫んだ。

「っプリキュア！パッション！ハーモニー！」

ト音記号から金色の閃光波が一直線に野犬に向かって発射される。口から唾を飛ばし、跳びかかった野犬だが、それよりも早く、閃光波が胸に直撃した。胸が炸裂し、咆哮を響かせる野犬。それが最期の咆哮となって直後に消滅したのは言うまでもない。野犬の最期を見届けたメロディとリズムは顔を合わせ、互いに笑い合った。

「やったね！」

「うん！」

「よし！このまま一気に・・・！」

だがその時、「ドドー!」「レレー!」とふたりの胸に装着されていた変身アイテム・キュアマージュールからセットされたピンクと白の小さな妖精が飛び出し、ふたりは即時に変身が解けてしまった。「え?なんで変身が?」

「心と息も合っていたのに・・・」

突然のことに理解に苦しむふたり。ハミイは慌てて目の前に降りてきた妖精から話を聞くと、驚愕の声をあげた。

「ええ〜っ!?それは本当ニヤ!?!」

「ハミイ、どうしたの?」

すぐさま奏が聞くと、ハミイは急いで振り返った。

「大変ニヤ!この世界ではフェアリートーンたちにとって、あまりに次元が違いすぎて体が保てないそうなんだニヤ。このままこの世界にいたら、フェアリートーンたちは倒れてしまい、二度ともこの世界に戻れなくなってしまふみたいだニヤ!」

「ええええええっ!?」

ふたりはびっくりした。急いで響が言った。

「じゃあもう帰るの?全ての世界が危ないって聞いたから、来たのに・・・」

するとハミイはニコニコ顔で答えた。

「大丈夫ニヤ。みんながいるから、あとのことは任せるニヤ」

「みんな?」

「響と奏も近いうちにきつと会えるニヤ。じゃ、フェアリートーンたち、あとはお願いするニヤ」

ハミイが言うと、フェアリートーンと呼ばれた7種の妖精たちは自らを発光させ、虹色に輝きだした。

「え?あ、ちよつと待っ・・・!」

響が叫んだが、光はあつという間に周辺を包んでいき、ふたりの姿をその場から消した。

「で、できた・・・」

キュアリベリオンは声をあげた。彼女の前には黒い大地が広がり、そこに何かが大きく描かれていた。

それは巨大な魔法円だった。直径は10メートル以上あり、文字がびっしり書き込まれた三重の円の内側には、5つの小さな円に取り囲まれた星のマークが描かれている。リベリオンは、はあ、はあ、と苦しそうに胸を抑えながらも、もう片方の手で懐中時計を取り出し、時刻を確認した。

そして少しだけ口角を上げて妖艶ようえんに微笑むと、闇が渦を巻く空を見上げた。

「あと少し・・・あと少しで全てが崩壊する。やっとあなたたちの想いも果たすことができる。・・・見てなさいよ、世界。今こそ断罪の鉄槌を下してやるわ!」

今、城の外では街が漆黒に包まれている。

満月が、ぼつかりと浮かび上がってきている。

！  
ヤマトノオロチの復活まで、あと1時間が迫っていた・・・

組曲（後書き）

次回、希望VS絶望、最後の戦い！

## 激突

今にも崩壊しそうな黒い大地に立ち、空には闇が渦を巻いているというのに、その空間は空気が澄み切っていて、安定していて、なぜか気持ちよかった。キュアリベリオンは思わずため息を漏らした。

それは、私が影の真夜であり、そして存在そのものが邪悪だからかもしれない。マイナス

そう思っ、リベリオンは自身の胸を強く？む。

ずっと、苦しかった。ずっと、辛かった。

終わりたくても終わらせてくれなくて、だから“私”はこの苦しみから解放されるために全ての世界を破壊するのに全力を傾けなければならなかった。でも……。

「やっと……やっと、これで終わる……！」

「終わらせない……っ！」

背後から声が聞こえた。胸を？んでいた腕を降ろし、リベリオンはスカートを翻して振り返った。

次の瞬間、ガラスが砕けるような音が響いて一部の空間が破れ、破片が無数に散らばった。そして細かな破片の中で、すっ、その煌く身体を立ち上がらせたのは……。

「真夜……いえ、キュアセイバー……っ！」

光の存在であるもうひとりの自分だった。リベリオンは途端に両目を、きゅっ、と鋭くする。セイバーも同時にもう恐れのない、切れ目を増した強い眼光をリベリオンに向けると、臨戦態勢を取った。「キュアリベリオン！……あなたが過去の私なのかどうかは分からない。だけど、あなたが今までやってきたこと、そしてこれからやるうとしてることを含めて、私はあなたを絶対に許さない！今度こそ、決着を着ける！」

そう激を飛ばしたセイバーの背後から神々しい光が反射して美し

く煌けば、

「許さない・・・？生憎とそれは私の台詞よ、真夜。・・・全ての世界は、私が壊すわ！」

リベリオンは右手に装備した鋼鉄製の鉤爪をさらしながら、漆黒に禍々しく輝く黒いアゲハ蝶を大量に飛ばす。

そして、ふたりの真夜は、凄まじい勢いで同時に地を蹴り、走り出した！

「はああああああっ！」

リベリオンは早速鉤爪を、ブウンツ！とセイバーに振り下ろした。だがセイバーは身体を翻して鉤爪をかわすと、

「はっ！」

と鉤爪目がけて爪先を伸ばした右足を思いつきり振り上げた。

ギーンツツツ！！

腹に響くような金属音がした。鉤爪は三本とも先端が折れ、グサツ！と地に突き刺さった。

「何っ・・・！？」

思わず目を見張るリベリオン。その隙を突き、セイバーは彼女の腹部に拳を叩き込んだ。

「うつ・・・！」

腹部を抑え、リベリオンは二歩後退する。彼女は腹部を抑えたまま口角を少し上げ、不敵に微笑んだ。

「・・・少しはできるようになったみたいね。じゃあ、私も本気で行くわよ！」

リベリオンは鉤爪を取り外し、右手を頭上に掲げた。その瞬間、彼女の右手に黒い炎が噴き出して、何かに形作る。炎はやがて漆黒の大鎌へ変わり、リベリオンはその3メートルはありそうな柄を器用に振り回して三日月のように曲がった禍々しいその刃をさらした。

「あれは・・・！」

「・・・ロモモ、知っているの？」

「聞いたことがあるロモ。あれは、確か100年前に闇との戦いで

過去のプリキュアたちを苦しめ、悪魔の兵器と呼ばれた『ウィッシュ・ハント希望狩』

ロモ。でも、結局はプリキュアに敗れて封印されたとも聞いたロモ」  
「その通り・・・」

ロモモの解説に、リベリオンは微笑んだまま答えた。

「アイスランドのラキ火山に封印されたのを私が見つけて、もう一度地上に引つ張り出したのよ。・・・さあ真夜、さつさと終わらせようか、私たちの決着<sup>ケリ</sup>つてやつを・・・！」

リベリオンは微笑んでいるが、その目には明らかに殺意が満ちていた。彼女の中の憎悪のボルテージが上がってきている。セイバーは額から汗が流れ始めながらもその強い目を衰えさせず、リリイフシンバルを両手に召喚し、身構えた。

ギインツツツ！！

瞬間にリベリオンが大鎌の刃を振りかざし、セイバーに斬り込む。セイバーはシンバルで刃を防御したが、斬り込んだ途端に衝撃がシンバルを通って、腕が一瞬だけ痺れた。凄い衝撃だと率直に感じながらもセイバーもすぐにシンバルを構え直し、相手を攻撃する。シンバルで打撃を与えようとして大鎌で弾かれ、吹っ飛ばされたところを即座に体勢を整えて上空から蹴りを放った。だがリベリオンは身体を回転させてセイバーの急降下キックをかわすと、即座に隙ができた腹部にブーツを履いた右足を瞬時に伸ばして強烈な一撃を逆に与えた。

「あつっ・・・！」

ひるむセイバー。だが彼女はすぐにリベリオンに目を飛ばして駆け出した。すぐさまリベリオンが大鎌を横様に振り出すが、セイバーは身体を優雅に回転させながら低く跳んでかわすと、そのまま左足を素早く繰り出した。

「くっ・・・！」

とっさに片腕で防いだものの、衝撃で少し身体がよろめくりベリオン。セイバーはすぐに着地すると、もう一度シンバルで胸に打撃を与えようとしたが、

「なめるなっ！」

リベリオンは一瞬で大鎌を構え直し、柄で打撃を防いだ。そして再びその禍々しい刃を煌かせる。セイバーもシンバルで構え、これを迎え撃った。次の瞬間、激しく衝撃をぶつけ合うシンバルと大鎌まぶしい火花と乾いた金属音が周囲に響き渡った。

ふたりの周囲に建っていた塔が衝撃を浴びて倒壊を次々と始めていく。黒い大地も亀裂が大きく走り、震動を起こした。だがセイバーもリベリオンも互いの敵に目を離さず、何度も衝撃をぶつけ合った。

セイバーは背中はなの翅を広げて高く跳躍すると、地に降り、リベリオンから少し距離を取った。そして両手のシンバルを三回鳴らした。銀の光の環が三つ飛び出し、彼女の周囲を飛び交っていく。セイバーはリベリオンに強い目を飛ばしたまま、両腕を大きく広げた。

「セイバー！リカヴァリング・アレスト！」

そしてシンバルを一際高く鳴らした。瞬間に三つの銀の環はスピードを増し、飛び交いながらリベリオンに攻撃を仕掛ける。

「こんなものっ！」

しかし、リベリオンは大鎌を振りかざすと、それを鮮やかに回転させて振り下ろし、環を三つとも破壊した。細かな欠片となって散りゆく光の環。だがセイバーはそれに目をくれずに突進していき、リベリオンに向けて白く光り輝いた右足を光速で発射した。

「ぐっ……うっうっうっうっ……！」

だがリベリオンはこれもとっさに大鎌の刃で防御した。しかし、やはりセイバーの必殺キックの威力は凄まじく、リベリオンは衝撃で思わず目を瞑り、今度は十歩以上も後退した。

「……そんなもの、効かないわ」

大鎌を降ろし、両目を開くりベリオン。だが、そこにセイバーの姿はなかった。

「！……どこへ！？」

「上よっ！」

声が聞こえ、リベリオンはすぐに頭上を見上げた。闇が渦巻く空を背後に高く跳躍したセイバーの姿が目映る。彼女は再び輝かせた右足を振り上げると、

「はあああああああつ！！！」

そのまま急降下を開始し、そのままりベリオンの右肩に思いっきり強く振り下ろした！

「がっ……！？」

さすがにこれには大きなダメージを受けた。リベリオンは大きく目を見開いた瞬間に頭に電流が走り、一瞬天と地がひっくり返ったように感じた。だが、すぐに首を激しく振って眼光を鋭くし、倒れそうになった身体を整える。そして急いでセイバーのほうに向くと、着地した彼女はリライフシンバルを両手に構え、必殺技の準備に入りだした。

「これで終わりよ！」

セイバーはシンバルを頭上に投げた。意志を持ったかのように上空で飛び交い、音を鳴らしていくシンバル。それを見て、リベリオンは大鎌を持つ手に力を込めた。刃に赤黒く燃える炎が発生し、徐々に燃え上がっていく。セイバーはカーブを描いて戻ってきたシンバルを目前で垂直に停止させると、それを高速で輪を描くように回転させ、大量の光の粒子を集め始めた。そして彼女は敵に狙いを定めたまま光が集まった環の中心部に両腕を勢いよく伸ばし、

「プリキュア！スターライトチャージ！」

渾身の思いで叫んだ。

「クラアアアツッシュュー！！！」

銀の環の中心部からまばゆいばかりの輝きを増す銀の光線が放たれ、リベリオンに向かっていった。だがリベリオンも準備ができていた。彼女は十分にエネルギーが集約された刃を大きく振りかざし、

「プリキュア！リベリオン・ヘル・ファイア！！！」

と叫ぶと、エネルギーの溜まった刃を一気に振り下ろし、強力な赤黒い熱線を発射した。

ぶつかる銀と赤の光。衝撃はこれまで以上に発生し、塔は遂に全て倒壊した。大地がさらに裂け、遂に崩壊を始めて、闇の空間に呑み込まれる。セイバーは両腕がまるで電流が貫いたかのように感じたが、相手に視線を向けたまま動かなかつた。一方でリベリオンもまた同様だった。自身も大鎌を握り、身体が動かなかつた。互いに最大必殺技を発動させたまま一寸も動かなかつた両者だったが、遂にリベリオンが動いた。彼女は片方の手を自身の顔に伸ばして、ぶちっ、と眼帯を取り外した。そして隠していた真紅の右目を大きく開き、喉の奥から絞り出すような声を放った。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああつっつっつっつ！！！」

その瞬間、彼女の赤黒い熱線がさらに増強し、銀の光線を呑み込み出した。「なっ!？」と目を見開くセイバー。彼女も光線を放つ両腕に力を込めたが、赤黒い熱線はますます勢いを増し、セイバーの光を押し出していく。その距離は1メートル、30センチ、10センチ、5ミリ、1ミリと詰めていき、遂に熱線は彼女の身体に激突した。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああつっつっつ！！！」

大きく弾き飛ばされ、黒の大地に叩きつけられるセイバー。そして、ごほっ、ごほっ、と激しく咳き込み、身体を抱きかかえる。その痛みはまるで身体の中に直接ぶつけられるように激しく、刺されるような、殴られるような、引き裂かれるようでもあり、もの凄いく苦しみだった。それを一気に全身に受けたセイバーはとても立ち上がれなくなった。

「本当の恐怖はこれからよ、真夜・・・！」

リベリオンは冷たい目を倒れているセイバーに飛ばすと、ゆっくりと片足を前へ踏み出した。

マイナス七人衆の残党たちとの戦いを終えたプリキュアたちは洋風の広間を抜けた途端に全員再会した。

「みなさん、ご無事だったんですね！」

一番にプロツサムが感激の声をあげる。

「うん！なんとかね。でも喜ぶのは後。今は早く行かないと、時間がもつないよ・・・！」

ドリームがそう言って、奥の道を進もうとしたその時、  
「待って！」

マリリンが声をかけた。彼女は全員の顔をひとつひとつ眺め回していくと、低い声で話した。

「実は、私たち、知っちゃったんだ。キュアリベリオンの正体・・・」

「……………えっ……………？」

「みなさんにも話します。キュアリベリオンの本当の姿を、そしてどうしてももう一度世界を滅ぼそうとするのかを・・・！」

そしてプロツサムはカノンから聞いたことを全て話した。全部を話し終えると、全員驚愕し、口を抑えたりする者も出た。

「そ、そんな……………。それじゃ、キュアリベリオンは本当に過去の真夜さん……………！」

ウィンディが蒼白の表情のまま呟く。

「今、真夜さんはどこなの!？」

同じく色を失った表情をしたミントが尋ねたが、プロツサムは首を左右に振った。

「分かりません。!・・・もしかしたら今、真夜さんはキュアリベリオンと戦っているのでは……………！」

「!・・・すぐ行こう!こんな悲しい戦い、すぐにやめさせなくちゃ……………！」

ブラックが叫ぶと、全員うなずいて奥へ駆け出した。

## 激突（後書き）

次回、キュアリベリオンの正体が明らかに！

・・・ですが、その前にみなさんにはまたお願いがあります。「DX 2 NEXT」のエピローグと外伝「ZERO ～Cure Rebellion's birthday～」のみ読んでほしいのです。そこにヒントがありますのでそれ読まずして次話読まないでください。

## 憎悪

「くっ・・・ああっ！」

セイバーはもう身体がボロボロになっていた。リベリオンは無抵抗なのをいいことに何度も彼女の身体を殴り、蹴り、地に叩き伏せた。すでに息は乱れて口端から血が流れ、視界も霞んできている。リベリオンは腹部を抑え、両膝を着いたセイバーの銀髪を強く驚くみした。

「うっ・・・！」

痛みにつめくセイバー。リベリオンは手を離さずに傷ついたセイバーの顔を少しだけ眼前に引き寄せた。

「冥土の土産に教えてやるわ。私が何者なのかを。・・・真夜、これを覚えてる？」

リベリオンはもう片方の手を開いて、何かを見せた。セイバーは髪を引っ張られ、痛みにつめきながらも、彼女の手に目を向けた。

その手の上に転がっていたのは口紅だった。漆黒に色塗りされ、仄かな輝きを放っている。セイバーはその口紅に見覚えがあった。

これは・・・。

「グラッジ・ルージュ 怨恨口紅」・・・」

それはかつて真夜がワンダー・プラネットでキュアリベリオンに変身する際に使用していたアイテムだった。これを初めて見た時、過去に「究極の闇」と自称していた主は確かこう言っていた。それには強力な闇の力が籠り、手にした者に一気に世界を消滅させるほどの力を与える。だが、あまりにも数多くの命を奪ったためにその亡者たちの恨みや憎しみ、怒りが染みつき、次に手を触れた者を呪う。そのため今では誰もが触れるのを恐れ、使いこなせないようになってしまったと・・・。そこまで思い出した時、セイバーはハッと目を見開いた。急いでリベリオンを見やると、彼女は憎しみの籠った刺すような視線をセイバーに飛ばしていた。

「まさか・・・あなたは・・・！」

「やっと分かったようね・・・そうよ！」

リベリオンは口紅を持っていた手を引つ込めると、さらにぐいつとセイバーの顔を引き寄せ、今までの鬱憤<sup>うつげん</sup>を吐き出すかのように怒鳴った。

「私はね！この怨恨<sup>グラッジ・ルージュ</sup>口紅に染みついていたあなたの憎しみを筆頭に全ての憎悪が結集した、怨念の集合体よッ！」

その言葉に、セイバーは愕然とした。すうつ、と全身から血の気が引いていった。

リベリオンはそんな呆然としているセイバーを乱暴に離すと、まだまだ溜まっていた憎悪<sup>マイナス</sup>を次々に浴びせた。

「真夜、あの時あなたは言ったわよね？全ての恨みと憎しみを私に預けなさいって。あなたたちの分まで私が晴らしてやるって！『私たち』はね、あなたの憎しみも激しいことも知って、その言葉を信じ、全ての憎悪<sup>マイナス</sup>をあなたに預けたのよ。・・・なのに、あなたは『私たち』の約束を破ったうえに、自分も幸せになろうとした！信じていたのに、裏切られた！絶対に許さない！・・・口紅に籠っていた全ての怨念と、真夜、あなたが忘れていったあなた自身の憎しみが合わさって、もう一度、<sup>キユアリベリオン</sup>雨牙真夜は誕生したのよ。全ては、今度こそ世界への復讐を果たすために・・・！」

するとリベリオンは胸を、ぎゅっ、と？み、表情が苦しそうに歪んだ。激痛を必死で抑えているような感じだ。

「この私の体の中には・・・中にはね！真夜、あなたの憎しみだけじゃない！口紅に込められていた全ての憎悪<sup>マイナス</sup>が、今か今かと暴れて、すぐにでも胸が張り裂けそうで・・・こんなにも・・・こんなにも苦しくて、悲しくて、痛いよ！それなのに・・・それなのに、あなたが約束を破って忘れたせいで、『憎悪<sup>マイナス</sup>』の私は世界を滅ぼす以外に一体どうすればいいのよ!？」

「!!!!!!」

セイバーは何も言わなかった。言えなかった。あまりにも衝撃的

すぎて頭が全く働かなかった。

そんな・・・そんな・・・そんな・・・。

ただただ、その言葉しか思い浮かばない。

キュアリベリオンは、本当に過去の自分だった。ワンダー・プラネットグラッジ・ルージュで変身した時、真夜は自分の憎しみと同時に怨恨口紅に込められていた全ての憎しみを背負う覚悟で世界を滅ぼそうとした。そして、二度と戦争も差別も嘘もない、憎しみも苦しみも生まれない平和で優しい世界を作ろうと決めていた。だがプリキュアたちとの出会いと自分は利用されていたという真実を知り、彼女はもう一度光になりたい、世界を救いたいと願うことでキュアセイバーに再び変身できた。しかし、それは同時に今まで背負っていた全ての憎しみを捨てたということに変わりなかった。

私は・・・ずっとそれを忘れていた・・・。

セイバーが言葉を発せないでいると、胸から手を降ろし、全てを吐き出すように大きくため息を吐いたりベリオンが大鎌の刃を振りかざして何の音も発さずにゆっくりと静かにセイバーの首に横から突きつけ、嘲笑するかのように言った。

「・・・真夜、あなたに私は止められない。憎しみを忘れ、腑抜けになったあなたに世界を救うことなんてできない。・・・世界が終わる前にここで死になさい。安心して。お友達もすぐに全員地獄に送ってあげるから・・・！」

「!・・・!」

そしてリベリオンは素早く大鎌を再び振りかざし、シャツ!と音とともに禍々しく輝く刃を横様に振り払った。だが。

「なっ・・・!?」

セイバーはその刃をなんと片手で受け止めた。驚いて、すぐ力を入れるが、彼女に抑えられた大鎌はびくともしなかった。即座に刃を引っ込め、弾かれるように後退するリベリオン。セイバーは最初目を伏していたが、すぐに顔を上げ、再び強い視線を過去の自分に飛ばすと、膝を立て、立ち上がった。

「キュアリベリオン……確かにそれは私の罪よ。私が憎しみを忘れたせいであなたに全てを背負わせてしまった。それは、本当に悪かったわ。……でも、それでも私はあなただを止める！勝手かもしれないけど、私にはどうしても失いたくない友達がいる！その友達と心の底から笑い合える世界がある！そのためにも今、私はどうしても負けるわけにはいかない！たとえあなたが過去の私であり、<sup>マイナス</sup>憎悪の私でも、私は守りたいもののために今ここで死ぬわけにはいかないの！だから……だから、私は『自分』を乗り越えて、これからも生きていく！」

そしてセイバーは両腕で構えを取ると、過去の自分に向けて走り出した。

全てに決着を着けるために………！

憎悪（後書き）

次回、決着・・・だが！？

## 覚醒

セイバーはかけ声とともに走り出し、距離を一気に詰めると、リベリオンに素早く拳を繰り出す。即座に大鎌で防御したりベリオンだが、途端に衝撃が柄を握る手に伝わり、全身へ流れていった。

「くっ……！」

思わず真紅の右目を瞑り、その声を漏らしたりベリオンだが、瞬時に大鎌を構え直してシャツ！と刃を振り下ろした。だがセイバーは一瞬で高速移動をし、リベリオンの背後に回ると、

「ふんっ！」

背中にかざした手から衝撃を発した。瞬間に悲鳴をあげ、吹き飛ばされるリベリオン。すぐに空中で身体を回転させ、体勢を整え着地する。だがその途端に大鎌を構えるよりも早く、セイバーが懐に潜り込んだ。

「なっ……！？」

そして間髪入れずに胸と腹部に打撃を次々と与えていく。十発目の鉄拳を与えた直後、セイバーは身体を優美に一回転させ、強力な蹴りを相手に浴びせた。

「がっ……ぐううっ……！」

打撃を防げぬうえに最後のキックで弾き飛ばされたが、そこは強大な闇の力を持つ悪の戦士、またも宙で体勢を整えてリベリオンは着地した。数多くの憎悪マイナスが血液のように循環する身体を抑え、はあ、はあ、と呼吸が荒くなるものの、すぐに真紅に輝く右目を向け、凶暴さを発揮する。

「なぜ……一体なぜよ？もうボロボロのあなたのどこにまだそんな力が残っているのよ……！？」

声も凄みを増して問うたりベリオンに、セイバーは静かに答えた。  
「キュアリベリオン……あなたが過去の私なら分かるはずよ。雨キ牙真夜は昔も今も守りたいものがある限り、最後まであきらめずに

戦い続けるってことを。そして……」

リベリオンは指を鳴らし、セイバーの周囲に悪魔の手を三本、出現させた。巨大な手首をぐんにやりとうねらせ、黒く鋭い五本の指が即座にセイバーに襲いかかる。だがセイバーは目を閉じて再びリイフシンバルを両手に召喚すると、それを頭上に掲げて鳴らし、「セイバー！セイクレッド・フラッシュ！」

とシンバルからまるで太陽が降りてきたかのような白銀の閃光を炸裂させ、悪魔の手を一瞬で三本とも塵と化した。リベリオンは表情をおぞましく歪め、思わず一步下がった。身体が微弱に震え始めた。

まさか……私が怯えている……？

震える身体を抑え、リベリオンが前に視線を飛ばすと、大量の塵の中でセイバーはゆっくりと目を開いて言葉を続けた。

「私はやつと分かった。私は本来なら殺されて当たり前前の存在だけど、わざわざ命を投げ出すことは罪を償うことにはならない。自分が犯した罪の重さを死ぬまで背負って、忘れないことが本当の贖罪になるの。だから、私は死なない。罪を背負いながらも生きて、平和で優しい世界を作る……その夢を叶えるためにも、私はここで未来を失うわけにはいかないの！」

「黙れッッッ！！！」

リベリオンは吠えた。彼女はもはや目だけでなく全身から凄まじい殺気を発していた。空間中の大気がピリピリと電気がほとばしり、大鎌を握り締めた手の甲に血管が浮き上がった。彼女は冷酷な目をセイバーに飛ばし、物静かに口を開いた。

「あなたに何が分かる？同じ自分のくせに、ずっとずっと苦しみや悲しみ、痛みを押しつけられてそれでも目的を果たすために生きなければならなかった私の何があなたに分かる？未来？守りたいもの？そんなものはまもなくこの世から全て消え去るわ。誰もかもが全ての世界からいなくなる。私も……あなたも……。残るのは永遠の闇というただ静かな世界。それはあと少しで完成するわ。だから・

・邪魔をしないで！私が全てを終わらせる・・・！！」

そしてリベリオンは大鎌を振り上げた。セイバーもシンバルを投げ、中心部にエネルギーを集結させていく。リベリオンも同様に刃に炎が赤黒く燃え盛り始めたのを確認し、ふたりは互いを見据えたまま同時に必殺技を発動させた。

「ップリキュア！」

「スターライトチャージ・クラッシュュ！！」

「リベリオン・ヘル・ファイア！！」

噴出するように飛ばされ、再び激突する銀と赤の光。今度はさつきよりも倍以上の衝撃が周囲に走った。黒い大地がさらに裂けていき、空間にも激震が起こる。技の威力は両方とも五分五分で、互いに一步も譲らない。両者は相手から視線を逸らすことなく飛ばして歯を食い縛り、己の光を発し続けた。希望と絶望。光と影。未来と過去。それぞれの想いが光に込められ、激しさを増していく。その激突は時間が長くも感じたようだし、短くも感じた。だがその時間も終わりを迎える。銀の光を飛ばしていたセイバーが両腕に力を込め、喉の奥から振り絞った声で叫んだのだ。

「はあああああああああああああああああああああああ・・・  
・・・はあーっっっっ！！！！」

彼女がその声をあげた瞬間、銀の光が増幅し、赤の光を呑み込み始めた。「何っ！？」と驚愕するリベリオン。彼女も真紅の右目をさらに見開き、大鎌を握り締める手に力を込めたが、押し返せない。銀の光は徐々に赤の光を呑み込み、接近してくる。

「そんな・・・私が・・・負けるなんて・・・！！」

まばゆい閃光は憎悪の光をみるみる押ししていく。リベリオンにセイバーの姿は増強した光でもう見えなくなっていた。聖なる光はすでに彼女の目前にまで迫ってきている。白銀の光が大鎌の刃を砕き、漆黒の少女に直撃するまでそう時間はかからなかった。

「あ・・・うあ・・・あああああああああああああああああああ  
ああああああっっっっ！！！！」

全身を光で覆われたリベリオンはその中で絶叫を轟かせた。希望のエネルギーが身体の中へ流されていく。

やめろやめろやめろーッ！私の中に入ってくるなッッ！！

リベリオンはすぐさま全身からおぞましい殺気と憎悪を放ったが、それすらも瞬時に光の中で消えた。変身が解かれ、リベリオンは黒い制服を着た過去の雨牙真夜の姿に戻る。聖なる光が消え、全身に衝撃を浴びたりベリオンはそのまま後方にゆっくりと倒れかけた。

「キュアリベリオン！」

だが倒れかけた彼女をセイバーが抱き締めた。セイバーの目からは涙が溢れ始めていた。リベリオンは意識が朦朧としながらもセイバーに抱き締められていることに驚き、少しだけ目を大きく開いた。セイバーは過去の自分の身体を強く抱き締めながら涙で詰まった声で懸命に話しかけた。

「ごめん．．．ごめんなさい。私が背負うはずだった憎しみを忘れたせいで、『憎悪』<sup>マイナス</sup>のあなたはずっとずっと苦しい思いをしてきたのね。本当に．．．本当に．．．ごめんなさい．．．！」

「！．．．あ、謝らないですよ。どうして．．．どうして、今になって謝るのよ．．．？」

「だって．．．今の私には謝ることしか、あなたにはできないから．．．」

セイバーの台詞を聞いたリベリオンも声を詰まらせ、泣き始めた。真紅の右目からもまるで流血したような赤黒い涙が溢れ出る。リベリオンは抱き締められたままの状態で唇を噛み、セイバーに問いかけた。

「どうして．．．どうして『憎しみ』の私を置いていったの．．．？あなたが憎しみを忘れたせいで私はずっと辛かった。自ら命を絶とうと考えても、私の中にある全ての怨念が私を惑わし、世界を全て崩壊しと呼びかけてきて．．．」

リベリオンは、ぎゅっ、と胸を強く？んだ。

「私は……こんなに痛くて、悲しくて、苦しい想いをほっつておくことができなくて……だから私は世界を全て壊すことでこの想いから解放されたかった。私は『憎悪』<sup>マイナス</sup>でできたあなたの分身。あなたがかつて目指していた世界の破壊以外は何も知らず、怨念の中でもがくしかなかった……」

次々と涙の粒を地へ降らせながら想いをぶつけていく。セイバーは抱き締めていた腕の力をゆるめ、リベリオンの顔を見た。

「一緒に暮らそう……」

「は……？」

思いもしないセイバーの言葉に、リベリオンは声を失う。

「もうあなたをひとりにはしない。させやしない。これからは私もあなたが抱えてきたものを一緒に背負っていくから。悲しみも、苦しみも、痛みも、共有し合っていくから、だから……ともに生きよう、私と……」

「な……何を言ってるの。バカじゃないの。絶望の存在の私が希望の光であるあなたと共存できるわけが……」

「そんなことないロモッ！」

ぽんつ！とペンダントが煙を発して、今まで黙っていたロモモが現れ、叫んだ。

「光と闇は常に背中合わせ。希望と絶望もそうロモ。何かの調子が狂えば、希望は絶望にも変わるし、絶望は希望にも変わるんだロモ。キュアリベリオンは過去の真夜ちゃんであり、マイナスの真夜ちゃんでもあるけど、それでも真夜ちゃんであることに間違いないロモ。ロモモはそんな真夜ちゃんの全部があって、真夜ちゃんが大大好きなんだロモッ！だから、共存できないことはないロモ！」  
「！……」

ロモモの言葉にリベリオンは何も言えなくなってしまうた。セイバーはリベリオンを見つめながら、もう一度彼女に呼びかけた。

「キュアリベリオン……私はもうあなたを封印しない。あなたを嫌いにならない。両親のいない私がこれからの未来を生きるために

は、きつと過去でもあり、『憎悪』<sup>マイナス</sup>でもある私も必要なの。だから、お願い。一緒に生きよう・・・一緒に優しい世界を作っていこう・・・」

「あ・・・ああ・・・!!」  
リベリオンは涙が止まらなかった。雨牙真夜という、もうひとりの自分が闇の存在でもある自分を必要だと言ってくれたからだ。

今の今まで自分は、過去であり、もう必要とされない存在だと思っていた。それだけに彼女の中に渦巻く絶望と憎悪は日に日に増して激しくなっていた。でも、それは違った。真夜も、ロモモも、きつとともに生きることができると断言してくれた。

自分は、ただただ、それだけが聞きたかっただけなのかもしれない。希望が彼女の中で煌きだす。深く冷たい、絶望の闇が晴れて温かくなり、気持ち軽くなっていく。リベリオンはセイバーを見た。セイバーは笑顔を見せ、身体から両腕を離れた。

言葉もなく、ただ黙って見つめ合うふたりの真夜。互いの瞳が「全て解決した」と告げているようだった。

・・・だが。

どくんっ・・・!!

「うっ・・・!!」

突然リベリオンが身体を強く抱き締め、セイバーから離れた。目を伏せ、はあ、はあ、と呼吸がさつきよりも荒くなり、必死の形相で胸を強く？んでいる。

「!・・・どうしたの!??」

リベリオンの異変に気づき、駆け寄るセイバー。だが、リベリオンは駆けてきたセイバーにギリりと鋭い真紅の目を放つと、彼女の身体を蹴飛ばした。

「きゃあああっ!!」

「セイバー!!」

背中から倒れたセイバーにロモモが慌てて飛ぶ。急いで上体を起こし、セイバーはリベリオンに視線を飛ばすと、ハッと息を呑んだ。リベリオンの目は両方とも真っ赤に血走っていた。その両目に宿るのは、憎悪と怨念、怒りと悲しみ、痛みと苦しみ。全てのマイナスが彼女の全身から溢れ、身体が一瞬、黒く燃え上がった。

「あれは・・・闇の暴走！」

セイバーは声をあげた。彼女もキュアリベリオンだった時に体験したことがある。あの時は身体の中に渦巻いていた闇の力が暴れだし、自分では制御できなくなって凶暴化し、自身を見失おうとしていた。ロモモが身体から放った光を浴びたおかげで暴走を止めることはできたが、今まさにリベリオンは再び闇の暴走が始まり、制御できなくなっている状態だ。

両目が真っ赤に変化したリベリオンは懐から何かを取り出した。

「あれは・・・！」

それはハピネスランド皇女・ユカが懸命に守っていたエメラルドグリーンのペンダントだった。彼女はそれを見て、邪悪に微笑んだ。そしてゆっくりと、大地に大きく描かれた魔法円へ進んでいく。漆黒の制服の少女は円の中央に立つと、ペンダントを闇が渦巻く空へ掲げ、男とも女とも区別のつかない声で叫んだ。

「とうとう我々の願いを叶える時が来た！ここに我々の怨念を捧げる！今こそ400年の眠りから覚め、全ての世界を隅々まで破壊せよ！そして絶望の闇を全ての命に知らしめる！さあ、蘇れ！最凶にして最強の邪神、ヤマタノオロチよ！！」

これはキュアリベリオンの声ではない。彼女の中に宿っていた全ての怨念の声だ。ありとあらゆる怨念が彼女の身体を操り、動かししているのだ。そして、怨念たちの宿願の声が周辺に響き渡った時、時刻は・・・。

午後6時6分6秒。

巨城の外で皆既月食が始まった。影がわずかな天の光を食い、闇が支配していく。影が全ての光を食い終えた瞬間、不気味に赤黒く輝く満月が夜空に出現した。そして赤い満月が現れた瞬間、

ゴオツ！！

リベリオンの足元で重い音がした。続いて地の底から響くような音を立てて、魔法円の二番目の輪の部分がゆっくりと回転し始めた。ゴリゴリと大地を擦りながら輪が一回転すると、ガチンツ！と歯車か噛み合うような音がした。すると、リベリオンの足元から色とりどりの光が柱となって天高く立ち、セイバーとロモモは動けないまま、息を呑んだ。

光の柱の中でリベリオンは頭上に手を挙げたまま立っていた。その両目は真紅に輝きを増し、邪悪に笑い続けていた。次の瞬間、彼女が掲げていたペンダントにビキツ、と亀裂が入る。そして大気を打ち破るような衝撃波がペンダントから一気に周囲に放たれ、セイバーとロモモはそれを全身に浴び、空間から弾き飛ばされた。

「きゃああああああっ！！！」

「わああああああっ！！！」

悲鳴をあげて吹っ飛ばされていくセイバーとロモモ。空間から追い出されても全身に受けたもの凄い衝撃で止まれない。このままでは自分はともかくロモモがどこかに身体を強くぶつけ、大怪我を負ってしまう。セイバーがそう思った時、

「………キュアセイバー！！！！！！！！！！」

数多くの聞き覚えのある声が聞こえ、セイバーは身体を誰かに抑えられた。「え？」とすぐに振り返ると、

「キュアブロッサム！キュアマリン！」

そこには笑顔を見せるブロッサムとマリリンが立っていた。ふたりの両腕には金と銀に煌く剣が抱えられていた。ロモモもサンシャインに抱きかかえられ、無事である。3人の背後にはセイバーがワンダー・プラネットで出会った全てのプリキュアが微笑を浮かべて立っていた。

こうしてキュアセイバーはプリキュアたちと再会を果たした。しかし、それを喜んでいる暇はなかった。

「セイバー、キュアリベリオンは……？」

ブロッサムが尋ねる。するとセイバーは悲しげに目を伏して首を左右に振った。

「ごめん……間に合わなかった……！」

「えっ……？」

ブロッサムがその声を出した時、突如床が激しく震えた。バキバキバキツ！と空間に亀裂が走った。天井から破片が大量に飛び散る。みんなは立っていられなくなった。

「ここは一旦、引き上げるわよ！」

ムーンライトが呼びかけ、みんなは急いで来た道を逆走し始めた。やがてセイバーとリベリオンが激突した空間が崩壊し、闇を切り裂くような咆哮が轟く。そして1分を待たずして、黒々と巨大な生き物の頭部が出現した。

見る者を一瞬で戦慄させる鋭い16の魔眼。耳元まで裂けた口と鋼のような牙。四本足から伸びた悪魔のような爪。鋭くとがった背びれはそれぞれ八つの頭部の後方から尻尾の先まで達している。尻尾までの長さは約200メートル以上で、それに身長を加えれば300メートルを優に超えるこの世のものとは思えない威容……。

！  
最凶にして最強の邪神、ヤマタノオロチが、復活した……。

覚醒（後書き）

次回、ヤマタノオロチの猛威！

## 地獄

城壁が、瓦礫の雪崩となって崩れ始めた。大地全てを揺るがせる震動に足を取られながら、外にいる人々は必死で自身の身体を持ち堪えた。

「な、何・・・!?!」

まだ歳幼い皇女が地下牢から解放された国王の身体にすがりつく。なぜだか分からないが、身体が異様に震えた。それはユカだけではない。王妃も国民たちも、ドールキティも外に出た七人衆の残党たちも色を失った瞳で巨城を見上げ、震えがどうしても抑えることができなかつた。やがて城壁に亀裂が大きく走り、屋根まで達していく。そして城全体からとてつもない邪悪な力が放たれ、突風となって人々を襲つた。

「ま、まさか・・・」

闇の突風を耐え切り、信じたくない、嘘であつてほしいという想いでドールキティは巨城を見上げた。だが、彼女のその想いは次の瞬間に打ち砕かれた。

城壁、屋根を突き破り、巨大な何かの中から巨城を崩壊しながら姿を現し始める。触れるだけでも痛そうなゴツゴツした岩石をまとつたかのような、暗黒に統一された巨体。ギラリと光らせる凶暴な魔眼を夜空へ向け、咆哮を轟かせる八つの首。全てを闇へと誘い、絶望の恐怖に一気に叩きつけるこの世のものとは思えないおぞましい姿。それが、予言にも記されていたヤマタノオロチということは一瞬で理解できた。

人々はその魔王のような巨体に凍りついたように見つめていた。あまりの恐怖に直面すると、人間は思考能力を失う。が、オロチの凄まじい咆哮と地響きですぐに現実に戻され、人々は我先にと振り返り、悲鳴をあげて逃げ惑つた。

だがオロチはそうはさせまいと言うかのように逃げ出した人々の

足を一瞬で止めた。一つの頭が数本の牙が生える喉の奥へ邪悪なエネルギーを結集させ、口から一気に赤黒い熱線を街へと向け、発射したのである。熱線を浴びた街は瞬時に爆発と煙を起こし、炎があつという間に燃え広がっていく。絶望の光景に人々は呆然と足を止めるしかなかった。

「ま、街が・・・！つ・・・てえんめえつ、あそこにはまだ人が残つてんだぞつ！」

愕然とし、激怒の形相で振り返るダイチ。数えきれないほどの怨念が宿るオロチの巨体は一步步いた途端に地面を大きく震動させて亀裂が走り、土が焼け焦げ、煙を吹いた。オロチが動く度に空気が波を打って人々に押し寄せる。オロチは熱線を次々と撃ち、存在だけで世界を破壊しようとしていた。

ヤマタノオロチのその邪悪な威容は神殿から帰還し、上空を飛行する宇宙船からも確認できた。窓からオロチを見て、セーラーセレーネが思わず機体の壁を殴った。

「つ・・・間に合わなかったか！」

「れ、冷静になって！とにかく、私たちも地上に降りよう。みんなを安全な場所へ避難するのよ。あなたたちも手伝って！」

「わ、分かった・・・」

セレーネの両肩に手を置いたジエアン又が振り返ってキクとミチにも伝える。宇宙船は地上へゆっくりと降下し始めた。

「あ・・・あれは・・・！」

人々を誘導しながらドールキティが再びオロチを振り返り、声をあげた。見ると、暗黒の巨体が揺らめくように震動し、至る所から何かが生まれようとしていた。

それは漆黒に包まれ、切り裂くような両翼が背中から生えた幼獣の集団だった。全長は約3メートル。オロチと比べればかわいいものだが、それでも人間大を超え、長い首も三つ伸びているものがあるれば、一つしかないのも存在する。いずれにしても幼獣はどれもが両眼が凶暴に煌き、牙からは大気を汚染させる毒気を吐いていた。

オロチの巨体から続々と誕生した幼獣たちは、バサツ、と翼を広げて飛び立つと、夜空を覆ってしまうほど目にも余る大群で四方八方へと飛翔していき、各々へ散らばっていく。地獄の炎からアジトに残っていた人々ともに逃れていたヒシはその光景を見上げ、両目を見張り、声が震えだした。

「おお・・・おお・・・なんとということじゃ。・・・終わりじゃ・・・全ての世界の終わりが、始まってしまった・・・！！」

幼獣の大群は各々の世界を標的に定め、全てを暗黒へ変えるべく、飛翔していった・・・。

## 地獄（後書き）

次回、各世界の危機にオールゲストが迎え撃つ！

破滅（前編）（前書き）

さすがに長くなったので前後編に分けます。

## 破滅（前編）

虹の園 「TAKO CAFE」

「おいし〜！」

「やっぱ、アカネさんのたこ焼きは最高だよ〜！」

ほくほくと口にしたこ焼きを運びながら満面の笑みを浮かべる高清水莉奈と久保田志穂に店主・藤田アカネは「ありがとう〜！」とふたりに負けないくらい笑顔でたこ焼きを回し続けた。

「そういえばアカネさん、なぎさたちは？」

ふと莉奈がアカネに聞く。

「ああ・・なーんかね、友達と一緒に山登りに行くと言って、まだ帰ってきてないみたいなんだよね。全く、どこほつつき歩いてるんだか・・」

その時、アカネは一瞬、空気が張り詰めたのを感じた。ハッと上空を見上げる。空間に突如巨大な灰色のオーロラが出現し、その中から大量の怪物が次々とその黒い両翼を広げて姿を現しだした。怪物はどれもこれも人間大かそれを上回る大きさで、首が長く、二本、三本と分裂しているものもある。目は鋭く光り、耳をつんざくほどの咆哮をあげ、性質は凶暴であることは一目瞭然に理解できた。

突然現れた怪物の大群は上空をあとという間に支配すると、それぞれ街へと向かい、口から熱線を吐いてビルや家を炎上させた。

「何・・何!？」

「てゆうーかてゆうーかてゆうーかっ!？」

「ふたりとも、早く中に入りな！」

さつきまで平凡に時が過ぎていた自分たちの街が地獄絵図と化し、呆然となる莉奈と志穂にアカネは急いで叫び、ふたりを車内へ避難させた。そして自身も車を畳み、車内へ引っ込み、全てのドアを口ツクする。そしてこの悪夢が早く終わることを必死で願った。

海原市夕風町

「か、薫お姉さん！」

みのりは恐怖に怯えて薫に抱きついた。そして瞳に涙を溜め、彼女の服をぎゅっと引つ張った。無理もない。さっきまで爽やかだった空に突然巨大な灰色のオーロラが現れ、さらにその中から悪魔のような怪物が無数に出現したのだから。

「みのりちゃん、こっち！」

薫はそんな恐怖に震える小さな少女の手を引つ張り、駆け出した。満もふたりの後に続く。ふたりは少女が暮らすパン屋の中に避難した。しかし、満と目を合わせてうなずいた薫はみのりの肩に優しく手を置いた。

「みのりちゃん、みのりちゃんは部屋の奥でじっとしていて」

「え？薫お姉さんは・・・？」

「私たちは大丈夫」

「で、でも・・・」

「心配しないで。きっと戻ると約束するから。今までみのりちゃんとの約束を破ったことは一度もなかったでしょ？さ、早く・・・」

「う・・・うん。分かった・・・」

みのりは振り返り、自身の部屋へと入った。満と薫はすぐさま店を出ると再び怪物たちが支配した空を見上げた。

「満、咲と舞は？」

「まだ登山から戻ってきてないみたい。ふたりがいない今は・・・」

「私たちがこの世界を守らないと・・・！」

ふたりは顔を見合わせ、目を閉じると、互いの手を強く握った。瞬間、ふたりは光に包まれ、衣装が変わっていく。満は月の力を得た黄緑の羽衣。薫は風の力を得た空色の羽衣。ふたりは目を開き大群に向くと、

「はああああああああっっっ！！！！」

かけ声とともに走り出し、手から光球や突風を放って迎撃を開始した。

~~~~~  
「ブンビーカンパニー」

ビルの屋上にあるあまりに小さい企業の扉を開け、中から黒いスーツ姿の男が現れる。男の表情はうんざりとし、思わず大きなため息が出た。

「はあ〜っ、今日もまた犬の散歩に庭の草むしりか。全くなんで社長の私がこんな雑用を・・・いや！こんな時にこそ、この私が自ら動いて社員たちの見本にならなければ、我が社がビッグになることはない！さあ、張り切って今日もがんば・・・のおおっ!？」

そこまで言って上空を見上げた途端、男は口をあんどりと開けた。見ると、さっきまで雲しか流れていなかった空に数えきれないほどの怪物の大群が翼を広げて飛び交っているのだ。そして怪物はそれぞれ二本や三本に分かれている首から熱線を発射し、街を襲撃する・・・あまりの突然に男は開いた口を閉じ、無言で振り返るとすぐさまダッシュして自社の扉を開け、中に飛び込んだ。

「おんやあ〜？社長、今日は随分とお早いお帰りですね？どうしたんです？」

「うるさい！今日は休業だ休業！ただし、絶対外に出るなよ！出たら100パーセント死ぬからな！いいな！」

雑誌を読みながら首を斜めにして尋ねた社員に、男は怒鳴ると座布団を頭にしてブルブルと震え、お経まで唱えだした。

~~~~~  
四つ葉町

「うまいっ！いつ食べてもやはりうまいな！兄弟の作ったドーナツは！おまえもそう思うだろ、瞬？」

「ああ。隼人もよく作るが、やはり本物には敵わないな」

「いや、イケメンのおふたりにまで褒めちぎられて、おじさんも参っちゃうよ。まあこう見えても、おじさんも昔は全国のお嬢ちゃんたちを虜にした罪深き男だったけどね。・なぐんて、グハツ」  
サングラスをかけた店主がそうジョークを飛ばした途端、上空に巨大な灰色のオーロラが出現する。

「ぶつ・うおっ!?なんだ、あれは!？」

瞬時にオーロラから現れた怪物の大群に隼人は思わず飲んでいた紅茶を吐き出した。すぐに瞬が目を鋭くしてテーブルから立ち上がる。ドーナツ店主は「あれっ!?これドーナツてんのっ!？」と驚きながらもギャグを交えていた。すぐに瞬は彼に振り返った。

「店主、あなたはすぐ奥に避難してください。僕たちも逃げますから・・・」

「おう。じゃああとは任せるよ」

店主がすぐに店を畳み、姿が見えなくなると、瞬は隼人を見た。隼人も強い目で立ち上がった。

「瞬、一体何なんだ、あれは？」

「分からない。だが、このままではこの世界が滅びてしまう。プリキュアがいない今、この町を守れるのは・・・」

「俺たちだけってことか・・・。じゃあ仕方ない、行くぞ！」

「スイツチ・オーバー！」

ふたりはパン!と手を合わせ、すぐに広げる。すると一瞬にしてふたりの服装が背中にマントを着用した白い衣装へ変わった。

ふたりは声をあげると、大群に視線を飛ばして大きく地を蹴った。

~~~~~

希望ヶ花市

怪物軍団の来襲によって植物園に続々と人が避難してきていた。ここはコッペが結界が張られ、しばらくは安全なのである。人々と同様に避難してきた来海ももかは急ぎ込んだように植物園の園長・花咲薫子に尋ねた。

「薰子さん、えりかは？つぼみちゃんやいつきちゃん、ゆりまで見えないんだけど・・・！」

「・・・まだ登山から戻ってきていないのよ。連絡しようにも電波も繋がらないみたいなの・・・」

「そんな・・・！」

「心配しないで。きっとみんななら大丈夫よ。信じましょう」

その時、轟音と震動が植物園を襲った。全員が悲鳴をあげ、恐怖に怯える。薰子も震える大地に足を取られないようにしっかりと立ったが、やはり心配で陰が出た表情で呟いた。

「つぼみ・・・」

人々が植物園などの避難場所に向かっていている頃、小高い丘の上では4人の高校生の男女が大群で覆われた空を見上げた。4人とも、強い眼光で睨んでいる。

「一体、こいつは何なんだ？ワームじゃないことは分かるが・・・」

「けど大人・・・」

「なんだ、琢磨？」

「あいつら人を襲ってるし、このままほうっしておいたら・・・」

「ああ・・・分かってる！」

「しかし参ったな・・・これだけの数に俺らだけで止められるかどうか・・・。生憎、他の仲間はお友達と山登りに行っただし・・・」

「傑、そんなこと言わないの。きつとみんなも戦っているよ。それに私たちはみんなから託されたんだよ、この世界のことを・・・。私たちがみんなの想いに応えなきゃ！」

「・・・ああ、そうだな、夕！」

「よし！みんな準備はできたか？行くぞ！！」

大人と呼ばれた少年が第一声を発し、全員は腰にベルトを装着すると昆虫型のメカを手にした。そしてそれを素早くベルトにセットし、4人は声を揃えて叫んだ。

「変身!!!」

『『『『 HENSIN!!!』』』』

途端、全員が身体が装重甲の鎧に包まれる。鎧を身にまとった4人はすぐにベルトにセットした昆虫メカの角や顎、羽を一気に倒したり畳んだりした。

「キャストオフ!!!」

『『『『 CAST OFF!!!』』』』

『 CHANGE BEETLE!』

『 CHANGE STAG BEETLE!』

『 CHANGE BEETLE!』

『 CHANGE BUTTERFLY!』

すると鎧が弾け、中からシャープな真の姿が現れる。

大人は艶やかに煌く赤に蒼の瞳。電子音とともに角がゆっくりと装着され、カブトムシをイメージさせる仮面の戦士・仮面ライダーカブトに。

琢磨は聡明な蒼に統一され、クワガタの象徴である大顎が仮面の両横に装着された戦士・仮面ライダーガタックに。

傑は容姿はカブトに酷似しているが、身体は漆黒に統一され、複眼も黄金に光る戦士・仮面ライダーダークカブトに。

夕は白銀の身体にコバルトブルーの瞳をした蝶をイメージさせる美しき戦士・仮面ライダーフェアリーに。

仮面ライダーに変身した4人はすぐさまベルトの横のボタンに手をかけ、叫ぶ。

「クロックアップ!!!」

『『『『 CLOCK UP!!!』』』』

電子音が響くとともに4人は周囲が全て静止しているように見えるほどの光速で移動し、それぞれの専用武器で大群に攻撃を仕掛ける。カブトはカブトクナイガンクナイモードで、ガタックはガタックダブルカリバーで、ダークカブトはダークカブトクナイガンクナイモードで、フェアリーはフェアリーレイピアレイピアモードで次

々と怪物を斬り裂いていく。やがて動きを止めたカブトの背後から怪物が一匹、牙と爪を飛ばして襲撃を凶ったが、

『ONE TWO THREE!』

「ライダー・・・キック!」

『RIDER KICK!』

カブトは青い稲妻のようなエネルギーを右足に集約すると華麗に身体を一回転させ、その右足を敵に思いっきり浴びせた。瞬時に爆散する怪物。

「大人、やるうっ!」

フェアリーが声を飛ばすと、大人は仮面の下で「へへっ」と笑い、次の敵に向けて走り出した。

~~~~~

「写真館」

そこにひとりの男が入る。

「おまえは・・・?」

突然現れた男にマゼンダのカメラで撮影し、やはり思ったとおりに歪んだ写真を眺めていた青年が一番に声をかける。すると男は彼にニツコリと笑った。

「やあまた会ったね、世界の破壊者。あ、今は救世主かな?」

「なんだ、海東その2か・・・」

「その2はひどいな、土。俺の名は海東暁。またの名を人呼んで、平和という宝を守る通りすがりの仮面ライダー、仮面ライダーサージエス!」

「どーでもいいけど暁、それ自分で言っつて恥ずかしくないのかい?」

「そうかい大樹?俺は我ながら決まっていると思うけどな」

「それより暁さん、どうしてあんたがここに?」

「そうですね。また土君と手合わせに来たんですか?」

「やあ小野寺君と夏マスカット。違っよ。今日はたまたま来ただけ。」

「コーヒー飲んだら、すぐ出て行くから安心したまえ。てなわけでマスター、コーヒーを一杯」

「私は夏メロン・・じゃなかった夏ミカン・・でもなくて夏海です！何なんですか、夏マスカットって！」

「あのねえ・・ここは喫茶店じゃないし、私もマスターじゃないよ」  
白髪の老人・栄次郎はそう言いつつも結局コーヒーを作りにも奥へ消えた。その時。

轟音と激震。部屋全体が大きく揺れ、みな床に倒れそうになった。「何だ！？」

一番に土が外に出て、空を覆う怪物の大群を目にする。土に続いてユウスケ、夏海、大樹、暁も外に出、上空を見上げた。

「あれは・・・！」  
「この世界でも侵食が・・。もしかしてショツカーの仕業！？」

「いや違うね」  
ユウスケと夏海の言葉に暁が答える。

「あれはショツカーじゃない。おそらく、それ以上の脅威が生み出した幼獣どもだ」

「幼獣？何のさ、暁？」

「さあね。そこまでは俺も分からんよ、大樹。でも、ま、はつきりしていることはこのままほっとけば、全ての世界は間違いなく滅びる・・。それだけだ。さて・・どうする、土？」

「決まっている。みんな、行くぞ。海東その2、おまえも協力しろ」  
「だから俺はその2じゃなくって・・まあいいや。平和というお宝は失ってはならないからね」

全員は怪物の大群を見つめ、それぞれ変身アイテムを構えると叫んだ。

「変身！！」「」「」

土はマゼンダの身体に覆われた仮面の戦士・仮面ライダーディケイド。  
ユウスケは赤い鎧と黒のスーツの戦士・仮面ライダークウガ。

大樹はシアンの光が収束された戦士・仮面ライダーディエンド。  
夏海は桜吹雪をまとい純白の身体が現れた戦士・仮面ライダーキ  
バール。

そして暁はスーパー戦隊の力を借りる赤をメインカラーとした戦  
士・仮面ライダーサージエス。

5人はそれぞれ手に専用武器を持つと大群に向けて走り出した。  
まずディケイドがガンモードのライドブツカーの引き金を引けば、  
ディエンドも銃口から光弾を飛ばす。クウガも怪物を凄まじい剛力  
で次々と殴り飛ばし、キバールも剣で斬り裂いていった。

「みんなやるなあ。よし、俺も」

サージエスも両手にサージエスザンバーを構え、敵を素早く斬り  
裂いていく。さらにガオレンジャーの絵柄が描かれたカードをベル  
トに差し込み、

「ガオメインバスター！ノーマルモード！！」

ガオメインバスターを構えて大群を狙い撃ち、一気に数を爆散さ  
せた。

~~~~~

風都

「うおいつ！？なんだありゃあつ！？」

翔太郎は思わず喉の奥から声をあげた。当然だ。さっきまでなん  
ともなかった空に突如怪物の大群が押し寄せ、それが街を襲撃した  
どころか、街のシンボルでもある風都タワーさえも破壊しようとし  
始めたのだから。

「あの野郎ツ！直つてから、一年にも満たないつてのに・・・フィリ  
ップ、聞こえるか？」

翔太郎は急いで通信機で鳴海探偵事務所の地下にいる相棒に話し  
かける。通信機の向こうから相棒はすぐに「ああ」と返事をした。

「何なんだ、一体あれは！？」

「一応検索してみたが、別の世界から来たという以外、何も分から

ない」

「別の世界？」

「左！」

すると、そこに赤い革ジャンの男が駆けつける。

「照井！一体全体、何が起こってんだッ！？」

「俺に質問するな」

「ああッ、どうせまだ何も分かってないんだろ！とりあえず行くぜ、フィリップ！」

「あの数に戦いを挑むのかい、翔太郎？」

「ほうっておくわけにはいかねえだろ！」

「・・・そうだね。それじゃあ・・・」

『CYCLONE！』『JOKER！』

「変身！！」

翔太郎は腰に当て、すでに緑のメモリが挿入されているダブルドライバ―に黒のメモリを差し込んだ。瞬間に翔太郎の身体が風と光に包まれていく。翔太郎は右側が緑、左側が黒の装甲をまとった戦士・仮面ライダーWに変身を遂げた。その頃地下室では倒れ込んだフィリップを亜樹子が急いで介抱したことは言うまでもない。

『ACCEL！』

「変・・・身ッ！」

照井竜も赤のメモリをドライバ―に挿入し、真紅の装甲をまとった熱き戦士・仮面ライダーアクセルに変身する。

「さあ、おまえの罪を数えろ！！」

「さあ、振り切るぜ！」

Wとアクセルは同時に走り出した。先にアクセルがエンジンブレードを手に構え、怪物を斬り倒していく。

「翔太郎、あの数ではサイクロン・トリガーが有効だ」

「んなもん、分かってるよ！」

『CYCLONE！』『TRIGGER！』

Wはすぐさま黒のメモリを抜き、青のメモリを挿入する。今度は

黒の装甲が青に変わり、Wは青の銃・トリガーマグナムから光弾を  
発した。連射と風による拡散効果で、怪物の大群は次々と直撃を受  
け、地に叩きつけられていった。

~~~~~  
多国籍料理店「クスクシエ」

「おい映司！すぐ外に出る！」

「あれアंक？一体どうしたの？凄い顔をしているよ」  
「いいから出る！」

そう言つとアंकは青年・火野映司を外へと強引に引つ張ると、  
怪物の大群が飛ぶ空を見せつけた。

「うわあ……。アंक、これ何なの？」  
「俺が知るか！」

「とにかくみんなを助けないと……！」  
「おい、あの数に立ち向かう気かよ！？」

「だってこの世界が終わつたら、メダルも手に入らなくなるだろ？」  
「……ちつ、仕方ない」

アंकが舌打ちをした時、30代前半の男が映司に近寄つた。  
「よお……」

「あ、伊達さん」  
「随分と変なことになってるな。何なんだ、こりゃ？」

「それより伊達さんも手伝ってくださいよ」  
「報酬は？」

「何言つてるんですか！？」  
「タダ働きかよ……」

「この世界をあいづらが支配したら、伊達さんの仕事もなくなるか  
もしれないでしょう！」

「……分かつたよ。つたく、面倒だな」

そう呟いて伊達明は一枚のコインを親指で弾いてキャッチすると  
瞬時にベルトにセットした。

「変身！」

身体が白銀の装甲に覆われ、U字型の複眼が赤く発光する。伊達明は仮面ライダーバースに変身した。

「面倒だから、すぐ終わらすぞ」

バースはさらに何枚かのコインをベルトに入れて音声を響かせる。すると胸元に巨大な砲身が召喚され、バースはまたコインを何枚かセツトすると、

「よっしゃ、充電完了！」

と声を発して大群に狙いを定めた瞬間、砲身から絶大な赤い閃光波を放ち、一気に80から100を爆散させた。

「よし、俺も！」

映司も三枚のメダルを腰に装着したバツクルに素早く入れて斜めに傾け、メダルをスキャンさせる。

「変身！」

『タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タトバ！タツ・トツ・バツ！』  
軽快な歌が流れ、映司は顔に鷹、両腕に虎、両脚がバツタを象徴づける黒いスーツの三色の仮面の戦士・仮面ライダーオーズに変身した。

「せいやあああああああつっつっ！！！！」

オーズは専用武器・メダジャリバーで怪物たちに斬り込んでいく。だがすぐに多くが一気に放った熱線に直撃しそうになり、思わずひるんだ。

「さすがに数が多い・・・なら！」

オーズは今度は三枚とも緑の色をしたメダルをバツクルに入れた。再び歌が流れ、オーズの姿が少しだけ変わる。鷹を象徴していた仮面は緑の顎が装着された昆虫のような顔に変わった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつっつっ！！！！」

オーズは両腕を挙げ、高らかに吠えると、大群に向かって走り出した。するとみるとオーズの身体が分裂し、あつという間に数十になる。怪物たちを迎え撃つにはまだ少ないほうだが、それでも

大勢を相手にするには持つて来いのスタイルだ。オーズはすぐに襲いかかってきた怪物の胸や腹部を殴り、蹴りを与えて善戦していた。

だがヤマタノオロチが生み出した幼獣たちはまだ圧倒的に多い。

それぞれが大群を率い、数ある世界に次々と襲撃を仕掛けていった。  
・  
・  
・

破滅（前編）（後書き）

今回はキラール&ナスカ、ヤイバ組、BF組、ゴセイジャー、ウルトラマングレートが立ち向かいます。

## 破滅（後編）

とあるハウスの指令室

ひとりの男が慌てた様子で中に飛び込み、報告する。

「お、おい、大変なことが起きたぞ！」

「なんだよ霧彦、こっちは新たな敵の情報収集をやっている最中なの……」

「それどころじゃない！今すぐ空を見るんだ！」

「空あ？」

園崎霧彦の言葉に男は面倒くさそうに外に出る。そして無数の怪物の大群を目撃して絶句。3秒後。

「つつつ……なあああんじゃありやあああツツツ！？」

「僕にも分からない。突然灰色のオーロラが現れたと思ったら、その中からうじゃうじゃと出てきたんだ。……まさか、あの中年ストーカーメガネの仕業か？」

「いや、それはない。あいつは僕が二度と来られないようにしておいたからな」

「じゃあ、新たな敵が仕向けたものか？」

「それもないだろう。調べたところ、やつらはまだ結成してまもないらしいからな。あんな怪物をしかも大量に操れるとは思えん」

「結局まだ何も分からず……というわけか。ところで、みんなは？」「それが諸々の事情でちとない。だから今、この世界を守るのは……」

「僕たちのみ……というわけか」

「そういうことだ。じゃあ行くぞ、霧彦！」

「分かった！」

そう言うとふたりの男はそれぞれ「K」と「N」のイニシャルのメモリを手に取る。

『KILLER!』

『NASCAL!』

「変身!!」

そしてふたりはいつの間にか腰に装着していたロストドライバーにメモリを素早く挿入した。ふたりの周囲を風が包み込む。風がやむと、ふたりは姿を完全に変えていた。

「K」のメモリを握っていた男は黒い身体と両肩に金が走った、重き罪を決して許さぬ信念を抱く仮面の戦士・仮面ライダーキラに。

園崎霧彦は蒼の身体に「ナスカの地上絵」のような紋様が刻まれた鎧騎士を彷彿させる高貴な仮面の戦士・仮面ライダーナスカに。

この世界に存在するふたりの仮面ライダーは怪物の大群を指差し、決める。

「さあ、裁きを受けるがいい!」

「私の勝ちが決まったな!」

・・・が。

「おい霧彦、なんだその決め台詞は?」

「まだ風都に滞在していた僕が風向きが悪いとつい足を運んでしまふ床屋で偶然Wの左側と遭遇してファンゲジョーカーに変身できず結局いつものスタイルで変身した彼に宣言した時の台詞さ。誰かさんが気に入って、決め台詞にしたらどうかと提案したらしい。これから僕はこの台詞で決めていく!」

「誰かのをパクるよりはマシだが、勝手に決めるな!」

「べつにいいじゃないか。やっと僕に合う決め台詞が出たんだから!」

いがみ合うふたりだが、怪物たちにそんな険悪な空気を読めるわけがない。すぐに何体かがふたりに牙を剥き、熱線を放った。ふたりはすぐさま左右に跳び、熱線をかわした。

「・・・っ! ええい、仕方ない。霧彦、話はいつらを片付けてからゆっくりするからな!」

「ああ！」

キラーは専用武器・キラーマグナムを取り出すと、メモリを装填した。

『KILLER！MAXIMUM DRIVE！』

「キラー・デスブレイク・・・！」

次の瞬間、四方八方から光弾が発生し、怪物たちに浴びせられ、一気に爆散させた。

ナスカも専用武器・ナスカブレードにメモリを挿入し、必殺技を発動させる。

『NASCAMAXIMUM DRIVE！』

「ナスカ・・・スライサー！」

ナスカは音速に達するスピードで敵を翻弄し、空間さえも斬り裂くように刀身を大きく振り下ろして一振りで七、八匹から翼の自由を奪った。

その後もふたりの仮面ライダーは互いに背中合わせとなって、数億にも及ぶ大群を相手に光弾と斬撃を浴びせ続けた。

~~~~~

埼玉県春日部市

あつという間に大群が占めた大空に気づいて、とある一軒家から二十代前半の3人の男女が中から急いで出てきた。

「な・・・なんだありゃ？分かるか龍一？」

「俺に分かるわけないだろうが、蒼牙」

「けど、このままじゃ、町が・・・」

「ああ・・・しっかし厄介だな。ただでさえこちとら忙しい身なのに、みんなは諸々の事情とかで全員いないし、あのジャガイモ小僧も妹つれてなんとか仮面のショーに行きやがったし・・・榊原さんも一緒だからうまく避難できたとは思わが」

「大丈夫だ。みんな無事だと信じよう。俺たちは俺たちでこの世界を守るうぜー！」

「ああ！そうだな！」

「だったら、私も・・・」

「いやアイリ、君は隠れていてくれ」

「蒼牙・・・？どうして？」

「君を失いたくない・・・！」

「蒼牙・・・」

「アイリ・・・」

「あゝ・・・ふたりの邪魔をして悪いんだが、イチヤイチャしている暇はないと思うな」

「！・・・っつわ、分かっているよ！と、とにかくアイリ、君は隠れてて！」

「うん・・・！」

アイリが「野原」と表札の書かれた一軒家に戻るのを確認すると、蒼牙と龍一は大群に強い視線を飛ばしてベルトを腰に装着し、叫んだ。

「変身！！！」

『change！！Y A I B A！！』

蒼牙が身体中に強烈な電流が流れていくのを感じた瞬間、彼はグリーンの装甲に赤いマフラー、同じく赤の宝石が嵌められた額を中心に三本の黄の角が伸びた雷の仮面の戦士・仮面ライダーヤイバに。龍一は紅蓮の炎に覆われ、黒い身体に赤の装甲、白いマフラー、鋭い刃のようなものが伸びた頭部に耳元に赤く突起が付いた炎の仮面の戦士・仮面ライダーケンに。

「俺は仮面ライダーヤイバ！覚悟しろ！今日がおまえの命日だ！」

「信じるのは己おのれの体のみ・・・武器に頼らず全てを貫く、俺は・・・仮面ライダーケン！」

そしてふたりとも同時に駆け出す。まずヤイバがベルトに装着されている蒼の宝石が嵌められた棒を剣に変え、雷を刀身に溜めると、  
「だああああああっっっっ！！！！」

の叫び声とともに雷撃を襲いかかってきた怪物たちに与え、五、

六匹を餌食にすると、続いてケンが凄まじい炎を集約した拳と足で怪物を次々と断末魔の咆哮さえも許さずに粉々にした。

だがそれでも怪物たちはひるむことなく、熱線を口から放つ。ふたりは恐れることなくかけ声とともに高く跳躍し、大群に立ち向かった。

東京 有楽町

「拓也先輩、あれは・・・!?」

鳥羽甲平は突如空に現れた怪物の大群を指差して隣に立つ甲斐拓也に急いで尋ねた。ふたりの周囲には8人の男女が甲平と同様に大群が覆う空を見上げている。拓也は両目を細め、深刻な表情で大群を見据えていたが、やがて首を左右に振った。

「・・・分かん。だが、このままでは東京が・・・」

「・・・そうですね。このままやらの好き勝手にさせるわけにはいきません！」

「ああ! だったら、やることはひとつだ！」

「はい! みんな!」

甲平は全員を振り返る。片霧大作も、鷹取舞も、橘健吾も、鮎川蘭も、マック・ウインディも、フリオ・リベラも、李文も、ソフィリー・ウエン・ヴィルヌーブも決意と覚悟の面持でうなずいた。そして10人はそれぞれインプットカードを取り出し、コマンドボイサーに差し込んだ。

「・・・重甲! ...!」

拓也、大作、舞は未来警察的ロボットをイメージさせるような装甲を身にまとい、ブルービート、ジースタッグ、レッドルとそれぞれ名乗りをあげると、

「・・・重甲、ビーファイター! ...!」

と決めた。

「・・・超重甲! ...!」

甲平たち7人も全員が昆虫をイメージさせる装甲をまとい、それぞれビーファイターカブト、クワガー、テントウ、ヤンマ、ゲンジ、ミン、アゲハと名乗り、10人の戦士たちは目の前の敵を装甲の下から見据えた。

「・・・怖いか、甲平？」

「大丈夫です、拓也先輩！いくら相手が多くとも、絶対にこの世界とみんなを守ります！」

「・・・それでこそビーファイターだ。行くぞ！」

「はい！」

10人の戦士はそれぞれの専用武器を構え、大群を迎撃する。

「110、インプット、マキシマムビームモード！」

「レイジングスラッシュ！」

「トルネードスパーク！」

「アタックビーム！」

「ファイヤービーム！」

「ジャミングビーム！」

「トンボウガン！」

「ライトニングキャノン！」

「ソニックプレッシャー！」

「ブルームキャノン、ビームシャワー！」

それぞれの技が炸裂し、怪物は次々と炎上して地上に叩き伏せられたが、まだ残りがすぐさま敵意を剥き出しにして咆哮と同時に熱線を一気に放ち、彼らの周囲に爆発を起こした。

~~~~~

豊洲

「あれは・・・悪魔？」

アラタは思わず目を見張った。彼の視線の先にはあり余るばかりの怪物の大群が都会を火の海と化している。レインボーブリッジも遂に炎上し、陸橋が巨大な水柱とともに海の中へと藻屑もくず化していく。

その姿、暗黒に統一され、鋭い両翼を背から生やし、両眼から凶暴さを発して存在そのものが「悪魔」を物語る。首はひとつのもあれば、二本三本四本に分裂しているのもあった。彼の周囲に立っていた4人の男女も怪物の大群を強い目で見るとすぐに取りべき行動を取った。5人は左手に持っていた顔面の形をした物体を右手で顎の辺りを引つ張り出して口を開かせ、そこにカードを素早く挿入した。

「チエンジカード、天装！！！！」

「CHANGE GOSEI GER！！！！」

5人は顔を閉じた途端に光に包まれ、姿を変えた。赤・桃・黒・黄・青の煌くスーツに黒のゴーグル。胸には聖なる両翼を象徴づける紋章が描かれた。そして5人は順にゴセイレッド、ゴセイピンク、ゴセイブラック、ゴセイイエロー、ゴセイブルーと名乗りをあげていく。

「地球を護るは天使の使命！」

最後にゴセイレッドが代表して叫ぶと、

「天装戦隊！ゴセイジャー！！！！」

と全員背後を輝かせ、ポーズを決めた。

ゴセイジャーと名乗った5人の戦士は即座に襲いかかってきた怪物たちを斬り伏せると、ゴセイブラックとゴセイイエローが召喚したスネーク、タイガーのヘッダーを装着、さらにランティックブラザーカードのクワガ、サイ、ティラノのヘッダーも装着して必殺技「ランティックバレット」を放ち、かなりの数を燃え散らすと、再び襲撃を仕掛けた者たちに斬りかかり、応戦した。

オーストラリア シドニー

怪物の大群はここ世界で最も美しい都市のひとつにも来襲していた。シドニータワーも海に臨むオペラハウスもあつという間に餌食になる。人々が恐怖に怯えて逃げ惑う中、ただ一人、黒髪の男がビルの屋上から大群をその瞳で睨んでいた。

「やれやれ・・・やつと地球に帰れたと思つたら・・・戦士に安息は訪れないのか・・・？」

黒髪の男はため息を吐くと胸からペンダントを取り出したが、彼は一瞬それを使用するべきか躊躇した。なぜなら仮に使用してもこの次元では3分しか保てないことを彼は知っていたからだ。巨大なのが一匹か二匹程度ならまだなんとかなるかもしれないが、このデタラメな数では・・・。

「だが・・・戦士としてこれを黙って見ているわけにはいかないな」  
せめて人々がみな避難できるまで時間稼ぎだけでも、と男・・・ジヤック・シンドーは決意し、ペンダントを左手に乗せた。するとペンダントが発光してその光を増し、ジヤックは光に包まれて目を閉じた。次の瞬間、空間が爆発し、その中から銀色の巨人が現れる。銀の顔、白い両目、赤の紋様が走った白い身体。人々はその巨人をこう呼ぶ。・・・ウルトラマングレート、と。

ヘアツ、と声を発して突如現れた銀の巨人は大群に体勢を変える  
と左手を向け、そこから光線を浴びせ、一瞬で30から40を炎に包ませた。

各世界に襲来したヤマタノオロチの幼獣の大群を迎え撃つ戦士たち。

しかし、やはりすぐに圧倒的すぎる数と強力な熱線を身体に次々と受け、大苦戦を強いられた。

幼獣はきりがないほどの数でそれぞれの世界をあっという間に支配し、地獄と化する。

全ての世界が、滅びへのカウントダウンを数え始めていた・・・。

破滅（後編）（後書き）

次回、猛威を続けるヤマタノオロチにキュアセイバーは・・・！？

## 決死圏

リベリオン城もといハピネス城は復活したヤマタノオロチによって完全に崩壊し、見る影もない状態になっていた。複雑怪奇だった迷路のような構造も今や粉々の瓦礫と化している。その瓦礫の下から何人かの少女たちが現れ始めていた。

プリキュアたちだ。キュアセイバーも含めた彼女たちは逃げるのが遅れ、突如決壊してきた天井に下敷きになりかねたが、間一髪でルミナスがバリアで全員を包み込み、無事だったのである。プリキュアたちは全員地上に立つと城下へとその巨体を動かし始めたヤマタノオロチに視線を飛ばした。暗黒の巨体からある程度幼獣を生み出したオロチは八つの首から熱線を四方八方に拡散させていた。オロチが移動した跡は踏み潰されたり薙ぎ倒されたりした建物の残骸だけが無残に残されていく。そして灼熱の火柱を次々に上げ、世界を地獄へ変えようとしていった。恐怖と絶望の悲鳴をあげる民たちの声が聞こえる。プリキュアたちはその光景に直面しながらもどうすればいいのか分からず、ただ呆然と眺めるだけだった。

全てが、遅かった。

全世界を滅亡から阻止するために今まで頑張ってきたというのに間に合わなかったのだ。もはやこのハピネスランドだけでなく世界中が幼獣たちの来襲によって滅亡に向かっているのだらう。今さら数々の戦いで体力も限界に来たこの小さな身体である魔王に戦いを挑んだとしてもおそろく勝つ見込みはゼロに近いだらう。未来は失われてしまったのかと、プリキュアたちの間にも絶望が漂い始めていた。だが、

「・・・つく！」

セイバーが突然傷ついた身体を前進させた。その瞳はただひとつ、ヤマタノオロチのみに向けられていた。

「セイバー！一体どこへ!？」

「まさか、ヤマタノオロチと戦うんじゃ・・・!?」

すぐさまブロッサムとマリンが聞く。セイバーはプリキュアたちに振り返り、瞳の強さを衰えさせぬままうなずくところ口を開いた。「私、キュアリベリオンを・・・過去の自分を、どうしても助けたいの」

「……………えっ!?」「……………」

「ヤマタノオロチは、人々の憎悪や怨念が集った負のエネルギー生命体・・・きつと、『憎しみ』の私であるキュアリベリオンもオロチの中にいると思うの・・・私はずっと忘れていた十字架をもうひとりの自分に背負わせてしまった。私が過去の自分を封印したせいでキュアリベリオンは暴走してしまっただから、私はもうひとりの私を今度こそ助けたい。もうこれ以上の苦しみから解放してやりたいの!」

「でも、助けるって、どうやって?」

パインが聞くと、セイバーは「ロモモ!」とパートナーを呼んだ。サンシャインの腕の中にいたロモモはすぐに返答して宙に飛び、セイバーに接近した。

「ロモモ、オロチの中に飛び込みたい。あなたの力を貸して」

「ロモモ?」

「マイナスエネルギーが溢れているあの体に飛び込むには私一人じゃ無理。でもロモモが力を貸してくれるなら・・・お願いロモモ、もう一度キュアリベリオンと話がしたいの。力を貸して」

するとロモモはたちまち笑みを輝かせて答えた。

「なぐに言ってるロモ。ロモモはいつだってセイバーの味方ロモ。」

セイバーのためなら、ロモモは喜んで力になるロモ!」

「ロモモ・・・!」

ロモモはセイバーの手に降りると煙を発し、ペンダントに姿を変えた。セイバーはそれを首に掛けた。

「でもセイバー、いくらなんでも危険すぎるよ。いくら過去の自分だからって、どうしてそんなに・・・?」

今度はブライトが尋ねる。するとセイバーは少しだけ思い返すように呟いた。

「夢だったかもしれないけど、ある人に言われたの。キュアリベリオンは過去の私、過去の自分を止められるのは『現在』<sup>いま</sup>である私にしかできないんだって。これ以上罪を数えなくなかったら全力で過去の自分を止めてみせる、世界を崩壊から救ってみせる、最後まであきらめないのがプリキュアだろ、自分が背負った宿命をよく考えろって。・・・もう何もかもが遅いかもしれない。だけど、私はわずかでも可能性があるのならそれに賭けたい。こうして今の私と過去の私が出会ったのが宿命なら、私は過去の自分をいつまでもほっとくわけにはいかない。今度こそ、長い苦しみから解放させてあげたい！」

罪を・・・数え・・・？

その台詞に聞き覚えがあり、ふとムーンライトは尋ねた。

「セイバー、その人ってどんな人だったか覚えてない？」

「えっ？」

言われてセイバーはすぐに自身に助言をもたらした人物がどんなだったかを思い出す。ところが不思議なことに台詞はほぼ覚えているにもかかわらず、セイバーはその人物の顔も名前もぼやけていてどうしても思い出せなかった。

「ごめん、よく覚えていない。ただ・・・」

振り返った時のその背中。それは大きくて、なぜか懐かしいようで、まるで・・・。

「どうしてだろう・・・まるで・・・お父さんのようだった」

「！・・・」

その言葉に、ムーンライトの記憶にある人物が浮かび上がる。

その人物は、強くて、優しく、頼りになって・・・かつてのパートナーよりも自分を理解してくれ、もうひとりの父と呼んだ、少し格好つけのハードボイルドな探偵。しかし今、彼の存在は・・・。まさか、と思う。そんなはずはない、と思う。しかしそれでも、

とさえも思い、ムーンライトはそれ以上の思考が続かなかった。そんなムーンライトの戸惑いを知らず、

「分かりました！」

とブロッサムが言い、みな彼女に注目した。

「では、私たちがヤマタノオロチの目を惹きます。セイバーはその隙にオロチの体の中へ入ってください！」

「ブロッサム……」

「私たちも最後まであきらめずに戦います。あなたはあなたで過去と決着を着けに行ってください！」

ブロッサム他、全プリキュアもセイバーに決意の光が宿った瞳をセイバーに飛ばし、全てを彼女に預けた。

「ありがとう、みんな……！」

セイバーは感激で少しだけ詰まった声で礼を言うと、再び破壊を続けるヤマタノオロチに振り返り、一気に駆け出した。

燃え広がる業火。立ち上る黒煙。崩壊した建物の残骸と瓦礫。人々の悲鳴。

ただ破壊と殺戮だけを目的とする黒き魔王は咆哮と熱線を絶えず放ち、その巨体をゆつくりと前進させる。かつての栄華を誇った王国がみるみるうちに蹂躪じゅうりゅうされていく。国民は避難しながらもその表情は絶望に変わろうとしていた。

七人衆やヤミたちと民を誘導していたセーラーセレーネ、ジェアンヌ、ドールキティにも表情が少しずつ翳りが現れ始めていた。もはや本当に終わりなのかと思考し、絶望を受け入れると悪魔が耳元に囁く。人々はその声に思わず従いかけた。

だが、そんな人々の絶望を打ち砕いたのは小さいながらも魔王に真っ向勝負を挑んだ19の影だった。その影を目にし、妖精たちが歓声をあげた。

「プリキュア！ ツツツ！！！！」「」「」

その影は19人のプリキュアだった。彼女たちは300メートルも超える巨体をも恐れず、オロチを正面から見据えると、それぞれ必殺技を発動した。

「プリキュア!!!」

「マールスクリユー・マックス!!!」

「スパイラル・スター・スプラッシュ!!!」

「シューティングスター!!!」

「ファイヤーストライク!!!」

「プリズムチエーン!!!」

「エメラルドソーサー!!!」

「サファイアアロー!!!」

「ラブサンシャイン・フレッシュ!!!」

「エスポワールシャワー・フレッシュ!!!」

「ヒーリングブレイアー・フレッシュ!!!」

「ハピネスハリケーン!!!」

「ピンクフォルテウェイブ!!!」

「ブルーフォルテウェイブ!!!」

「ゴールドフォルテバースト!!!」

「シルバーフォルテウェイブ!!!」

各必殺技が巨体に次々と炸裂する。しかし、ヤマタノオロチはあれほどの強力な技を一度に受けたのに全く効いていない様子であった。ただ、さすがにこれだけのちよっかいを受けるとなると注目せざるをえなくなる。オロチはびっしりと隙間なく縁どられた、ギザギザにとがった<sup>かみそり</sup>剃刀のような牙をプリキュアたちに見せたと思ったら、次の瞬間その奥から禍々しい赤黒の業火を浴びせた。幸いルミナスがバリアで防御し、さらにローズがメタルブリザードで再び巨体を攻撃したが、オロチは怒ってその長い首を飛ばし、牙で捕らえようとした。プリキュアたちはすぐさま散らばって走り出し、八の首を幻惑させた。プリキュアたちのおかげでヤマタノオロチは背後からセイバーが接近していることに全く気づかなかつた。

「みんな、本当に恩に着るわ。・・・ロモモ、行くよ！」

「オツケーロモ！」

ペンダントが白く発光し、さらにその輝きを増していく。全身を覆われたセイバーは背中の翅を広げ、自らを光の蝶と化させると光速となつて魔王の黒い背へ突進していった。

次の瞬間、視界が暗転する。魔王の体の中へ突入したのだとセイバーはすぐに理解した。

誰も知らない、負の世界へ。<sup>マイナス</sup>

## 決死圏（後書き）

次回、キュアセイバーはキュアリベリオンを救うことができるか！  
？

## 帰る場所

そこはどこまでも暗黒に染まり、冷たく、どろどろとした闇の世  
界だった。

セイバーはその闇の中で腕と足を動かし、泳いでいた。

「ここが・・・ヤマタノオロチの中・・・」

そう呟いた次の瞬間、何か彼女を襲った。

それは声だった。鼓膜を破るほどの数多くの叫びが一気に激流と  
なつてセイバーの中へ押し込まれた。憎悪、号泣、恐怖、苦痛・・・  
全ての負の感情が身体の中を駆け巡り、セイバーは絶叫をあげた。

目が回り、吐き気さえも感じた。

「な・・・なんて絶望なの！」

「そうよ・・・それを私はずっと抱え込んできたのよ・・・」

すると声が響いた。セイバーはすぐに声がした方向に目を向けた。  
漆黒の制服の白い顔の少女が暗黒の闇に下半身を埋めていた。

「キュアリベリオン！」

キュアリベリオンは上半身もどろどろとした闇に侵食され、黒く  
染まろうとしていた。セイバーはそれを見るなり、すぐに彼女に接  
近を試みた。

「来ないで！」

だがリベリオンは彼女を拒んだ。セイバーはビクン！と身を引い  
た。リベリオンは絶望の闇が宿ったその瞳をセイバーに向けた。

「どうしてこんなところに来たの？ここはあなたにとって最も場違  
いな場所よ。すぐに出てって・・・」

「・・・あなたを迎えに来たのよ」

「迎えに・・・？」

リベリオンはかすかに嘲笑すると、目を逸らした。

「冗談を聞いている暇はないわ」

「冗談じゃない！私はあなたに言ったはずよ。もうあなたを『なか

った』ことにはしない。あなたは私で、同じ雨牙真夜なの。．．．  
確かに以前の私は『憎悪』<sup>マイナス</sup>の私をもう必要ないと決めつけていた。  
嫌いだとさえ思っていたかもしれない．．．そんな私はまだ弱く、  
あさはかで、ずっと逃げていた。でも、私はもう逃げない。憎しみ  
も、悲しみも、苦しみも、痛みも全部ひっくるめてあなたとともに  
生きるわ！」

「．．．それで？」

「え．．．？」

「ご高説はどうも。でもね真夜、仮に私を助けたとしてふたりで本  
当に生きていけると思う？さつきはつい心が揺らいだけれど、よく  
よく考えてみればそんなのは無理よ。だって『日常』はひとつしか  
ないもの。私はあなただけ、家も、家族も、友達も、そんな当た  
り前のモノを“私”は受け取ることができずいつもあなたの裏で  
我慢していたのよ。そんな雨牙真夜が今さら雨牙真夜<sup>あなた</sup>と生きていけ  
ると本気で思う？．．．私の『居場所』はね、最初からなかったの  
よ、どこにも．．．」

過去の自分の言葉に、セイバーはゆっくりと首を振る。

「．．．それは、違う。どこの誰にも『居場所』なんてものは  
存在しないのよ」

「．．．は？」

リベリオンは思わず視線をセイバーに戻した。セイバーはリベリ  
オンを見つめたまま言葉を続けた。

「どこの誰にも、最初から用意されている『居場所』なんかないの。  
『居場所』ていうのはね、自分で作るものなんだよ．．．私は持つ  
ているよ、自分の『居場所』を。ここにしっかりと．．．！」

セイバーは目を閉じて手を胸に当てた。

「私が見て、感じて、大切に想ったもの．．．その全てが私の．．  
私だけの『居場所』なのよ。自分の『居場所』は誰にだって作るこ  
とができて、心の中に留めておくことができる．．．私、思うの。  
私たちがこうして出会ったのは私たちの『居場所』を繋げるためじ

やないかって……」

「私たちの……『居場所』？」

「うん。私たちは同じ存在でありながら表と裏の対の関係。そのままだったら会うことはなかった私たちが、今こうして出会い、話げできたのは……きつと、力を合わせて『居場所』を作るためだったのよ。私たちの出会いはどちらが本物が決着を着けるためじゃない、一緒に『居場所』を作って生きていくために起こった奇跡だったの。もう私たちは繋がっている。だって同じ雨牙真夜だから……」

セイバーは目を開けた。そして両腕に圧倒的な光を込めて闇に侵食されていくリベリオンの腕を取った。

「あなたの『居場所』はある。私も一緒に作ってあげる。私はあなたが大好きだから……だから、帰ってきて、真夜！」

「!……」

名前を、初めて呼ばれた。セイバーは両腕に溜めた光の威力をさらに増した。暗黒の闇に白銀の閃光が走ってヤマタノオロチは初めて苦しみだし、咆哮を上空に飛ばした。次の瞬間、オロチの巨体の一部が中から破られ、そこからリベリオンをしっかりと抱きかかえたセイバーが飛び出した。

「おかえり……真夜」

セイバーは地面に着地し、リベリオンを降ろした。

「た……ただい……」

ただいま……そう言おうとしたリベリオンは最後までその言葉を言い終えることができなかった。

微笑むセイバーの背後から魔王が八つの首から一気に集中砲火を浴びせた。

閃光と衝撃。そして爆音が周辺に響き渡る。

魔王の一撃。その強力すぎる一撃は一瞬にして火柱をいくつも立たせ、周辺を焦土へ変えていた。そんな荒涼とした場所で、リベリオンは愕然となって目の前の光景を見つめていた。変身していない生身の状態では今の攻撃はひとたまりもないはず。だがリベリオ

は無事だった。彼女の目の前には両手を左右に大きく広げたセイバーがいる。その背中からは焼け焦げたような嫌な煙がいくつも立ち上っていた。セイバーは己おのれを盾にして彼女を守ったのだ。

「ま・真夜！」

リベリオンが大きく両目を見開いて叫ぶ。ヤマタノオロチの熱線をもろに受けておきながらそれでも微笑を浮かべていたセイバーはふっと力が抜けたようにそのまま倒れ込んだ。光とともに変身が解除され、もとの服装に戻り、ロモモも妖精の姿で地に倒れる。リベリオンは彼女の身体を抱きとめた。

「真夜！真夜！」

その肩を抱き、必死で名前を呼ぶ。だが返事の代わりに聞こえたのはかすかに苦しげに繰り返される呼吸だった。周囲を見れば、全てのプリキュアたちが全身に傷を負った姿で地面に倒れ伏している。絶大な邪悪マイナスのパワーでプリキュアたちを圧倒したヤマタノオロチは再び全身から幼獣の大群を生み出し、それらを彼女たちに迫らせた。「・・・っ！」

それを目にしたりリベリオンはオロチをキッと睨むと真夜を地に降ろし、手を広げて迫る大群の前へと躍り出た。

リベリオンは、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「・・・黒き魔王よ、私は今まで存在そのものが否定された気がして、ヤケになって、それで全て壊したくて、あなたという存在を蘇らせた。・・・けれど、私はやはり愚かだった」

そこでリベリオンは言葉を切る。

「私は光が決して当たらない、当たることのない影の存在。でも、そんな私でも確かなものを得ていた・・・」

絶望だけが循環する現実。いつ終わるのかと明日が見えることのない醜い争いの日々。大切な存在と無理やり別れさせ、神をも恨んだ時間。

しかし、それでも人々は生きた。希望を信じて。いつか必ず光が見えてくると信じて、笑顔を輝かせた。

醜い中でも必ず光はある。それを見ずして自分は勝手に思いあがり、全てを暗黒に変えようとした。だが光と闇は共存できる。セイバーが言ってくれたようにこれからも自分が自分らしくあるためには負の自分も必要になれる。そしてともに協力し合い、一緒に生きる道を作ることができる。

「私は影で、偽者かもしれない。でも偽者の私でもようやく信じていることができる存在に気づけた。未来をあきらめない『自分』という存在が……。私はたとえ過去の存在でも、もうひとりの自分の想いを無駄にしたくない！私は愚かで、自己中心的な存在かもしれないけれど、それでも私は全ての世界と、未来を、そしてみんなを……」

最後にリベリオンは声を振り絞って、叫んだ。

「守るッッッ！！！」

その時だった。

ビカーッ！！

ユカ皇女の手握られていたステイニーミラクルライトが突如輝きを増した。皇女は驚き、ミラクルライトを見る。その光に全員が注目した。真夜もプリキュアたちもその光に気づき、ボロボロの身体を起こして立ち上がり、ヤマタノオロチと幼獣の大群も鋭い眼光を飛ばした。そして次の瞬間。

「え……？うわっ！？」

「きゃああっ！？」

ブロッサムとマリンの腕に抱えられていたゴルドソードとシルバースードがミラクルライトの光に応えるように突如激しく震動を起こし始め、まるで意志を持ったかのようにふたりから離れた。そして空中で飛び交うとふたつの剣はふたりの真夜のもとへと降臨した。

銀の剣は、キュアセイバー雨牙真夜に。

金の剣は、キュアリベリオン雨牙真夜に。

目の前に降りたふたつの剣の柄を真夜が握り締めた時、ふたりの

周囲に大量の光の胞子が集結しました。

帰る場所（後書き）

次回、遂に！！

## 勇士

「これは・・・！」

スイッチを入れていないのに突如輝きだしたデステイニーミラクルライトをユカは驚きながら見つめた。周囲にいた人々も驚き、七色の光に注目している。ココが目を大きく開きながら一番に声を発した。

「デステイニーミラクルライトが反応しているココ！」

「ミラクルライトが真夜の、世界を、未来を、みんなを守りたいという想いに共鳴を起こしたんだナツ！」

「それに剣がふたりの真夜は今のところに来たっつーことは、予言に出とつた“ふたりの勇士”って、キュアセイバーとキュアリベリオンのことだったんかいな・・・！」

「キュアキュア〜！プリリ〜」

妖精たちは全員プリキュアたちに振り返った。真夜と真夜の周囲には光の胞子が無数に漂っていた。そしてその光は剣に集まっていた。ふたりは柄を引つ張った。シャキンツ！と銀色に輝く刀身が抜け、聖なる光を放つ。ユカはそれを見て、ミラクルライトを高々と上げ、声に出して叫んだ。

「キュアセイバーとキュアリベリオンに、力をーっ！」

その声にみんなが注目する。ユカは構わずもう一度叫び、ミラクルライトを左右に振り続けた。

「キュアセイバーとキュアリベリオンに、力をーっ！」

するとユカの声に重なって、今度はダイチが声をあげた。彼はミラクルライトを持っていないが、それでも拳を高く持ち上げて叫び続けた。ふたりの声に続き、やがてひとり、ふたりと声が増え、合わせていく。彼らはたとえ魔王の16の眼に睨まれても、数億の幼獣大軍が牙を剥いても恐れずに叫び続けた。

そして、奇跡が起きた。

ミラクルライトの光が一直線となつて暗黒の空に上り、噴水で水が舞うかのように炸裂したのである。そしてその光は幼獣たちを超えるほどの数に分裂して民たちの手に戻ってきた。民たちの手にはそれぞれのミラクルライトが握られている。人々はすぐにそれらを高く振り上げ、もう一度喉から絞り出るような声を合わせて叫んだ。

「キュアセイバーとキュアリベリオンに、力を！ っっ！ っ！」

光が分裂して人々の手に渡ったのはハピネスランドだけではない。さらに時空を超えて飛び出し、各世界に暮らす人々の手にも渡つていった。

「アカネさん、あれ・・・！」

「んん・・・？」

莉奈が車窓から外を指を差したのでアカネはそこから外を覗いた。見ると、さつきまで炎上していた街が七色に炸裂した閃光に包まれ、襲いかかってきた怪物たちを撃退しているのだ。光を浴びた途端にあの悪魔のような怪物がまるで春の淡雪のごとく消滅していく。それを見て、志穂が外に出た。

「危ないっ！」

アカネと莉奈も急いで外に出る。しかし、もう周囲に怪物は一匹もいなかった。3人は光が弾ける街にもう一度視線を飛ばす。すると3人の手に光が降り、ミラクルライトが握られた。

次の瞬間、3人はそれを無意識に頭上に向け、左右に振りながら叫びだした。

満と薫は目の前の現実を目を疑っていた。

あれほどさつきまで大勢いて、自分たちを変身解除にまで追い詰めた怪物たちが突如ふたりの手に現れたミラクルライトの光を浴びた途端に簡単に消滅したのだ。怪物たちは目の前にいる満と薫に牙と爪をさらし、口から殺気を発しながらもその光に近寄ることがで

きずにいた。

「薫お姉さ〜ん!」

みのりも手にミラクルライトを握って、パン屋から飛び出してきた。

「みのりちゃん!」

「どうして・・・?」

満と薫が驚いていると、みのりは強い瞳で怪物たちを見、ふたりに伝えた。

「みのりも戦うよ!みんなで応援しよう!ね?」

ふたりは幼い少女の言葉とその衰えさせぬ強い眼光に一瞬呆けたが、すぐに微笑を浮かべてうなずき、ともにミラクルライトを振り出して、叫んだ。

~~~~~

「こ、これは・・・フェアリーパークやワンダー・プラネットで手にしたものは少し形が違うが、まさしくミラクルライト!これさえあれば百人力だ。諸君、諸君らも一緒にミラクルライトを振って、あの怪物たちをやっつけようじゃないか!」

「こんな小さなライトで本当に怪物を倒せると思うなんて社長、あなたの脳味噌は子供以下ですか?そういえばフェアリーパークの時もひとりだけ両手でミラクルライトを振ってましたね?それに私たちに内緒で自分だけワンダー・プラネットに遊びに行ったこと、私はまだ許してませんよ」

「う・・・うるさいっ!いいから振れっ! 私たちも想いをひとつにして応援するんだ!いいな!」

~~~~~

「瞬!これはまさか!?!」

「ああ・・・間違いない。フェアリーパークやワンダー・プラネットでも手にしたミラクルライトだ。もちろん形は異なるが、光を浴びせただけであの怪物を倒すとは凄い力だ」

「瞬!これはきつとみんなも戦っているんだ!俺たちも応援しよう

！」

「それだったら、おじさんも手伝うよ、グハッ」

「おおつ、それでこそ兄弟！さあ瞬、俺たちも一緒に・・・」

「嫌だ」

即答。

「な・・・なぜだっ!？」

「なんとなく君らと同類だと誤解されそうな気がして」

「何が誤解だ？世界が終わってもいいのか？つべこべ言わずにやれ  
！」

瞬はその後拒否を続けたが、隼人の説得と大群の前に結局折れてミラクルライトを振って叫んだ。

~~~~~

「薰子さん、これは・・・？」

ももかは掌てのひらに突然現れたミラクルライトを薰子に見せた。薰子は微笑んだ。

「それはきつと、みんなに力を与えるミラクルライトよ。私たちが想いをひとつにすればきつと世界を救える。・・・みんなで応援しましょう」

「これで本当に世界を・・・？」

「ええ・・・」

「分かった。じゃあみんな、私と一緒に応援しよう！世界を守るために！」

ももかが植物園に避難してきた人々に呼びかけると、みな表情を引き締めてうなずき、立ち上がった。

薰子はその光景を優しく見つめていた。

「大人！これ・・・！」

琢磨はミラクルライトを握り締めて大人を振り返った。次々に怪物たちの熱線を受けて変身が解除され、追い詰められた4人だった

が、突如凄い勢いで手に降りてきたミラクルライトの光で助かったのだ。

「これ・・・よく分かんないけど、持っているだけでなんだか凄く力がみなぎってくるよ！」

「ああ！どうやら俺たちも望めば天はいつだって俺たちに味方してくれるみたいだな、傑！夕！」

「ああ！その通りだ！」

「みんなで振って、応援しましょ！」

そして4人もミラクルライトを振り、心の底から力を出して叫んだ。

~~~~~

「何だ・・・コレは？」

士は突如手に現れたミラクルライトを見つめた。士だけでなく、他の4人の手にもそれは握られていた。

「海東か海東その2、おまえらこのペンライトを知っているか？」

「いや、知らないよ」

「俺も。それより俺はその2じゃないってのに・・・」

「けど士、なんだかこれ持っているとか力が湧いてきて、なぜだか分からないけど応援したくなってきたよ。応援してみようよ」

「ふざけるなユウスケ！俺がこんなもん持って、応援するタマか！」

「大樹さん、晧さん、ちよっと士君を抑えててください」

「「え？こっ・・・？」」

「何？夏ミカン、おまえまさか」

「光家秘伝！笑いのツボ！」

ドスッ！

「あ・・・あははははははははは！バカ・・・あははははははは・・・わ、分かった分かったから・・・」

~~~~~

「本当に一体全体何がどうなってんだこりゃ？」

翔太郎は大群を前にしながらも首をかしげずにすまなかった。そ

れはそうだろう。変身が解け、危うく怪物に噛みつかれそうになつたところを掌てのひらに突如飛来したミラクルライトのおかげで無事で済んだのだから。翔太郎だけではない。今や風都中の人々の手にミラクルライトが渡り、みな光を炸裂させて怪物を撃退していた。風都タワーもプロペラこそ被害に遭つたものの、なんとか倒壊には至らずに済んだ。翔太郎は急いで通信機器で相棒に叫んだ。

「おいフィリップ、このペンライトみたいなの、何なんだ？」

「急いで検索してみたが、それも別の世界から来た以外何も分からない。だがなかなか興味深い。翔太郎、それから照井竜、それ振つてみたらどうだい？」

「ふざけんな！なんでそんなことしなきゃならねえんだ！」

「俺も同意見だ」

スパコーンツ！

ふたりは後ろから誰かに軽く頭を殴られた。

「・・・つつつてえーッ！て、亜樹子！」

「いいからフィリップ君の言うとおりにしなさい！フィリップ君もそのライトを振ってみると言っているし、私だって振るんだから！」

「だあぁーっ、もう！分かったよ！やるぞ、照井！」

「俺に命令するな」

「俺だけやらす気が、てめえは！いいからやれっ！」

~~~~~

「す・・・凄い。凄いよ、このライト。これの光を向けただけであいつら次々と消えていくよ」

映司は感動していた。変身が解かれ、絶対絶命のところをミラクルライトに救われた彼は七色に光を炸裂させるそれに目を輝かせながら見つめていた。

「これでこの世界を救える。アंक、伊達さん、ふたりも一緒に・・

」

「やるか！」

「・・・ですよね、じゃあ俺だけでも振りますから・・」

「勝手にしろ！」

「な、何だこれは？これ浴びせた途端に怪物たちが消え始めたぞ」「どうやらこいつらと戦っているのは我々だけではないようだぞ、霧彦。その証拠にこのライトはあちこちにも散らばっているようだ」「僕たちにこれを使えというのか？」

「ああ。きつとそうだろ。僕たちはその想いに応えなきゃいかん義務があるようだ。応援するぞ、霧彦。そしてやつらに今度こそ裁きを下すんだ！」

「ああ！分かった！」

「何だろ・・・これ？分かんないけど、すっげえ温かいよ、龍一」「ああ！なんだか力が湧いてきたぜ！」

「蒼牙！」

すると家の扉が開いてアイリが飛び出してきた。

「アイリ！」

「蒼牙、これはみんなの・・・人々の想いの力よ。私たちも一緒に応援しましょ」

「俺も？・・・よし、分かった。ふたりとも、俺たちの想いの力つてやつをやつらにも見せてやるうぜ！」

そして3人はミラクルライトを高く振り上げた。

「何なんだ、このライトは？光を向けた途端にあの怪物が消えてしまった・・・」

「拓也先輩、このライト、世界中に散らばってますよ。それに人々の応援する声が聞こえます。俺たちも振って応援しましょう！」

「いや、しかし・・・」

「なに恥ずかしがってんの？拓也、かわいい」

と鷹取舞が横からにやけた。続いて片霧大作も言った。

「応援つてのは、やればやるほど燃えるもんなんだぜ、拓也」

「みんなも声を合わせて応援するぞ！」

「~~~~~うん!!!!」

甲平が振り返ると、みな笑みを浮かべてうなずいた。

「・・・やれやれ、妙なことになったもんだな」

拓也は小さくため息を吐きながらも、ふっ、と表情をすましてミラクルライトを振り上げた。

~~~~~

「凄い・・・このライト、あの悪魔をあつという間に消滅させてしまった・・・」

アラタは頭上を見上げた。空には七色の光が炸裂して東京中に光速で降りていった。アラタはミラクルライトを構え、仲間呼びかけた。

「みんな！これは人々の想いだ。人々の想いがこのライトに詰まってるんだ。やろう！このライトに俺たち護星天使の想いを込めて、あの悪魔を完全に倒すんだ！」

「~~~~~おう!!!!」

ゴセイジャーも手に持ったミラクルライトを握り締めて高く持ち上げた。

~~~~~

「これは・・・？」

ジャック・シンドーは手に降臨したミラクルライトを不思議そうに見つめた。すでに3分が経ち、彼はもとの姿に強制的に戻されていた。怪物の大群はまだ目の前にいる。しかし、突如人々の手に降りたこの光で怪物たちは近づけなかった。もう人々は恐れず、強い目を向けてライトから光を放っている。

「・・・どうやら、安息の時も近いようだな」

ジャックは悟ったように息を吐くと、彼もミラクルライトを握った手を高々と振り上げた。

~~~~~

人々の、想いが集った光は別次元に存在する宇宙にも見えていた。

それをひとりの戦士が遠くから見つめている。

上半身が青、下半身が赤を基調とした「彼」にミラクルライトは届いていなかったが、それでもと両手を振り上げてそこに力を集約すると、その力を光と化せ、世界に向けて優しく解き放った。

「彼」が放った光は、「彼」の想いとなって、世界に注がれていく。

味な真似をしてしまったな、と言つかのように「彼」は親指で鼻を擦るような動作をすると、振り返って自身の故郷に向けて飛んでいった。

~~~~~

「キュアセイバーとキュアリベリオンに、力をーつつつつ  
つ!!!!!!」「」

世界中の人々の想いが光となり、ふたりの真夜に結集していく。

すると荒涼とした大地が黄金に輝きだし、さらにそこから光の胞子が浮かび上がった。

「私たちも!」

「うん!!!!!!」「」

ブラックがプリキュアたちに振り返って呼びかけ、全員声を張りあげてミラクルライトを左右に振った。

「キュアセイバーとキュアリベリオンに、私たちの光をー  
つつつ!!!!!!」「」

彼女たちの想いも光となって、ふたりに注がれていく。

すましたような笑みを浮かべたふたりはそのまま胞子とともに身体が浮かび上がる。みんなの想いが詰まった光はそのまま彼女たちの身体を包み込み、ふたりは抗うことなく光を全身に受け入れた。

まばゆい光の中でふたりは目の前に誰かがいることに気づいた。

長い金髪の左右に施された羽翼をイメージさせるティアラ。灰色調の甲冑。左肩には赤い薔薇があしらわれている。まるで天使のようだ。彼女は……。

「キュア・アンジェ……」

ふたりがその名を口にした瞬間、天使・・・キュアアンジェは両腕を微笑みながら大きく広げた。光の中で強く、優しい光が炸裂した。ふたりは天使の想いも込められた光も全身に浴びて目を閉じる。そして光が弾け、粒子となって周囲に散らばった時。

「あ・・・ああ・・・！」

ブロッサムが感激の声をあげた。

そこにいたのは衣装が変わったふたりの真夜だった。

真夜は白銀の西洋風の甲冑と琥珀のイヤリング、そして白いマントを身につけた勇士。

真夜は漆黒の西洋風の甲冑と翡翠のイヤリング、そして黒いマントを身につけた勇士。

ふたりはそれぞれ銀と金の剣を構えて立ちはだかる魔王を強い瞳で見据え、

「未来を繋ぐ奇跡の聖者、キュアセイント！」

「世界を紡ぐ幻影の使徒、キュアファントム！」

と名乗ると、刀身を重ね、

「私たちと、みんなの想いの力・・・受けてみなさい！！！！」

とその刃先を魔王に向けた。

その瞬間、怒り狂った魔王の咆哮が周囲に轟き渡り、空間を激震した。

勇士（後書き）

次回、全てに決着！

## 終焉

ヤマタノオロチは八つの首から殺気にまみれた咆哮を轟かすと、すぐに黒い全身から何百もの幼獣の大群を生み出した。幼獣たちはみな眼と爪牙そつがから毒気を発していつせいにキュアセイントとキュアファントムに襲いかかった。だがセイントとファントムは微塵も恐れずにマントを翻すと、ふわっ、と上空に高く飛び上がった。

「セイバー・・・いや、セイント！」

プリキュアや妖精たちとともに地上に残るロモモが空を見上げて叫ぶ。セイントは一瞬だけロモモに微笑んだが、すぐに表情を引き締めて前を向き、迫り来る大群を見据えると、ファントムと目を合わせた後に剣を高く振り上げた。

「はあっ！！」

ふたりが剣を振り下ろした瞬間、まるで空間そのものが斬り裂かれたかのような巨大な太刀風が発生し、一気に幼獣たちに浴びせられた。太刀風をその身に受けた幼獣はみなまるで包丁に切られたかのようにきれいに真っ二つに裂け、一瞬で塵と化して地上へと散っていった。だが太刀風はそれだけでは止まらなかった。幼獣を全滅させた後、大群を生み出した親玉にも浴びせられ、今までプリキュアの必殺技を受けてもなんともなかったオロチは初めてうめくような咆哮を次々にあげた。暗黒の巨体が一瞬だけねじれ、火花が走っていく。オロチにダメージを与えたふたりは目を合わせてうなずくと、再びマントを翻してその巨体に猛接近した。まずセイントが太刀風を八つの首に浴びせながら致命傷を与えていく。そこへファントムが巨体に向けて強靱な風の刃を放ち、オロチにさらなるダメージを与えた。だがそれでも400年前に世界を滅亡に向かわせ、過去のプリキュアたちでも封印するのがやっとという絶大な強さを持つ魔王だ。すぐに怒りで満ちた魔眼で睨み、牙から殺気を吐き、灼熱の業火を発射した。高速で低飛行しながら熱線を軽やかにかわし

ていくセイントとファントム。ふたりは魔王が業火を吐き疲れたのを確認すると、再び漆黒の空へ上昇した。

シャキンッ！

そしてふたりはもう一度刀身を合わせると、光を集約し、標的を魔王に向けた。

だが魔王も準備を始めた。16の魔眼がふたりの姿を捉え、八つの首全てが喉の奥から憎悪のエネルギーを最大限に溜め、集中砲火で放とうとしている。ふたりの剣にもエネルギーは次第に溜まっていくが、魔王のほうが早い。もう口内が赤く発光し始めている。

「ヤ、ヤバいよ！先に撃たれちゃう！」

「みんなで邪魔をしよう！」

マリンに続き、ブロッサムが全員に声をかけ、プリキュアたちは駆け出すと、八つの首にそれぞれの必殺技を炸裂させた。セイントとファントムに集中していたオロチは突然の乱入に少しだけひるむ。「私たちも！」

セーラーセレーネはじめ、ジェアンヌとドールキティ、さらにはディアーナとファン・ハルトも走り出した。

「はっ！」

まずドールキティがライトスピナーから強烈なフラッシュをオロチの頭上から浴びせる。ジェアンヌとファンは巨体の前に佇むと、

「行くよ、ファン！」

「よし、とびつきりの行くよ！ふああああいいいいいやあああああつつつつつ！！！」

と額を発光させてありつただけの力をジェアンヌが握った口ザリオに送り、そこから何千度にも及ぶ炎を放出させて魔王の巨体に思いつきり浴びせた。

魔王は数々の攻撃にひるみながらも巨体を少しねじらせ、長い尻尾をムチのように飛ばす。さらに全身から凄まじい憎悪の衝撃波を放って、戦士たちの身体に浴びせた。

「「「「「きゃあああああああああああつつつつつつ

つつつつつ！！！！！！！！！！

強烈なエネルギーを全身に受け、地面に叩きつけられる戦士たち。邪魔者を排除した魔王はすぐにまだ光が最大限に結集していないセイントとファントムに向くと、喉の奥に完全に溜め込んだ業火を八つの口から一気に発射した。

次の瞬間、溶岩以上の高熱がまともに直撃し、空中で大爆発が起こる。息を呑む人々。魔王の勝利かと思われたが、すぐにそれは杞憂きゆうに変わった。爆発が起こった空間に亀裂が大きく走り、割れるように破片が飛び散ったのである。標的を完全に倒したと思っていたヤマタノオロチもさすがにこれには魔眼を訝しげに細めた。そして無数の破片の中に存在していたのはキュアセイントとキュアファントムではなく……。

「鏡を作るのは得意なの」

「知らなかった？」

背中から翼を広げ、得意げに魔王を見下ろしていたセレネと本来の少女の姿に戻っていたディアーナだった。そう、ふたりはプリキュアやジェアンヌ、ドールキティたちが攻撃して敵の目を逸らしている間に力を合わせて空間に巨大な鏡を作りだし、魔王を惑わしたのである。状況を理解したのか、すぐさま怒り狂い、全身から凄まじい殺気を放つオロチ。

「ヤマタノオロチ！！！！」

すると、怒りに燃える魔王の背後から声が響いた。魔王は八つの首とも反応したように振り返った。するとそこにはエネルギーが極限にまで到達した剣を向けたキュアセイントとキュアファントムがいた。ふたりは狙いを魔王に定めたまま、渾身の力を込めて叫んだ。「これが、私たちの、光よ！プリキュア！メモリアル・エターナリイイツツ！！！！」

金の剣と銀の剣。ふたつの剣に込められた光が一気に放たれ、空間に電撃を飛ばしながら魔王に伸びていく。すでに最大の業火を放った魔王にはもう一度エネルギーを溜める力も時間もなかった。

黒い巨体に凄まじい光の束が直撃する。魔王は光に覆われながら身をよじらせ、咆哮した。だがやがて全身にいくつもの閃光が走る。そして次の瞬間、巨体の中から光が炸裂し、大爆発を起こした。闇の空に目がけて八つの首が凄まじい咆哮をあげる。だがそれが断末魔の声となつて、すぐに首は八つとも炎に包まれた。周囲に爆風と衝撃が走る。だが、それも束の間で人々は固唾を吞んで見守つた。立ち上がる巨大な火柱の中から空にまたたくような星々のような、煌く粒子がいくつも天に昇っていく。その数は何千、何万、何億となつて優しく笑うような声をあげながら四方八方へ散つていった。あれは、魔王の体に宿っていた全ての怨念の塊だ。それを見て、人々は理解した。魔王・ヤマタノオロチは遂に消滅したのだと。

「や・・・」

「や・・・」

「や・・・！！」

「！！！！」

大歓声をあげ、抱き合う民たち。みな満面の笑顔を見せ、喜びのあまり跳び上がった。

さらに彼らを祝福するような出来事が起きた。

今まで陽の光が差すことはなかった闇の空が晴れていき、太陽が顔を出したのである。あれは朝日だ。そして朝日が現れた瞬間、光のカケラが雨となつて街に降り注いだ。光の雨を浴びた民たちは怪我が完全に塞がっただけでなく、さらにヤマタノオロチによって崩壊した建物を一瞬で修復していった。一瞬で瓦礫と化した八ピネス城ももとの巨城へと戻った。

光の雨は八ピネスランドだけでなく、全ての世界へと注がれていく。虹の園も夕凧町も、四つ葉町も希望ヶ花市も、風都も東京も光の雨を受け、傷跡を治していった。まだ残っていた幼獣たちも雨を浴びた途端に消滅し始めた。

世界中の人々が喜びに包まれていく。みんなこの奇跡に心から感

謝した。

そしてその人々の前に、ふたりの真夜は降りていった。地に降りたふたりは身体を光に包まれると、セイントはキュアセイバーに、フアントムはキュアリベリオンへと姿を戻した。

「……セイバー！リベリオン！」

ふたりの周りにプリキュアと妖精たちが集まる。みんな笑顔だ。ふたりもその笑顔に応えるかのように微笑み、澄み切った青空を見上げた。

「終わったね、真夜」

「ああ……終わった」

ぼつりとセイバーがリベリオンに言った時だ。

リベリオンの、その黒い身体が、まるで朽木くちぎが倒れるようにゆっくりと地に伏した。

終焉（後書き）

次回、キュアリベリオン……さらば！

## 永遠

「真夜・・・？」

「「「「「キュアリベリオン！」」「」「」」」」」

セイバーはすぐさま倒れたリベリオンを抱き起こした。セイバーの後からプリキュアと妖精たち、セレーネ、ジェアンヌ、ドールキティ、マイナス七人衆が駆けつける。セイバーはリベリオンの全身から力が抜けていくのを感じて、彼女に叫んだ。

「真夜！真夜、どうしたの！？」

その時、彼女は気づいた。リベリオンの黒い衣装が透け始めているのを。そして少しずつ細かな塵に変わろうとしているのを。彼女は声を失った。

「ど・・・どうして？」

「・・・憎しみが晴れたからよ」

疑問を口にするセイバーにリベリオンが腕の中で静かに答えた。

「ヤマタノオロチの消滅とともに全ての怨念が解放された。・・・私もそう。私はずっとあなたを憎んでいた。でも、今は違う。私はもうあなたを憎んでいない。私はあなたの憎しみが生み出した存在だから、もう世界に存在する理由がなくなったのよ」

「そ・・・そんな・・・ダメ！ダメよ！行かないで！」

「・・・勘違いしないで、真夜。私は消えるんじゃない。あなたの中に帰るのよ。今までのように、私は影として・・・あなたの心の中で生き続けるわ」

「影だとか、そんなの関係ない！」

セイバーは目に涙を溜め、言い放った。

「あなたは私で・・・最初からちゃんと世界で生きて存在しているの！私たちはずっと・・・ずっと、一緒だったのよ！そして、私たちがこうして出会い、話ができるようになったのは、きっと砂粒ほどの奇跡。・・・なのに、今まで苦しんできたあなたがどうしてまた

私の中で生きなきゃいけないの！もう十分じゃない！私たちの未来は、ここから始まるの！だから・・・だから、一緒にいてよ！あなたはあなたの未来を切り開いてよ！」

うっ、うっ、と水の粒がこぼれ、リベリオンの顔に当たる。するとリベリオンは腕を少しだけ伸ばし、指先で彼女の涙を拭ぬぐった。

「本当に泣き虫ね、真夜・・・でも、私はあなたの涙、嫌いじゃない。それは、あなたが人の不幸を心から悲しみ、人の幸福を心から喜ぶ大切な気持ち・・・あなたはこれからもその気持ちをたくさんの人に授けていきなさい。私にはそれはできないから・・・」  
「でも・・・でも・・・！」

「真夜、あなたが私を名前で呼んだ時、私は本当に嬉しかったのよ。そして、あなたはこうして私のために泣いてくれている。それだけで、私は存在意義があったわ。だから・・・これは私からあなたへの最初で最後の約束。あなたのその人を思いやる優しい気持ちをこれから多くの人に注いでいって。それだけで、救われる人はたくさんいるんだから・・・さあ」

「・・・」  
セイバーはリベリオンが出した小指に自身の小指を結んだ。

泣き崩れた表情をし、嗚咽が漏れながらも小指を結んだセイバーにリベリオンが微笑みかけた瞬間、突然彼女の視界が崩壊を始めた。ああ、もう時間が来たのかと彼女は理解した。

ああ・・・真夜、私がどうしてあなたを憎み、許さなかったのか、やっと分かった・・・。

私は、ずっとあなたが羨ましかったんだ・・・。

「日常」という当たり前のものを持っているあなたが・・・。

同じ雨牙真夜なのにあなたは持っていて、私は持っていないこと

に、私はどうしても我慢できなかったんだ……。

だから、私はあなたの持つ大切なものを壊したくて、こんなバカなことを始めたんだ、きつと……。

もし……私に少しでも勇気があつて、もっと早くあなたと話ができたら、私も「日常」を持てたかな？

幸せになれた……かな？

ああ……私はいつだって、気づ……く……のが……お……そ……い……。

「真夜！……真夜」

セイバーの手にはもう口紅しかなかった。それが『グラッジ・ルージュ怨恨口紅』であるの言うまでもなかった。だがそれも彼女の手の手で黒い火に包まれ、灰となった。

彼女は手が震えた。

こんな……こんな、ちっばけなものの中に……。

ごめん……ごめんね。私が負うはずだったものを、あなたが代わりに負ってくれてたんだね。

今だけじゃなく、昔からそうだったんだね……。

もっと……もっと、早く気づいていれば……これも……これも、私の罪だ。

もうこれからは、私も一緒に背負っていくから……。

私があなたにしてやれるのは、もうこれしかないから・・・生  
きよう、これからも、ずっと・・・。

「う・・・ぐす・・・うああああ・・・っ!」

セイバーは灰を強く握り締め、号泣した。

彼女の背後に立つ者たちも目を伏せたり、唇を嚙んだり、膝を着  
いたりした。

彼女たちの声は世界中の歓声にまみれて、すぐに聞こえなくなっ  
た。

こうして史上最も強く、最も美しく、最も哀しき少女は、全ての  
世界から姿を消した。

永遠（後書き）

次回、ハピネスランド、その後。

## 感謝

それから、数日が過ぎた。

魔王・ヤマタノオロチによって破壊された街は完全復興し、人々は再び平和な日常へと戻った。

プリキュアたちがみなハピネスランドから去った今、国では自分たちを守ってくれた彼女たちの勇姿を讃えて彼女たちの像を建設する計画が進められている。そしてハピネス城では皇宮にてプリキュアとともに戦った月野葉兔羽、日沙菜るまん、キティ、ディアーナ、ファン・ハルトに称号が贈られようとしていた。もちろん、称号を直々に授けるのは現皇女、ユカ・カヤマ・ハピネスだ。

「あれ？るまんさんとファンさんは？」

キティに称号を授けた直後、ユカはさっきまで彼女の隣に跪いていたるまんとファンがいつの間になくなっていくことに気づいた。3人は顔を見合わせてくすくす笑うと、セレーネが代表して皇女に伝えた。

「ユカ様、あのふたりなら、きっと・・・」

「本当によかったの？称号もらわずに黙って行くななんて・・・？」

一軒屋根の上で佇むジェアンヌに、ファンが横から話しかけた。

ジェアンヌは屋根の上から遠くに見える巨城を見つめると、くすりと微笑した。

「いいの。だって私は怪盗。物をもらう立場じゃないもの。それに・・・平和になったこの街にもう自分がこれ以上いる必要はない。旅を始めましょ、ファン。悪魔はヤマタノオロチだけじゃなく、世界中にたくさんいるんだから。みんなチェックメイトしなきゃ」

「・・・そうだね。じゃ、行こっか！」

ジェアンヌは巨城から目を逸らすと、リボンとスカートを翻して

青い空へと高く舞った。

ハピネスランドとは違う別の国にある小さな喫茶店。

そこでマイナス七人衆は数ヶ月ぶりにに集結した。

といつても、全員が集まったわけではない。ミチ（じゅうげんじ）流禅師美智とカノン（ほつじきカノン）は法月華音は欠席し、実際に集ったのは5人となった。

「何？美智は水不足問題が低迷する国々に派遣されたのだと？」

キク（うつのみやキク）宇都宮菊はコーヒーを口にしながら少し驚いたように聞いた。ツバキ（さからツバキ）相楽椿は優雅に紅茶を味わいながら上品にうなずいた。

「ええ、調べたところ、美智さんの水は99パーセント真水と判明したそうです。それで、深刻な水不足に苦しむ国々で美智さんの力を活かしてみたらいかがとボランティアから誘いがありました・・・」  
「なるほど。見世物以外にそんな使い方があったとはな・・・」

「ちなみに華音さんは大都会のフラワーショップにて働いているそうです。華音さんは花の知識がありますし、花を咲かせる能力も一種のパフォーマンスとして活用してお店を繁盛させ、相当評判になっているようですよ」

「そうか。それはよかった。ところでおまえたちは今どうしているんだ？」

菊は椿、スズ（おりべスズ）折部鈴、ヨツバ（むらさめヨツバ）村雨四葉、アキラ（とうやつ）藤堂亜綺羅に尋ねた。

「鈴、そういえばおまえレインコート着てないな。大丈夫なのか？」

「あ・・・はい。実はあれから自分で抑えたり、発揮できるようになったの。だからあれはもう雨の日にしかな着なくなっちゃった・・・  
今、私は発電所で働いています」

「発電所？」

「はい。それで万が一停電が起きても大丈夫なように私が装置の上に立って電気を溜めているの。すごく大変だけど、職員さんたちはみんな優しく、親切にしてくれるし、私もやりがいできてとても幸せです」

「そうか・・そんな方法もあつたんだな。だが、もし誰かにいじめられてもしたら、すぐに私に連絡しろよ。私はいつでもおもえのもとに飛んでくるからな」

「はい！」

「んでもって、私は・・・」

と、亜綺羅が口を挟んだ。

「地震とかの災害の現地に派遣されて一役買っているよ」

「?・・どう役に立っているんだ？」

「ほら地震とか土砂崩れが起きると、たくさんの人が瓦礫がれきの下敷きになることがあつて、時間がかなりかかるじゃん?そこでさ、私がご自慢の触手を伸ばして瓦礫がれきを取り除いたり、まだ息がある人を手が届かない場所から引つ張り出してやつてるんだよ。この間も虫の息だった人を私が救つてさ、その人の家族も全身触手まみれの私に凄く感謝していた。あんなに気持ちよかったのは本当にひさしぶりだったよ」

「私は、あいかわらず発明を続けていますよ。人の役に立つ発明をね・・・」

亜綺羅が言い終わると同時に今度は四葉が話した。

「キボウちゃんも各国の施設で子供やお年寄りの方たちを懸命に世話をして役に立っているようです。今度は私を妬む輩やからが訪ねても、私以外、しかも生体認証をしないと細工できないようにプログラムしましたから、もうキボウちゃんがおかしくなることはないでしょう」

「そして私は・・・」

最後に椿が口を開いた。

「不発弾の撤去に能力を役立たせてますよ」

「不発弾？」

「ええ。世界の中には長い戦争が終わっても不発弾の被害に怯える国がありましてね、しかし、不発弾の撤去は少しでも衝撃を与えたら途端に爆発を起こすこともありますから、問題が深刻化している

のです。そこで私の力で不発弾をクリスタルの中に封じ込めましてね、安全な場所に移してから爆発させるといふ案が採用されたのです。私のクリスタルは大抵の衝撃を受けても、封じ込めたものには震動ひとつすら伝わりませんからね」

「だが、大丈夫なのか？」

「私の力で多くの人の命が救えるのなら、私はやりますよ。ま、その分、お茶の時間が減りましたがね・・・」

「そうか。みな見つけたんだな。自分の生きる道を・・・」

「そういえば、菊さんは昔のご主人に会いに行つたそうですね。あれからどうなつたのです？お嫌でしたら、無理にとは言いませんが・・・」

「あ・・・ああ、主はもう住んでいなかったよ。すでに他界し、今は主の甥が暮らしていた」

「・・・申し訳ございません」

「謝ることはない。むしろ私はやはり行ってよかったと思っている」「え？」

「甥の方は実は私のことを知っていてな、聞いたところ、主は生前私が帰ってくるのをずっと待っていたらしい。奥様が狂言を起こして私を罫に嵌めたことはバレ、数週間もしないうちに離婚したそうだ。甥の方は私の能力を主から聞いたうえで、もし私が帰ってきたら、ともに暮らしてほしいと主からの伝言を受け取っていたよ」

「それでは・・・」

「ああ。今私は、その方を新しい主として騎士ナイトとして守っている・・・」

「よかったですね」

「ああ・・・それにしても、不思議なものだな」

ふと、菊は天井を見上げた。

「あんなにも死にたがっていた私たちが、こうして希望を見つけ、『いま現在』を懸命に生きている・・・これもプリキュアのおかげだろうが、もとを辿れば・・・」

「私らを拾ってくれたキュアリベリオンのおかげ・・・」

亜綺羅が言い、菊は首を縦に振った。すると四葉が少し考えてから口を開いた。

「ちよっと思っただんですが、キュアリベリオンは本当に全ての世界を破壊して私たちの願望を叶えるつもりはあっただんでしょっか・・・？」

「え？どういふこと？」

鈴が聞くと、四葉は続けた。

「私思っんです。いくらヤマタノオロチの邪悪なエネルギー生命体が封印されているからといって、皇女殿下のペンダントを奪い、6時6分6秒の皆既月食を待つなんてそんな回りくどいことしなくても、自らが怨念の集合体であるキュアリベリオンの圧倒的な闇の力を最大限に発揮すれば、あっという間に世界を滅亡させることが容易くできたんじゃないか・・・と」

「・・・確かに」

椿がうなずいた。

「なのに、キュアリベリオンはそうしなかった。・・・もしかしたら、キュアリベリオンはそう行動を起こすことで自らの暴走をもうひとりの自分、すなわちキュアセイバーに止めてもらい、体の中を巡っていた怨念から解放されたかったのではないのでしょうか？そして・・・希望を見つけて、もう一度世界で生きていけるようにするために願望を叶えてあげると嘘をついて死のうと考えていた私たちを僕にし、プリキュアたちと戦わせたのではないのでしょうか？希望の存在であるプリキュアなら、きっと私たちを救ってくれると信じて・・・」

「・・・」

全員沈黙した。

壁に取り付けられた古時計の、秒針を刻む音と他の客からメニューを聞き取る店員の声だけが聞こえた。

「ま、言えることはひとつだけだな・・・」

しばらくして、菊が口を開いた。全員彼女に目を向けた。

「キュアリベリオンの中には、きつと狂気と正気がいつも巡り回っていたんだよ。どっちにしろ、私たちがキュアリベリオンに救われたのは事実なんだ。キュアリベリオンが世界から消えた今、私たちがあの人のためにできるのはただひとつ、私たちの手で、世界を少しでも変えられるようにすることだ。それが、キュアリベリオンへの恩返しにもなる。・・・そうだろ？」

「・・・うん！」「」「」

みんな笑顔で応えた。

光では、正義では、救えない命がある。

逆に、闇で、悪で救われる命もある。

世の中は不条理で釣り合いが取れている。

しかし、それでも自身が救われたのなら、私たちは感謝し、生きていかなければならない。

それだけが、自分にできるたったひとつのことだから。

感謝（後書き）

次回、最終回！

## 新章

ゆるゆると、透き通った水が流れる川の畔の草原にてプリキュアたちは全員座り込んでいた。

数日前まで全ての世界が滅亡に向かっていたとは到底信じられないくらい空は青く、聡明に澄み切っている。つぼみとえりかは空を眺めながら大きくため息を吐いた。

「あゝあゝ・・真夜さん帰っちゃったね、ニューヨークに」

「そう・・・ですね」

「せっかくまた会えたのに、もう少し話がしたかったなあゝ」

「仕方・・ないですよ。真夜さんはわざわざニューヨークから飛んで来たんですし、真夜さんには真夜さんの夢があるんですから・・」

「そりゃそうだけど・・あゝあゝ、結局交流のための山登りもパーになっちゃったし、散々だよ。あんなに計画を立てたのに・・」

「だったらえりかさん、今度は別のことで交流の計画を立てたらどうかしら？」

するとほのかが口を挟んだ。ふたりは彼女に振り向いた。

「別のこと？どういうことですか、ほのかさん？」

「そのままの意味よ。たとえば、えりかさんはファッションの才能があるのよね？だったら、その才能を活かして、みんなでファッションショーを開催したらどうかしら？」

瞬間にえりかの両目がキラキラと輝きだした。

「お・・おおおおおおっ！いい！それいいよ、ほのかさん！そうだよ。今度はみんなでファッションショーをやるうよ！」

「じゃあモデルが必要ね。この完璧な私が特別に出て、会場を盛り上げてあげるわ」

美希が髪をさらして、華麗に立ち振る舞いをするよと、

「ええっつ、ミキたんばかりズルイよあゝ。そうだ！私たちもファッションショーに出ようよ、ブッキー！せっな！」

「わ、私もなの、ラブちゃん？」

「いいじゃんいいじゃん！来てくれた人に幸せゲットしてもらおうよ！」

「面白そうね。ラブがそんなに言うのなら私、精一杯頑張ってみるわ！」

「ラブさんが出るなら私も私も！」

「のぞみには無理よ」

「なんでよ、くるみい〜？」

「あなたが出たら、もうガツチガチに緊張してドジ踏んでシヨーを台無しにしかねないじゃない。ここは頭脳明晰、容姿端麗の私とかれんが出るべきよ」

「え？私もなの、くるみ？」

「そうよ。かれんならこういう大役はぴったりよ。ふたりで出ましょ」

「わ・・私はそういう柄じゃないけれど、まあ考えてみるわ」  
「でしたら、私は・・・」

うららは手を合わせて目を閉じ、想像の世界へ入った。

「今度発売される新曲を歌ったり踊ったりして披露したいです！」

「いや、それじゃライブになっちゃうでしょ」

「じゃあ私はおとぎ話に出てきそうな衣装を着たいわ。たとえば私が前に執筆した『海賊ハリケーン』に出てくる海賊の船長みたいな服装をして、来場者のみなさんに剣を向けて『いざ、魔海の向こうに眠る金銀財宝を求めて！』って台詞を・・・」

「・・・こまちさん、演劇じゃないんですから」

りんがふたりにツツコミを入れたのを見て、つぼみは「あははは・・・」と呆れ笑いを浮かべた。

「えりか・・・、なんだか凄くなりそうな予感がします・・・」

「そうだね。でも燃えてきたよ！」

「えりか、ボクも出ていいかな？」

「もちろんだよ、いつき。とびつきりかわいいのを作ってあげるか

ら！そうだ、ゆりさんも出てください！」

「わ、私も？」

「ゆりさん美人だし、パリのファッションショーに出た時も評判よかったですか。もも姉も誘ってみますから、ぜひ！」

「ま、まあ・・・ももかが出るのなら、考えておくわ」

「だけど、どこで開催するんですか？」

ひかりが聞くと、咲が答えた。

「いい所があるよ。ここから少し遠いんだけどさ、今度大きなショッピングモールができるんだって。そこで開催できるように頼んでみようよ」

なぎさが親指を立てて、はにかんだ。

「それグッドアイデアだよ、咲。お客さんいっぱい来るだろうし、みんなで盛り上げようよ！」

「えりかさん、私もファッションのデザインを描いてもいいかしら？」

「もっちろんだよ、舞さん！絵のうまい舞さんなら、きっと凄いデザインができるよ！」

「それじゃあ決まりですね！みなさんで力を合わせてファッションショーを成功させましょう！」

「…………おーっ！！！！…………」

つぼみの弾んだ声にプリキュアたちは全員笑顔で青空に向け、拳を高々と振り上げた。

凄まじい邪気にまみれた、深く冷たい暗黒の闇。

その中に8人の影があった。

「ふ・・・ははははははははっ！キュアリベリオンが遂に死んだそうだ」

「何？それは確かなのか？魔女」

「ムシバーン、私を疑うか？さきほど私のかわいい僕どもが事実を確認し、戻ってきたわ」



## エピソード

ニューヨーク

「真夜ちゃん、こっちロモ！」

ロモモが宙を急いで移動しながら、真夜を振り返って叫んだ。真夜は両足を懸命に動かして走った。すると、ふたりの行く先に轟音とともに爆発が起こり、炎と煙が空に高く立ち上った。人々の悲鳴が聞こえる。ふたりは急いで停止し、目の前の光景を見据えた。

「一体、何が・・・？」

「真夜ちゃん、凄く嫌な気配がするロモ！」

突然、耳をつんざくような咆哮が聞こえ、巨大な黒い何かが煙の中から姿を現す。それは両目が釣り上がり、口からギラギラと牙を光らせていた。ロモモはそれを指差した。

「真夜ちゃん、あれロモ！あれが突然空から降ってきたんだロモ！」

「どうやら、新たな敵のようね。行くよ、ロモモ！」

「オツケーロモ！」

ロモモはすぐさまペンダントに姿を変え、真夜はそれを手にして人差し指で弾き、頭上に掲げた。

まばゆく、優しい光の中で真夜は衣装が変わり、背中から六枚の翅はねを生やし、地上に降臨する。

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！！」

変身した真夜は両手にリリィシンバルではなく、剣を召喚した。右手には白銀に煌く剣。左手には黄金に輝く剣。真夜は金の剣に少しだけ視線を向けた。

「行くよ・・・真夜！」

彼女は視線を前方の敵に移すと、ふたつの剣を構えて地を蹴り、走り出した。

かくして自分の過去に決着を着けた雨牙真夜という少女の戦いは、  
新たなる章に突入<sup>ステージ</sup>していく。

それは永遠に繋がり続ける「プリキュア」という、宿命を背負った大いなる物語。

そこには幾多の苦しみと悲しみが待ち受けているだろう。

だが、どんなに苦しくても、どんなに悲しくても、伝説の戦士・プリキュアは立ち止まらない。

どんなことがあつたとしても、その胸に守りたいものがある限り、絶望を乗り越えていけるのだから。

仲間たちとともに希望を武器にして走り続ける彼女の戦いはまだ、始まったばかりだ。

(完)

## キャラクター紹介？

### 伝説の勇士

#### キュアセイント

キュアセイバーが伝説のシルバーソードに選ばれ、そしてキュアアンジェ含めた人々の想いが込められたミラクルライトの光を受けてさらに変身を遂げた最強形態。攻撃及びスピードに優れ、一振りですりゃキュアたちの必殺技もものとしなかつた強敵・ヤマタノオロチをもひるませる巨大な太刀風を起こし、キュアファントムと刀身を重ねて撃つ「プリキュア・メモリアル・エターナリイ」が最終必殺技。これは絶大な闇の力を持つヤマタノオロチを一撃で倒すだけでなく、オロチの体の中に結集した数々の怨念を絶望のエネルギーから解放する浄化技でもあり、キュアファントムと力を合わせることのできるパワーの発揮が最大限にまで増幅可能となる。名乗り口上が示すとおり、人々の未来を繋ぐ希望を肩に乗せて降臨した戦士である。

#### キュアファントム

キュアリベリオンが伝説のゴールドソードに選ばれ、そしてキュアアンジェ含めた人々の想いが込められたミラクルライトの光を受けてさらに変身を遂げた最強形態。攻撃及びスピードに優れ、一振りですりゃキュアたちの必殺技もものとしなかつた強敵・ヤマタノオロチをもひるませる巨大な太刀風を起こし、キュアセイントと刀身を重ねて撃つ「プリキュア・メモリアル・エターナリイ」が最終必殺技。これは絶大な闇の力を持つヤマタノオロチを一撃で倒すだけでなく、オロチの体の中に結集した数々の怨念を絶望のエネルギーか

ら解放する浄化技でもあり、キュアセイントと力を合わせることでパワーの発揮が最大限にまで増幅可能となる。名乗り口上が示すとおり、全ての世界を紡ぐ希望を胸に刻んで降臨した戦士である。

## 暗黒の魔王

### ヤマタノオロチ

約400年前に地上に現れ、全ての世界を破滅に追い込んだという恐怖の邪神。初めて現れた当時はキュアアンジェ含めて複数存在していたプリキュアたちによって激戦の末に敗れ、エネルギー生命体がエメラルドグリーンのペンダントに封印される。それはハピネスランドの王家に代々お守りとして受け継がれていたが、現皇女、ユカ・カヤマ・ハピネスの代に突如襲撃を仕掛け、国を支配したキュアリベリオンに奪われ、彼女の召喚術によって遂に復活を遂げる。巨体に宿った数多あまたの怨念をエネルギーとしており、それは八つの首から熱線を放つ他に体から両翼を生やした幼獣を何億も生み出した。り、全身から衝撃を発したりすることにも使用される。プリキュアたちの必殺技が炸裂してもものとしめない巨体と怨念と絶望にまみれた強大な闇の力で再び全世界を滅亡に追い詰める。

## ゲスト

### 北条響ノキュアメロディ

キュアリベリオンとの決着に急ぐキュアセイバーが行く先を阻む凶犬たちに苦戦している時に突如乱入してきたプリキュアで、2011年2月から絶賛放送中の『スイートプリキュア』の主人公。全

世界の危機を感じ取ったハミイとフェアリートーンの力でリベリオン城に突然送り込まれるが、次元の違いによってあまり体が保てないフェアリートーンによってすぐにもこの世界に戻るのを余儀なくされる。そのため本文ではキュアリズムとともに凶犬を相手に戦い、合体技「プリキュア・パッションートハーモニー」を披露するのみの活躍となった。

### 南野奏／キュアリズム

キュアリベリオンとの決着に急ぐキュアセイバーが行く先を阻む凶犬たちに苦戦している時に突如乱入してきたプリキュアで、2011年2月から絶賛放送中の『スイートプリキュア』の主人公。世界の危機を感じ取ったハミイとフェアリートーンの手でリベリオン城に突然送り込まれるが、次元の違いによってあまり体が保てないフェアリートーンによってすぐにもこの世界に戻るのを余儀なくされる。そのため本文ではキュアメロディとともに凶犬を相手に戦い、合体技「プリキュア・パッションートハーモニー」を披露するのみの活躍となった。

### ハミイ

キュアリベリオンとの決着に急ぐキュアセイバーが行く先を阻む凶犬たちに苦戦している時に突如乱入してきた外見が猫に酷似した生き物。その正体は幸せの音楽の国・メイジャーランドにて暮らす歌の妖精であり、2011年2月から絶賛放送中の『スイートプリキュア』のキャラクター。全世界の危機を感じ、フェアリートーンの手を借りて響と奏とともにリベリオン城に転送するが、次元の違いによってあまり体が保てないというフェアリートーンの話聞き、

やむをえずもとの世界にすぐ戻ることになる。しかし、結果的に彼女たちの乱入がキュアセイバーの危機を救い、活躍した。

#### 光明寺御子／キュアエルス

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与える側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、選ばれた6人の中では最も戦闘力が優れ、リーダー格にも入る。「プリキュア・ライジング・クラッシュ」という技の他、専用武器・ライトニングロッドを使用した必殺技「プリキュア・ライトニング・スラッシュャー」も放つ。もともとは夢原信者氏が生み出した存在で「プリキュアオールスターズ」伝説の戦士の日常」にて初登場。続編「」新たな日常と新たな戦い」でも活躍し、外伝となった「キュアエルス・ビギンズナイト」では主役を射止めた。

#### 神名遙／キュアテンペスト

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与える側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、風と雷の力を持つ。同様に炎と氷の力を持つキュアブレイズとのコンビで戦い、「プリキュア・テンペストブレイク」という技の他、専用武器・テンペストスタッフを使用した必殺技「プリキュア・テンペストライク」「プリキュア・テンペストストリーム」も放つ。またキュアブレイズとの融合光線「プリキュア・デュアルブレスター」も発射する。もともとはGASH氏が生み出した存在でキュアエルスと同様に「」伝説の戦士の日常」で初登場。続編「」新たな日常と新たな戦い」でも活躍し、外伝「ダブ

ルフォースプリキュア！」ではキュアブレイズともども主役となっている。

### 江神麗華ノキュアブレイズ

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与える側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、炎と氷の力を持つ。同様に風と雷の力を持つキュアテンペストとのコンビで戦い、「プリキュア・ブレイズスマッシュ」という技の他、専用武器・ブレイズソードを使用した必殺技「プリキュア・ブレイズスラッシュ」「プリキュア・ブレイズスクリーン」も放つ。またキュアテンペストとの融合光線「プリキュア・デュアルブレスター」も発射する。もともとはGASH氏が生み出した存在でキュアエルスと同様に「伝説の戦士の日常」で初登場。続編「新たな日常と新たな戦い」でも活躍し、外伝「ダブルフォースプリキュア！」ではキュアテンペストともども主役となっている。

### 鏡莉緒<sup>かがみりお</sup>ノキュアミラージュ

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与える側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、鏡の属性を持つ。「プリキュア・ミラージュ・フラメント」という技の他、専用武器・ジュエルミラーを使用した必殺技「プリキュア・ミラージュ・レイ」も放つ。もともとはABC氏が生み出した存在で、本文が初登場となる。

岬累ノキュアバースト

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与え、側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、炎の属性を持つ。「プリキュア・バースト・クラッシュ」「プリキュア・バースト・ドラゴン」という技の他、専用武器・バーストファンを使用した必殺技「プリキュア・バースト・ストーム」も放つ。もともとはABC氏が生み出した存在で、本文が初登場となる。

立花沙羅ノキュアスピリット

伝説の剣が眠る神殿に到着したキュアブロッサムたちに試練を与え、側としてキュアアンジェに選ばれた過去に世界を守ったプリキュアのひとりで、キュアエルスに次いで格闘技に優れている。専用武器・フィシカルグローブを使用した「プリキュア・スピリット・ウインド」が必殺技。彼女のみが桔梗が生み出した存在で、本文が初登場である。

鳴海莊吉ノ仮面ライダースカル

言わずもがな前作「仮面ライダースカルVSキュアムーンライト」の主人公。本編でも「仮面ライダーX仮面ライダーオーズ&W feat.スカル MOVIE大戦CORE」の「仮面ライダースカルメッセージforW」にて主演を果たした。本文では幻影(?)として再登場。再び絶望に伏していた真夜に助言をし、彼女をもう一度プリキュアに復活させた。

## キュアアンジェ

初めて世界に降臨し、多くの仲間とともにヤマタノオロチを封印した伝説の戦士で、剣が眠る天空の神殿の守護者。本編では『ハートキャッチプリキュア！ 花の都でファッションショー…ですか！？』で初登場。本文では剣を求めに来たキュアブロッサムたちに過去世界を守った6人のプリキュアと戦わせる試練を与え、さらに人々の想いが込められたミラクルライトの光を受けたキュアセイバーとキュアリオンに力を授け、ふたりをキュアセイントとキュアファントムにパワーアップさせた。

## キャラクター紹介？（後書き）

これにて本編は完結となります。本編が完結できたのはみなさんの応援のおかげです。本当に感謝してもし尽くせません。ありがとうございます。

本編はこれで完結しましたが、私桔梗はもう少し連載を続け、本編に登場した3人の外伝スピンオフを書こうと考えています。

第一弾は、キュアリベリオン。

第二弾は、ゲストとしてちらとだけ登場したあの男。

第三弾は、真夜。

なるべく早く構成を完成させて執筆できるようにします。お楽しみに。

外伝 ZERO? \ Revenge of Core Rebellion \

あなたは死神リベリオンの真実をもう一度知る。

荒涼とした大地を私は歩いた。

右を見ても、左を見ても、何も無い。

ここはどこだろう・・・なぜ私はこんな場所をたったひとり歩いて  
いるのだろうか・・・。

・・・全く分からなかった。

私は自分が何者なのかを知らない。どこで生まれ、そしてどこから来たのか・・・気がついたら、私はここにいた。私はいわば記憶喪失というやつなのかもしれない。そんな漫画か映画みたいなことにまさか自分がその犠牲になるとは思いもしなかったけれど・・・。私が持っているのは、ただひとつだけ覚えている名前と着ているこの黒い制服と、どうしてか真っ赤に染まっているこの右目だけだ。でも名前も本当に自分のものなのかは自信がないし、なぜ右目がこんなに赤く染まっているのか全然分からない。一度鏡で自分の顔を見た時は驚いた。そしてすぐに目を逸らした。これは怪我か何かの病気なのかと思ったが、それにしてもほとんど痛みを感じたことはない。仮に怪我か病気だとしても、今の私には病院に行くお金もない。

だからこうしてあてもなく彷徨い続けているのだ。でもこれもいつまで続くか・・・。最後には名前以外に何も思い出せず、倒れて死を待つだけかもしれない。私がそう思った時だ。

突然、急に胸が苦しくなった。いや、これは「苦しい」というよりも「痛い」といったほうが正しい。まるで何かが私の中で暴れているようだ。なんだ、これは。私は地に倒れて身体を大きくねじり、悲鳴をあげた。

思・・・イ・・・出せ。

痛みにうめく私の中で誰かの囁くような声が聞こえた。

でも私は、その声を聞いた直後に意識を失った。

「気がつきましたか？よかった・・・」

誰かの声が降ってきて、私は目が覚めた。目の前には頭までフードを被り、首に小さな口ザリオを掛けた修道僧の女の人が微笑みかけていた。年齢は私より二つか三つくらい年上。シスターというのか、これは？私は上体を起こし、周囲を見回した。真っ白に綺麗に塗装された小さな部屋だった。

「ここ・・・は？」

「ここは村の教会にある私の部屋ですよ。倒れていたあなたを子供たちが見つけてくれたんです」

「そう・・・」

「名前を伺ってよろしいでしょうか？」

「私は・・・」

私は唯一覚えている名前を口に出した。

「雨牙・・・真夜。それ以外は・・・何も覚えていない」

「記憶喪失なのですね・・・」

シスターは哀れむような瞳で私を見たが、すぐに笑顔になって私に言った。

「でしたら、どうでしょう？記憶が戻るまでここにお住みになっては？」

「え？でも、迷惑じゃ・・・」

「『汝、何人なにひとにおいても人を救いたまえ』・・・これが私が習った神からの教えです。つまり、どんな人であろうともその人が困っているのなら助けてあげなさいという意味ですよ。それにここは結構広くて、部屋がいくつもあるのです。ひとつくらい貸してあげたところで何も心配はいりません」

「はあ・・・」

「記憶喪失のあなたと私がこうして出会えたのもきつと神様からのお導きです。ゆっくりしてってください。慌てず、焦らずに、少

しずつ思い出していけば、きっと全ての記憶が蘇ります」

「・・・ありがとう、シスター」

こうして私はこの教会に暮らすことになった。

この村での暮らしは毎日が充実していた。村の人々は見ず知らずで記憶のない私にも優しくしてくれた。子供たちもいつも私に駆け寄って来てはいつも遊ぼう遊ぼうとまぶしい笑顔で接してくれた。こんな村で私は自分自身さえもいつしか笑顔を見せるようになり、幸せを感じるようになっていた。

そう、幸せだったんだ。私の唯一にしてあまりにも短かった幸福な時間・・・。

「シスター、これは？」

「見ての通り、眼帯よ。真夜さんはいい人だけど、さすがにその右目は怖いって、子供たちが持ってきてくれたのよ。付けてくれないかしら？」

「はあ・・・」

私はシスターに言われたとおり、黒い眼帯で真紅に染まった右目を隠してみた。そしてシスターの手鏡を覗いてみた。

「・・・なんだか、海賊みたいですね」

「でも、さつきよりは怖くなくなっただし、それになかなか似合っているわよ」

「はあ・・・それ褒めているんですか？」

でも確かに少しは怖くなくなっていた。眼帯をした右目に私が手をかざした瞬間。

轟音と激震。聖堂が大きく揺れ、天井から破片が何枚も散った。

「何!？」

「あ、真夜さん!」

私はシスターの声を振り切り、すぐに外へ飛び出した。そして目の前の光景に呆然となった。

「何・・・これ？」

私の前には家々が燃え上がり、黒煙を噴いていた。飛び交う村人の悲鳴。子供たちの何人かが私に泣きながら駆け寄って、身体に抱きついた。

「み・・・みんな、一体何があつたの!？」

子供たちは答えなかった。あまりにもその恐怖で震え、私を離さなかつた。でも私の質問の答えはすぐにその姿を現した。

再び轟音が響く。そして、私の前に巨大な足が現れた。そして巨大な影が私の頭上を覆い、私はハッと顔を上げた。

そこにいたのは、全長5メートルもの黒い巨体を持つ悪魔だつた。悪魔は一つ目をしており、手に棍棒を持ち、その口からは数本もの長い牙が殺気を放つていた。私は瞬間に悲鳴をあげ、身体が震えだした。悪魔は私と子供たちを見据えると、少しだけ腰を低くし、言葉を話した。

「そおのちつこいのを俺によおこせえつ！食うつてやる・・・！」

私は悪魔の言葉に身体が震えながらも精一杯の力で拒否を伝えた。「ダ・・・ダメよ！子供たちは絶対に渡さない！」

すると悪魔は棍棒を持った手を大きく振り上げ、空に咆哮した。「うがあああああああつつ！よおこせえつ！俺はあ眠りから覚めたばかりで腹が減つてるんだあつ！よおこさないんぬうらおまえを食うつてやるうっ！」

「ダメです!!!」

私の背後から叫ぶ声が聞こえ、私は振り向いた。シスターが恐怖に身体を震わせながらも毅然と立っていた。

「真夜さんを食べないでください。その人はまだ記憶が戻っていないです。・・・私が生贄になりますから！」

「シスター！あなた一体何を!？」

シスターは私の横に立つと、にこりと微笑んだ。

「真夜さん、悪魔が私を食べている隙にあなたは子供たちと一緒に逃げてください。子供たちをお願いします・・・」

「そ・・・そんな!？」

愕然とする私から目を離し、シスターは悪魔の前に出ると、ロザリオを両手で握り締めながら目を閉じた。自ら進み出したシスターに悪魔は舌なめずりをして、鋭く爪の生えたその腕を伸ばした。

「あ・・・ああ・・・あ・・・!」

私はそれを目の前で見ていながら、少しも身体が動かなかった。

このままじゃ・・・このままじゃ、シスターが食べられてしまう・・・。

記憶のない私を助けてくれたシスターを私は見殺しにしてしまう。でもあの悪魔に私は何もできない・・・。

力が・・・力がほしい。あの悪魔にさえ勝てる力を・・・!

どくんっ・・・!

その時、心臓が大きく跳ね上がった。耳にうるさいほどの大きな鼓動の音。

何・・・何っ!?

私は思わず子供たちから離れ、両耳を手で抑えた。そして、声が再び響いた。

思イ出セ。オマエハカヲ持ッテイル。世界ヲ地獄へ変エルホドノカヲ・・・。

何?何を言っているの?あなたは誰なの!?

我々ハ如何ナル時モオマエノ中ニイタ。サア、全テヲ思イ出セ。

自分ガ何者カヲ・・・!

「!?!」

次の瞬間、雷に打たれたかのような衝撃が私の中で走った。

圧倒的かつ、膨大な量の情報が頭の中に入って、いや、蘇ってくる。

そしてひとりの少女の姿が私の中に浮かび上がった。私と同じ顔をしている。その娘は・・・。

「ああ・・・ああ・・・そうだ、私は・・・！」

膨大な情報から真実を取り戻した私は口角を上げて邪悪に微笑し、片腕を掲げると、その言葉を叫んだ。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

漆黒の炎が私の全てを包み込む。私は炎の中で身を任せた。黒の制服が邪悪な闇を象徴する漆黒の衣装に変わる。私は黒の炎を消し去り、驚愕している村人と悪魔、そしてシスターの前に静かに着地した。

「ま・・・真夜さん？」

あと少して悪魔に身体を？まれそうだったシスターが変身を遂げた私を振り返る。私はシスターに目をくれずに悪魔に視線を定めた。そして。

「全てを無へ誘う漆黒の堕天使、キュアリベリオン！」

とお決まりの名乗り口上を口に出すと、即、瞬間移動で悪魔の眼前に現れ、その醜い顔を蹴飛ばした。

「ぐうおおおおおおおおおつっつ！！！！！」

地面を滑るように飛ばされていく悪魔の滑稽な姿に私は少しだけ嘲笑する。それから私は瞬間移動で悪魔を惑わし、次々にその巨体を殴り、蹴り、波動で<sup>なぶ</sup>飛ばしていった。楽しい。すごく楽しい。私はいつの間にか快感に溺れていった。悪魔は棍棒をメチャクチャに振り回したけど、そんなノロマな動きで私を倒せない。私は瞬間に巨体の背後に移動して悪魔の背中に両手をかざした。

「地獄を少しだけ味わいなさい。プリキュア！リベリオン・ヘル・ファイア！！！」

赤黒の業火が巨体を一瞬にして包み込む。悪魔は絶叫をあげ、炎の中で暴れたけど、私の炎はそう簡単に消えるほどヤワじゃない。その醜い体が灰か塵になるのもあとわずかだ。私はもう一度嘲笑した。すると悪魔は業火の中から巨大な腕を素早く伸ばし、私の身体を強く？んだ。

「！・・・ちっ、小癩な真似を！」

「おおおまえも一緒だあああつ！」

「・・・悪いわね。あなたが悪魔なら、私は死神。死神が死ぬなんて話は存在しないのよ。それにあなたみたいな醜いやつと心中なんてまっぴら御免よ。・・・本来なら、あなたには使う価値なんてないけれど、特別よ。光栄に思いなさい」

そして私は変身しても装着していた眼帯を取り、真紅の右目でひとつしかない悪魔の魔眼を覗き込んだ。その途端、悪魔の頭がぐらくらし始め、私を？んでいた手の力が徐々にゆるんだのを感じた。私は手から逃れると、魔眼を見据えたまま、一言だけ伝えた。

「消え失せなさい」

途端に悪魔はおぞましい咆哮をあげ、業火の中で塵となつていった。でも、業火はその塵までも燃え尽くし、天に昇るようにしてようやく消えた。

私は周囲を振り返った。村人は怪我を負った者はいたが、死者は出なかったようだ。でも、もうその目は私を「雨牙真夜」として見ていなかった。目の前で悪魔をなぶり殺した私を「死神」と認識して恐怖に怯える目だった。シスターも子供たちも私から遠ざかって色を失った瞳で見つめていた。

もう・・・潮時か。神は神でも死神まで受け入れてはくれないわよね。

私は彼らをそのまま冷めた目で見据え、眼帯を右目に付けると、また一言だけ伝えた。

「じゃあね・・・」

私は彼らに背を向け、歩き出した。後ろから、私の名を叫ぶシスターの声が聞こえたような気がしたけれど、私はもう振り返らなかった。

私の中に現れるのはただ一人。全ての憎悪をマイナス忘れ、もう一度幸せになろうとしているもうひとりの自分。私は憎しみを込めて、その名を呼んだ。

「待ってなさいよ・・・真夜」

~~~~~

私はスペースホークAの船内で目を覚ました。

すぐそばには私がラキ火山から封印を解除した大鎌「ウィッシュ・ハント希望狩」がある。

随分と、懐かしい夢を見たものね。。。

私が片手で眼帯をした右目をかざすと、スペースホークが声をかけた。

「オジヨウサマ、ドウカナサレマシタカ？カナリオツカレノヨウデシタガ・・・」

「・・・べつに、ちょっと眠っていただけよ。それよりお嬢様と呼ぶのはやめてと何回言えば分かるの？吐き気がすると言ったはずよ」

「・・・モウシワケゴザイマセン」

「それよりハピネスランドは？」

「マモナクトウチャクイタシマス」

「そう。国内に潜入していたキクが皇女殿下の首に掛かっていたと連絡してきたけど、本物かしら？」

「だけど、もう手段は選べない。」

「これが私から真夜に贈る最後の「想い」なんだ。」

これから真夜には私が味わってきた地獄を伝えなければ、私がこキョアリペリオンうして再び死神として復活できた意味がない。

そう。私の復讐は、ここから始まるの。

私は窓から外を覗いた。

巨城の塔が次第に見えてきた。

外伝 ZERO? \ Revenge of Corebellion \

次回は、あの男。

気がつけば、俺はまばゆいばかりの光の中にいた。

仕事着の白いスーツをまとい、おまけに翔太郎に渡したはずの山折帽まで俺の頭に確かに被せられてある。ご丁寧なことには俺が“運命の子”を助ける際に受けた傷までもが再現されていた。

こうして光の中に立っている、という現実リアルに俺は少し戸惑う。

当然だ。なぜなら、俺は、もう……。

ふと手に何かを握り締めていることに気づき、俺はそれに目を移す。ロストドライバーと黒のガイアメモリがそこに間違いなく存在あった。

なぜこんなものが俺の手に……？

訳が分からず、俺がますます混乱していると、声が聞こえた。

誰だ？おまえが俺を蘇らせたのか？

だが声の主は俺の問いに答えなかった。ただ、声が俺に伝えるのはひとつだけ。……キュアセイバーというプリキュアを助けてほしい、ということだけだ。

プリキュア……。懐かしい言葉だ。

つい、あの娘このことを思い出す。今、どこで何をしているのだろうか……。

すると声は少しばかり感傷に浸っていた俺に次の言葉をかけ、俺を一瞬にして現実リアルに呼び戻す。

何？あの娘こも来ているだと？しかも他のプリキュアと一緒に？どういうことだ……。今何が起きようとしているんだ？説明しろ。

すると声は分かったと答え、俺に全てを話した。

そうか……。そんなことが。

一息を吐き、俺は全てを理解した。そして声の主に聞いた。

それで、俺にそのキュアセイバーとかいうプリキュアを救ってくれ、と？それは依頼なのか？

声はイエスと答えた。

・・・なら、しょうがねえな。

探偵たる者、依頼を受けた以上、動かなけりやならない。それが常識であり、俺の仕事だ。

もつとも、これが最後の仕事になるかもしれん。だが絶望に瀕したレディをほうっておくわけにもいかねえ。

レディを泣かすことはハードボイルドにとつて、何よりも重罪だ。俺は決断し、依頼を受けることを伝えたと、光が拡散するかのように弾け、次の瞬間、俺は全く別の空間に連れて行かれた。

べつに驚きもしない。

別世界には一度来たことがある。それに何よりも俺は・・・。

いや、これ以上の無駄口はやめよう。今は引き受けた依頼を果たすのみ。

俺はどこか皇宮のような、だが薄暗い長い廊下を靴音を響かせながら歩き出した。

野獣の唸る声が聞こえ、俺は足を止めた。どこから声がするのか、俺は耳をすまし、声のする方向について足早になる。そして俺は暗闇の中で再び足を止め、そこから向こうを覗いてみた。

狼？いや、凶犬が五匹、床に倒れている黒髪の少女の周りをうろついている。少女のそばには白い妖精が横たわっていた。俺は一目であの少女が依頼人が言っていたキュアセイバーとかいうプリキュアだなと悟った。そして、過去の自分・・・キュアリベリオンにこっぴどくやられたのだらうということも。

凶犬の一匹が彼女の相棒である妖精にそつと牙を近づけている。

だが少女は動かない。このままだと彼女はさらなる絶望の淵へ追い込まれてしまう。

全く、あの娘とは違い、こっちは手を焼かせる半熟だな。

俺は即座にロストドライバーを腰に当て、黒のガイアメモリ「スカルメモリ」を挿入した。

『SKULL!』  
「変身・・・」

疾風が巻き起こり、俺は骸骨を模した戦士、仮面ライダースカルに姿を変える。そしてすぐに拳銃を向け、撃鉄音と同時に一匹を地獄に送り込んだ。俺は靴音を響かせ、帽子に手を当てながら暗闇から出、凶犬たちの前にその姿を現す。仲間を地獄に送られ、殺意を向けた者どもが即座に牙と爪を振り出して跳びかかってきたが、俺は瞬時に二発、三発、四発と銃弾をその体に叩き込み、そいつらも仲間のもとへ飛ばしてやると、

『SKULL! MAXIMUM DRIVE!』

最後の一匹は蹴りを浴びせて地獄まで吹っ飛ばした。

そして、俺は倒れている少女の前まで歩き、彼女が薄く目を開いていることに気づく。俺は帽子を取り、髑髏の部分だけを解除すると、本来の顔をさらし、膝を折り曲げ、初めて彼女に伝えた。

「ざまあねえな。キュアリベリオンとかいうレディはそんなにも強かったのか？」

「あなたは・・・死神・・・なの？」

死神。その言葉につい口元がゆるむ。

「死神、か。そうかもしれないな。俺は本来ならこの世に存在するはずがねえ身だからな」

「私を・・・迎えに来たの？」

少女のその台詞に一瞬だけ黙り込むが、俺はすぐに口を開いた。

「・・・死にたいのか、レディ？」

「分からない……そうかもしれない。私は……過去に罪を犯した。本当なら……殺されても……文句は言えない身。だけど……このままだと……もうひとりの私が……また罪を犯す。どうすればいいのか全然……」

なるほどな……。俺はやつと理解した。

この娘はまだ罪の数え方を知らねえんだ。だから、過去の自分……罪を犯した自分を前にどう対処すればいいのか分からず、足掻き続けているんだ。

さあ、おまえの罪を数えろ。

俺の決め台詞。だが世の中には自分の罪に気づいても、その罪の重さゆえにそこからどう先を進めばいいのか分からず、止まっているやつもいる。彼女はまさにそういう人間だ。その娘に俺はこの台詞をかけられない。今回、俺が彼女にしてやるのは罪をしつかりと気づかせることじゃない。自分が犯した罪にどう立ち向かっていかを導いてやることだ。俺はそう気づいて、少女にそばに倒れていた妖精フェアリーに手を伸ばし、相棒を彼女の手握らせる。

「え……？」

小さく驚いた少女に俺は俺の言葉で彼女を導く。

「答えはひとつだ。おまえの手で過去のおまえを止める。それしかねえだろ」

「それは……そうだろうけど……私は……」

「キュアリベリオンは過去のおまえなんだろう？ やつを止められるのは『現在』のおまえにしかできないんだぜ。おまえはこのまま過去の自分が全ての世界をぶっ壊すのを黙って見ているのか？」

「だけど……私は……」

まだ絶望から抜け出せないでいやがる。俺は少しだけ声を強めて言った。

「またあきらめるのか？」

「!・・・」

ハツとなった少女メイデンの顔を見、俺はあの娘こと会った時の記憶を思い出しながら続けた。

「俺が昔会ったプリキュアはたとえ孤独でも愛する人や世界を守るためにあきらめず敢然と戦い続けていたぜ。そいつもこの世界に来ていて今も戦っている。そいつだけじゃねえ。他にもプリキュアが世界を守るために、そしておまえを救うために戦い続けている・・・おまえはそんなやつらの想いに応えられないのか?おまえにとつて大切な友達フレンドなんだろう?」

「みん・・・なが・・・?」

「ああ」

そつだろ、キュアセイバー?

おまえにはあの娘こたちの存在がきつと自分が戦う理由になっっているはずだ。

仲間がいたから、おまえは光に戻れたんだ。だから・・・。

「これ以上罪を数えたくなけりや、今からでも遅くはねえ。全力を出して過去の自分を止めてみせる。そして世界を崩壊から救ってみせる。・・・最後まであきらめないのがプリキュアだろう?自分の背負った宿命つてやつをよく考えてみるんだな」

そつだ。プリキュアになり、世界を守ると決めたこと。それがおまえの背負いし宿命だ。

俺が自分の罪を数え、仮面ライダーとして風都の笑顔を守ると決めたように、おまえはおまえの決めた道を突き進まなけりやいけねえ。それがどんなに苦しく、悲しかろうと、一度決めたからにはもう引き返せねはずだ。それは仮面ライダーもプリキュアも、同じだろう?だったら、いつまでもぐずぐずするな。いい加減、自分の宿命を認め、絶望から抜け出せ。

俺は立ち上がって、帽子を頭にやった。瞬間に俺の顔は再び髑髏スカルに戻され、俺は帽子を頭に被せる。そして俺は振り返り、歩き出した。

「待つて・・・あなたは誰？」

少女メイデンの声に俺は少しだけ振り返り、  
答えた。

「俺の名は・・・仮面ライダー・スカル」

少女メイデン・・・キュアセイバーは目を閉じ、また眠りに着いた。

依頼は果たした。ここから先はもう、あの娘こ次第だ。

俺は再び前を向き、歩き出した。

変身を解き、再び暗い廊下を歩いている途中で俺はまた声の主に会った。ありがとう、と声は伝えた。

べつに礼を言われるようなことはしていない。ただ依頼を引き受けたから、仕事を遂行したまでだ。

報酬？べつにいらんさ。

何？風都に連れて行ってやるうかだと？馬鹿。もうこの世に存在しない身の俺が今さらあの街に何の未練があるっていうんだ？確かに翔太郎はまだまだハードボイルドには程遠い半熟だが、やつにはもう互いを理解し合い、支え合い、足りないところを補う、最高の相棒がともにいる。それに街を愛するあいつの想いは本物だ。もうあいつは、いや、あいつらは風都を守る切り札。帽子を翔太郎に渡した時点で俺はもうあいつらに全てを託したんだぜ。もう俺の出る幕はないさ。

すると声はしばらく黙った後、分かったと答え、せめてこれを報酬として受け取ってくれと言ってきた。いらんと言ったのに、しつこい依頼人だ。一体何だ？すると、頭上から何かがゆっくりと、俺の腕に降りた。俺が視線を降ろすと、それは黒いソフト帽だった。

これは、あの娘こにあげた・・・？

その時、元気のよい声が響き、俺は思わず振り返り、少しだけ歩

調を速めた。そして大広間の影から向こうを覗いた。

ざっと、19人の煌びやかな衣装コスチュームを着た少女たちメイデンがいる。俺はそ  
の中に交じっていた一人を見つけ、目を見張った。

キュアムーンライト……。

自分の世界と人々を愛し、ひとりでも戦うと決めた美しき戦士。  
彼女の面構えは俺が会った時よりも様になっていた。俺は自然と笑  
みがこぼれた。

そうか……。おまえにもできたんだな、仲間が。道理で帽子が俺  
のもとに帰ってきたわけだ。

これでもうおまえはひとりじゃない。この事実を確認できただけ  
でも、十分な報酬だ。

俺は被っていた白い山折帽を脱ぐと、それを声の主に渡した。小  
さく驚いた声に俺は伝えた。

こいつを探偵事務所のもとの位置に戻しとしてくれ。俺はこれ  
でいい……。

そして俺は黒いソフト帽を被る。さすがに白のスーツには似合わ  
んかもしれないが、なあにその時は似合う服を着ればいいだけの話だ。  
あとは頼んだぜ。おまえたちは俺たちの希望だ。

俺は彼女たちから目を離すと、ゆっくりと影の奥へと戻っていっ  
た。

ああ、そうだ。もう俺を呼ぶなよ。

今回は依頼だというから引き受けたが、俺は探偵であって、便利  
屋じゃねえんだからな。

俺は声の主が開いてくれた光の扉の中へ入り……。消えた。

外伝 Another Phantom ( Truth of SKULL )

次回は真夜でラスト！

外伝 Future へ未来へへ

こうして私はロモモと一緒に父さんとお母さんがいたニューヨークの国際医療団体本部が管理する児童養護施設に帰ってきた。・  
・ああ、ごめん。ロモモの他に“もうひとり”も一緒だったね。

新たな戦いが始まり、キュアセイバーとして世界を守りながらも、私は医療や福祉にまつわる講義や実践を受けたりして、充実した日々を送っている。これが私が今まで守り、残し、確かめてきた証・  
・「日常」という平凡ながらも幸せなこの時間を決して壊されてはならない。

講義が終わり、私が施設に戻ると、玄関の郵便受けに手紙が入っていた。手を伸ばしてそれを取り、差出人の名を見て、私は微笑む。私は扉を開け、部屋の中に入ると、机の前に座り、封を破って内容を読んだ。

「真夜ちゃん 何読んでいるロモ？」

部屋の中で遊んでいたロモモが早速羽をパタパタさせて私に寄る。手紙の内容を大体読んだ私はパートナーに振り向いた。

「つばみからの手紙よ。つばみたち、今度新しくオープンするショッピングモールでファッションショーを開催するんだって」

「へへ、ショッピングモールでファッションショーを……いいロモね。ロモモも行きたいロモ！」

「そうだね。じゃあ、今度市内のショッピングモールに行こっか」

「あ、いや・真夜ちゃん、そういう意味じゃなくて……何をしているロモ？」

「見て分からない？手紙の返事を書くのよ。今日はもう講義も終わったし、私も早く書きたいもの」

「そうロモ。……ねえ、真夜ちゃん？」

「ん……？」

出だしをなんて書こうかと悩んでいると、またロモモが声をかけ、

私は振り返った。するとロモモは少しだけ躊躇するような表情を見せた後でやがて決意したかのように私にこう問いかけた。

「真夜ちゃんは・・・本当にキュアリベリオンと一緒に暮らしたかったロモモ？」

「!?!?!?!?!」

思いもよらない問いかけに私は一瞬で沈黙する。けれど、ロモモは真剣な表情のまま、私の答えを待ち続けている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

難しい質問だった。けれど私はしばらく考え込んだ後、うん、と首を縦に振った。

「キュアリベリオン・・・真夜は苦しい思いや悲しい思いだけでなく、ずっと寂しい思いも強いられてきたからね。だから私は真夜と一緒に暮らすことで真夜の苦しみと悲しみ、そして寂しさを共有していきたかった。それに気づかず真夜を封印してしまったのは私の罪。私は真夜とともに暮らすことで自分の罪を永遠に刻んでおきたかったんだ。・・・でも、大丈夫。真夜はちゃんと“ここ”にいる。私は胸に片手をそっと置いて、ロモモに微笑んだ。

「真夜は私の中で生きている。私たちはね、ふたりで『雨牙真夜』なの。もうこれから私たちは苦しみも、悲しみも、痛みも、喜びも、優しさも、お互いに分け合って、支え合って生きていく。もう私は真夜を封印しない。過去の罪を忘れてしまわない。ふたりで力を合わせて同じ目標へ走っていくよ。」

「目標？」

ロモモが首をかしげた。私は「そう」と続けた。

「『今の世界を変え、優しい世界を作る』・・・キュアリベリオンとキュアセイバー、過去と現在に分かれた私たちだったけど、最初に目指していたものはふたりとも同じ。これからどんな苦難が来ても分らないけれど、私たちは同じ目標に向かってくじけずに向かい続けていくよ。もう今度は絶対に絶望に負けたりしない。だって・・・それが私の贖罪であり、自分で決めた宿命なんだから」

「そして、それは真夜ちゃんたちの夢でもある口モね？」  
「そう」

瞬間に口モモは笑顔がまぶしく弾けた。

「だったら、口モモも真夜ちゃんたちの夢を手伝う口モモ！」

「ありがとう、口モモ」

私たちは互いに笑い合った。この笑い合う時間も私たちが今まで守ってきた証。でもその時間はあまり持たなかった。

「！・・・真夜ちゃん！」

突然両耳をピン！と立てた口モモが慌てたように私に叫んだ。

「どうしたの、口モモ？」

「なんだか、邪悪な気配を感じる口モモ！」

「えっ？まさか・・・！」

「きつと、またあいつら口モモ！」

はあつ、とため息を吐き、私は額に手を当て、やれやれと首を左右に振る。

「・・・勘弁してほしいよね。こっちは講義が終わったばかりでクタクタだったのに・・・仕方ないわ。行くよ、口モモ！」

「オッケー口モモ！」

口モモは元気よく返事をする、すぐさま玄関へ飛んだ。私もすぐに立ち上がり、玄関へ向かう。その際に部屋の壁に取り付けてあった鏡の中の私と目が合い、私は足を止めてふと笑みを漏らす。

さあ、行こうか、真夜。

私たちの世界を守りに。そして夢と未来を守るために。

これからも一緒に歩み続けよう。

大丈夫。きつと私たちならどんなことも乗り越えていけるよ。

雨牙真夜は、ふたりでひとり。

世界で誰よりも強い存在コンピなんだから。

そして私は、いえ、私たちは玄関へ向かい、その扉を開ける。  
陽の光に抱かれながら、私たちは外へと走り出した。

## あとがき

これにて本文は全て完結となります。最後まで読んでいただきありがとうございました。

本作については前々作の「プリキュアオールスターズDX2NEXT」を執筆している最中に続編も書きたいと思ったのがきっかけでして、「DX2NEXT」では絶望の象徴であるキュアリベリオンと希望の象徴であるキュアセイバーが同一人物である設定ゆえに原作のような対決ができなかったという唯一の不満が残ったため、本作ではふたりの対決を実現したいと考えました。また先に原作である『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝国』が公開されたこともあり、もう一度筆を取った次第です。本作のテーマは薄々気づいた方もいらっしやると思いますが「贖罪」で、「DX2NEXT」では絶望の闇から希望の光へ戻ることができた真夜ですが、その際に一度は強く抱いていた世界への憎しみを捨て、自分がどんなにひどいことをしたか、また行おうとしていたのがよく理解できていなかったのではないかと考え、そこからヒントに真夜が捨てた憎悪からキュアリベリオンが復活し、再び世界への破壊を目論み、それをプリキュアたち及びキュアセイバーが立ち向かうという新たな戦いを描こうと思いつきました。

本作は完結編でもあるという設定からして過去の東映ヒロインをモチーフとした新たな戦士他、現在放送中の『スイートプリキュア』のキュアメロディとキュアリズム、夢原信者氏、GASH氏、ABC氏が生み出し、本編以外でも活躍しているオリジナルプリキュア、さらには「共演」という形ではないですが、仮面ライダーなどのヒーローもカメオ出演で加わり、「DX2NEXT」よりもスケールの大きい作品になりました。それぞれのキャラクターをお貸ししてくれましたみなさんには本当に心から感謝を伝えます。

また本作は同時にあと二週間で公開される『プリキュアオールス

ターズDX3 未来に届け！世界を繋ぐ『虹色の花』に続く物語としても執筆しております。なので本作を読んだ後で映画を観に行ってもいいし、映画を観た後で本作を読んでも構いません。本作を読み、十分楽しんでいただけることが私自身の至上の喜びです。

真夜たちの物語はこれにて一応の終止符ヒリオトを打ちましたが、みなさんの要望が強ければ、また彼女たちの新しい物語を書いてみたいと思います。

なお次回作についてですが、今のところは未定です。しかし、また仮面ライダーとの共演作を書いてみたいと考えています。構想が出来上がり次第、即座に執筆しますので、みなさんにはまたお待ちくださるようお願いいたします。

それではもう一度、感謝を込めて。

ご愛読、本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8697p/>

---

プリキュアオールスターズDX2 THE LAST 光と闇 最後の戦い！

2011年9月3日03時37分発行